

平成29年度
山口大学のFD活動

山口大学大学教育機構
山口大学教学委員会

はじめに

今年度のFD活動のテーマには、昨年度に引き続き、ディプロマ・ポリシー(DP)、カリキュラム・ポリシー(CP)に関するもの、またアクティブラーニングに関するものがあります。DP・CPについては平成28年度に見直し作業が行われました。それに伴い、新しいDP・CPに対応したカリキュラム・マップやカリキュラム・フローチャートの改訂作業を実施する必要があるため、今年度の教育改善FD研修会では、これらの見直し作業について各学部・研究科と意見交換が行われました。アクティブラーニングに関しては、全学FD講演会“アクティブラーニングにおける諸問題の解決方法を探る”や、昨年度のアクティブラーニング・ベストティーチャー賞受賞者による模擬授業を柱とするFD・SDワークショップが開催され、学内外から多くの教職員が参加者されました。また、昨年度に引き続き、障害学生への対応についてのFDはニーズが高く、一方、新たに著作権法改正に伴うFDや、修学支援システムについてのFD、またラーニングアドバイザー養成講座も実施されています。

各学部でのFD/教育改善の取り組みでは、学部の個性がよく現れているものがあります。例えば、人文学部では基礎セミナー部会の活動、教育学部では「学校における危機管理について」等学校教育に関連したもの、経済学部では「科研申請推進会議」、理学部では科学理解増進活動事業を通じた学生の能力育成の取り組み、医学部では「医学科学生・教員合同研修会」「シラバス作成講習会」「看護学教育モデル・コア・カリキュラム」等々、工学部では優秀授業の表彰、農学部では基礎セミナーおよび生物学実験において14名のALベストティーチャーとして表彰されたこと、共同獣医学部では鹿児島大学共同獣医学部との共同FD研修会、国際総合科学部では就職指導やPBL、留学に関するFDなどです(これ以外にも沢山ありますが)。これらは各学部のニーズに合わせて実施されているものと思いますが、他学部でも参考になるかもしれません。

山口大学 大学教育機構
大学教育センター長
菊政 勲

第1部 全学FD活動

第1章 大学教育機構主催等のFD活動	1
第1節 大学教育機構主催等の講演会及び研修会一覧	1
第2節 大学教育機構主催等の講演会及び研修会の概要・報告	10
第2章 共通教育授業科目別部会のFD活動	85
第3章 学生授業評価及び教員授業自己評価	87
第1節 実施方法・実施状況	87
第2節 授業評価の結果について（全学）	94
第3節 学生授業評価の結果について（共通教育）	109

第2部 学部・研究科のFD活動

第4章 人文学部のFD活動	121
第1節 授業公開	121
第2節 学部・研究科主催FD研修会	123
第3節 教育改善に関する活動	125
第4節 学生授業評価・教員授業自己評価	126
第5節 FD実施経費報告書	130
第6節 来年度の課題	130
第5章 教育学部のFD活動	132
第1節 授業公開	132
第2節 学部・研究科主催FD研修会	132
第3節 教育改善に関する活動	138
第4節 学生授業評価・教員授業自己評価	139
第5節 FD実施経費報告書	139
第6節 来年度の課題	139
第6章 経済学部のFD活動	141
第1節 授業公開	141
第2節 学部・研究科主催FD研修会	141
第3節 教育改善に関する活動	141
第4節 学生授業評価・教員授業自己評価	141
第5節 FD実施経費報告書	143
第6節 来年度の課題	143
第7章 理学部のFD活動	144
第1節 授業公開	144
第2節 学部・研究科主催FD研修会	151
第3節 教育改善に関する活動	156

第4節	学生授業評価・教員授業自己評価	158
第5節	F D実施経費報告	160
第6節	来年度の課題	160
第8章	医学部のF D活動	161
第1節	授業公開	161
第2節	学部・研究科主催F D研修会	162
第3節	教育改善に関する活動	175
第4節	学生授業評価・教員授業自己評価	178
第5節	F D実施経費報告書	178
第6節	来年度の課題	179
第9章	工学部のF D活動	182
第1節	授業公開	182
第2節	学部・研究科主催F D研修会	182
第3節	教育改善に関する活動	184
第4節	学生授業評価・教員授業自己評価	185
第5節	F D実施経費報告書	190
第6節	来年度の課題	190
第10章	農学部のF D活動	192
第1節	授業公開	192
第2節	学部・研究科主催F D研修会	192
第3節	教育改善に関する活動	196
第4節	学生授業評価・教員授業自己評価	197
第5節	F D実施経費報告書	203
第6節	来年度の課題	203
第11章	共同獣医学部のF D活動	204
第1節	授業公開	204
第2節	学部・研究科主催F D研修会	206
第3節	教育改善に関する活動	208
第4節	学生授業評価・教員授業自己評価	210
第5節	F D実施経費報告書	211
第6節	来年度の課題	211
第12章	国際総合科学部のF D活動	212
第1節	授業公開	212
第2節	学部・研究科主催F D研修会	212
第3節	教育改善に関する活動	219
第4節	学生授業評価・教員授業自己評価	219

第 5 節	F D 実施経費報告書	219
第 6 節	来年度の課題	219
第 13 章	人文科学研究科の F D 活動	220
第 1 節	授業公開	220
第 2 節	学部・研究科主催 F D 研修会	220
第 3 節	教育改善に関する活動	220
第 4 節	学生授業評価・教員授業自己評価	220
第 5 節	F D 実施経費報告書	221
第 6 節	来年度の課題	221
第 14 章	教育学研究科の F D 活動	222
第 1 節	授業公開	222
第 2 節	学部・研究科主催 F D 研修会	222
第 3 節	教育改善に関する活動	223
第 4 節	学生授業評価・教員授業自己評価	224
第 5 節	F D 実施経費報告書	224
第 6 節	来年度の課題	224
第 15 章	経済学研究科の F D 活動	226
第 1 節	授業公開	226
第 2 節	学部・研究科主催 F D 研修会	226
第 3 節	教育改善に関する活動	226
第 4 節	学生授業評価・教員自己評価	226
第 5 節	F D 実施経費報告書	228
第 6 節	来年度の課題	228
第 16 章	医学系研究科の F D 活動	229
第 17 章	創成科学研究科の F D 活動	230
理学系		
第 1 節	授業公開	230
第 2 節	学部・研究科主催 F D 研修会	232
第 3 節	教育改善に関する活動	232
第 4 節	学生授業評価・教員授業自己評価	232
第 5 節	F D 実施経費報告書	234
第 6 節	来年度の課題	234
農学系		
第 1 節	授業公開	235
第 2 節	学部・研究科主催 F D 研修会	235
第 3 節	教育改善に関する活動	236

第4節	学生授業評価・教員授業自己評価	236
第5節	F D実施経費報告書	241
第6節	来年度の課題	241
第18章	東アジア研究科のF D活動	242
第1節	授業公開	242
第2節	学部・研究科主催F D研修会	242
第3節	教育改善に関する活動	244
第4節	学生授業評価・教員授業自己評価	245
第5節	F D実施経費報告書	245
第6節	来年度の課題	245
第19章	大学院技術経営研究科のF D活動	247
第1節	授業公開	247
第2節	学部・研究科主催F D研修会	248
第3節	教育改善に関する活動	252
第4節	学生授業評価・教員授業自己評価	252
第5節	F D実施経費報告書	256
第6節	来年度の課題	256
第20章	連合獣医学研究科のF D活動	257
第1節	授業公開	257
第2節	学部・研究科主催F D研修会	257
第3節	教育改善に関する活動	257
第4節	学生授業評価・教員授業自己評価	261
第5節	F D実施経費報告	267
第6節	来年度の課題	267
平成29年度	山口大学 教学委員会 名簿	268
平成29年度	山口大学 学部・研究科F Dコーディネータ 名簿	269
平成29年度	山口大学 大学教育センター 名簿	270

第 1 部 全学 F D 活動

第1章 大学教育機構主催等のFD活動

山口大学のFD活動は全学レベルと学部・研究科レベルで実施されている。本章では、全学レベルのFD活動として大学教育機構および事務局が主催するFD活動の報告を行う（一部にSD・TAD活動を含む[※]）。
[※]FD(Faculty Development、大学教員の職能開発)、SD(Staff Development、大学職員の職能開発)、TAD(Teaching Assistant Development、大学院生が行うTAの職能開発)。

第1節 大学教育機構主催等の講演会及び研修会一覧

以下の表は平成29年度の大学教育機構主催FD講演会・研修会の一覧である。講演会は夏に1回行われ、参加者は71名であった。また研修会は14種類・計18回開催され、参加者は計919名であった。また、各学部・研究科と大学教育機構が共同で実施する「教育改善研修会」への参加者は合計385名であった。延べ1375名が本年度はFD活動を行った計算となる。多くの教職員は自主的に、また職務上の必要性から参加し、積極的にFD活動を実施した。

I 講演会									
	講座名	開催時期	時間	開催地区	開催場所等	講師	対象者	内容	参加人数
1	アクティブラーニングにおける諸問題の解決方法を探るーパフォーマンス評価、デープアクティブラーニング、教員のファシリテーション、フリーライダ問題、コミュニケーション障害問題に対していかに対応するかー	平成29年8月9日(水)	13:30～16:30	吉田地区・常盤地区・小串地区	メディア棟情報メディア講義室 工学部E31番教室 医学部総合研究棟多目的室	森 朋子(関西大学教育推進部教育開発支援センター 教授)、 中井俊樹(愛媛大学教育企画室 教授)	本学教育職員ほか及び県内他大学関係者	アクティブ・ラーニングが広がっていく中で学生の学修活動や学修効果をどのように評価するか、また、教員のファシリテーションはどのように行うべきか。グループ間学修達成度の格差問題やフリーライダー問題、コミュニケーション障害が疑われる学生への対応といった種々の課題に対して具体的にどのように対応するのかについて学内外の有識者から意見を聞く。講演やパネルディスカッションを通して解決策や改善策を探り、「山口と世界」をはじめとする各学部・学科で行われているアクティブラーニングの指導方法や成績評価方法等について考える。	教職員71名
									参加者 計71名

II 研修会									
	講座名	開催時期	時間	開催地区	開催場所等	講師	対象者	内容	参加人数
1	新任教員研修会(第1回)	平成29年4月3日(月)	14:30～17:15	吉田地区・常盤地区・小串地区	メディア講義室 工学部D11講義室 医学部総合研究棟多目的室	岡 正朗(学長)、堀 憲次(副学長)、田中和広(副学長)、福田隆真(副学長)、根ヶ山徹(副学長)、菊政 勲(大学教育センター長)、小川 勤(大学教育センター副センター長)、木下真(大学教育センター准教授)	(1)前回の研修会(平成28年9月29日)以降に本学の教育職員(附属学校を除く。)となった者。 (2)上記の日以前に本学の教育職員となった者で本研修未受講者のうち受講を希望する者。	新任教員を対象として、本学において教育活動や研究活動を実施していく上で必要な知識・情報等について説明し、本学の教育職員として相応しい認識を高めると共に、大学運営に関する理解を深める。	教職員42名
2	共通教育TA・SA研修会	平成29年4月6日(木)	13:00～14:30	吉田地区・常盤地区・小串地区	共通教育1番教室 工学部E31番教室 医学部総合研究棟多目的室	菊政 勲(大学教育センター長)、小川勤(大学教育センター副センター長)、岡田耕一(大学教育センター講師)、森本宏志(保健管理センター准教授)	共通教育においてTAに採用された大学院生、SAに採用された学部生、およびTA・SAを採用する教員	TA・SAの役割や責任、また、各分科会に分かれて、それぞれ授業におけるTA・SAの仕事の確認と留意点などについて理解を深める。	教職員24名 学生179名
3	各学部・研究科FDコーディネータ研修会(第1回)	平成29年5月10日(水)	17:40～19:10	吉田地区・常盤地区・小串地区	各地区第1テレビ会議室	菊政 勲(大学教育センター長)、小川勤(大学教育センター副センター長)、林透(大学教育センター准教授)	各学部・研究科のFDコーディネータ	各学部・研究科のFDコーディネータを対象に、本年度の機構主催のFD計画について説明するとともに、各学部でFD計画を立てる際に注意すべき点やFD予算要求の際の注意点などについて研修を行う。	教職員17名
4	著作権法改正に伴う教育活動への影響と対応	平成29年7月19日(水)	15:00～15:30	吉田地区	教育学部21番教室	木村友久(知的財産センター副センター長・国際総合科学部教授)	希望者	異時送信等で他人の著作物が利用できるメリットと補償金支払いのバランスが悩ましいところであり、本研修会では授業担当教員の視点から最新情報の確認と対応策を考える。	教職員78名

	講座名	開催時期	時間	開催地区	開催場所等	講師	対象者	内容	参加人数
5	大学生にみられる精神障害の基礎知識と対応について	平成29年7月19日(水)	13:30～14:10	吉田地区	農学部大会議室	松原敏郎(保健管理センター准教授)	希望者	学生が精神障害を抱えてもキャンパスライフを継続できるように、大学職員の精神障害への理解と、当該学生への支援が今まで以上に求められている。大学生にみられる精神障害(発達障害を含む)の基礎知識と、当センターに精神症状を主訴に来所された事例を踏まえながら、実際の対応方法について概説する。	教職員28名
6	障害学生修学支援申請状況と課題・学生特別支援室での相談対応から	平成29年9月20日(水)	15:00～16:20	吉田地区	国際総合科学部2階会議室	岡田菜穂子(学生特別支援室専任講師)、田中亜矢巳(学生特別支援室カウンセラー・臨床心理士)	希望者	支援申請の傾向を含めた最近の学生特別支援室の相談対応状況について紹介。支援の申請までの流れを今一度確認するとともに、実際の支援内容の決定と修学支援の状況について伝え、学部特性を踏まえた修学支援の難しさなどについて情報・意見交換を行う。	教職員20名
7	FD・SDワークショップ 第1回ALベストティーチャーによる模擬授業	平成29年9月26日(火)	14:00～16:00	吉田地区	共通教育15番教室(アクティブ・ラーニング教室)	上田真寿美(国際総合科学部教授)、尊田望(山口大学非常勤講師)	希望者	第1回ALベストティーチャー受賞者による模擬授業を体感し、改めて、「アクティブ・ラーニングとは何か」、「アクティブ・ラーニングを通じた学生の学び・成長」について考える。	教職員50名 学生2名
8	新任教員研修会(第2回)	平成29年9月27日(水)	12:55～17:15	吉田地区	事務局2号館4階第2会議室	小川勤(大学教育センター副センター長)、岡田耕一(大学教育センター専任講師)他	(1)前回の研修会(平成28年9月29日)以降に本学の教育職員(附属学校を除く。)となった者。 (2)上記の日以前に本学の教育職員となった者で本研修未受講者のうち受講を希望する者。	新任教員を対象として、本学において教育活動や研究活動を実施していく上で必要な知識・情報等について説明し、本学の教育職員として相応しい認識を高めると共に、大学運営に関する理解を深める。	教員31名

	講座名	開催時期	時間	開催地区	開催場所等	講師	対象者	内容	参加人数
9	ルーブリックを活用した学修評価ワークショップ～ルーブリックの観点と記述に着目して～	平成29年11月10日(金)	16:10～ 18:00	吉田地区	共通教育26番教室	俣野秀典(高知大学地域協働学部講師)、藤宮龍也(山口大学大学院医学系研究科教授)	希望者	ルーブリックを活用した学修評価に焦点を当て、実際の実践事例を紹介するとともに、ルーブリックの観点や記述の調整を含めた諸課題について検討する。	教職員39名 学生2名
10	カウンセラーとして関わった約2400名の大学生との泣き笑いを語る	平成29年11月15日(水)	15:00～ 15:30	吉田地区	教育学部21番講義室	今井佳子(学生相談所カウンセラー・臨床心理士)	希望者	講師が本学のカウンセラーを務めた15年間について、様々な学生との出会いを振り返りながら、そこからみえてきた学生との向き合い方について講演。	教職員73名
11	2017ラーニングアドバイザー養成講座	①平成29年11月30日(木) ②平成29年12月21日(木) ③平成30年1月19日(金)	①14:00～17:00 ②13:00～17:00 ③13:00～17:00	吉田地区	①共通教育棟2階会議室 ②事務局2号館4階第2会議室 ③共通教育棟2階会議室	①清水栄子(愛媛大学教育企画室講師) ②清水栄子(愛媛大学教育企画室講師)・篠田雅人(大学教育センター助教(特命)) ③菊政 勲(創成科学研究科・理学部教授)・寺西晴美(学生支援部学生支援課副課長)・篠田雅人(大学教育センター助教(特命))	希望者	事務職員一人ひとりがこれまでのキャリアを振り返りつつ、大学人として身に付けておくべき学内の各種情報や制度、学生のニーズなどをしっかり把握・理解したうえで、学生の学びに関する疑問・悩みに応える事務職員になることを目指す。	職員23名
12	著作権法改正に伴う教育活動への影響と対応	平成29年12月13日(水)	13:30～ 14:20	吉田地区	農学部・共同獣医学部大会議室	木村友久(知的財産センター副センター長・国際総合科学部教授)	希望者	異時送信等で他人の著作物が利用できるメリットと補償金支払いのバランスが悩ましいところであり、本研修会では授業担当教員の視点から最新情報の確認と対応策を考える。	教職員25名

	講座名	開催時期	時間	開催地区	開催場所等	講師	対象者	内容	参加人数
13	大学マネジメントセミナー 2017inやまぐち 「今、改めて考える“教職協働”～地方大学の魅力発信と大学間連携～」	平成29年12月18日(月)	14:00～17:00	吉田地区	大学会館2階会議室	樋口浩朗(米沢キャンパス事務部研究支援課副課長)、吉村充功(山口大学工学部教授・学長室長)	希望者	各大学における教職協働の取組を共有しながら、課題解決のための新たな方策うあ気付きを得る場を提供。大学間連携に経験豊富な専門家による基調講演に加え、大学リーグやまぐち加盟期間によるポスター発表を通して、大学教職員同士のネットワークの充実を図る。	教職員101名
14	学習支援システムとして新修学支援システムはMoodleを代替できるか？～小テストやアンケート、レポート、ポートフォリオ機能等の紹介～	平成29年12月20日(水)	14:30～15:15	吉田地区	人文・理学部大会議室	岡田耕一(大学教育センター専任講師)	希望者	平成28年に改修を行った修学支援システムには、小テストやアンケート、レポート、ポートフォリオ等の機能が独自に追加され、これらの機能は Moodle に比べると簡素だが、その反面、簡単で使いやすいのではないかと熱い期待が寄せられている。本研修会では、これらの学習支援システムの機能や使い方を対比しながら、紹介する。	教職員44名
15	受け入れ留学生の理解と対応 留学生との簡単日本語コミュニケーション	平成30年3月14日(水)	15:00～15:40	吉田地区	人文・理学部大会議室	中溝朋子(留学生センター准教授)	希望者	留学生と日本語で話すときのヒントを日本語教育の立場から伝える。日常的な会話なら、ちょっとした工夫でお互いの理解を増すことができ、日本語が通じた喜びや自信は留学生の適応にも有効に働くと考えられる。また日本人学生に留学生との交流をさせたいときのアドバイスにも役立つ。	教職員51名

	講座名	開催時期	時間	開催地区	開催場所等	講師	対象者	内容	参加人数
16	山口大学 共育ワークショップ2018 みんなで教育(共育)について語ろう!～大学と高等学校による授業協奏曲～	平成30年3月15日(木)	14:00～17:00	吉田地区	共通教育棟	今村久美(認定NPO法人カタリバ代表理事)、なかはらかぜ(徳山大学経済学部知財開発コース教授)、和田将太(山口県立西京高等学校 英語科教諭)、河本順康(野田学園高等学校 数学科教諭)、藤井克彦(山口大学創成科学研究科准教授)	希望者	教育を通じた社会的起業家であるNPO 法人カタリバ代表理事 今村久美氏の基調講演を皮切りに、山口県内初の大学と高等学校が連携する模擬授業セッションを企画し、高大接続による人材育成をテーマに開催。	教職員58名 学生32名
									参加者 計919名

Ⅲ 教育改善研修会									
	講座名	開催時期	時間	開催地区	開催場所等	講師	対象者	内容	参加人数
1	大学教育センターと医学部保健学科、医学系研究科との教育改善FD研修会	平成29年8月23日(水)	13:30～15:30	小串地区	医学部保健学科管理棟4階大会議室	木下 真(大学教育センター准教授)	各学部・研究科の全教員	平成28年度にDP・CPの見直し作業が終了し、平成31年度のYu-CoBCuS導入に向けた前段階として、新しいDP・CPIに対応したカリキュラム・マップやカリキュラム・フローチャートの改訂作業を実施するため、これらの見直し作業を巡って、具体的な作業手順やYu-CoBCuS導入に向けたプロセス等について各学部・研究科と意見交換を行う。	教員32名

	講座名	開催時期	時間	開催地区	開催場所等	講師	対象者	内容	参加人数
2	大学教育センターと理学部、創生科学研究科(理学系)との教育改善FD研修会	平成29年9月8日(水)	14:30～15:10	吉田地区	人文・理学部大会議室	岡田耕一(大学教育センター専任講師)	各学部・研究科の全教員	平成28年度にDP・CPの見直し作業が終了し、平成31年度のYu-CoBCuS導入に向けた前段階として、新しいDP・CPIに対応したカリキュラム・マップやカリキュラム・フローチャートの改訂作業を実施するため、これらの見直し作業を巡って、具体的な作業手順やYu-CoBCuS導入に向けたプロセス等について各学部・研究科と意見交換を行う。	教員39名
3	大学教育センターと人文学部・人文科学研究科・東アジア研究科(人文系)との教育改善FD研修会	平成29年9月20日(水)	14:30～15:10	吉田地区	人文・理学部大会議室	林透(大学教育センター准教授)	各学部・研究科の全教員	平成28年度にDP・CPの見直し作業が終了し、平成31年度のYu-CoBCuS導入に向けた前段階として、新しいDP・CPIに対応したカリキュラム・マップやカリキュラム・フローチャートの改訂作業を実施するため、これらの見直し作業を巡って、具体的な作業手順やYu-CoBCuS導入に向けたプロセス等について各学部・研究科と意見交換を行う。	教員36名
4	大学教育センターと医学部医学科、医学系研究科との教育改善FD研修会	平成29年10月11日(水)	13:00～13:50	小串地区	医学部本館6階第1会議室	林透(大学教育センター准教授)、白澤文吾(大学院医学系研究科教授)	各学部・研究科の全教員	平成28年度にDP・CPの見直し作業が終了し、平成31年度のYu-CoBCuS導入に向けた前段階として、新しいDP・CPIに対応したカリキュラム・マップやカリキュラム・フローチャートの改訂作業を実施するため、これらの見直し作業を巡って、具体的な作業手順やYu-CoBCuS導入に向けたプロセス等について各学部・研究科と意見交換を行う。	教員43名

	講座名	開催時期	時間	開催地区	開催場所等	講師	対象者	内容	参加人数
5	大学教育センターと経済学部・経済学研究科・東アジア研究科(経済系)との教育改善FD研修会	平成29年10月11日(水)	13:00～ 13:50	吉田地区	経済学部第1会議室	小川 勤(大学教育センター教授)	各学部・研究科の全教員	平成28年度にDP・CPの見直し作業が終了し、平成31年度のYu-CoBCuS導入に向けた前段階として、新しいDP・CPIに対応したカリキュラム・マップやカリキュラム・フローチャートの改訂作業を実施する必要があるため、これらの見直し作業を巡って、具体的な作業手順やYu-CoBCuS導入に向けたプロセス等について各学部・研究科と意見交換を行う。	教員60名
6	大学教育センターと教育学部・教育学研究科(教職大学院を含む)・東アジア研究科(教育系)との教育改善FD研修会	平成29年10月18日(水)	15:00～ 15:30	吉田地区	教育学部21番教室	小川 勤(大学教育センター教授)	各学部・研究科の全教員	平成28年度にDP・CPの見直し作業が終了し、平成31年度のYu-CoBCuS導入に向けた前段階として、新しいDP・CPIに対応したカリキュラム・マップやカリキュラム・フローチャートの改訂作業を実施する必要があるため、これらの見直し作業を巡って、具体的な作業手順やYu-CoBCuS導入に向けたプロセス等について各学部・研究科と意見交換を行う。	教員75名
7	大学教育センターと工学部、創成科学研究科(工学系)との教育改善FD研修会	平成29年11月8日(水)	14:20～ 14:50	常盤地区	工学部D11教室	岡田耕一(大学教育センター専任講師)	各学部・研究科の全教員	平成28年度にDP・CPの見直し作業が終了し、平成31年度のYu-CoBCuS導入に向けた前段階として、新しいDP・CPIに対応したカリキュラム・マップやカリキュラム・フローチャートの改訂作業を実施する必要があるため、これらの見直し作業を巡って、具体的な作業手順やYu-CoBCuS導入に向けたプロセス等について各学部・研究科と意見交換を行う。	教員29名

	講座名	開催時期	時間	開催地区	開催場所等	講師	対象者	内容	参加人数
8	大学教育センターと農学部、創生科学研究科(農学系)との教育改善FD研修会	平成29年12月20日(水)	13:30～14:00	吉田地区	農学部本館2階会議室	木下 真(大学教育センター准教授)	各学部・研究科の全教員	平成28年度にDP・CPの見直し作業が終了し、平成31年度のYu-CoBCuS導入に向けた前段階として、新しいDP・CPIに対応したカリキュラム・マップやカリキュラム・フローチャートの改訂作業を実施するため、これらの見直し作業を巡って、具体的な作業手順やYu-CoBCuS導入に向けたプロセス等について各学部・研究科と意見交換を行う。	教員33名
9	大学教育センターと技術経営研究科(MOT)との教育改善FD研修会	平成30年1月16日(火)	14:30～15:30	常盤地区	大学院技術経営研究科棟1階会議室	岡田耕一(大学教育センター専任講師)	各学部・研究科の全教員	平成28年度にDP・CPの見直し作業が終了し、平成31年度のYu-CoBCuS導入に向けた前段階として、新しいDP・CPIに対応したカリキュラム・マップやカリキュラム・フローチャートの改訂作業を実施するため、これらの見直し作業を巡って、具体的な作業手順やYu-CoBCuS導入に向けたプロセス等について各学部・研究科と意見交換を行う。	教員11名
10	大学教育センターと国際総合科学部との教育改善FD研修会	平成30年1月17日(水)	13:00～13:50	吉田地区	国際総合科学部棟大会議室	林 透(大学教育センター准教授)	各学部・研究科の全教員	平成28年度にDP・CPの見直し作業が終了し、平成31年度のYu-CoBCuS導入に向けた前段階として、新しいDP・CPIに対応したカリキュラム・マップやカリキュラム・フローチャートの改訂作業を実施するため、これらの見直し作業を巡って、具体的な作業手順やYu-CoBCuS導入に向けたプロセス等について各学部・研究科と意見交換を行う。	教員27名
									参加者 計385名

第2節 大学教育機構主催等の講演会及び研修会の概要・報告

1. 講演会

アクティブ・ラーニングにおける諸問題の解決方法を探るーパフォーマンス評価、ディープ・アクティブラーニング、教員のファシリテーション、フリーライダー問題、コミュニケーション障害問題に対していかに対応するかー

○日時：平成29年8月9日（水）13:30～16:30

○会場：吉田地区：共通教育メディア講義室（主会場）、常盤地区：工学部 E31 番教室、小串地区：医学部総合研究棟 8階 多目的室
大学リーグやまぐち（東亜大学、山口学芸大学、徳山高専）の3大学をネットで繋いで参加

○参加者：参加総数 71 名（昨年 92 名）

（内訳）内訳：山口大学 60 名（吉田地区 38 名（昨年度 53 名）、小串地区 19 名（昨年度 20 名）、常盤地区 3 名（昨年度 5 名））、山口学芸大学 6 名（昨年度 6 名）、東亜大学 2 名（昨年度 2 名）、徳山高専 3 名（昨年度 6 名）；アンケート回収数 47 枚（昨年 63 枚）

○講師：関西大学教育推進部教育開発支援センター 森 朋子 教授
愛媛大学教育企画室 中井 俊樹 教授

○内容

講演会は2部構成で行われた。第1部ではアクティブ・ラーニング(以下、AL)が大学教育の中に広がっていく中で、これまでの成果と課題を論点整理するために2名の外部講師を招聘してそれぞれの立場で現状を分析してもらった。森教授からは「アクティブ・ラーニングからディープ・アクティブラーニングへ」というテーマで、「活動は

設問1 研修会に参加した感想はいかがでしたか？		
選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	16	34.0%
良かった	28	59.6%
どちらとも言えない	2	4.3%
あまり良くなかった	0	0.0%
良くなかった	0	0.0%
無回答	1	2.1%
合計	47	100.0%

アクティブであるが思考は本当にアクティブになっているのか」、「教員だけがアクティブになっているのではないか」、「フリーライダーが出るAL」などの現状のALを巡る種々の課題について重要な問題提起がなされた。その上で、ディープ・アクティブラーニング（以下、DAL）に深化させていくためには「内化と外化の往還」が必要であることが明らかにされた。内化すなわち、教員が講義やeラーニングで教えるとともに学生が文献を読んだり、調べたりして学ぶ等の活動が必要である。しかし、この段階ではまだ、学生は「分

かったつもりになっている」だけである。そこで、「わかったつもりから、わかった」と深化させるためには、自ら考えるだけでなく、考えたことを「教員への外化（演習問題、テスト、レポート）」や「仲間への外化（グループワークやプレゼンテーション）」を通して、さらに自分の思考を深める必要がある。その際に躊躇や葛藤、疑問、失敗等が生じるが、そこで、教員がアカデミックな知見から講義等の内化活動を行うことによって、学生は自分や仲間の考えを比較・深化させることによって「わかった」状態にすることができる。すなわち、内化1（個人：わかったつもり）⇒外化（グループ）⇒内化1・（個人）を繰り返すことにより、DALが実現できるという非常に明確な手法の説明があった。

中井教授からは、「アクティブ・ラーニングを促す教員のファシリテーション」というテーマで、温かい学習環境の整備としてのルール作りの必要性とともに、教員の「発問法」の重要性について事例を交えた詳しい説明があった。

第2部では、星野晋国際総合科学部准教授から最初に国際総合科学部におけるALの現状と課題について報告があった。新学部の課題としてはALを各授業で行う機会が多く、学生はALのパターンを習熟し器用にこなすようになるが、中身が深まらない。タスクをこなすことに追われる。中にはグループワークや人とのコミュニケーションが苦手とする学生がいるため彼らに対する対応方法が難しい。授業外に十分時間が取れない。教員・学生ともAL疲れが生じている等の報告があった。

そこで、次のパネルディスカッションでは講演や星野先生から出てきた課題等に対してどのような解決策があるかを4名のパネリストが協議した。さらに、本研修に参加した参加者からの質疑に応答する形で協議が進められた。この中でALをDALについて深化させる方法として、教員のファシリテートの重要性や時にはALの中で担当教員がアカデミックな知見から講義を実施して学生の思考を深める必要があるといったヒントが示された。また、発達障害や精神障害の疑いのある学生は人とのコミュニケーションを苦手とする傾向があり、必要に応じて特別授業の開講やレポート提出で代替する等の合理的配慮が必要であるが、その際にAL授業担当者や支援関係者はその授業の本質や目的を今一度考え直し建設的な協議を行う必要があることが示された。また、小中学校や高校に今後ALが広がっていく中で大学教育はどのように変化していくべきかという問いに対しては、パネリストからは現在、大学の初年次教育で必修科目として実施しているAL型の授業が少なくなってくることは喜ぶべき現象ではないか。今後は高校までに行われてきた学生の主体的な学びへの学習習慣を身に付いてきた学生を対象にさらに深化した大学での学びに結び付くような授業設計を考え、実行すればよいという意見が出された。

講演会後のアンケート結果では、「非常に良かった」および「良かった」を合わせて93.6%（昨年度76.1%）であり、ここ3年間の中で最も参加者の満足度が高かった。この原因は森教授らの講師陣やパネリストが誰にでもわかりやすくALの課題を分析するとともに、DALに向けての道筋を明確に示してくれたことにあると考えられる。また、研修参加者からのALを推進する上でのさまざまな疑問や課題が質問という形で示されたが、パネリストたちがそれぞれに対して明確にその解決策を示すとともに、今後のALの深化の方向性を示してくれたことが高評価に結び付いたものと考えられる。

参加者はここ 3 年間の全学講演会の中で 71 名と少なかったが、講演会の内容は良かったために、今回、研修会に参加されなかった先生方もぜひ、後日センターから学内配信さ



森教授（関西大学）の講演の様子



中井教授（愛媛大学）の講演の様子

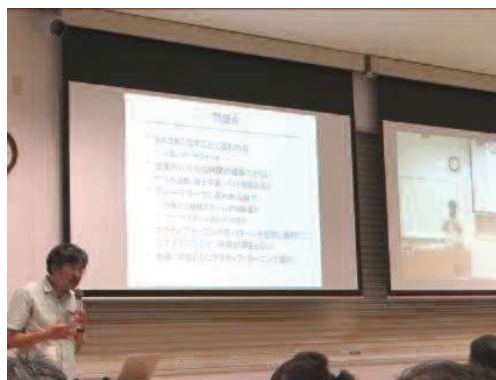
れるビデオを一度視聴してもらいたいと考えている。

アンケートの自由記述欄には、「AL や教員のファシリテータについてはこれまで抽象的に理解していたが、今回の研修会に参加して人に説明できる程度までには理解できた」、「AL についていろいろなことがよく理解できた」、「内化→外化→内化の流れは興味深く、参考になった」、「講義に取り入れやすく、ポイントが絞られていた」、「AL や教員のファシリテータの話が具体的で有益だった」、「パネルディスカッションにおけるコミュニケーションが苦手な学生への対応に関して特に参考になった」、「発問法はいろいろな授業の場面で使えると思った」、「非常に有意義であった。教員の参加が少ないのが残念であった」という肯定的な意見が多かった。

一方、「最終的にどうやって個を評価するかがわからなかった」という意見もあった。



福田機構長の冒頭の挨拶



星野准教授（山口大学）の講演の様子



パネルディスカッションの様子（1）



全学 FD・SD 講演会の様子



パネルディスカッションの様子（2）

2. 研修会

(1) 平成 29 年度 新任教員研修会（第 1 回）

○日時：平成 29 年 4 月 3 日（月）14:30～17:15

○会場：吉田地区：メディア講義室、常盤地区：工学部 D11 講義室、
小串地区：総合研究棟多目的室
(8F)

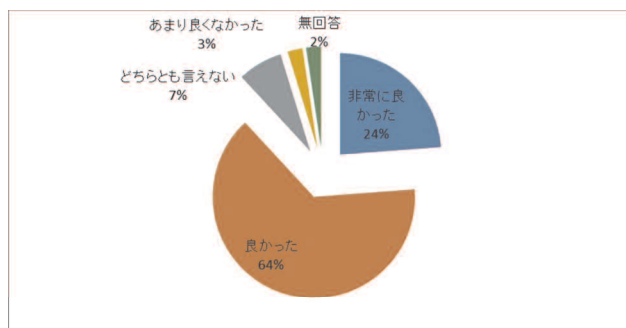
○参加者：参加人数 42 名（昨年度 37 名）
内訳：吉田地区 25 名（昨年度 13 名）、小串地区 9 名（同 10 名）、常盤地区 8 名（同 14 名）

当該研修会が年 2 回（第 1 回目 4 月、2 回目 9 月）開催されることになって 7 年目を迎えた。4 月に第 1 回目を開催する趣旨としては新任教員に対して就任当初の時期から本学の大学改革の方向性と現状、また、教育と研究に関する方針、さらに具体的な授業の指導方法等について理解を深めていただくためである。岡学長からは「明日の山口大学ビジョン」等の資料を使って本学の大学改革の状況と今後の本学の進むべき方向性について講話をしていただいた（図 1）。堀副学長（学術研究担当）からは本学の研究支援の取り組み（URA の活用）と研究不正への取り組み（CITI）について、



図 1 講演中の岡学長

表 1 アンケート集計結果



田中副学長（人事労務担当）からは、サービス・兼業・利益相反・ハラスメント防止対策について、福田副学長（教育学生担当）からは大学教員として本学で教育活動を行う際の心構えや本学の教育改革の方向性について、根ヶ山副学長（学術情報担当）からは、図書館の利用及び情報セキュリティについて（図 2）、それぞれ話があった。

その後、菊政大学教育センター長から「山口大学における教育の特徴について」というテーマで「新しい共通教育」の概要や本学が現在推進している AP 事業や YFL 育成プログラムについて説明があった（図 3）。

研修会後半では、小川大学教育センター副センター長・教授から「授業の実施方法について」というテーマで、大学における教育改善の具体的な取組方法や本学の障害学生支援方法について説明があった（図 4）。特にシラバスをしっかりと記載して授業設計を行う必要

性や学生参加型授業の重要性について説明があった。木下大学教育センター准教授からは「山口大学における授業評価とFD活動」というテーマで、本学の授業評価の方法や研修体制について説明があった。

研修会に参加した先生方の全体的な感想としては88%（非常に良かった＋良かった）の方が内容的に良かったという意見で概ね好評であった（表1参照）。先生方からの意見としては、「電子ジャーナルが充実しており、頼もしい」、「学生を育てようとの機運が非常に高く、好ましく感じる」、「様々な視点から詳しい情報が得られて良かった」、「実務について、より具体的なイメージを持つことができた」、「シラバス・授業計画についての話が参考になった」、「主に事務手続きに関して、新しく知る内容が充実しており、有意義な時間だった」、「各先生方が、分かりやすく、コンパクトに説明いただき、しっかりと理解できました」という肯定的な意見とともに、「新任教員対象ということなので、事務的なレベルの内容を多くして欲しい」、「新任教員研修会としての内容を選抜した方が良いと思う」、「初めて聞く言葉があり、概ね理解できたが、全てを完璧に理解できなかった。」、「研修自体もActive Learning（質問を受ける時間、グループディスカッション等）が取り入れられればもっと良くなると思う」という改善を求める意見があり大変参考になった。

当該研修会の開催時期や開催場所については、98%の先生方が「良い」と回答しており好評だった。入学式直後というタイミングが新任教員にとって概ね好評であり、この時期の開催が定着してきたと感じた。今回は年2回実施される当該研修会の第1回目の研修会であり、スタートアップ的性格を持つが、その意義は十分に果たせたと感じている。



図2 講演中の根ヶ山副学長



図3 講演中の菊政大学教育センター長



図4 講演中の小川大学教育センター教授



図5 新任教員研修会の様子

(2) 平成 29 年度 共通教育 TA・SA 研修会

1. 主催 山口大学大学教育機構
2. 開催日時 平成 29 年 4 月 6 日 (木) 13:00~14:30
3. 場所

全体研修： 吉田地区：共通教育 1 番教室
常盤地区：工学部 E 棟 31 番教室
小串地区：医学部総合研究棟 8 階多目的室

個別研修： 共通教育棟他 (分科会ごと)

4. 参加者共通教育において TA・SA に新規に採用予定の大学院生・学部生、TA・SA を採用する教員

参加者総数 203 名 (昨年度 222 名) (学生 179 名 (同 194 名)、教職員 24 名 (同 28 名))

内訳： 吉田地区 154 名 (昨年度 174 名) (学生 132 名 (同 150 名)、教職員 22 名 (同 24 名))

常盤地区 46 名 (昨年度 44 名) (学生 45 名 (同 42 名)、教職員 1 名 (同 2 名))

小串地区 3 名 (昨年度 4 名) (学生 2 名 (同 2 名)、教職員 1 名 (同 2 名))

アンケート回収数：152 枚

5. 内容 TA・SA の制度を十分に活用できるように、TA・SA の職務内容、望まれること、注意点、採用する教員が知っておくべき点など。

6. 報告

本研修会は年 1 回実施し、今年で 11 年目 (11 回目) となる。全体で 203 名の参加者があり、昨年度の 222 名より 19 名減少した。この理由は今年度から TA・SA に初めて採用された学生の

設問1	研修会に参加した感想はいかがでしたか？	
選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	18	11.8%
良かった	88	57.9%
どちらとも言えない	39	25.7%
あまり良くなかった	3	2.0%
良くなかった	1	0.7%
無回答	3	2.0%
合計	152	100.0%



みを対象にしたためである。研修会は2部構成で、それぞれの内容は次の通りであった。

第1部（13:00～14:00）

まず、菊政大学教育センター長より、共通教育の特徴とTA・SAの職務内容と注意点の説明があった。今の大学院生は旧・共通教育カリキュラムを履修したため、現行の共通教育カリキュラムとの相違点について説明があった。次に、学生支援センター・学生特別支援室(SSR)の小川勤室長による障がいをもつ学生の対応について、合理的配慮とはどういうことか、学生特別支援室の役割・機能、具体的な留意事項、もっと学びたい者への支援スキル研修会の案内などの説明があった。その後、大学教育センターの岡田耕一先生による出席確認システムと修学支援システムの宿題提出機能の使い方について、TA・SAの具体的な関わり方の説明があった。最後に、保健管理センター・全学労働安全衛生管理室主任の森本宏志先生による大学の授業における安全衛生について、特に「科学的探究力」と「想定外」・「リスク感覚」とは関連があることの指摘など興味深い講演をいただいた。また事務的な手続きについて、教育支援課共通教育係より注意事項の説明があった。

今回の研修会では、SSRにおいて実際に学生支援を行っている小川勤室長から、専門家の立場としてご講演をいただいた。TA・SAは実験・実習などの授業に関わることも多く、これらの授業を安全に実施するためにも、森本先生の安全衛生に関する講演と合わせて、本研修会の重要な研修事項であると考えている。

第2部（14:10～）

個別研修として、情報処理基礎、化学実験、生物学実験、数学I・II、運動健康科学、多人数・講義系授業科目の分科会に分かれて研修を実施した。

(3) 平成 29 年度 F D コーディネータ研修会

1. 主催 山口大学 大学教育機構
2. 日時 平成 29 年 5 月 10 日 (水) 17:40-19:10
3. 場所 各地区第 1 テレビ会議室
4. 対象 各学部・研究科 F D コーディネータ (参加者 : 17 名)
5. 報告

最初に菊政大学教育センター長より、本研修会の開催趣旨の説明があった。その中で、昨年度の 3 つのポリシー見直しを受け、YU CoB CuS の全学導入に向けて検討する時期になってきていることが明らかにされた。また、これに関連したテーマで教育機構が計画する教育改善 F D 研修会が開催させることも明らかにされた。

次に、大学教育センターの小川副センター長より、本年度の教育機構が計画する研修会の概要と F D コーディネータに対する依頼事項の説明があった。本年度は、昨年度の各学部・研究科のディプロマ・ポリシー (DP) の見直しを受け、YU CoB CuS の全学導入を目指して、その前段階となる以前策定されたカリキュラム・マップ (CUM) やカリキュラム・フローチャート (CFC) の見直し作業を行う必要があることが明らかにされた。そのために策定趣旨や策定手順等を明確にするために教育改善 F D 研修会を開催する予定であることが示された。また、アクティブ・ラーニングの成果と課題を検証するために全学講演会が開催されることが明らかにされた。さらに講師派遣型アラカルト研修会では「メンタルヘルス」、「精神障害や発達障害が疑われる学生への対応」、「就職活動支援」、「教育活動における知的財産の取り扱い」等をテーマとする研修会が開催されることが明らかになった。また、本年度から「授業コンサルテーション」が新たに研修メニューとして追加されることになったため、当該研修会の周知を各学部・研究科で行って欲しいとの説明があった。



設問1 研修会に参加した感想はいかがでしたか？		
選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	0	0.0%
良かった	3	37.5%
どちらとも言えない	4	50.0%
あまり良くなかった	1	12.5%
良くなかった	0	0.0%
無回答	0	0.0%
合計	8	100.0%

依頼事項としては、全学講演会の参加者募集依頼や、講師派遣型アラカルト研修会では開催予定日の 2 か月前までに教育企画係に開催計画を連絡すること、教育改善研修会については、開催日時を 6 月末日までに教育企画係に報告をしてほしい旨の説明があった。しかし、教育改善 F D 研修会の開催日は毎年学部間の日程調整が難しいため、協議の結果、大学教育センターが学部・研究科ごとの開催予定月日を提案し、それをもとに各学部・研究科が F D 計画に組み込むことになった。

次に、各学部が F D 計画を立てる際に、必要となる F D 予算要求について、大学教育センターの林准教授から説明があった。本年度は教育機構の F D 予算が昨年度に引き続いて減額されることが予想されるため、必ずしもすべての予算要求に応えられない旨、説明があった。

その他の協議事項では、小川勤大学副センター長より、昨年度同様、本年度も第 2 回目の各学部・研究科 F D コーディネータ研修会を開催したい旨提案があったが、協議の結果、本年度は第 2 回目を開催せず、次年度の当該研修会開催の際に前年度の各学部・研究科の F D 活動の状況を説明していただくことになった。

今回の研修会では、教育機構主催の F D 活動の在り方を巡り、学部・研究科の実態を踏まえた議論が熱心に交わされた。教員の多忙化に伴い、必要な F D 活動を今後どのように調整し開催していくのかをあらためて考えさせられる良い機会となった。

(4) 著作権法改正に伴う教育活動への影響と対応

日程 平成 29 年 7 月 19 日(水)
 [吉田地区] 15:00~15:30
 場所 教育学部 21 番教室
 (吉田キャンパス)
 講師 木村 友久
 (知的財産センター)
 参加者 78 名(アンケート 47 枚回収)



内容

本研修会では、著作権法 35 条の改正によって大学教育の現場が受ける影響と想定しておくべき対応について説明が行われた。

著作権法 35 条と関連する最近の趨勢としては、著作者人格権を厳密に解釈する、あるいは著作権の支分権を精査して権利を行使する傾向がみられる。例えば「森のくまさん事件」については、これは太田プロに所属するパーマー大佐が馬場氏訳詞の「森のくまさん」の中間部分を除いて、そこに自ら作成した歌詞を挿入したことに端を発する。そうすると、これは財産権の侵害ではなくて、著作者人格権における同一性保持権の侵害となる。著作者人格権については、この例のように理解不足によるトラブルが多い。また、JASRAC は CM 等への楽曲の利用について、昨年の 4 月 1 日から利用料金を相対で決定することになった。これは著作物の利用において、著作者の意向を反映しやすくする意図がある。研修会では、この他の事例として、H 大学における学生論文改変事件、京都大学総長の入学式式辞をとりあげて、著作者人格権や支分権等の行使について解説がなされた。次に、JASRAC が音楽教室に対して演奏権の対価を徴収するとして生じた紛争について解説が行われた。これについては、大学の音楽授業に対しても対価が徴収されるのではないかとの懸念があるが、JASRAC 担当者は「当面は、大学の音楽授業における演奏権の対価は徴収しない」と発言している。これについては、JASRAC は大学の音楽授業も徴収の対象とみなしているということであるから、今後この点について注視しておく必要がある。演奏権については、著作権法 35 条は複製を対象にしているため、論理的にみると演奏は入らないとの解釈が原則であると考えられるが、これまで十分な議論が尽くされていないため、実際に訴訟が起こった場合、どのような判断が下されるかは定かではない。

著作権法 35 条の改正の経緯については、昭和 45 年の年末までの旧法では、権利制限規定を定めた同法 30 条第 3 項で「普通教育上」と書かれている。したがって、旧法では大学等の高等教育機関はこの規定の対象外であり、普通教育における修身や読本において、正当な範囲でのみ抜粋蒐輯が可能であった。ところが、昭和 45 年に施行された現行法では、この部分が「学校その他教育機関」と改められ、当時の権利者団体は驚きを隠せなかったという。その後、権利者団体は権利制限規定から大学を除外するために機会を伺っていたが、2~3 年前から海外事例の調査を行っている。その調査結果をもとに、他国の例に倣って、我が国においても補償金と引き換えに著作物の利用を許可する方向で、文化庁と共に検討を進めている。今回の法改正の動きはその延長線上にある。

著作権法 35 条については、現行法が施行された昭和 45 年時点では、現在のパソコンによるスライドの上映は存在しなかったため、規制の対象は印刷物を想定した複製のみを対象としていた。そのため、公衆送信を行わずにスライドを上映するところまでは、現在でもこの解釈が成り立つと解

表1 研修会に参加した感想はいかがでしたか？

選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	4	8.5%
良かった	27	57.4%
どちらとも言えない	10	21.3%
あまり良くなかった	4	8.5%
良くなかった	2	4.3%
無回答	0	0.0%
合計	47	100.0%

積できる。その後、平成16年に第2項が設けられ、同時公衆送信であれば、当該授業を同時に受ける者に対して、スタジオからの配信は権利制限規定の範囲内と定めている。その一方で、スライドのデータを保存して、それを公衆送信する場合は異時送信に該当する。具体例としては、最近流行の反転授業などで、あらかじめ基本的な学習内容をビデオ映像データとしてホームページ上に配置して、これを学生に視聴させる場合がある。この場合については、現状では原則通り権利処理をしなければならないことになる。

権利団体との補償金の交渉では、現在では著作物の複製や公衆送信が容易に行えるため、著作物が流出すると甚大な被害が生じる懸念を踏まえて、異時送信については1年間に学生1人当たり500円年程度の補償金を支払う方向で検討が進んでいる。ただし、補償金を支払えば著作物を自由に使えるようにするのか、あるいはその射程範囲について今後検討を要する部分が残っている。

今回の法改正の検討では、その過程で様々な議論があったが、著作権法35条の1項と2項には変更を加えない方向での話し合いが進んでいる。その上で、補償金について第3項を新たに設けて条文化する案と、法改正は行わずに契約で対処する案が出ている。前者については、補償の範囲内での著作物の利用が学校教育のみに限定される反面、海外の権利者についてもそのまま対応ができると考えられる。後者については、海外の権利者には別途契約が必要となるなど難しい対応が生じると考えられる。これら2つの案についてどちらを採用するかについては現時点(7/19)では検討中である。

今後、大学は法改正に注視しながら、教育活動において異時送信を行わないのか、それとも異時送信について権利処理を行うか、オリジナルな教材を作るかについて熟考する必要がある。本日の研修会について質問があれば、後日個別に対応したいとのことであった。

説明後の質疑応答は、時間の関係で行われなかった。

研修会後のアンケートには、「きちんとした背景がわからない者にとっては、理解するのが難しかった。もう少しわかりやすく説明してほしい」、「著作権は研究とも深く関わる事項で、意識すべき事であり、新たな情報も得られて、貴重な会でした」、「時間が短く、もう少し話を聞きたい」、「もう少し時間をとって説明してほしい」、「よくわからなかった」、「音楽に関する現状が少し理解できた」、「法律として知っておくべき内容で、とても参考になりました。ただ、授業など自分の教育活動の中で、何をどう気をつけたらよいのかについて、さらに具体的なお話が聞きたいです」、「マイクの声が聞きとりにくかった」、「時間がタイトだったが、おもしろい内容だった」、「話の論点が見えなかった。話の内容がまとまっていなかったためと思われる」、「演者の話の論点がわからないような研修会は必要ないと思われる」、「情報が多くて消化できなかった。もう少し時間をかけて研修会を行うか、もう少し情報量を絞っていたら良かったかも」、「教育活動に直接関係する内容で良かった」、「テーマは重要で、気をつけなければいけない部分だと思いました。もう少し基本的な用語など分かりやすく解説していただくと助かります」との回答があった。また、今後希望する研修会については、「最新のハラスメント」、「法改正などで気をつけておくこと」、「大学入試改革について」、「今回の内容のさらに具体的なことを知りたい」、「今回の内容のように大学での教育活動に関する法律や制度の改正にかかわる内容」、「科研費に関する研修」、「Active Learning / ICT 活用」との回答があった。

(5) 大学生にみられる精神障害の基礎知識と対応について

日程 平成 29 年 7 月 19 日(水) [吉田地区] 13:30~14:10

場所 農学部会議室

講師 松原 敏郎 (保健管理センター准教授)

参加者 28名(アンケート回収23名)

内容

研修会の前半では、松原先生から大学生にみられる精神障害の基礎知識として学生のライフサイクルに関係したストレスに応じた精神疾患が発症するという事実がまず示された。思春期・青年期の代表的な精神疾患として発達障害、統合失調症、少し年齢が上がると気分障害である躁うつ病等が発症するケースが多くなる。特に思春期の女性に顕著にみられるのは摂食障害(拒食症・過食症)である。そしてこの時期同様に顕著によくみられるようになるのが発達障害である。以前は広汎性発達障害といわれていたが、最近ではASD(自閉症スペクトラム)と呼ばれ、幼少期から顕在化し、その数が大学でも急激に増加している。これはアクティブ・ラーニング等の学生間コミュニケーションを重視する授業形態の増加が背景にある。また、生涯通して出現しどの年代でも発症するのがストレス反応である「適応障害」である。ストレスがかかり過ぎで自分のキャパシティをオーバーすると不安、抑うつ、不眠という症状が一過性に出現する。就職活動や研究、友達関係が上手くいかないといったことが原因となって発症するそうだ。保健管理センターにもこのような学生が来診するが、このような学生には薬を服用せず環境調整等で適切に対応することで改善に向かうケースがあるそうだ。したがって、大学に入ってくる以前から発達障害や摂食障害等の元々

設問1 研修会に参加した感想はいかがでしたか？

選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	11	47.8%
良かった	12	52.2%
どちらとも言えない	0	0.0%
あまり良くなかった	0	0.0%
良くなかった	0	0.0%
無回答	0	0.0%
合計	23	100.0%



脆い部分を持っていた学生と入学後に自分自身のキャパシティオーバーとなってストレス反応を起こしてしまう学生という大きく分けて 2 種類の学生がいることやどちらのタイプの学生かによって支援方法が異なってくるということが明らかにされた。

後半には、これらの精神疾患に関する対応方法について説明があった。多くの学生は上記でも記したように「環境調整」すなわち、指導教員とのコンタクト、作業量の軽減、家族や友人に悩みの打ち明け等により回復する学生がほとんどであるようだ。これらの支援のために保健管理センター、学生相談所、学生特別支援室 (SSR) が連携を取りながら本人、先生方等の支援を対応している。また、早期からのコミュニケーションこそが対応の基本であることが示された。また、早急な対応が必要な学生を先生方や支援者が見極めることも大切だそうだ。

講演の中で大学生のストレスでは保健管理センターで摂食障害や躁うつ症等総合的な精神状態のスクリーニング検査を入学時の健康診断の際に行っていることが明らかにされた。その結果、全新生 2000 名の内、ハイリスクの学生が全体の約 10%程度いることが明らかになった。その後、松原先生が診察して要観察・要治療の学生が 52 人、全体の 2.6%いたそうだ。これらの学生は大学入学前から精神障害・疾病や発達障害の診断や治療を継続的に受診してきた学生が大部分を占めているようだ。

また、本学の自殺者の過去 20 年間に調査したところ、3, 4 年生が過半数を占め、男子学生が約 9 割を占めているようだ。これらの学生は休学や留年、不登校等の何らかのトラブルを抱えている学生で毎年の健康診断に 2~3 年来ていない学生が大半を占めているようだ。この結果から、大学生のストレスを考えると、就活、研究、卒論などが出てくる 3, 4 年生の時期にストレスがかかり精神疾患に陥りやすい危うい時期と考えた方がよいという見解が示された。したがって、先生方は不調を訴えてきそうな学生の様子を早期に察知して対応し声かけをすることが重要であるという見解が示された。

質疑応答では以下のようなものがあった。

Q: 男子学生に自殺者が多い背景や理由はなぜか？

A: 日本だけでなく海外の統計を見ても男子の方が女子より自殺者が多い。その理由としては、女子学生の場合、周りに学生や保護者とのコミュニケーションが男子学生より比較的取りやすい (ネットワークを形成しやすい) ため、悩みを打ち明けることができるため自殺に至らないケースが多い。しかし、男子学生の場合、そのようなネットワークを作りにくく、「男らしさ」から相談しにくいいため自殺者が多いと考えられている。

Q: 精神障害のある学生の対応には早期発見、早期対応が重要だということ話だったが、場合によってはハラスメントと捉えられる可能性はないか？

A: 先生方が思っていることと、学生が思っていることが異なっている (ズレがある) とそのようなケースがあるかもしれないが、研究室で一緒に研究して社会に出ていくという流れから見た時に、当該学生が支援してくれた先生方に対して感謝するケースが圧倒的に

多いと感じている。また、ハラスメントを避けるため、当該学生に対して教員が声掛けをし、顔色や精神状態を観察するだけでもよいと考えている。先生が自分のことを気にかけてくれているというように当該学生に感じさせるだけでもよいのではないか。

Q: 心配になる学生に何度も声掛けをしたり、電話連絡を取っているが、最近では着信拒否や電話にあえて出なかったりする学生がいるが、そのような場合、教員はどのように対応したらよいのだろうか？

A: このようなケースの場合、保護者を巻き込んだ（連絡を取り合った）支援を考えていく必要があると考えている。教員は親ほどの親身になった支援は無理だからである。

Q: スライド中、平成 27 年度入学時のスクリーニング検査結果が示されているが、検査項目の専門用語を説明してもらいたい。

A: EAT は摂食障害、UPI は全体的な精神的不調、SDS はうつ状態を示している。今後は発達障害のスクリーニングをどのように調査するか考えている。なお、この調査は学生自身が記入回答する自記式という形態を取っている。また、この調査は病院の IRB の許可を得て実施している。

Q: 現在、初年次の共通教育から「山口と世界」のようなアクティブ・ラーニング型授業が導入されたことにより、人とのコミュニケーションが苦手とする発達障害のある学生の存在が顕在化してきたといわれている。彼らが専門教育に進学した際に専門教育の内容に興味・関心を持って、小人数教育ではうまく対応できるものなのか、それともその障害特性ゆえにやはり専門教育でも対応は難しいのでしょうか？

A: アクティブ・ラーニング型授業に対して発達障害学生がどのような手段や支援を行えば上手く対応できるのかを様々な検証を行い、データを収集し分析する必要があると思う。その結果、アクティブ・ラーニング型授業そのものを変えていくのか、アクティブ・ラーニングに代わる授業形態を新たに考えていくのが明らかになってくると思う。

Q: 4 年生になって研究室に来なくなった学生への対応をどのようにしたらよいか？親とも相談しているが、SSR や保健管理センター等への相談などといったそこまで大げさな対応を避けて欲しいという保護者からの要望がある。また、保護者と当人とのコミュニケーションも充分取れていないようだ。まず、教員自身が SSR や保健管理センター等へ相談に行った方がよいのだろうか？

A: それによって先生自身の対応がどのように変わるかわからない。もし、学生の不調の理由がどうしてもわからないのであれば、医学的な相談も含めて、学外の医療機関を受診するわけではないので、学校の保健室に相談に行くといった感覚で学内の保健管理センター等にまず当該学生に受診をすすめたらどうだろうか。

研修会後のアンケート結果では、「非常に良かった(47.8%)」および「良かった(52.2%)」であり、参加者全員の満足度が非常に高い研修会であった。自由記述でも、「興味が持てる内容であった」という意見があった。開催時期および開催場所も概ね「良い」という意見が大半を占めていた。

(6)障害学生修学支援申請状況と課題 - 学生特別支援室での相談対応から

日程 平成 29 年 9 月 20 日 (水)
 [吉田地区] 15:00-16:20 |
 場所 総合科学部 2 階会議室 (吉田キャンパス)
 専任講師・コーディネータ 岡田 菜穂
 カウンセラー・臨床心理士 田中 亜矢巳
 参加者 20 名(アンケート 14 枚回収)

内容

昨年 4 月から障害者差別解消法が施行され国立大学では合理的配慮の不提供や障害者に対する差別的取り扱いの禁止が法的義務となっている。そこで本学では学生特別支援室 (以下、SSR) を設置し、合理的な配慮を実施している。そこで、岡田講師から合理的な配慮の内容や学内の支援体制の概要、SSR の業務内容について説明があった。この中で相談件数は年々倍増していることや配慮願の作成・配布方法等について詳細に説明があった。さらに、SSR ではサポート学生の育成を行っている。スキルトレーニングだけでなく、本年度からは正規授業として単位化し、アクセシビリティの考え方を理解し、障害者と企業や組織等の社会とのさまざまな仲介ができる人材を大学から輩出することを目指していることが明らかにされた。

田中カウンセラーからは発達障害の概容とアクティブ・ラーニングでの対応について説明があった。発達障害者は、最近では神経発達症の言う分類に含まれるようになった。発達障害には自閉症スペクトラム症 (ASD)、注意欠陥多動性症 (ADHD)、学習障害 (SLD) 等があることが示された。アクティブ・ラーニングにおける配慮に関しては、グループ分けに対して注意を払う必要や情報が取れていない状態があるのでプリント配布や板書等が情報を確実に伝えるのに有効であることが紹介された。

後半は、国際総合学部で現在、支援の申請書を提出している学生を題材に、当該学生の配慮願の内容を元に SSR としてこれまでどのような支援を行ってきたかを岡田先生より説明があった。その後、学部で当該学生の授業を担当しているまたは支援に関わっている 3 名の先生方から、基礎ゼミや授業等での支援の状況や支援に対する本人の反応等について意見交換が行われた。また、後期にアクティブ・ラーニング型授業を担当予定の先生方から心配になっていることについて協



図 1 講演中の岡田コーディネータ



図 2 講演中の田中カウンセラー

設問1 研修会に参加した感想はいかがでしたか？		
選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	7	50.0%
良かった	7	50.0%
どちらとも言えない	0	0.0%
あまり良くなかった	0	0.0%
良くなかった	0	0.0%
無回答	0	0.0%
合計	14	100.0%

議が行われた。この中で本人が特に興味関心がある題材を話のきっかけにすると本人とのコミュニケーションが比較的上手に進むことが報告された。一般的に障害学生支援というと、問題を解決するというどちらかというネガティブ対処療法的な支援を主に想像されがちであるが、本人が持っている良さを上手く引出すというポジティブな支援も大切であることが協議を通じて共有することができた。SSR や学部としても今後は授業担当者の先生方に本人から自分が苦手とすることや配慮願の内容を説明できる能力（セルフ・アドボカシー能力）を育成できるように学部や授業担当者の先生方と協力していきたいとの意見があった。

最後に以下のような質疑応答が行われた。

Q1.アクティブ・ラーニング型のグループ分けやグループ協議ではどのようなことに注意したらよいのか。また、指示漏れを防ぐ対策はあるのかアドバイスをいただきたい。

A1.前期において国際総合科学部では全学部生メールを出して重要な日程を周知する方法を取っていると伺っている。この方法を徹底させたらどうか。グループ分けや協議については、個人的に何か困っていることを何気なく本人聞いてみるという方法がある。特に他の学生の自分の障害を知られたくないという学生には本人を呼び出して困っていることがないかをあらためて聞き出す必要はないと思う。

Q2.当該学生の実施していく上で、他の学生とのバランスに対してどのように対応したらよいのか？

A2.先生方は配慮願に書かれたことを着実に実施していただきたいと思います。他の学生とのバランスですが、授業では履修できる条件やルールがあると思うので、そのことを障害学生本人にはよく理解させる必要があります。また、当該学生の障害内容を他の学生に公開することは本人の承諾を得ないとできないので慎重に対応すべきである。

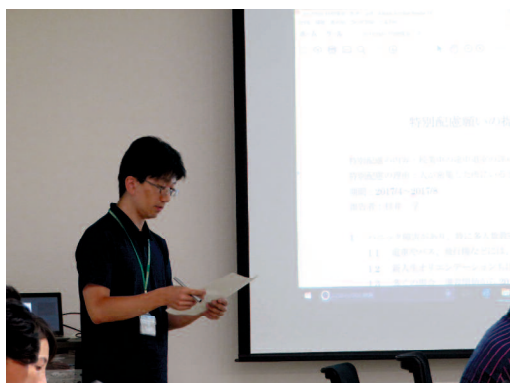


図 3 ケーススタディ 1 杉井先生



図 4 ケーススタディ 2 阿部先生



図 5 ケーススタディ 3 北西先生

今回の研修会では本人の特性を活かした支援の方法を考えるという新しい視点から合理的配慮が議論されたことは非常に有意義な研修会であった。

研修会後のアンケートでは、「非常に良かった」および「良かった」を合わせて89.5%であり参加者の満足度は高かった。アンケートの自由記述欄には「利用状況を知ることができ、教員として学生のSSRの利用を勧めることができる」、「具体的な事例を挙げて説明していただきありがたかった」、「最近の障害学生の傾向や対応を知ることができて良かった」、「スライドの内容に参考になるものが多かった」。また、一方で、「研修の時間が足りなかった」「拡大教授会の間に入れると参加者は多くなるが、研修時間は少なくなってしまう」等の問題点を指摘する内容もあった。

(7)FD・SDワークショップ 第1回ALベストティーチャーによる模擬授業

日 時：平成 29 年 9 月 26 日（火） 14:00～16:00

場 所：山口大学共通教育棟 15 番教室（アクティブ・ラーニング教室）

参加者：52 名（学内 33 名（教職員 31 名、学生 2 名）、学外 19 名（教職員 19 名））

概 要：

14：00～14：10 開会挨拶・趣旨説明

菊政 勲 山口大学 大学教育機構 大学教育センター長

14：10～14：45≪模擬授業 Part1≫

「深い学びにつなげるアクティブ・ラーニング型授業『山口と世界』

上田 真寿美 山口大学国際総合科学部教授

[小休憩]

14：50～15：25≪模擬授業 Part2≫

「英語が嫌い」から「英語が楽しい」に変えるアクティブ・ラーニング」

尊田 望 山口大学非常勤講師

15：25～15：55 質疑応答・対話

15：55～16：00 クロージング・閉会挨拶

[総合進行：山口大学 大学教育機構 大学教育センター准教授 林 透]

山口大学・大学教育再生加速プログラム(YU-AP)
**アクティブ・ラーニング(AL)ベストティーチャー表彰記念
 FD・SDワークショップ
 ～第1回ALベストティーチャーによる模擬授業～**

【趣 旨】
 山口大学・大学教育再生加速プログラム(YU-AP)は、事業4年目を迎え、共通教育・専門教育を通じたアクティブ・ラーニング型授業が確実に広がっています。しかし、一方において、大学教育の現場では、「アクティブ・ラーニングを通して、学生の深い学びに結びついているのか」といった疑問や「自分の授業をアクティブ・ラーニング型授業として認識していない」といった実態が依然として見受けられます。
 本学では、アクティブ・ラーニング型授業の優れた取組を讃える「アクティブ・ラーニング(AL)ベストティーチャー表彰制度」を創設し、平成28年度に最初の受賞者(5科目・10名)を表彰しました。今回のワークショップでは、第1回ALベストティーチャー受賞者による模擬授業を体験し、改めて、「アクティブ・ラーニングとは何か」、「アクティブ・ラーニングを通じた学生の学び・成長」について考えてみたいと思います。

【申込方法・問合せ先】
 件名「FD・SDワークショップ申込」にし、「①氏名、②所属、職名(学生)、③E-mail」を記入の上、E-mail: yuap@yamaguchi-u.ac.jp 宛先 YU-AP推進室(あてに、9月22日(金)まで)までご連絡いたします。なお、定員に達した際、申込を締め切らせていただきます。

山口大学 大学教育機構 大学教育センター(YU-AP推進室)
 E-mail: yuap@yamaguchi-u.ac.jp

日時：2017年9月26日(火)
14:00～16:00

場所：山口大学吉田キャンパス
共通教育棟15番教室
(アクティブ・ラーニング教室)

対象：学内外の教職員
(定員 30名)



Active Learning

【概要】
 14:00～14:10 開会挨拶・趣旨説明
 14:10～14:45≪模擬授業 Part1≫
 「深い学びにつなげるアクティブ・ラーニング型授業『山口と世界』
 上田 真寿美 山口大学国際総合科学部 教授
 (※振り返りを含む)

[小休憩]

14:50～15:25≪模擬授業 Part2≫
 「英語が嫌い」から「英語が楽しい」に変えるアクティブ・ラーニング」
 尊田 望 山口大学非常勤講師
 (※振り返りを含む)

15:25～15:55 質疑応答・対話
 15:55～16:00 クロージング・閉会挨拶

アクティブ・ラーニング(AL)ベストティーチャー表彰とは、山口大学の共通教育におけるアクティブ・ラーニング(AL)実施に顕著な成果をあげた教員について、その功績を表彰するとともに広く周知し、併せて本学教員の意識向上とALの推進に資することを目的としています。さらに、ALによる教育効果の共通理解やAL授業実践のグッド・プラクティスを共有できる機会(FD・SDワークショップ)や事例集(Teaching & Learning Catalog)を提供することで、学内におけるAL実践の向上に資することが期待されています。




内 容：

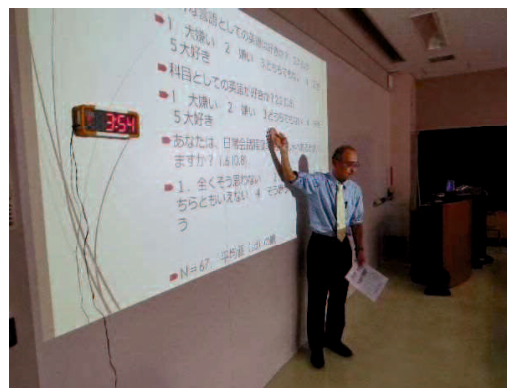
平成 29 年 9 月 26 日（火）に、山口大学・大学教育再生加速プログラム（YU-AP）『アクティブ・ラーニング（AL）ベストティーチャー表彰記念 FD・SD ワークショップ～第 1 回 AL ベストティーチャーによる模擬授業～』が、学内外から合計 52 名（学内 33 名（教職員 31 名、学生 2 名）、学外 19 名（教職員 19 名））の参加者を集めて、本学吉田キャンパス共通教育棟 15 番教室（アクティブ・ラーニング教室）にて開催された。本ワークショップは山口大学・大学教育再生加速プログラム（YU-AP）の一環として実施された。

冒頭、菊政 勲 山口大学 大学教育機構 大学教育センター長より開会挨拶があり、本学では、アクティブ・ラーニング型授業の優れた取組を表彰する「アクティブ・ラーニング（AL）ベストティーチャー表彰制度」を創設し、平成 28 年度に最初の受賞者（5 科目・10 名）を表彰し、今回のワークショップでは、第 1 回 AL ベストティーチャー受賞者による模擬授業を体感し、改めて、「アクティブ・ラーニングとは何か」、「アクティブ・ラーニングを通じた学生の学び・成長」について考えてみたいとの趣旨説明があった。

まず、模擬授業 Part1 では、上田 真寿美 山口大学国際総合科学部教授より、「深い学びにつなげるアクティブ・ラーニング型授業『山口と世界』」と題して、アクティブ・ラーニング型授業『山口と世界』初回の模擬授業を行っていただいた。授業のオリエンテーション時における学生との関係づくりを大切に、受講生全員の名前を読み上げて出席を確認した後、グループメンバー同士の自己紹介やチームづくりのポイントを説明された。このほか、授業の到達目標に関連して『山口と世界』コメントブックの観点の説明や、グループごとの活動記録に対するフィードバック、さらには、中間発表や最終発表の評価のあり方などについて紹介があった。受講生役の参加者は、実際の授業での配布資料や成果物サンプルを手にしながら、意見交換を行った。



次に、模擬授業 Part2 では、尊田 望 山口大学非常勤講師より、「「英語が嫌い」から「英語が楽しい」に変えるアクティブ・ラーニング」と題して、アクティブ・ラーニング型授業『English Speaking』導入部分の模擬授業を行っていただいた。冒頭、授業設計の背景の説明があり、学習目標を設定して学ばせることに主眼を置いたシラバスと学習者が自らの学び方に沿って知識やスキルを習得していくことに主眼を置いたシラバスの 2 種類があることについて解説があった。その後、自己紹介演習、語彙ゲーム、Q&A 演習、コミュニケーションゲームと、タイマーによる制限時間内のワークを小刻みに行いながら、教材を通して知っている単語を増やししながら、実際に英語を使って分かるようになる楽しさを実感させる授業を参加者一同が体感し、教室全体が活気ある雰囲気になっていった。最後に、教員は教え込むのではなく、学生の学修意欲を引き出すことに集中し、学生に気づきを与えるアクティブ・ラーニング型授業設計のポイントを力説された。



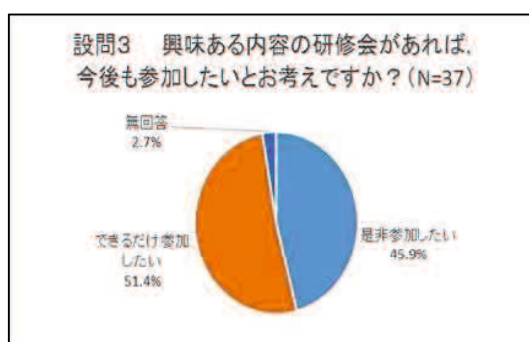
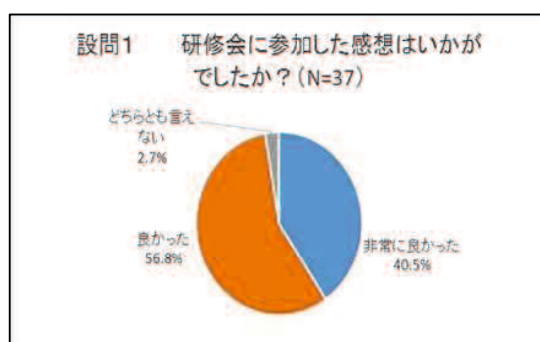
後半の質疑応答・対話のセッションでは、林 透 山口大学 大学教育機構 大学教育センター准教授のファシリテーションにより、参加者に事前配布したダイアログシートに模擬授業を受講して感じた気づきや疑問点を記入していただいた後、グループごとに、短時間の意見交換を行った。その後、全体の質疑応答に展開し、大人数授業での学生からの意見の引き出し方、グループワークやプレゼンテーションの評価方法、探究型授業におけるテーマ設定や学生によるテーマ検討の指導方法、さらには、英語表現を楽しく学びながら定着に結び付ける指導方法や到達度の目安など、授業実践における具体的かつ詳細な意見交換があった。また、若手教員からはグループワークにおいてうまく行った事例を知りたいという声や高校教員からはルーブリックによる学習評価の適切性に関する意見など、実践に役立てたい、実践での課題解消に結び付けたいという参加者からの真剣な思いが伝わってくるセッションとなった。



まとめ：

山口大学・大学教育再生加速プログラム（YU-AP）では、過去2年間、アクティブ・ラーニング型授業に関する事例紹介を行ってきたが、事例紹介だけでは伝えられないコツや秘訣を伝える機会を提供したいという思いで、今回の模擬授業型 FD・SD ワークショップを企画した。当該企画を思い立った、そもそものキッカケを与えてくれたのは、AL ベストティーチャーの先生方であった。昨年度末、AL 型授業実践集及びアクティブ・ラーナー記録集である『Teaching & Learning Catalog』作成取材において、AL ベストティーチャーの先生方からお聞きした授業実践の話のインパクトは大きいものであった。その素晴らしく、きめ細かい授業実践を、より多くの教職員の方々に体感していただき、大学全体の共有の財産としたいという思いで今回の FD・SD ワークショップが行われた。

今回の FD・SD ワークショップでは、模擬授業を通して、実際の授業設計や学修評価のコツを学びたいという若手教員や学校教員の参加が多く、当初の定員を大きく上回る参加者となった。参加者アンケートからも非常に好評であったこと（下表参照）が分かり、来年度以降も、AL ベストティーチャーによる模擬授業型 FD・SD ワークショップを継続的に実施していく予定である。



(8) 平成 29 年度 新任教員研修会 (第 2 回)

日程 平成 29 年 9 月 27 日(水) [吉田地区] 12:55～17:15

場所 事務局 2 号館第 2 会議室

講師 小川 勤 (大学教育センター教授)、岡田 耕一 (大学教育センター専任講師)
グループワーク・ファシリテータ 池園センター主事 (人文学部教授)、小川教授、林准教授、岡田専任講師

参加者 31 名(アンケート回収 31 名)

内容

当該研修会は本年度から小串地区から吉田地区での開催に変更になった。そのため、参加者は 37 名から 31 名と 6 名ほど減少した。この原因は医学部からの参加者がかなり減少したためと考えられる。本年度は昨年度の内容をさらに改訂し、人事、地域連携、研究推進、障害学生対応、授業設計・教育方法、シラバス・授業評価、グループ協議というように新任教員にとって研修ニーズが比較的高い内容に変更された。

大学教育センターが担当した部分に関しては、小川教授から「授業設計と教育方法」というテーマで、授業設計の方法、授業形態の種類、もっと授業をよくするためのコツ、良い授業とは何か、成績評価方法、試験の公正な実施、学生の多様化に対する配慮等について事例を交えてわかりやすい説明があった(図 3)。

岡田耕一専任講師からは、「来年度シラバスの入力について」および「学生授業評価の閲覧と教員授業自己評価の入力について」それぞれ説明があった。DP とカリキュラムマップ、シラバスの関係や、最近教員の授業自己評価の入力率が低くなっていること。その改善のためには、教員は授業改善の PDCA サイクルを回すために必ず授業自己評価に入力して改善する必要があるという指摘があった(図 4)。

グループワークでは、「本学赴任後の教育・研究活動を振り返って」というテーマで、4 班に分かれて実施された。赴任後の教育活動や研究活動で困っていること、悩んでいることなどを中心に参加者がそれぞれの立場からは話し合いを行った。班はさまざまな学部・学科、研究科の教員が混在する形で協議が進められた。教育活動に関しては、山口大学生はまじめな学生が多く授業態度もよいが、もう少し自主的かつ積極的に授業や学修活動に取り組んで欲しいという積極性を求める意見が多かった。(図 2)。

研究活動では、科研費の採択が難しくなっている現状を考えると、今後の自分の研究活動が十

表 1 アンケート結果

非常に良かった	3 名
良かった	18 名
どちらとも言えない	4 名
あまり良くなかった	2 名
良くなかった	3 名
無回答	1 名

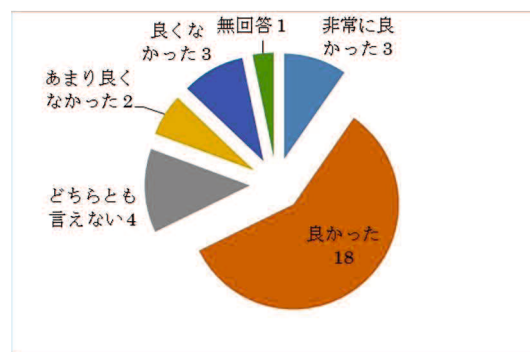


図 1 研修の満足度



図 2 グループワークの様子

分やっっていけるかが不安である。前の職場に比較して現在の研究環境（狭い、汚い、遠い、研究機器の未整備等）が悪いことや研究レベルが低下することを心配する意見があった。また、同僚の先生方の研究意欲が低いことに対する不満を述べる新任教員もいた。

大学教育センター教員が担当した 2 つの研修に対する意見としては、「授業設計と教育方法」に関しては、「授業を良くするための具体的な手法をあげてくれたのは大変分かりやすい」、「静穏な環境にするために座席指定を行うなどの具体的な方法を教えてもらってよかった」、「今日の話の中では一番参考になった気がする」、「講師の方のプレゼンが上手であった」、「スライド、パワーポイントを使ってもダメな授業」の例を話したが、今日の他の話し手の方も参考にしてはどうか、「実際の問題点や解決策の例があり、参考になった」という肯定的意見が多かった。

「シラバスおよび授業自己評価の入力」等に関しては、「時間がおしているのもあったのだろうが、少し早口になっていてわかりにくい部分もあった」、「メール通達で十分と感じる」、「とにかく話したというだけで、窓口を教えるだけ。それなら研修に参加する意味はない」という研修内容の改善を求める意見があった。

「グループワーク」に関しては、「分野が異なる話が聞けて心に少し余裕ができた」「悩みを共有し、同じことで悩んでいた人がいることを知るだけでも安心できた」、「他分野のお話が聞けてよかった。同じ立場や先輩からの話を聞くことができ、非常に良かった」、「着任して1ヶ月で参加しても理解できないことが多い。もう少し時間が経ってから参加すべきと考えた」等肯定的および改善を求める意見があった。

学生特別支援室の岡田菜穂子専任講師が担当した「学生特別支援室」に関する研修内容については、「非常に重要な内容だと思うので、もう少し時間を長めにとってほしかった」、「ほとんど知らなかったなので、聞いておいてよかった」という肯定的な意見の一方で、「大切な話だと思うが、統一の基準についての質問について特に明解な答えがなかったと思う」、「もっと詳細に話してほしい。学生は（教員がすすめても）相談に行かない。センターの方から定期的に学生へメールなどを通じて注意喚起があるといいかもしれない」といった学生特別支援室に対する要望や意見があった。

一昨年度までの当該研修会（第2回）は理事・副学長の講話が中心であったが、昨年度から受講者の研修ニーズに沿った研修内容に変更となった。その結果、研修会全体の満足度（「非常に良かった」＋「良かった」）は全体の 67.7%と比較的高い値となっており（表1、図1）、研修内容の変更は一定の評価を得ることができたと考えている。しかし、まだ研修内容に関しては改善すべき点も多く、今後は人事課とともにアンケートに記載された改善意見や要望を反映した研修内容に改訂していく必要性を感じた。



図 3 授業設計と教育方法の様子



図 4 学生授業評価の閲覧と教員授業自己評価の入力の様子

(9) ルーブリックを活用した学修評価ワークショップ ～ルーブリックの観点と記述に着目して～

日 時：平成 29 年 11 月 10 日（金）16:10～18:00

場 所：山口大学共通教育棟 26 番教室（アクティブ・ラーニング教室）

参加者：41 名（学内 23 名（教職員 21 名、学生 2 名）、学外 18 名（教職員 18 名））

概 要：

16：10～16：20 開会挨拶・趣旨説明

菊政 勲 山口大学 大学教育機構 大学教育センター長

16：20～17：00《導入レクチャー&事例紹介》

「ルーブリックによる学修評価を知る、活かす」

俣野 秀典 高知大学地域協働学部 講師

「医学科チュートリアル教育におけるルーブリック活用実践」

藤宮 龍也 山口大学大学院医学系研究科 教授

17：00～17：55《ワークショップ》

「ルーブリックの観点や記述を考える」

ファシリテーター：俣野 秀典 高知大学地域協働学部 講師

17：55～18：00 クロージング・閉会挨拶

白澤 文吾 山口大学 医学教育センター長

[総合進行：山口大学 大学教育機構 大学教育センター准教授 林 透]

山口大学・大学教育再生加速プログラム(YU-AP)&医学教育センター共同企画
FD・SDワークショップ

ルーブリックを活用した学修評価ワークショップ ～ルーブリックの観点と記述に着目して～

【趣 旨】
山口大学・大学教育再生加速プログラム(YU-AP)では、アクティブ・ラーニングの組織的推進とともに、アクティブ・ラーニングを通じた学修成果の可視化に取り組んでいます。学修成果の可視化の取組として、学生の学修行動や成果物を評価するルーブリックの開発・実践・検証の作業を進めてきました。アクティブ・ラーニングの取組が共通教育・専門教育を通じて広がる中で、その学修評価のためのルーブリックの活用実践が共通教育だけでなく専門教育に広がっております。また、近年では、フィールドワークの成果測定に活用しようとする取組も進んでいます。
今回のワークショップでは、ルーブリックを活用した学修評価に焦点を当て、実際の実践事例を紹介するとともに、ルーブリックの観点や記述の調整を含めた諸課題について検討してみたいと思います。


【申込方法・問合せ先】
件名「FD・SDワークショップ申込」とし、「①氏名、②所属、職名(学年)、③E-mail」を記入の上、
E-mail: yuap@yamaguchi-u.ac.jp(担当: YU-AP推進室)あてに、11月2日(木)までご返信願います。なお、定員に達し次第、申込を締め切らせていただきます。

山口大学 大学教育機構 大学教育センター(YU-AP推進室)
E-mail: yuap@yamaguchi-u.ac.jp

日時：2017年11月10日(金)
16:10～18:00

場所：山口大学吉田キャンパス
共通教育棟2階・26番教室
(アクティブ・ラーニング教室)

対象：学内外の教職員
(定員 30名)



Rubric



【概要】
16:10～16:20 開会挨拶・趣旨説明
16:20～17:00《導入レクチャー&事例紹介》
「ルーブリックによる学修評価を知る、活かす」
俣野 秀典 高知大学地域協働学部 講師
「医学科チュートリアル教育におけるルーブリック活用実践」
藤宮 龍也 山口大学大学院医学系研究科 教授
17:00～17:55《ワークショップ》
「ルーブリックの観点や記述を考える」
ファシリテーター：俣野 秀典 高知大学地域協働学部 講師
17:55～18:00 クロージング・閉会挨拶

「ルーブリック」とは・・・米国で開発された学修評価の基準の作成方法。評価水準である「尺度」と、尺度を満たした場合の「特徴的記述」で構成されています。記述により達成水準等が明確化されることにより、他の手段では困難なパフォーマンス等の定性的な評価に向くとされ、評価者・被評価者の認識の共有、複数の評価者による評価の標準化等のメリットがあるとされています。ルーブリックは、コースや授業科目、課題(レポート)等の単位で設定することができ、国内においても、個別の授業科目における成績評価等で活用されています(文科省2016)。



内 容：

平成 29 年 11 月 10 日（金）に、山口大学・大学教育再生加速プログラム（YU-AP） & 医学教育センター共同企画『ルーブリックを活用した学修評価ワークショップ ～ルーブリックの観点と記述に着目して～』が、学内外から合計 41 名（学内 23 名（教職員 21 名、学生 2 名）、学外 18 名（教職員 18 名））の参加者を集めて、本学吉田キャンパス共通教育棟 26 番教室（アクティブ・ラーニング教室）にて開催された。本ワークショップは、山口大学・大学教育再生加速プログラム（YU-AP）の一環としての実施であるとともに、医学教育センターとの初めての共同企画での実施となった。

冒頭、菊政 勲 山口大学 大学教育機構 大学教育センター長より開会挨拶があり、山口大学・大学教育再生加速プログラム（YU-AP）では、学修成果の可視化の取組として、学生の学修行動や成果物を評価するルーブリックの開発・実践・検証の作業を進めるとともに、アクティブ・ラーニングの取組が共通教育・専門教育を通じて広がる中で、学修評価のためのルーブリックの活用実践が共通教育だけでなく専門教育に広がりつつあり、今回のワークショップでは、ルーブリックを活用した学修評価に焦点を当て、実践事例紹介のほか、ルーブリックの観点や記述の調整を含めた諸課題について検討したいとの趣旨説明があった。

導入レクチャーでは、俣野 秀典 高知大学地域協働学部講師より、「ルーブリックによる学修評価を知る、活かす」と題して、ルーブリックに関する基礎知識をレクチャーしていただいた。ルーブリックの形式（評価観点・評価尺度・評価基準）について概略説明の後、フロアの参加者に「何のために成績評価は必要か」という問いを投げ掛け、グループテーブルでの参加者同士のアイスブレイクを兼ねた意見交換を行った。



事例紹介では、藤宮 龍也 山口大学大学院医学系研究科教授より、「医学科チュートリアル教育におけるルーブリック活用実践」と題して、2017 年 3 月の医学教育モデルコア・カリキュラムの改訂に伴う医学教育改革や 2019 年度受審予定の国際基準認証に向けた動向な



どを紹介しながら、医学教育全体に、伝統的なプロセス基盤型教育からアウトカム基盤型教育に移行する必要性に迫られていることが説明された。医師として求められる基本的な資質・能力が明確化される中で、実践力や表現力などを評価するツールとしてルーブリックの導入に着目し、医学科チュートリアル教育においてルーブリックを活用した成績評価を行っている複数科目の実践事例が紹介された。

後半のワークショップ「ルーブリックの観点や記述を考える」では、俣野 秀典 高知大学地域協働学部講師のファシリテーションにより、まず、ルーブリックに関する詳細や作成上の注意点について説明があった。特に、ルーブリックについて、学生との共有が大切であり、次の学習の方向性を示す指針となることが説明されたほか、目標規準である「評価規準」と達成基準である「評価基準」の意味について解説があった。その後、幾つかの参考事例を紹介しながら、レポートを評価する際の観点やレベルごとの評価基準の記入を行うワークに取り組んだ。さらに、「ご自身の教授活動や職務の中でルーブリック評価をココに使って

みよう」というテーマで、参加者同士が振り返りを兼ねながら意見交換を行った。クロージングでは、俣野先生から、ループリック作成・運用のコツ、ペア・モデレーションに関する補足説明があったほか、ループリックというツールが学生の学習の到達状況を測定するだけでなく、授業や大学の質保証を証明する重要な武器になるとのメッセージがあった。



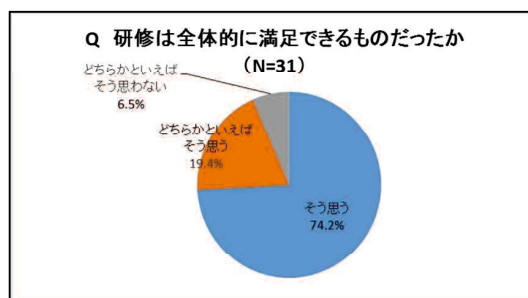
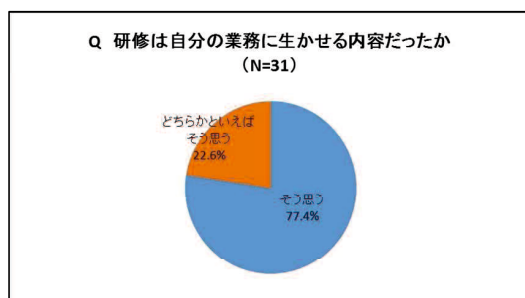
最後に、白澤 医学教育センター長より閉会の挨拶があり、アイスブレイク、ミニワーク、振り返りワークを通して、会場一体に、積極的かつ和やかな雰囲気の中で、シート記入、グループ対話が進み、充実したワークショップとなった。

まとめ：

山口大学・大学教育再生加速プログラム（YU-AP）では、初年次教育科目「山口と世界」コモン・ループリック開発を中心に、学内でのループリック活用の普及を図ってきたが、専門教育におけるループリック活用実践が徐々にではあるが広がりにつつあることを契機に、今回の FD・SD ワークショップが企画実現した。医学教育センターとの共同企画は今回が初めてのケースであるが、今後とも、成績評価や教育の質保証をテーマに、連携を図っていきたい。学部の先生方の日々の授業実践の中には素晴らしい取組が多く、学部との対話を通しながら情報把握し、大学共有の財産となるような場づくりをさらに進めていきたい。



今回の FD・SD ワークショップでは、教育学部、医学部、共同獣医学部の教員、探究型科目の導入が進む高等学校の教員の参加が多く、当初の定員を上回る参加者となった。参加者アンケートからも非常に好評であったこと（下表参照）が分かり、レポートやプレゼンテーションをはじめとした学修活動の評価に活かしていきたいというコメントが多かった。学修評価をテーマとした FD・SD ワークショップを継続的に実施していく予定である。



(10) カウンセラーとして関わった約 2400 名の大学生との泣き笑いを語る

日程 平成 29 年 11 月 15 日(水)
 [吉田地区] 15:00~15:30
 場所 教育学部 21 番教室
 (吉田キャンパス)
 講師 今井 佳子
 (学生相談所 カウンセラー)
 参加者 73 名(アンケート 35 枚回収)



内容

本研修会では、講師が本学のカウンセラーを務めた 15 年間について、様々な学生との出会いを振り返りながら、そこからみえてきた学生との向き合い方について講演が行われた。

講師は学生時代から本学教育学部と縁が深い。本学を卒業後、小学校で理科の教員を務め、後に様々な仕事を経験した。その後本学の大学院を修了し、病院等で臨床心理士を経験し、本学の学生相談所に赴任した。この職に就くまではさまざまな経験をし、それはストレートな道筋ではなかったものの、様々な学生の話を書く上では有意義であったと考えている。

カウンセリングでは、相談者の心の病気に向き合う日々が続く。世間では「目に見えることだけが現実とは限らない」というが、普段の我々は目に見えることを判断の拠り所とすることが多いと思う。その一方で、心の病気のケアでは目に見えないことを対象とする。医学が高度に進歩した現在にあっても、心の病の深刻さを数値化する客観的な指標は限定的であるため、そのケアは相談者との人間的な信頼関係を軸として成り立っていると考えられる。

カウンセラーを務めた 15 年間は、多くの若い人とかかわる機会があり、実に楽しく貴重な体験をした。学生の在学期間を通じて、長いスパンで関わるケースもあり、それはとても良い経験であった。学生たちとは様々な話をしてきたが、これらのかかわりからみえてきたもののうち、3 点ほど教職員にお願いしたいことがある。

ひとつ目は、学生と「生きる意味」について話をし、苦悩する学生の気持ちに寄り添っていただきたいと思う。相談所を訪れる多くの学生は「生きる意味」について話したがっている。講師が赴任した当初は、学生から生きる意味を問われて戸惑うこともあったが、「生きる意味」に向き合うことは、その対極の死を冷静に見つめることであり、ひいてはその学生が生きる方向性を見いだす源流となる。学生との対話を大事にして頂きたい。

ふたつ目は教員が発した言葉や文字が、学生にどれほど大きな影響を与えるかについて注意して頂きたい。同じ言葉であっても、教員が発した言葉は、学生に極めて大きな影響を与えることがある。このことについては、文字についても同様である。特に、SNS (ツイッターやフェイスブックなど) における発言についても十分ご注意頂きたい。

三つ目は教員養成についての要望である。教育実習をひかえた学生の中には、実習に不安や戸惑いを感じ、嫌なものにとらえている学生がいる。このような学生に対しては、不安や戸惑いを和らげるとともに、教科を教えることを通じて表現すること、人との関わりをもつ面白さについて説い

表1 研修会に参加した感想はいかがでしたか？

選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	25	71.4%
良かった	10	28.6%
どちらとも言えない	0	0.0%
あまり良くなかった	0	0.0%
良くなかった	0	0.0%
無回答	0	0.0%
合計	35	100.0%

て頂きたいと思う。

本学の学生相談所は昭和 28 年に開所し、今年度で 65 周年を迎える。これからも脈々と続いてゆくとする。4 月からは新しいカウンセラーが赴任するが、今後もよろしくお願いたしたい。

講演後には以下の質疑応答があった。

Q1 教育実習に対して不安を抱えているとか、面白さがわかっていない学生がいるとの話があったが、それは実習を終えた後か。それとも前か。

A1 実習の前である。付属学校の先生は非常に高い授業技術をお持ちであるが、実習前にその授業を参観することによって、「先生のような授業はとてもできない」と自信を失い、自己評価に疲れてしまう学生がいる。このような学生に対しては「付属学校の先生は特別に授業がうまい先生たちだ。先生にも色々な先生がいるので、実習では自分なりの先生でいいのだよ」と言い聞かせてきた。

研修会後のアンケートには、「カウンセラーとしての楽しさやご苦労が聞いて良かったです」、「今井先生には大変お世話になりました。最後の講演を聞いて、ありがとうございます」、「良かったです。良いご説明でした」、「とてもよかったです。お疲れさまでした」、「今井先生、長年の学生へのカウンセリングありがとうございました」との回答があった。また、今後希望する研修会については、「学生の指導にいかせる内容」、「学生のメンタル面に関する内容」、「学部の先生方の実践紹介。若手のロールモデル。ベテランにとっての刺激に」、「学生指導に役立つような内容」、「学生の動向や、メンタル面における指導事例等」、「業務改善」、「学生相談所の人の話をもっと聞きたい」、「情報セキュリティ」、「個人的な意見として、今回のような全体的な講義形式がよいと思います。時間的にも今回のような形式がよいと思います」、「授業改善、共同研究のすすめ方など」との回答があった。

(11) 2017 ラーニング・アドバイザー養成講座

大学における学生の「自主的な学び」「積極的な学習行動」の支援者は教員だけではない。現に、教育支援・学生支援・就職支援・図書館といった部署では、その役割の一部を担っています。学生の多様化が進んできたこともあり、これまで以上に事務職員による学修支援体制の充実が求められている。

そこで、AP 事業テーマⅡの数値目標項目「学修成果測定を支える教学マネジメントの強化」のひとつとして本学が独自に定めている指標である「ラーニングアドバイザー及び高度専門職（UEA：University Education Administrator）の配置」に向けた事業の一環として、「学生の学びの好循環」に資することのできる事務職員に活躍してもらうため、新たに「ラーニング・アドバイザー制度」を創設した。

この制度は、大学教育機構が主催する「ラーニング・アドバイザー養成講座（全3回）」を受講・修了することにより、ラーニング・アドバイザー認定証が授与されるというものである。なお、この3回の講座は、プログラムそのものに順次性がある関係で、定められた順番で受講することを求めた。可能な限り同一年度に3回とも受講することが望ましいが、業務との兼ね合いから必ずしも同一年度に全てを受講できないこともありうることから、可能な限り多くの事務職員が参加しやすい制度にしたいという趣旨から、複数年度にわたって受講することを可能とした。

講座の内容は、事務職員一人ひとりがこれまでのキャリアを振り返りつつ、大学人として身に付けておくべき学内の各種情報や制度、学生のニーズなどをしっかり把握・理解したうえで、学生の学びに関する疑問・悩みに応える事務職員になることを目指したものとなっている。

初回の講座は、2017年11月から2018年1月にかけて開催した。計23名から受講申込があり、このうち8名の事務職員の方々が全3回の講座を受講・修了し、大学教育機構長から「ラーニング・アドバイザー認定証」が授与された。初代ラーニング・アドバイザーのみなさんが、それぞれの部署・業務の中で、様々な形で学生の成長を支援して下さることを期待したい。

【2017年度の実施概要】

- 日 時：①2017年11月30日（木）14:00～17:00
②2017年12月21日（木）13:00～17:00
③2018年1月19日（金）13:00～17:00
- 会 場：①吉田キャンパス 共通教育棟 2階 会議室
②吉田キャンパス 事務局2号館 4階 第2会議室
③吉田キャンパス 共通教育棟 2階 会議室
- 内 容：①学習支援者に必要なスキルとは？
②メンタリングとスタッフ・ポートフォリオ（SP）
③山口大学における学習支援者として目指すもの—事務職員として可能な学習支援を考える—
- 講 師：①清水栄子（愛媛大学教育企画室講師）

②清水栄子（愛媛大学教育企画室講師）・篠田雅人（大学教育センター助教（特命））

③菊政 勲（創成科学研究科・理学部教授）・寺西晴美（学生支援部学生支援課副課長）・篠田雅人（大学教育センター助教（特命））



(12) 著作権法改正に伴う教育活動への影響と対応

日程 平成 29 年 12 月 13 日(水)
[吉田地区] 13:30~14:20
場所 農学部・共同獣医学部大会議室
(吉田キャンパス)
講師 木村 友久
(知識財産センター 教授)
参加者 25 名(アンケート 16 枚回収)



内容

本研修会では、今後予定されている著作権法改正が、大学での教育活動にどのような影響をおよぼすのか、どのように対応すべきなのかについて説明が行われた。

現行の著作権 35 条では、著作物を教育目的に利用する際の権利制限が記載されている。現行法は昭和 46 年 1 月 1 日に施行されたが、それ以前の著作権法では、授業のための複製については普通教育（小学校や中学校）のみに認めていた。その後、昭和 46 年に改正が行われた際は、普通教育以外の教育機関にも権利制限が拡大され、権利者団体は驚愕したという。この時以来、権利者団体は他国では権利者団体には著作物の対価が支払われていることを一貫して訴え続けてきた。2 年前にこの運動が実を結び、35 条を改正して、料金を徴収する方向で改正することになった（平成 30 年 6 月に国会で成立予定）。文化審議会によると、混乱を避けるために、第 1 項と第 2 項については変更を加えず、新たに設ける第 3 項で異時送信について言及するという。これに向けて権利者団体は既に料金を徴収する団体を設立しており、大学に対して学生 1 人当たり年間 500 円年程度の補償金（補償金額は増減両方の案がある）を要求することになる。本学では、1 万 2 千人の学生が在籍しているので、500 円の場合年間の支払額は 600 万円にも上る。

昨今は反転授業のために、授業に先だって学生にネット上でビデオなど様々なコンテンツを提供し、学習させることがある。このような授業以外の場でのネットワークを介した教材の配布は、異時送信に該当し、この教材に他人の著作物が含まれる場合は、教育目的であるにもかかわらず著作権法に基づいた権利処理が必要となるので細心の注意が必要である。

今後の法律改正のスケジュールは、平成 30 年 6 月ごろに 35 条の第 3 項について法改正案が出され、平成 31 年の 1 月 1 日に施行し、権利者団体が教育機関に対して料金を徴収するという流れが予想される。大学は同法の改正に注視しながら、教育活動における異時送信を行わないのか、それとも異時送信について権利処理を行うか、オリジナルな教材を作るかについて熟考する必要がある。特に、完成後の教材の権利処理は非常に大きな労力がかかるため、なるべく早期に検討を開始する必要がある。各部局でどのように対応するか早急に検討を始めていただきたい。知識財産センターは助言を行いたいと考えている。

講演後には以下の質疑応答があった。

Q1 獣医の場合は鹿児島大学と授業の資料を作成していて、パワーポイント資料等に他人の著作物が含まれる。これらの資料を授業の 1 週間ぐらい前に、視聴者が特定の学生に限られるサイトに掲載して、閲覧できるようにしている。こういう場合も、著作権法に抵触するようになるのか。ま

表1 研修会に参加した感想はいかがでしたか？

選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	8	50.0%
良かった	7	43.8%
どちらとも言えない	0	0.0%
あまり良くなかった	1	6.3%
良くなかった	0	0.0%
無回答	0	0.0%
合計	16	100.0%

た、もしそうであれば、ライセンス料 500 円を支払うことで、解決できるのか。それと、この授業内容を録画して、両大学の学生に限定して復習のために視聴できるようにしているが、これも法に抵触することになるのか。

A1 法的には、2つの場合とも異時送信に該当し違法になる。これらについては、現状は個別に権利処理をする必要があるが、法改正でこの点は包括的なライセンス料支払いで解消される。

Q2 授業である出版社の本を教科書として用いていて、その本に掲載されている図などを授業のパワーポイントに用いているが、その出版社に授業のスライドに用いてよいかを照会し、許可が出ればそのまま使用してよいのか。

A2 一般的には、その本を教科書として学生が購入していれば、許可が得られることも少なくないと思う。このあたりについては、出版社に対して直接的に問い合わせる方が得策と考えられる。

Q3 学生に資料を配布する場合、例えば学生が資料をダウンロードした後に、国家試験に備えて学生どうして過去問や関連する資料を集めて試験対策をするとき、学生がそれらの資料に含まれる画像等を、獣医系の他大学の学生と融通しあった場合の責任は誰が問われるか。あらかじめ教員が2次配布を禁止することを学生に明示していたとしても、教員の責任が問われるか。それとも、そのようなことをした学生のみが責任が問われることになるのか。

A3 2次配布禁止については、授業の際に口頭で著作権侵害になることを含めて学生に伝えるとともに、資料にも明示するようにはしていただきたい。そうすれば、今の例では権利侵害の主体は当事者の学生であるので、教員の責任が問われることはない。

Q4 ライセンス料を支払えば、様々な出版社等のコンテンツを教材等に利用しても、合法ということか。

A4 法律で定めるといふことは、そういうことである。

このようなライセンス料支払いについては、不公平なところもある。出版社はこのようにライセンス料の支払いがあるが、その本を書いた著者者について、このライセンス料の分配が実際に回るかどうか見通しがついていない。大学の教員は研究者であり、現行の著作者という立場であることも少なくないので、このように権利団体が徴収するライセンス料から分配金を支払うことを要求してもよいのではないかと考える。先生方が本を出される場合には、著作権の許諾を出版社は求めてくるが、今後はこのような点を面倒と考える出版社側が、大学の先生方には知識がないと思って、著作権の譲渡を求める場合も増えるかもしれない。このよう場合は、著作権を譲渡しないようにしていただきたい。また、出版契約で著作権を許諾する際に、何らかの著作物を出す場合、特定の出版社を通してドラマ化権など全てのハンドリングを行うとの条項が含まれていることが多いが、この条項を外すように要求していただきたい。日本の出版物のかなりの部分は大学の教員が著者になると思うので、このあたりについてはご留意いただければと思う。

知的財産センターとしては、個人的にもご相談いただければと思うので、ご連絡いただければと思う。

研修会後のアンケートには、「IT 時代が故の権利の帰属の考え方が難しいことを改めて学んだ」との回答があった。また、今後希望する研修会については、「引き続き著作権」との回答があった。

(13) 大学マネジメントセミナー2017 in やまぐち 「今、改めて考える“教職協働”～地方大学の魅力発信と大学間連携～」

日 時：平成 29 年 12 月 18 日（月）14:00～17:00

場 所：吉田キャンパス・大学会館 2 階会議室

参加者：101 名（うち、学内 68 名、学外 33 名）

主 催：大学リーグやまぐち、山口大学

共 催：大学マネジメント研究会、大学行政管理学会中国・四国地区研究会

概 要：

（13:00～ 受付・大学リーグやまぐち加盟機関によるポスターツアー
ポスターテーマ：「うちの大学・短大の教職協働を紹介します！」）

14:00～14:10 開会挨拶・趣旨説明
山口大学長 岡 正朗

14:10～14:40 基調講演（1）
「東の山大でプレイフル！～職種と組織を超えた協働が日本を救う～」
山形大学米沢キャンパス事務部研究支援課・副課長 樋口 浩朗氏
（元・大学コンソーシアムやまがた事務局長）

14:40～15:10 基調講演（2）
「教職協働による地域に信頼される大学づくり」
日本文理大学工学部教授・学長室長 吉村 充功氏

[15:10～15:20 休憩]

15:20～16:50 ポスター発表 & ディスカッション

16:50～17:00 クロージング & 閉会挨拶
山口大学理事・副学長 田中 和広

[総司会：山口大学 大学教育機構 大学教育センター准教授 林 透]

内 容：

2017 年 12 月 18 日（月）に、大学リーグやまぐち・山口大学主催 大学マネジメントセミナー2017 in やまぐち『今、改めて考える“教職協働”～地方大学の魅力発信と大学間連携意識変容・行動変容を目指した大学職員育成を考える』を、県内大学はもとより、北は北海道から南は長崎からの参加を含め、100 名を超える参加者を集め、吉田キャンパスにて開催した。本セミナーは、大学リーグやまぐち、山口大学の共同主催、大学マネジメント研究会、大学行政管理学会中国・四国地区研究会の共催で、山口大学・大学教育再生加速プログラム（YU-AP）における教学マネジメント強化のための研修の一環として実施された。

冒頭、岡 正朗 山口大学長より開会挨拶があり、2017 年度から SD（スタッフ・ディベロップメント）の義務化に加え、大学経営における教職協働の重要性が謳われる中で、従来の SD セミナーを大学マネジメントセミナーと改称して開催する趣旨が述べられ、例年同様、所属大学を超えた大学関係者の議論や情報交流に期待が寄せられた。

基調講演では、まず、樋口浩朗 山形大学米沢キャンパス事務部研究支援課・副課長より、「東の山大でプレイフル！～職種と組織を超えた協働が日本を救う～」と題して講演があ

った。近年の山形大学における外部資金獲得の伸び率が2年連続1位や米沢キャンパスにある工学部での研究活動の躍進などの紹介があった後、樋口氏自身が大学職員として取り組んできた取組について説明があった。国立大学法人化以前の山形大学での入試ミス事件を契機に、職員仲間で危機感を抱き、山形大学アクションプランの提起や基本理念の策定に参画するなど、大学執行部や大学教員との協働した成果を挙げ、そのほか、東日本大震災後の復興支援プロジェクト、若手職員育成を視野に入れた大学経営塾の企画など幅広い活動について説明があった。学内外の仲間やネットワークに支えながら、大学職員の仕事に生き甲斐を感じ、更なる使命感を持って仕事に取り組む樋口氏の言葉と姿勢に、参加者は多くの感銘を受けているようでした。

次に、吉村充功 日本文理大学工学部教授・学長室長より、「教職協働による地域に信頼される大学づくり」と題して講演があった。18歳人口減が始まる大分県において、入学者数のV字回復を遂げた成果を取り上げながら、地元県内から選ばれる大学を目指して、教育理念の再編を図りながら、人間力育成に重点を置いた教育改革を、教職協働により時間をかけて進めてきた経緯について説明があった。FD研修会を通して、幹部と現場、教員と職員、ベテランと若手が教育や学習支援に関する価値観が違うことを互いに認識し合うことこそが大切であり、教職協働そのものが目的になってはいけないと力説された。第2期中長期施策や文部科学省COC事業が起爆剤となって、地域に学生があふれ出すことで、大学への信頼感が向上し、学生の成長も数値になって表れてきていることを説明された。地方大学の成功事例の紹介とともに、教職協働のポイントを掴んだ大学経営人材としてのリーダーシップに、参加者は多くの学びを得ているようでした。

後半では、展示ロビーにおいて開催されたポスター発表において、発表者と参加者との対話に話が弾んでいるようであった。今回のポスター発表では、大学リーグやまぐち加盟機関すべてからポスター展示があり、県内初の高等教育機関同士のポスター発表は有意義なものとなった。その後のディスカッションでは、林透 大学教育センター准教授の全体進行のもと、基調講演の講師2名に加え、九州工業大学、九州女子大学、長崎短期大学の職員の協力を得て、グループファシリテーターをお願いし、ポスター発表での気づき・感想・意見について「教職協働」「地方大学の魅力発見」「大学間連携」という三つのキーワードに絡ませながら、グループ対話を行った。まとめとして、5名のグループファシリテーターからそれぞれ一言コメントがあり、教員と職員の対話の重要性、学生の力をベースとした業務の関連付け、やまぐち地域特有の分散型大学間連携のメリット感などについて言及があった。

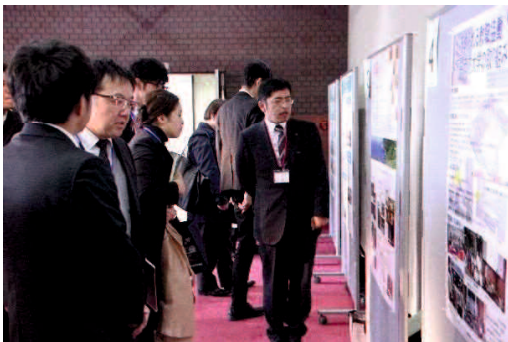
クロージングでは、ポスター発表の表彰式があり、「最優秀ポスター賞：徳山大学「徳山大学ダブルアドバイザー制度について」」「樋口賞：山口県「大学リーグやまぐち」の取組」「吉村賞：梅光学院大学「教職協働による学生支援（海外研修編）」」がそれぞれ受賞した。最後に、田中和広 山口大学理事・副学長より閉会挨拶があり、学内外の大学関係者が交流する素晴らしい機会となり、今後もこのような場づくりを行っていくこととした。



基調講演①（山形大学 樋口氏）



基調講演②（日本文理大学 吉村氏）



ポスター発表風景



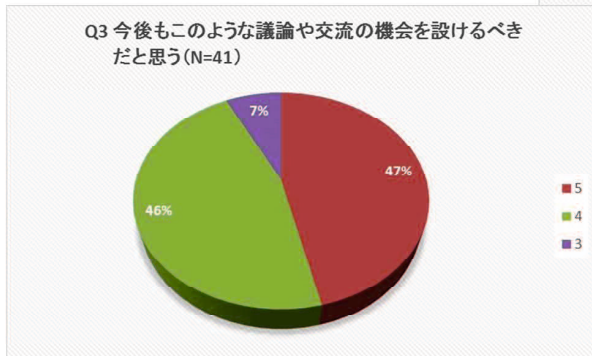
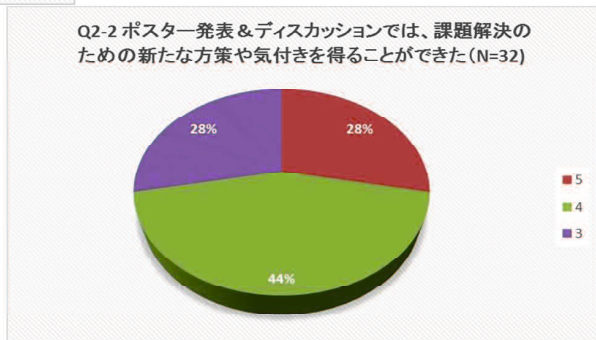
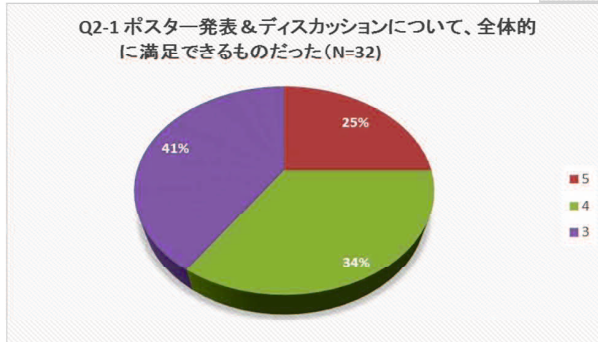
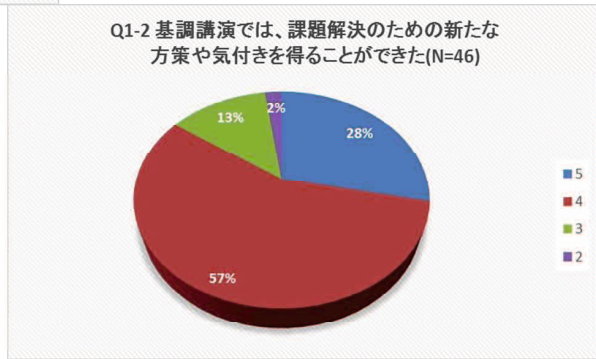
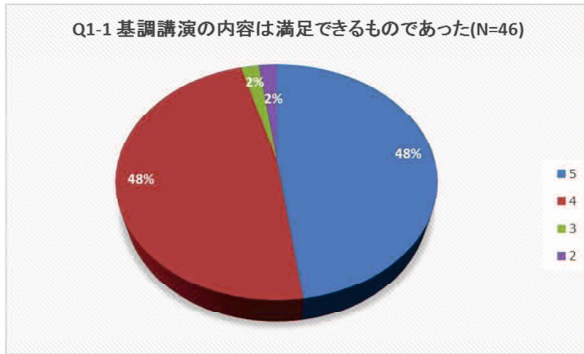
全体集合写真

成果及び今後の方向性：

今回の基調講演では、職員の立場、教員の立場から、大学運営の臨む姿勢や意思などについて、2人の講師の豊富な経験と確かな実績に基づきながら、分かりやすく、かつ、説得力あるお話をいただいた。非常に密度の濃い話に、参加者一同、緊張感をもって聴き入る姿が印象的であった。また、後半のポスター発表では、県内の高等教育機関同士で初の取組であったが、熱心な意見交換ができたように思われる。参加者にとって共通のキーワードである「教職協働」「地方大学の魅力発信」「大学間連携」を通じたディスカッションでもお互いの問題意識を共有し、新たな気づきを得ているように感じられた。

参加者アンケートからは、基調講演、ポスター発表&ディスカッションともに、満足度が高く、かつ、継続的な開催を望む回答が多数を占めた（Q1-1～Q3 参照）。特に、基調講演の満足度が非常に高く、来年度以降も、ニーズに合ったテーマと講師選定の充実を図っていきたいと考えている。

「大学リーグやまぐち」が結成されてから1年の月日が経つ中で、各機関の教職協働を中心とした取組をポスター発表し、情報交流する機会を得ることができたこと、さらには、他県の参加者から、山口県庁が大学リーグやまぐちの事務局を担当し支援していることに高い評価をいただいたことを重要視したい。山口県内の高等教育機関同士、さらには、県外の高学教育機関の関係者との交流を得ながら、大学マネジメントセミナーの更なる充実を図っていききたい。



5 強くそう思う 4 そう思う 3 どちらともいえない
 2 どちらかといえばそう思わない 1 全くそう思わない

(14) 学習支援システムとして新修学支援システムは Moodle を代替できるか？－小テストやアンケート、レポート、ポートフォリオ機能等の紹介－

日程：平成 29 年 12 月 20 日（水）〔吉田地区〕 14:30～15:15

場所：人文・理学部大会議室

講師：岡田 耕一（大学教育センター講師）

参加者：44 名（アンケート回収 14 名）

【★説明内容】

岡田 大学教育センター講師より、『学習支援システムとして新修学支援システムは Moodle を代替できるか？－小テストやアンケート、レポート、ポートフォリオ機能等の紹介－』と題し、本学の学習支援システム（LMS：Learning Management System）として運用されている新修学支援システム（自己主導型学修総合電子システム（eYUSDL））及び Moodle の機能やメリット・デメリットについて説明があった。



まず、LMS で出来ることの整理があり、「①資料作成・配布等、②課題や演習の出題・回収・講評等、③小テスト・アンケート等、④学習活動の評価・採点等、⑤出欠の管理、⑥メッセージ・メール・掲示板・Wiki・チャット等のコミュニケーション」が挙げられた。その上で、LMS 利用のメリットとして「ペーパーレス化、省力化、双方向性」の 3 点、デメリットとして「LMS 自体の学習コスト、準備負担、周知に時間を要すること、設定ミスやシステムトラブルの可能性」の 4 点が指摘された。その後、新修学支援システム（eYUSDL）及び Moodle の動線等について説明があった。

次に、新修学支援システム（eYUSDL）の学習支援機能として、講義資料・レポート・小テストなどの機能について作成方法や教員・学生それぞれの画面表示方法などについて説明があった。同様に、Moodle の学習支援機能についても説明があり、Moodle については、コース作成や学生登録などの諸準備の必要性について説明があった。

【★質疑応答・意見交換】

岡田 大学教育センター講師からの説明の後、以下のとおり、幾つかの質疑応答が行われ、人文学部における学習支援システム活用のニーズと関心の高さが窺われた。また、アンケートの自由記述からは、システムを理解すること以上に、システムの使い方や活用のメリットを詳しく知りたいというコメントがあった。



Q1 日頃、Moodle を利用しているが、Moodle に登録されている履修者データが実際の履修者データとずれている場合があるが、何か対応していただけないか。

設問1 研修会に参加した感想はいかがでしたか？		
選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	1	7.1%
良かった	7	50.0%
どちらとも言えない	3	21.4%
あまり良くなかった	1	7.1%
良くなかった	2	14.3%
無回答	0	0.0%
合計	14	100.0%

A1 メディア基盤センターで対応いただく事項であるが、Moodle に履修者データが自動登録されないケースが見られる。その際には、Moodle の利用準備に当たって、学生登録を別途行う必要がある。

Q2 新修学支援システム (eYUSDL) の小テスト機能において、公開期限終了後は閲覧可能ですか。また、学生による小テストの自己採点は可能ですか。

A2 公開期限終了後は閲覧できなくなる。また、学生による小テストの自己採点は設定によって可能である。

(15) 受け入れ留学生の理解と対応 留学生との簡単日本語コミュニケーション

シヨン

日時 平成 30 年 03 月 14 日(水) 15:00～13:40

場所 人文・理学部管理棟 4 階 大会議室

参加者 51 名 (アンケート回収 47 名)

担当者 中溝 朋子 (留学生センター准教授)

内容

理学部 FD コーディネーターより、理学部でも昨年度からサマースクールで海外の学生受け入れたりという事で国際化が徐々に進んできている。今後は各先生方の研究室にも留学生がぼちぼち入ってくるのではないかと思う。既に留学生を受け持っておられる先生方にとっては復習的なことになるかもしれないが今から留学生を迎え入れるというような先生方にとっては良いお話になるのではないかと説明があり、講師の中溝先生から以下のような話が合った。

本学の留学生数は、去年 5 月 1 日現在で 403 人、11 月 1 日現在で 430 人となっており、4 月には 100 名を越える留学生が入学予定である。中期目標では平成 31 年に 26 年の 80% 増という目標が掲げられており、具体的には約 550 名に相当する。現状ではこの目標は厳しいかもしれないが、短期を含めれば現在でも約 700 名を越えている。

以下、初めに留学生に関する留学生支援室、留学生センターのサポートについて。留学生の生活を中心になって支えているのが、共通教育棟 2 階のアドバイザールームに常駐する野原アドバイザーと渋谷アドバイザーの 2 人。具体的なサポートとしては、渡日時のワンストップサービスなど。ワンストップサービスは、福岡空港への出迎え、ビザ・外国人登録・銀行などの手続きや市役所・警察からの生活上の留意点 (ゴミの分別・交通ルール等) についての話、宿舎別のオリテ (YU シェアハウス居住者のみ自転車講習会の後、自転車の貸与するサービス有)、図書館オリテ、日本語授業や生協からのサービス (携帯電話、クレジット関係等) 紹介などが含まれている。

また留学中の問題について。健康上の問題については留学生も原則、国民健康保険、学研災、OSSMA に加入している。現在 3 棟ある宿舎は原則入居は半年で、残りの期間は民間アパート等に住むことになる。その際、機関補償という制度がある。また理系の大学院生では既婚者も多く家族の呼び寄せの問題も生じ得る。その他学業や研究、人間関係、経済的問題なども生じ得る。

このように様々な問題もあるが、これらを大きく発展させないための鍵としてひとつはチュー

設問1

研修会に参加した感想はいかがでしたか？

選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	14	29.8%
良かった	27	57.4%
どちらとも言えない	6	12.8%
あまり良くなかった	0	0.0%
良くなかった	0	0.0%
無回答	0	0.0%
合計	47	100.0%



ター制度の活用が重要と考える。理系の院生などの場合、チューターと留学生の年齢や人生経験の差などによりペアの活動が難しい場合も考えられるので、研究室全体の人間関係や協力が大切と考える。もう一つは日本語学習。センターの日本語授業は入門から上級まで5レベル。受講者の大半は交換留学生だが、院生や研究生も一緒に受講している。理系留学生の受講が多い入門レベルは来年度は前期週4コマ、後期は週4コマと週2コマの2コースを開講予定。理系の留学生の予定を考慮し1コマ目に集中させているので、渡日後すぐの学期の受講を勧めて頂けたらと思う。また毎週土曜、国際交流会館で市民ボランティアによる日本語クラスもあり家族の受講も可。

以下、サブタイトルの簡単日本語コミュニケーションの具体例について。まず初級の日本語学習者と話すときのコツ。一つ目は、文は短く、ゆっくり、はっきり。短くするには、一文には述語は一つ。例えば「家に着いたら、電話してください」は分けて「リさんが家に帰ります。そして私に電話をしてください」と言う。また名詞修飾を使わない。例えば「明日発表する人は、だれですか」は「明日の発表は誰ですか」「明日誰が発表しますか」とすると理解され易い。二つ目は「です・ます体」を使う。「行く・行かない」のような「で・ある体」は活用の変化が大きく初級教科書の後半で扱われる。「です」でも「明日、授業に来ないんですか」は不可。三つ目は、漢語よりは和語で。例えば朝食より朝ご飯。日常の会話で聞きなれているのは和語。初級教科書でも和語が先に導入される。中国語話者でも会話では和語のほうがわかりやすい。四つ目は視覚情報を効果的に使う。身振りや実物、図など。特にスケジュールなど数字は書いて確認を。最後は情報は分けて、確認しながら話を進める。例えば「レポートは15日までに、研究室のドアのポストに出してください」は「レポートの締め切りは15日です」「研究室のドアにポストがありますよね」「そこに出してください」のように文を区切って確認しながら進めると理解されやすい。

一方、中・上級でも誤解が生じるケースはある。日本語が上手で、文字通りの意味は理解していても日本人と同じように思考しているわけではなく文化的な背景や談話的な知識が不足している場合もある。日本人が無意識に期待しているやり取りや行動と異なる言動をする場合はすぐに評価や判断を下すのではなく、理由を聞くといった対応があるとお互いに誤解が生まれにくい。

最後にムスリムの学生について。宗教と生活がとても結びついているのでより注意を払った対応が必要。名古屋大学のHP¹の冊子、ハラル食についてはHalal JapanのHP²に詳しい説明がある。ハラル食については留学生センターで行事や見学の際にも考慮している。今年の7月からはボーノでもハラル食が提供されている。去年より国際交流会館1階に全宗教で使用可能なお祈り部屋がも設置された。

最後に、本学でもますます増えるであろう留学生の受け入れであるが、学内のサービスや日本語授業を効果的に利用していただき、それぞれの留学生に対応したコミュニケーション、対応がなされて進んでいくことが大切と考える。

質疑応答

以下のようなやり取りがあった。

¹ 名古屋大学「ムスリムの学生生活とともに学ぶ教職員と学生のために」

<http://acs.iee.nagoya-u.ac.jp/doc/interculture/201510muslim.pdf>

² Halal Japan

<https://www.facebook.com/pages/Halal-Japan/503821533010825>

Q:最初の方で研究室全体で関わるようにと言う話があったが、謝金が出る出ないと言う差があってみんなに頼みにくいというのがあるが、全員に払うことは可能か。

A:現在の制度で可能かは確認してみなければわからないが、今までは二人以上に支払ったケースはなかったと思う。(後日確認したところ、現制度では同時期の2人以上への支払いは不可)

Q: オリエンテーションを5年前に受けたが、その時は日本語のスライドと日本語だけでされていたが、それは改善されたか。

A: 申し訳ございません。来年度については確認して改善したいと思う。

アンケート

以下のような内容が見られた。

感想

- 留学生が使う日本語テキストに即したコミュニケーションの仕方がためになった
- 日本語の話し方
- チューターの数を増やしてほしい
- たいへんわかりやすかったです。
- チューターに関して制度をあまり知らなかったのが勉強になった
- 知らないことがたくさんあって、良い研修会でした
- ポスドクへの制度も聞いてみたいと思った
- 留学生との文化の違いを改めて理解できた
- 時間がやや長かった
- 特に伝わりやすい日本語の例がためになりました。また無意識に期待している事の言語化も。
- サポート体制や問題点など大変勉強になりました。

- 留学生を今後受け入れる上で参考になった。
- 留学生による問題発生ケーススタディを数多く紹介して頂きたい

希望の研修内容

- 心のケアが必要な学生に対する対応法等
- 入試問題等における正しい日本語表現
- (前もあったが)「問題学生と親の対応」
- 特にイスラム教の学生への対応についての話を聞きたい
- 発達障害の学生に対する対応の具体例
- 発達障害学生
- なんでも
- 特になし
- 思いつかず

参加したくない理由

- 有意義な内容ではないことが多い

以上



(16) 山口大学 共育ワークショップ2018

「みんなで教育（共育）について語ろう！～大学と高等学校による

授業協奏曲～」

日 時：2018年3月15日（木）14：00～17：00

場 所：山口大学共通教育棟（吉田キャンパス）

参加者：学内 38名（教職員 27名、大学生 11名）、
学外 52名（教職員 31名、大学生 6名、高校生 14名、高専生 1名） 計 90名

主 催：山口大学・大学教育再生加速プログラム（YU-AP）

共 催：徳山大学

後 援：大学リーグやまぐち、山口県教育委員会、山口県私立中学高等学校協会

対 象：大学関係者、学校関係者、大学生、高校生ほか

構 成：

14：00～14：10 開会挨拶 山口大学長 岡 正朗

14：10～14：50 【1限目：基調講演】

「生徒・学生が輝く『学び』とは」

認定NPO法人カタリバ代表理事 今村 久美

（休み時間（教室移動））

15：00～15：45 【2限目：大学×高等学校による模擬授業】《選択制》

①大学の模擬授業（1）

『目に見えない世界を科学する ～微生物バイオテクノロジー概論～』

山口大学創成科学研究科（農学系）准教授 藤井 克彦

（山口大学第2回アクティブ・ラーニング（AL）ベストティーチャー）

②大学の模擬授業（2）

『みんなの世界をビジュアル化 ～ものづくりのキャッチボール～』

徳山大学経済学部 知財開発コース教授 なかはら かぜ

③高等学校の模擬授業（1）

『ビジュアル教材でイングリッシュ ～子供のときの思い出・選択と幸せの関係～』

山口県立西京高等学校 英語科教諭 和田 将太

④高等学校の模擬授業（2）

『三角形の心の探究 ～心の相互関係～』

野田学園高等学校 数学科教諭 河本 順康

（休み時間（教室移動））

15：55～16：55 【3限目：ダイアログ・セッション】

「大学の授業と高等学校の授業ってどうなの？」

模擬授業担当教員×大学生×高校生

16:55～17:00 閉会挨拶 山口大学理事・副学長 福田 隆眞

[総合司会・進行：山口大学 大学教育機構 大学教育センター准教授 林 透]

内 容：

2018年3月15日（木）、共育ワークショップ2018「みんなで教育（共育）について語ろう！ ～大学と高等学校による授業協奏曲～」を本学共通教育棟（吉田キャンパス）にて開催し、学内外から90名（学内38名（教職員27名、大学生11名）、学外52名（教職員31名、大学生6名、高校生14名、高専生1名））が参加した。共育ワークショップは、大学教育センターが主催し、大学の教育（共育）について、学生、教職員が一緒になり、様々な観点から語りあい、考えてみるというもので、2013年度から始まり、今年で5年目となる。今回は、2014年12月公表の中央教育審議会答申『新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜の一体的改革について（答申）』を受け、高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜の一体的改革が進み、2016年3月『高大接続システム改革会議「最終報告」』のほか、学習指導要領が大きく変わろうとしている中で、生徒や学生の確かな学力を育成することを目的に、「主体的・対話的で深い学び」を促すアクティブ・ラーニングの視点による授業改善が学校種を超えた共通テーマとなっており、大学関係者と学校関係者が一緒になって、教育について考える場を提供した。なお、本ワークショップは、山口大学・大学教育再生加速プログラム（YU-AP）中間成果交流会として開催した。

はじめに、岡 正朗 学長より開会挨拶があり、近年の高大接続改革の重要性に言及しながら、大学生や高校生を交えて授業のあり方等について対話する今回のワークショップへの期待が述べられました。

1限目：基調講演では、認定NPO法人カタリバ代表理事 今村 久美 氏より「生徒・学生が輝く『学び』とは」と題して、今村氏自身の高校生時代や大学生時代の経験を紹介しながら、高校生と大学生のナナメの関係を活かした対話の場「カタリ場」を発案した経緯などを話し、現在の若者への期待や可能性についてメッセージを送った。山口県内で実施している「カタリ場」に関わっている山口県立大学生との本音トークや、「カタリ場」を受講した山口県立西京高等学校の高校生からの感想など、盛りだくさん内容が提供された。





2 限目：大学×高等学校による模擬授業では、山口大学、徳山大学、山口県立西京高等学校、野田学園高等学校の教員から、それぞれ趣向を凝らしたアクティブ・ラーニング型授業が提供された。参加者は事前に希望した授業を各教室に分かれて受講した。山口大学 藤井克彦准教授の模擬授業では、微生物バイオテクノロジーの学術的概念や現実社会での微生物の生態など、最先端の研究内容を学んだ。徳山大学 なかはら かげ教授の模擬授業では、4コマ漫画を作図するというワークが課され、ストーリー展開を考えながら、自らの考えをイラスト化するという授業を体感した。山口県立大学西京高等学校 和田 将太 先生の模擬授業では、授業中は英語のみによるグループ対話・質疑応答に終始し、子供のときの自らの経験などを英語で表現する授業を体感した。野田学園高等学校 河本 順康 先生の模擬授業では、三角形の重心・内心・外心・垂心について、正三角形、二等辺三角形、直角三角形の3グループに分かれ、ジグソー法を活用した相互学習を体感した。

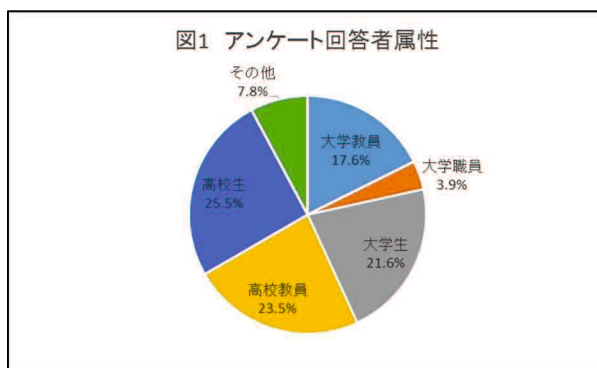
3 限目：ダイアログ・セッションでは、山口大学 大学教育機構 大学教育センター 林 透准教授のファシリテーションのもと、11グループ（1グループ5～6名）に分かれ、模擬授業を受けた感想や気づきを話し合いながら、「大学の授業への期待や要望」「高等学校の授業への期待や要望」についてリストアップした。最後に、「大学の授業への期待や要望」「高等学校の授業への期待や要望」のうち、最も大事だと思ったアイデアをスケッチブックに書き出し、全体発表を行った。各グループから高校生または大学生が代表して積極的に発表する姿が印象的であった。「考える楽しみを感じられる授業」「将来やりたいことが見つかるような興味が持てる授業」「色々な価値観や意見が知りたい、柔軟に考えたい」「答えのない活動をする中で自分の考えを自由に共有できる空気づくりが大切」「アウトプットする機会が欲しい」「（生徒と教師が、）授業を一緒に作る」などの提案があり、今後の大学や高等学校の授業充実に役立てることとした。



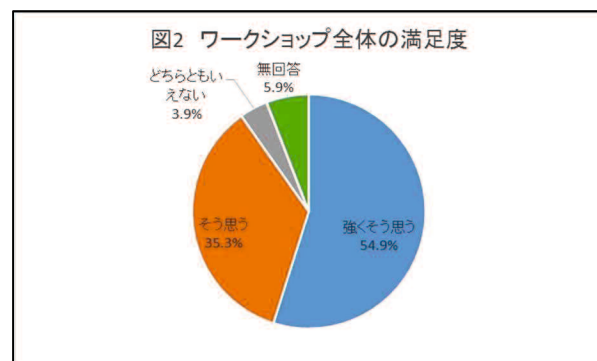
最後に、福田 隆真 副学長より閉会挨拶があり、今後もこのような大学と高等学校の交流の機会を作っていきたいとの言葉が述べられた。

アンケート結果：

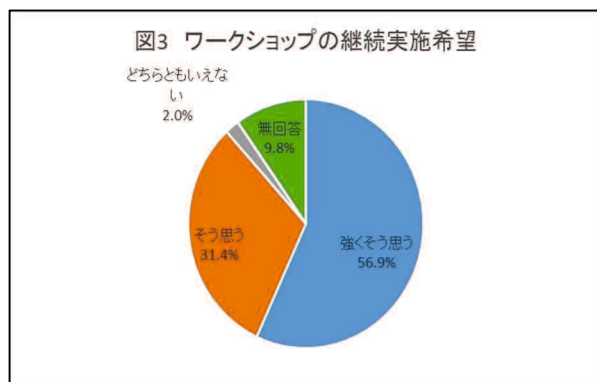
ワークショップ参加者によるアンケートについて、51名（回収率56.7%）から回答を得た（図1）。今回は、大学と高等学校の交流や模擬授業競演をテーマに開催され、ワークショップ全体の満足度については、「強くそう思う・そう思う」が9割を超え（図2）、今後も継続していくべきであるという意見が9割近い回答となった（図3）。



1限目から3限目までを受講した参加者に新しい気づきがあったかという設問において、1限目：基調講演では8割以上（図4）、2限目：模擬授業では9割以上（図5）、3限目：ダイアログ・セッションでは8割近く（図6）の参加者が何らかの気づきがあったと回答しており、特に、模擬授業を通した新しい気づきが非常に多かったことは、「大学と高等学校による授業協奏曲」という趣旨を十分に達成できた成果である。

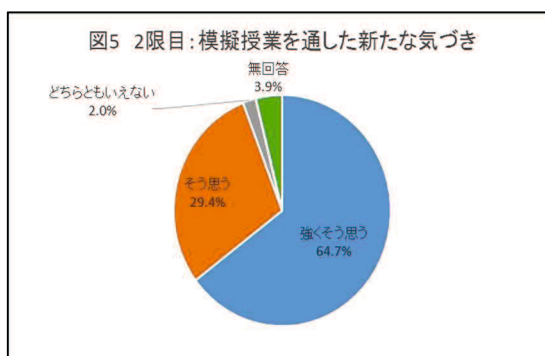
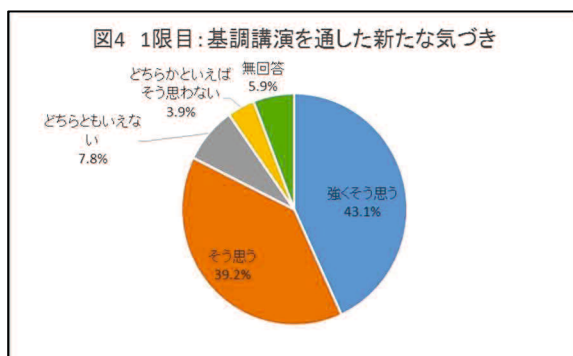


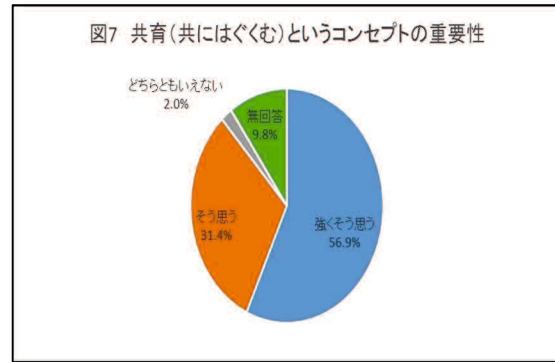
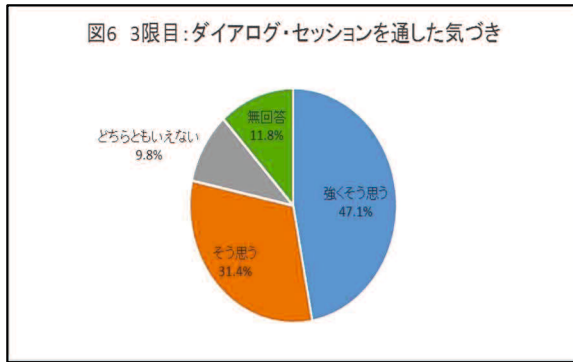
また、共育ワークショップ自体のコンセプトへの理解に関する「共育（共にはぐくむ）というコンセプトは大切か」という設問では9割近い賛同を得た（図7）。



以上、1限目：基調講演、2限目：模擬授業、3限目：ダイアログ・セッション

を通して、参加者が新たな気づきを得、全般的に満足度の高い機会となった。組織開発（OD）プログラムとしての共育ワークショップの有効性が改めて窺える結果となった。





まとめ：

山口大学憲章が掲げる「発見し・はぐくみ・かたちにする 知の広場」の創造を目指して、山口大学を構成する教員・職員・学生が理解を深め、共有することが求められている。今年度のワークショップでは、高大接続や高大連携を第一テーマに、さらには、生徒と学生の瞳が輝く学びを第二テーマに、各種企画に取り組んだ。山口大学・大学教育再生加速プログラムを中心に広がりつつある、アクティブ・ラーニングや学修評価を通じた大学と高等学校の情報交流から今回の共育ワークショップが生まれた。

この共育ワークショップという場は、山口大の組織力の向上、引いては、山口大の教育力の向上を図るための組織開発プログラムであるだけでなく、教員・職員・学生個々に気づきを与え、新しいチャレンジ精神を培う人材育成の機能を果たすものである。さらに、今回は、地域の学校教員や高校生の参加者を得て、その輪を広げることができた。

今回のワークショップでの新たなアイデアや出会いを大切に、今後の山口大の教育課程・学習支援の充実、教職学協働の強化に一層努めていきたい。



3. 教育改善研修会

(1) 医学部保健学科・医学系研究科

日時 平成 29 年 8 月 23 日(金) 13:30～15:30

場所 医学部保健学科管理棟 4 階 大会議室

参加者 32 名

担当者 木下 真 (大学教育センター准教授)

内容

研修会は 2 部構成実施された。第 1 部の冒頭、医学部保健学科田中愛子教授から研修会の主旨の説明があった。その後、図 1 のように木下准教授により、資料に沿って以下の説明があった。①3 つのポリシーを巡るこれまでの経緯、②カリキュラム・マップ(CUM)の見直しについて、③意見交換。

第 II 部では専攻別に班を編成し、カリキュラム・マップの「○付け作業体験」ワークショップを実施した。その後、発表や意見交換が行われた。

①については、平成 27 年 1 月の文部科学省による「高大接続改革実行プラン」の公表から、平成 28 年 3 月 31 日に大学教育部会から出された 3 つのポリシーの策定に関する「ガイドライン」発表、学校教育法施行規則の一部改正の省令交付までの国・文部科学省の一連の経緯について説明が行われた。その後、それを受けての本学の動きと 3 つのポリシーの策定と今年度 4 月の公開が説明された。

②については、ディプロマ・ポリシー (DP) の見直しを受けて、各科目と新しい DP が一体化しているかどうかの確認のために、カリキュラム・マップの見直しが必要であることが説明された。医学部保健学科で過去に策定された現行のカリキュラム・マップ、そして、新しく策定されたディプロマ・ポリシーが紹介された。

第 II 部では、意見交換。

設問1 研修会に参加した感想はいかがでしたか？		
選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	2	7.1%
良かった	20	71.4%
どちらとも言えない	4	14.3%
あまり良くなかった	1	3.6%
良くなかった	0	0.0%
無回答	1	3.6%
合計	28	100.0%



図 1 講演中の木下准教授

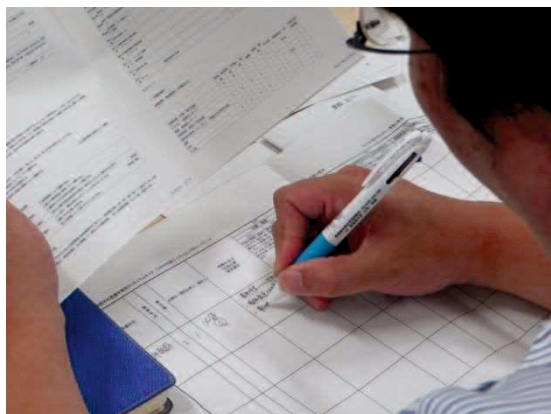


図 2 個人ワーク



図 3 グループワーク

第Ⅱ部では専攻別に班を編成し、カリキュラム・マップの「○付け作業体験」ワークショップと意見交換が行われた。予め準備しておいたカリキュラム・マップの雛形が配布され、図2のように各教員が自分の担当している授業科目について、到達目標を記入し、◎、○、△付け作業を行った。その後、図3のように同じ専攻の他の教員とカリキュラム・マップについて意見交換を行った。

なお、は、最後に、現行のカリキュラム・フローチャートが紹介され、カリキュラム・マップの見直し後はカリキュラム・フローチャートの見直しが必要であることが説明された。現行のカリキュラム・フローチャートは平成23年度に導入した新しい共通教育が反映されていないため、新しいものを策定する際は考慮する必要があることが付け加えられた。

研修会後のアンケートでは78.5%が概ね良かったという意見だった。

なお、研修参加者からは以下のような質疑応答があった。

(質問1) 今回のカリキュラム・マップの○付けと以前説明があったYU-COB-CUSとはどのような関係があるのか？

(回答) 今回の○付け作業は、DPが昨年度改訂されたことを受けて行われるものである。YU-COB-CUSの導入については、次年度あらためて作業の進め方を含めて各学部と協議していく予定である。

(質問2) 同じDPのところ○が偏在化する可能性があるが、それでもよいのか？

(回答) 専門教育の場合、○付けされた結果、そのような傾向が時々見受けられる。その際にはDPの設定そのものがよかったのか。科目の編成がこのままでよいのかを考え直す必要がある。ただし、医学部保健学科のように職業資格に結び付いたコア・カリキュラムで運用されている場合にはカリキュラムそのものを変更することは難しいと考えられる。



図2 気付きの発表の様子



図3 質疑応答の様子

(2) 理学部、創成科学研究科（理学系）

日時 平成 29 年 9 月 8 日(金) 15:00～15:30

場所 人文・理学部管理棟 4 階 大会議室

参加者 39 名

担当者 岡田 耕一（大学教育センター講師）

内容

研究会の初頭、松野理学部長から研修会の主旨の説明があった。

その後、岡田講師によって、以下の順で説明があった。

1. 3つのポリシーを巡るこれまでの経緯
2. カリキュラム・マップ(CUM)の見直しについて
3. 意見交換、カリキュラム・マップの「○付け作業体験」
4. カリキュラム・フローチャート(CFC)の見直しについて



1. のポリシーを巡るこれまでの経緯

平成 27 年 1 月の文部科学省による「高大接続改革実行プラン」の公表から、平成 28 年 3 月 31 日に大学教育部会から出された 3 つのポリシーの策定に関する「ガイドライン」発表、学校教育法施行規則の一部改正の省令交付までの国・文部科学省の一連の動きにして説明された。その後、それを受けての本学の動きと 3 つのポリシーの策定と今年度 4 月の公開が説明された。

2. カリキュラム・マップ(CUM)の見直しについて

新しいカリキュラム・ポリシーとディプロマ・ポリシーが一体化しているかどうかの確認のために、カリキュラム・マップの見直しが必要であることが説明された。理学部で過去に策定された現行のカリキュラム・マップ、そして、新しく策定されたディプロマ・ポリシーが紹介された。

3. 意見交換、カリキュラム・マップの「○付け作業体験」

準備しておいたカリキュラム・マップの雛形が配布され、各教員が自分の担当している授業科目について、到達目標を記入し、◎、○、△付け作業を行った。その後、他の教員とカリキュラム・マップについて意見交換を行った。

4. カリキュラム・フローチャート(CFC)の見直しについて

最後に残りの 5 分間で、現行のカリキュラム・フローチャートが紹介され、カリキュラム・マップの見直し後はカリキュラム・フローチャートの見直しが必要であることが説明された。特に、現行のカリキュラム・フローチャートは平成 23 年度に導入した新しい共通教育が反映されていないので、新しいものを策定する際は考慮しなければならないことが付け加えられた。

聴衆からの質問はなかった。

以上

(3) 人文学部、人文科学研究科、東アジア研究科（人文系）

日時 平成 29 年 9 月 20 日(水) 14:30～15:10

場所 人文・理学部管理棟 4 階 大会議室

参加者 36 名

担当者 林 透（大学教育センター准教授）



内容

本研修会では、カリキュラム・マップ(CUM)とカリキュラム・フローチャート(CFC)の見直しに関し、最初に担当者による詳細な内容説明、続いて参加者全員による具体的な見直し作業体験（ミニワーク）、最後に質疑応答が行われた。

設問	研修会に参加した感想はいかがでしたか？	
選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	1	6.3%
良かった	5	31.3%
どちらとも言えない	5	31.3%
あまり良くなかった	3	18.8%
良くなかった	2	12.5%
無回答	0	0.0%
合計	16	100.0%

1. 担当者による内容説明

最初に 3 つのポリシー(DP、CP、AP)を巡るこれまでの経緯説明がなされた。これらの策定については、特に平成 27 年度以降の国・文科省の動向、すなわち、高大接続改革実行プランの公表、大学教育部会によるガイドラインの公表、学校教育法施行規則の一部改正の省令交付等が背景にあることが述べられた。

続く本学の動きについての説明では、既に平成 28 年度において、各学部・研究科単位での DP および CP の見直し作業とその公表が行われている点が確認された。これを受け、今後はそれらに対応するカリキュラム・マップとカリキュラム・フローチャートの見直し作業が求められることが解説された。また、それぞれの作業に必要な観点についても具体的な説明がなされた。

2. 参加者全員による見直し作業体験（ミニワーク）

上記説明の後、実際に人文学部用カリキュラム・マップのテンプレートを用い、参加者全員が自らの担当科目について、①到達目標を記入し、②DP 達成のための貢献度に応じて◎、○、△印をつけるという作業を行った。短時間ではあったが、隣席の教員同士のフリートークを交えた体験作業で、今後行われる見直し作業のイメージ作りに寄与するものであった。

3. 質疑応答

二つの質問が出された。一つ目は、今回のミニワークでは教員個人の裁量で自分の科目に印をつけていったがこのような方法で良いのか？という質問で、担当者からは、最終的には学科やコース単位で調整していく必要もあるかと思うという回答がなされた。二つ目は、スライド資料の中に「大幅変更は「新テスト」が固まってから」という文言があるが DP や CP もまた見直すということなのか？という質問で、担当者からは、これはその直前に記されている AP のみに関する言及であるという回答がなされた。

以上

(4) 医学部医学科・医学系研究科

日時 平成 29 年 10 月 11 日(水) 13:00～13:50

場所 医学部本館 6 階 第 1 会議室

参加者 43 名(アンケート回収 32 名)

担当者 林 透 (大学教育センター准教授)

白澤 文吾 (大学院医学系研究科 教授)

内容

はじめに、医学部 FD コーディネーターの藤宮教授から本研修会の概要説明が行われ、その後、林准教授及び白澤教授によって、以下の順で説明があった。

1. 3つのポリシーを巡るこれまでの経緯
2. カリキュラム・マップ、カリキュラム・フローチャート(CFC)の見直しについて
3. カリキュラム・マップの「〇付け作業体験」、意見交換
4. 新コアカリキュラムについて
5. 質疑応答

以下にまとめる。

1. 3つのポリシーを巡るこれまでの経緯

概ね次のような内容で講話があった。ここ 10 年近く日本の大学教育の在り方として 3 つのポリシー (DP, CP, AP) に基づいた大学教育の質保証、マネジメントが行われてきており、本学でも PDCA サイクルの中で質保証を図ってきたが、カリキュラム・マップ、CFC を見直しながらカリキュラムの充実を図っていきたいというのが今日のポイントである。平成 17 年辺りから中教審答申でも AP はもとより CP, DP を明確化して学生の教育の質保証、学習成果をしっかりと担保できるようなアウトカムベースの教育をしてくださいというトーンが強くなってきたのがこの 10 年くらいの動き。高大接続で確かな学力を育成するというトーンが強くなる中で 3 つのポリシーの重要性が増しており、法令の改正の中で 3 つのポリシーを策定して公表することが義務化され平成 29 年 4 月には公表することがマストになった。

本学では昨年、ディプロマ・ポリシー検討ワーキンググループで見直しを図ってきた。次の段階としてカリキュラム・マップや CFC の見直しをしていこうという話を今日させて頂いている。どう見直したかと言うと、文科省のガイドラインでも示されていたが、従来よりも育成する力が明確化する形で DP を成文化して頂いたと思う。CP においてもカリキュラムの詳細な構成、6 年課程での階層性、順序性、その中で学生の成果、評価を明文化してくださいというのが今回の 3 つのポリシーの見直しのポイントで、きちんと見直してもらったと思う。AP は入試改革が確定してないところがあるのでマイナーチェンジで留めており、今後見直しもあろうかと思う。その中で今日、カリキュラム・マップ、カリキュラム・フローチャートも見直しを確認していく作業の

設問1

研修会に参加した感想はいかがでしたか？

選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	4	12.5%
良かった	23	71.9%
どちらとも言えない	5	15.6%
あまり良くなかった	0	0.0%
良くなかった	0	0.0%
無回答	0	0.0%
合計	32	100.0%



説明をしている。

2. カリキュラム・マップ、カリキュラム・フローチャート(CFC)の見直しについて

カリキュラム・マップと CFC とは何であるかについて説明があり、今日は先生方の授業科目で寄与する DP の重み付けを見てもらい、各先生方にカリキュラム・マップの意味 CFC の意味、個々の授業がカリキュラムの中でどういう位置付けにあるかについて共通認識持って頂くための研修会であること、すべての科目がいずれかの DP に寄与していないとカリキュラムの一要素を成していないことになるのでしっかり確認いただきたい事、それに基づくカリキュラムマネジメントのためのチェックリストにして頂きたい事等の説明があった。

3. カリキュラム・マップの「○付け作業体験」、意見交換

現在医学教育センターで作成中のカリキュラム・マップを元に、担当科目の○付けの状態を確認してもらう時間を取った後、医学部以外でもカリキュラム・マップを作ってもらっているが、教務担当の一部の教員だけでまとめて、作ってそれまでというところもあったので、自分の授業科目と DP の関係性を確認して頂くと共に、カリキュラム・マップを完成させた後も、カリキュラムは動く物であり、時代の変化によって育成するものも変わってくるので学科内での点検、FD の材料にしてもらいたいと説明があった。

その後、数分程度時間を取り、担当科目のカリキュラム・マップへの○付けについて隣の先生と意見交換を行ってもらった。

4. 新コアカリキュラムについて

講師の交代を行い、白澤教授よりトピックスということで、今回改定になった医学教育モデル・コア・カリキュラムについての以下のような説明があった。

各大学が策定する「カリキュラム」のうち、全大学が共通して取り組むべき「コア」の部分抽出し、「モデル」として体系的に整理したものであり、各大学における具体的な医学教育は、学習時間数の 2/3 程度を目安にモデル・コア・カリキュラムに準拠し、残り 1/3 程度は各大学が地涌的に編成することになっている。そのような中で今後、日本医学教育評価機構による医学教育分野別評価基準が始まるので、整合性が今後の課題になる。医学教育において、国際基準としての必要事項をカバーするために必要最低限な学習項目に加えて残り 1/3 の部分を上手く使って大学の自主性保つようになっている。

だいたい 7~8 年周期で改定があり今回が改定 3 回目で、多様なニーズに対応できる医師の養成が今回のキャッチフレーズになっている。専門教育のみならず総合診療、地域、在宅もろもろ含めて大学で教育しなさいと言うことになると思う。その中で医師として求められる基本的資質能力として新たにプロフェッショナリズムが明確に出されてきたのと、もう 1 点は、再来年度から全大学で一斉に始まる臨床実習終了後の OSCE、今は 4 年生の冬にやって臨床実習に入っているが、それが終わった後に卒業試験と同等のような感覚で POST CC OSCE を全大学同時にやらなくてはならないということが決まっている。このために、おそらく 6 年生の夏くらいにそういう日を設けて一斉にやらないといけない状況になると思う。その見返りとして今年度から国家試験が 3 日から 2 日に短縮され問題数も減っていく流れになっている。

eYUME の中に今年度の医学教育コアカリの資料を入れている。印刷すると 3~400 枚あるので先生方全員にお配り出来ないし紙代の経費も掛かるので各自でご覧いただきたい。

改定の概要、1 つ目は臨床研修の到達目標との整合性を合わせる、もう 1 点はモデル・コアカリの中で国試の出題基準や臨床研修の到達目標、生涯教育との整合性も合わせる、山大にダイレクトに関係するのは、医師として求められる基本的な資質・能力を実質化、診療参加型臨床実習の充実、地域医療や地域包括ケアシステムの教育体制の構築、腫瘍についてさらにページが割かれる状況となっている。

残りは指導の方略への言及、準備教育、目標の整理として一般目標と到達目標を狙いと学修目標に、総量はスリム化されていて、医学用語の表記の整理と、世界へ発信するようなことをやってくださいという内容になっている。

現在医学科のカリキュラムの流れは、1 年で共通教育・医学入門やって、2 年~3 年にかけて基盤系社会医学系科目、高度自己修学があって、そのあと展開やって、OSCE、CBT やって臨床実習に入っていく。卒業試験のところに 2 年後には POST CC OSCE が正式に入ってくる。で、国家試験。もう 1 つはすべての学年にわたって、Open Science Club や SCEA, AMRA コースがなされているという状況になっている。

医学部医学科の 7 つの DP で、7 番の統合的診療能力として統合された知識・技能・態度に基づき、全身を総合的に診療する実践的能力を習得する。その中で、患者中心のチーム医療を安全に実践できるということで、臨床推論力、診療技能、医療安全力等が求められている。

本コアカリに関しては本学の DP とマッチしているということで今回は DP7 番の総合的診療能力を臨床部分のチェックで切り出している。

臨床実習で求められている物の 1 つは診療チームの一員として一定の役割、責任を担いながら行うということ。正統的周辺参加というような言い方がされるが、学生に出来るようなところから少しずつ責任を持たせてやっていく。それが診療参加型の 1 つの方策だという風になっている。

その中で、臨床推論力や基本的診療技能、実践的診療能力、医療安全力を高めていくことになる。

その項目の中には病歴聴取、判別診断、検査の結果を解釈、診療録を記載する、これを指導医に口頭でプレゼンテーションするというのが基本的な流れ。こちらに関しては、このような流れになるように既に教育主任会議等を通じて各診療科の先生にお願いしている所。

もう 1 つ、基本的臨床手技については、目的、適応、禁忌、合併症と実施法について事前に十分に理解するということが必要になってくる。今日は省くが、その中でコアカリの「F 診療の基本」の中に記載されているので、こちらの方でしっかり確認して頂いてから基本的臨床手技を行って頂くという流れになる。

臨床検査についても、基礎知識、臨床推論、身体診察等もろもろのところを大事にしていかなければならないという風になっている。

具体的な臨床実習の大きな柱の 1 つとして、今日先生方に覚えておいて頂きたいのは、新コアカリでは、内科、外科、小児科、産婦人科、精神科というのはそれぞれコアカリが列挙されているが、それら以外の診療科についてはそれ以外という風になっている。ですから今後は時代の流れと共に、内科、外科、小児科、産婦人科、精神科をしっかりとやって、それ以外は各大学の裁量の中でやって行くと。傾斜して教育していけという流れにいずれなっていくのではないかと思っ

ている。内科を履修する場合の狙いは、1 番に内科医にならない場合にも必要な内科領域の診療能力について学ぶということになっている。2 番目が内科医のイメージを獲得するというような事になっている。外科に関しても外科医にならない場合と、要するにそういう事を求められているというところが今回のコアカリの狙いの特徴になっている。

学修目標に関しては通常通りだが、一番最後に必ず、どのように内科にコンサルテーションすれば良いか分かると、こういう事をしっかりと学生の時代には臨床実習では指導しなさいというような流れになっているのが大きな違いかと思う。

今年度、モデル・コアカリが改定になっている。2 年後には分野別認証評価も実施するというような流れとなっているので、臨床実習の充実化と言うことで、臨床推論の具体化が一つと、もう 1 点は学修と評価の記録の具体化と言うところを進めていかななくてはならない。そのような中で Mini-CEX の説明会を来月行いますが、実際に患者さんを学生に診察させて、それを横で指導医が見ながら評価して、形成的評価を相互にするというようなことを少しずつ初めて行かなければならないということになっている。

最終的には、臨床実習期間は延長した。今後、診療参加型臨床実習の充実化と学修記録と評価法の整理、一言で言うと、とりあえず出来ることとして、ログブックの充実等がある。現在は学生が出したり出さなかったりなので、教員サイドも各科によって方針が違っているように思いますが、毎回臨床実習が終わる毎に少し時間を取って頂いて学生と指導医の間で相互評価を行って形成的評価を行うというような事が積み重なっていった最終的な総括評価というような流れになっていくという風に考えている。

5. 質疑応答

以下のような質問があった。

Q：私担当している救急では 4 年生に講義するが、系統講義において DP にどう該当するか確認すればよいか？

A：そう。ご自身の担当の科目について。

Q：最初ミニ WS について教えてほしい。カリキュラム・マップと CFC があって、僕の理解していたのは CFC を作ってそれぞれ今回の 7 つの力を付ける事を 1 年～6 年のどの学年、どの領域でやってもらうかを作った後に各診療科の講義がそれに該当するという風に理解した。今日はミニ WS なので先生たちが教えている講義がどれに該当するかという WS という理解で良いか？

A：その通りです。順序性からいうと、今日の資料 3 の裏面に医学科から頂いた学年教育進行プログラムで DP の 6 年間の階層性の説明があって、多分まずこういうのがその後 CFC も準備されているので、まずこのフローチャートがあったうえでカリキュラム・マップを作ると言う作業になる。ただ、今日は WS と言うことで先生方個々の到達目標と DP の関係性を共通認識持ってほしいという辺りに重きを置いています。

A：資料 3 の裏で、進行プログラムがプロフェッショナリズムを中心にまとめてある。理屈上は先に DP があってカリキュラムがあるが実際問題今までの歴史的物があって、コース、ユニットがあって、それから DP との関係になる。参考資料 2 は正式に決まってない案の段階だが、左

に DP という格好で医療基盤力、地域・国際対応力、医療プロフェッショナルリズム等載っている。下位項目は医学部長、病院長会議の方から卒業時の医学教育モデル・コア・コンピテンシーという形で出ていて、これも先に医学部長会議から出てきているけれど、こういったのを卒業時までには身に付けてもらいたいという形で出ている。山口大学の DP は元々コアカリをもの凄く意識して作っているのだから、医学部長会議のモデル・コア・コンピテンシーを丁度上手い具合に入れ込むことが出来て、単純に入れ込んだのがこの形になっているので、おそらくこれを認めてもらったらこういった格好になる。聞いてもらうと総合的診療能力のところを自分たちで決めると結構大変だが、医学部長会議の方で、医療面接、身体診察、臨床技能、診療録、プレゼンテーション、救急医療、慢性期医療等がずっと載っておりまして、ある意味、医学部長、病院長会議の方からこういうのを教えろというかそういう形になっているかと思うのでご参考をお願いします。

Q：これはお知らせだが、資料2でミニWSで◎とか○とか見て頂いたが、あれは医学教育センターの方で、まっさらな状態で確認して頂くと非常に手間で先生方のお手を煩わせるということで、とりあえずこちらで◎○△している。別にすごく細かく考えて悩み上げてこういう風に記載しているわけではないので、これに関してはいずれ近いうちに各ユニットの責任者にお送りして確認して頂いて修正したものをこちらの方で取りまとめて、それを次年度に使っていくという流れにしているのです。そのように思っただけかと思う。

A：現在とりあえず作って頂いた主題とか到達目標について修正等がありましたら医学教育センターの方にご連絡してもらえたらと思います。

A：今の関係で全学的な動きの事をお知らせしておきます。今日は研修会と言事でWS入れさせていただいたが、この後、教育学生担当の副学長名で今のカリキュラム・マップ、CFCの作成の正式な依頼をさせて頂くことになると思う。ここで作って頂いて割と時間を取っている。来年の9月末までに全学では整備するという流れなので医学科は早めに進んでいるので、学部で確定の作業進めてもらうのと、お知らせ頂ければ大教センターでもサポートするのでお願いします。

Q：後半のプレゼンの事で教えて欲しい。臨床実習が内科、外科、小児科、産婦人科、精神科、後の領域がその他になっていて、僕は救急ですけど、救急は必ずしも必修化されずに選択になっている可能性があるということですか？

A：すみません。おそらく救急も独立してありました。それとはまた別の質問だと思いますが、将来的にはとりあえず必ず教えなくてはならないところを優先してやれというような流れになっているみたいです。いくつかの大学は先進的に先んじて、例えば3つくらいの科は2つ選択とかやってみたらいいんです。ただ、それは必ずしも上手く行かなかったと。一つにはやっぱり日本の医学部の場合は医局へのリクルートが同時に絡んでいるんですね。それがあって、結局いろいろあってまた元のような全ての診療科が必修という感じに戻ってしまっているところがあるらしいです。ですので、まだすぐとは思いませんけどもうしばらくすると2週間ずつの21診療科と言うようなことを臨床実習1でやっていくというのがどうなるのかと言うところは感じています。その分を臨床実習2のところで選択制で充実させるというやり方もあるみたいなのですが、一応基本的にはすべて同じ比率ではありませんよと言うようなニュアンスではあるようです。

Q：質問したかったのは今日のカリキュラム・マップ、系統講義のことやりましたが臨床の方しか僕知りませんが、やはり臨床実習でプロフェッショナルリズムがいろいろ教えていく、総合判断力あると思うんです。そこがもし実習が削られていくとか、もし選択制になるなら系統講

義をかえないといけないので、またお知らせがあったら教えてください。

A： 基本的には大学の裁量権の中で出来るとは思っていますが、確かにそういう事がございますのでまた何かありましたらよろしくをお願いします。

Q： 成績評価の方ですけど、これも確か、ルーブリック評価でやるとなると、DP の 7 つのコンピテンシーに当てはめるとなった場合に特に医学部の教育の場合は非常に偏っていますので、そうなった場合に大学本部の評価のルーブリックでやるというのは非常に難しいと思いますけど、そのところは従来通りの評価で良いのか、あるいは大学本部の新しい評価方法でやらなくちゃいけないか、非常に医学部の場合はアダプテーションが難しいように思うのですが如何でしょうか？

A： まず個々の授業科目については、今のカリキュラム・マップ、到達目標あると思うので、そこにおいてしっかりと成績評価していただければいいと思います。その大きな風呂敷としてカリキュラム・マップとかあってその中に位置付けられていればまずそれでいいのかなと思います。いろんな動きありますけど、まず先生方、今、各授業で求められているところについて、それからいろんな評価方法も新しい物も求められていますけど、そこをまず着実にやって頂くというところがまず大事なかなと思っています。

A： そこも大事なところですけど、まだ決まってないので、また検討していきたいと思います。

アンケートでは以下のような意見があった。

感想

- 成績評価(ルーブリック)は大学の中期目標にも入っており、今後導入していかなければならないと思うが医学部の講義をどのように適合させるか問題がある。
- DP、etc がわかった
- 教育カリキュラムの全体像がよくわかった。
- カリキュラムを改めて確認することができよかったです。
- 具体的にブラッシュアップしてみないと、どのように変更・対応すべきかよくわからなかった。

希望する研修内容

- 新しい講義法、評価法など
- 学んでいけないといけないと思うので教員は教育についてよく知らないので教育についての FD があればよいと思う。
- 教育手法について学びたい。
- 今日のような内容が良いです。
- 他大学又は外国との相違など。
- 作業が発生する内容だと、いやおうなく出席するモチベーションとなる。
- 行うべき作業を一部行うなど、より具体性が高い内容が良い。
- 他大学の現状(例えば中国地方及び地方別)の共有があると、特色の再認識できるのではないか。
- 教員としての質を向上させるような内容のセミナー
- 私は医学部の基礎系講座に所属していますが、私の **back ground** は医学部ではない為、臨

床で特に重要と思われる個所・観点に自信がなく、もし機会があれば、臨床の先生と重要な個所の話し合い or 指てきする時間があると、今後どのような実習・講義をすればよいか方針が立てられ嬉しいです。

- 他大学でのモデルケースなど(どのようにカリキュラム改革を行ったかなど)、アクティブ・ラーニングの実例の紹介、※実例を示していただくとイメージがつかみやすくなると思います。

参加したくない理由

- 例えば **diploma policy** を本当に理解している人間が上にもいるのか？(20～30 年前の日本の医学教育でも国際的に活躍する **Dr.** は多数出ている)
- 具体性に欠けてよく分からない。言葉の独り歩きのような気がします。毎回聞いていてイライラする。

実施時期

- 夕方が良いです。
- 複数日で開催しないと参加できない人がいると思います(全員参加義務ならば)。
- 診療が終わっていませんでした。

実施場所

- 教授以外の **Dr.** は入りにくいです。
- 席がすわりにくかった。教授席だと。
- もう少し広い場所がいいのではないか。
- 総合研究棟 1 階 **S1** がよい。
- **S1**、もしくは第 3 講義室(全員参加義務ならば)。

その他

- いつも教員の参加が少なく勿体ないと思いますので例えば各講座の教育主任は出来るだけ中心的に積極的に参加などある程度必修化することも必要ではないかと思いました。

以上



(5) 経済学部・経済学研究科・東アジア研究科（経済系）

日時 平成 29 年 10 月 11 日(水) 13:00～13:50

場所 経済学部 A 棟 2 階 第 1 会議室

参加者 60 名（アンケート回収 22 名）

担当者 小川 勤（大学教育センター教授）

内容

小川教授より、以下の順で説明があった。

1. 3つのポリシーを巡るこれまでの経緯
2. カリキュラム・マップ、カリキュラム・フローチャート(CFC)の見直しについて
3. カリキュラム・マップの「〇付け作業体験」、意見交換、
4. 質疑応答

1. 3つのポリシーを巡るこれまでの経緯

昨年度行ってもらった 3つのポリシーの見直しと、その結果必要となるカリキュラム・マップ、CFC の見直しについてのお願いが行われ、そのようなことが必要になった背景として幾つかの中教審の答申や国による法改正による 3つのポリシーの義務化などの流れについて説明があった。

2. カリキュラム・マップ、カリキュラム・フローチャート(CFC)の見直しについて

カリキュラム・マップについて DP との関係を示す仕組みや、CFC について履修モデルの学年進行と DP の関係を図示する仕組みについて確認が行われ、昨年度の DP の改定により見直しが必要になっていることが説明された。

5. 3. カリキュラム・マップの「〇付け作業体験」、意見交換、 質疑応答

配布された資料を元に、昨年度見直された DP と、経済学部の科目一覧を示しつつ、カリキュラム・マップを見直し、〇付けをしてもらうに当たっての観点、および CFC の見直しを行ってもらうに当たっての観点について説明が行われた。また、平成 25 年から共通教育が変わったので書き換える必要がある点について注意が行われた。

経済学部特有の問題として文系大学院の再編の問題があるため、大学院構想が固まってからやって頂いて構わないが、はっきりしない場合は経済学部だけカリキュラム・マップが抜けている状況も好ましくないため現状の物を作って頂けないかも検討して欲しいという趣旨のコメントも行われた。

設問1

研修会に参加した感想はいかがでしたか？

選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	0	0.0%
良かった	11	50.0%
どちらとも言えない	5	22.7%
あまり良くなかった	3	13.6%
良くなかった	2	9.1%
無回答	1	4.5%
合計	22	100.0%



質疑応答

質疑応答では以下のようなやり取りがあった。

Q：今年度経済学部の学科長をしていて、教務も学務委員会と言うことで兼ねているので、確認しておきたい。今丁度○付けを新設科目でやっていて、履修の手引きやコースカリキュラム表を持っているけど、確認しておきたいのは分かる範囲で結構ですが、必修、選択必修、選択の国際経済の例が出ているが、これは決まったものとして出てくるのか、それともこれも今後再調整するのかというのが一つ。それから、選択に△と書いてあるが、経済学科の場合は選択必修 A、選択必須 B、自由科目とあって、自由科目は無印なので△は付けないんですけど、もう一つは経済は DP1～DP6 までであるが、これは大体どこに当てはまるかと言うのは、先生方お分かりになるかと思うが、一つを選択するのか、関連すると思ったらいくつか付けていいのか、その三点をお伺いしたい。

A：まず 1 点目は今後科目が少し変わるということですね？

Q：必修、選択必修と言うのが書いてあるが、これを今後作る段階で個々人が変えられるか？

A：経済学部の学務係からもらってきたのを貼っただけなので、もちろん変えられますし、変えてもいいと思います。

Q：学科で話し合えばいいと。

A：2 点目は？

Q：細かいことだが△が選択になっているが、自由科目の場合、経済の場合は無印。

A：それで結構です。選択とか外していただいて変えて頂いて結構です。一番上のテンプレートの枠組みは全学共通にしたのでそうなっているけど、学部がそうじゃない場合には学部の形にして頂いて結構です。3 点目は？

Q：DP1～DP6 でだいたい一つ選択できるんですけど、いくつかまたがっていると思ったら複数選択して良いのでしょうか？

A：それは結構です。これも事前に相談してもらって、専門のところは同じ所に◎付くんじゃないかと指摘を受けたんですけど、基本的にそれは結構です。DP は 6 つしかないの。

ただし、メインは ◎とか当然付けられる、すぐ分かると思うんですが、それ以外の所で横を見ていったときに DP に自分の担当する科目が関係する、コースが関係する、と思えば○とか△とかつけて頂いて何ら問題ありません。

Q：◎とかというのは必修と言う意味じゃなくて、重要と思ったら◎にする？

A：上の欄外に書いてありますが、DP の達成の貢献度です。何も関係ないと思ったら空白で結構です。極端な話、◎1 つか○1 つかしかない場合でも、そうだと思えばそれは仕方ない。

Q：提出はいつまで？

A：来年の 9 月 30 日ですが、学科委員が変わっちゃうとかあるらしいので、教育学部は年内、変わらないうちにやると言っていました。提出は長目にとって 9 月 30 日までにはしています。4 月に変わっちゃうと困るので、年内にやった方がいいかなと思いますけど、皆さんの仕事量の問題

なのでお任せします。

Q： 聞いちゃいけないんでしょうけど、公開の範囲はどういう予定になっているんですか。これをどういう形で利用されるのか。

A： 一応、カリキュラム・マップについては9月30日と言ったが、そろったら大学教育センターのwebページ上にアップする。

Q： それは、どなたが見るためにアップするんですか？要するに、これは何のために作るのか分からないまま研修の案内をしてるんですけど。

A： 一つは、国立大学は税金で賄われている大学なので、周知するのが一つ。ステークホルダーに。

Q： であれば、もっと 分かり易いものを提供すべきであって、これを見て何が分かるのか、私、常々疑問に思っている。そういう意味では、締め切りも9月30日であるならどうか。やりません。やらないと言う意味ではないです。でも大学院についてはやりません。変わるの分かっているのになぜやるのか。それは私やらないと言ったはずなんですけど、変わらないならやってくださいと、無駄な作業やらされるのは不本意なので。もちろん固まり次第やりますが、現時点でご検討くださいと言う事であれば、やらないと言う事で考えていただきたい。

A： 締め切りは9月30日ですので、それまでに固まらなくて、議論が進んで、もう少し日を伸ばした方がと言う事であれば…

Q： いえ、やるかやらないかという状況じゃなくて、やらなきゃいけない状況になっているので、やるんですよ。大学院の改革はですね。であれば、今やるのは全くの無駄じゃないですか。それをとりあえずやってくださいと、とりあえずやらされるのはたまらんと話です。だからそれはやりませんと言う風にお答えさせていただきます。

A： であれば、聞いていた話と少し違った話だったので、うちのセンター長と相談して、まだ固まってなければと相談したんですけど…

Q： 固まってはないんです。でも何もやらないと言う選択肢はないので。であれば、やらされるのは無駄ですよ。

A： それはいつ頃までに？

Q： それは分かりませんよ。分からないからどうしようと相談して、それだったらいいですとおっしゃったのに、とりあえずやれとか言うからおかしな話になるんですよ。

A： そうなると、他の文系で言うと、人文学部と教育学部はあるけど、経済の場合は大学院の研究科のところのカリキュラム・マップはないと言う事になると思います。今言ったように公表しますので、その時に説明を。

Q： そんなことは出来ないわけですよ。人文さんもやらなきゃいけないし、文系全体で今やらなきゃいけない状態になってるんですから、それは考えてくださいって言ってるわけです。絶対やらないと言っているんじゃないかと、文系全体で再編が進んでいるのにとりあえずやれと言うのはおかしいでしょと。

A： 言ってることは良く分かりますけど、我々としては出来れば…

Q： 出来ないと言ってるんです。

A： そうじゃなくてですね、出来ないんじゃないなくて、要は出来た段階で出してくださいと言う事なんですよ。センター長からもそれは伺っていますので、そういう学部のご意見であれば、出来た段階でアップして頂ければいいという話でしたので、今のご意見の通りで結構です。今の段階で出来ないと言うのであればそれで結構です。出来る場合は、教育学部なんかは半年伸ばしてくれれば出来ると。

Q： 教育学部は専門職だから全然違うじゃないですか。なんで教育とうちを一緒にするんですか。

A： いやいや、ただ、教育学部も同じじゃないですか。出来たから、半年伸ばしてくれれば出来ますよと言われたから、じゃあいいですよ。

Q： 全然違う事やりますから、こっちも混乱しますよ。

A： 経済学部さんもそういうご意見でしたら、出来た段階で作って頂いてアップするだけです。それはまだわからないというお話しでしたので、出来た段階でとしか答えられないですよ。我々としては、我々、待っているしかないという形になると思います。

A： と言うことで、まだ、先の話ですけど、どういう進捗でやられるか、先ほどの話も含めて学部にお任せしている関係がありますので、一応締め切りとしては9月30日を締め切らせて頂くと。ただし、ご事情がありますので、それは伸ばしてもいいと思っていますので、出来上がった段階でアップして頂ければいいなど。いずれにしても出来ない、例えば先ほど言った審査の時とか、当然言われると思いますので、学位授与機構とか大学評価の時に言われると思いますので、そこらへんを横目に見ながら経済学部として、大学全体として検討されればいい話だと思うんですけどね。よろしいでしょうか？

Q： 打ち合わせとちょっと違ったので、大学院はやらなくていいと、私は了承していたので、ちょっと声を荒げてしまいましたが、やらないと言う事ではなく、出来次第やります。やりますが、いろんな学部でいろんな事情があるのでと言うところをご理解頂ければと思います。

アンケート回答

以下のような回答があった。

感想

- 画面を見ながら画面に向かって一方的にしゃべっている。FD担当とは思えない。単純に内容が良くない。科目名だけで◎つけなんてできない。ミニワークが無意味。もっとちゃんと設計すべき。プロとは思えない雑さ。
- DPは不要だと思います
- 時間の無駄

希望する研修内容

- 大学予算についての現状説明
- 適応障害、うつなど、心の病気を抱えている学生への接し方、対応について

- 学生のモチベーションや学力別に分類した場合に、どのような講義が効果的か
- 日本の高等教育の方向にかかわるもの
- 授業力アップ、研究力アップ
- 大学運営に関する重要事項
- 英語での論文編集
- 教授法等

参加したくない理由

- 益少し

実施時期について

- 教授会中はよくない
- 教授会の時が一番人が集まるので仕方がないが、総じて5時を過ぎてしまい会議は5時以降やらないという原則(ワーク・ライフ・バランス)に反してしまう。
- 教授会がより長くなるだけ

開催場所について

- 教授会中はよくない
- 教授会以外の場所をお願いしたい

以上



(6) 教育学部・教育学研究科・東アジア研究科（教育系）

日程 平成 29 年 10 月 18 日(水)
 [吉田地区] 15:00~15:30
 場所 教育学部 21 番教室
 (吉田キャンパス)
 講師 小川 勤
 (大学教育センター)
 参加者 75 名(アンケート 49 枚回収)



内容

本研修会では、カリキュラム・マップおよびカリキュラム・フローチャート改訂の必要性およびその作業内容について説明が行われた。

本学では 3 つのポリシー (DP、CP、AP) が定められている。それぞれ、DP はディプロマ・ポリシー (卒業認定・学位授与の方針)、CP はカリキュラム・ポリシー (教育課程編成・実施の方針)、AP はアドミッションポリシー (入学受け入れの方針) を意味している。これらに基づいて、入学者選抜、授業、卒業認定・学位授与などの教育活動を実施し、各種の評価 (学生授業評価等) と改善活動を行う一連のサイクルを回すことによって、大学教育の改善と改革を行っている。このサイクルを内部質保証のための PDCA サイクルと呼んでいる。次期の大学評価では、このサイクルが実質的に機能しているかが問われることになる。これまで中教審は様々な答申 (学資課程答申、質的転換答申、高大接続答申) を出しているが、これらを通じて大学に「出口管理」の強化すなわち学習成果基盤型教育 (Outcome-based Education) を求めている。平成 26 年 12 月の高大接続答申では、センター試験を見直すなど大きな変化があった。また、平成 28 年 3 月 31 日には 3 つのポリシーの一体的な策定と法令上の位置づけのために学校教育法施行規則が改正され、大学にはポリシーの策定と公表が義務付けられることになった¹。これを受けて、本学では平成 28 年度にディプロマ・ポリシー等検討ワーキンググループによって DP と CP の見直し作業が行われ、学部・大学院の双方について 3 つのポリシーを既に公表している。なお、AP については、「新テスト」の方針決定を待つために、現段階では必要最小限の見直しにとどめている。今後は改定した DP や CP に基づき、カリキュラム・マップやカリキュラム・フローチャートの改訂が必要となる。研修会では教育学部および教職大学院のカリキュラム・マップが示され、これらの更新作業内容と締め切りについて説明があった²。

表 1 研修会に参加した感想はいかがでしたか？

選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	3	6.1%
良かった	33	67.3%
どちらとも言えない	10	20.4%
あまり良くなかった	1	2.0%
良くなかった	1	2.0%
無回答	1	2.0%
合計	49	100.0%

説明後の質疑応答では以下の質問と回答があった。

Q1 作業開始時期と締め切りはいつなのか。

A1 作業開始はこの FD 終了後に部局長宛に依頼文書、作業手順書、カリキュラム・マップのテンプレートを配布する予定である。これらが届いてから作業を開始していただければと思う。また、締め切りに関しては平成 30 年 9 月 30 日としている。

¹ 大学院については AP のみが義務化された。

² カリキュラム・フローチャートは学部のみ作成する必要がある。大学院については不要である。

Q2 国語教育を例にとると、DP が非常に細かく設定してあるが、これ程細分化する必要があるのか。また、撰修によっては教科教育というよりも児童の発達全般をテーマにしているの、教科という形で DP を書かれると全て丸がつかなくなる。今後、このような実情に合わせて DP を作り直すことができるか。

A2 大学教育センターでは、昨年度に教育学部がまとめた DP やカリキュラム・ポリシーに沿って、カリキュラム・マップの枠組みを考えている。もし DP 等の調整が必要ならば変更も可能である。他の課程等とも相談しながら学部で検討および調整をしていただければと思う。また、DP を変更された場合は、大学教育センターにもご連絡いただきたい。

Q3 カリキュラム・マップやカリキュラム・フローチャートの締め切りは来年の 9 月末とのことであるが、公開はいつから行うか。フローチャートには教職科目が入っているが、これについては現在コア・カリキュラムやナンバリング等を検討中である。平成 31 年度からの公開であれば教職大学院に一本化された科目で作成できると思うが、それよりも前に公開するのであれば、わずか半年のために別途作成が必要であるため、要する労力は大きい。平成 31 年 4 月に向けて新しいものを対象に作成するというのであれば無駄が無いと思うが、どうすればよいか。

A3 そのような事情があれば、平成 31 年度からを対象にカリキュラム・マップやカリキュラム・フローチャートを作成していただき、平成 31 年 4 月より公開していただければよい。

Q4 共通教育の部分のカリキュラム・マップは誰が作成するのか。カリキュラム・マップには授業科目名が記入されているため、実際に講義される開講科目の内容がわからないものもある。このような場合はどうするのか。

A4 ご指摘のような問題があるので、共通教育科目については、その概要を記載した資料³を添付するので、これを参考に丸付けをしていただければと考えている。

研修会後のアンケートには、「教育の質を高めることを、山口大学は早くから取り組みがなされていることを嬉しく思いました。3つのポリシーは重要だと思います」、「今後の作業が見えた点は良かった。但し、学部の事情等現実対応しやすい様、準備して頂けるとありがたい」、「教育学部の今後に対して言い方が失礼だと思います」との回答があった。また、今後希望する研修会については、「具体例を含んだ研修。今回もあったことはあったが、イメージがつかないものだった」との回答があった。

³ 学生用の共通教育の履修案内に掲載されている内容。

(7) 工学部・創生科学研究科（工学系）

日程：平成 29 年 11 月 8 日（水）[常盤地区] 14:20
～14:50

場所：工学部 D 棟 D11 講義室

講師：岡田 耕一（大学教育センター講師）

参加者：29 名（アンケート回収 26 名）



【★説明内容】

岡田 大学教育センター講師より、「カリキュラム・マップおよびカリキュラム・フローチャートの見直しについて」と題し、3つのポリシーに基づく大学教育改革の概要、近年の高等教育政策の動向、さらには、平成 28 年度に学内で行われた 3 つのポリシーの改訂作業について概観しながら、今回のカリキュラム・マップおよびカリキュラム・フローチャートの見直しに関する趣旨説明があった。

まず、本学では従来からポリシーに基づく内部質保証システムを確保してきたが、政府の高等教育政策の動向を追っていくと、平成 17 年 1 月の中央教育審議会答申『我が国の高等教育の将来像』を契機として、3つのポリシーの策定による学習成果基盤型教育が推奨されるようになり、平成 25 年度末には、ほとんどすべての国立大学で 3 つのポリシーが策定された状況が説明された。平成 26 年 12 月の中央教育審議会答申（高大接続答申）において、改めて、3つのポリシーの一体的な策定が求められるようになり、平成 27 年度には中央教育審議会大学分科会大学教育部会での検討を経て、平成 28 年 3 月末に、学校教育法施行規則の一部改正による 3 つのポリシーの公表義務化、さらには、『卒業認定・学位授与の方針』（ディプロマ・ポリシー）、「教育課程編成・実施の方針」（カリキュラム・ポリシー）及び「入学者受入れの方針」（アドミッション・ポリシー）の策定及び運用に関するガイドライン』が提示された。これに対応して、学内では、ディプロマ・ポリシー等検討ワーキンググループを設置して、当該ガイドラインに基づき、3つのポリシーの改訂を行った旨の説明があった。特に、ディプロマ・ポリシー（DP）とカリキュラム・ポリシー（CP）の一貫性の確保が重要であるとの言及があった。





次に、カリキュラム・マップおよびカリキュラム・フローチャートの意義や構成内容について説明があり、今回の3つのポリシーの改訂に伴い、改めて、既存のカリキュラム・マップおよびカリキュラム・フローチャートの改訂を依頼する趣旨を説明した。

その後、カリキュラム・マップの「〇付け作業体験」と題して、配布されたカリキュラム・マップ様式に従い、参加教員各人が担当授業科目の到達目標と所属学科のDPを確認しながら、DP達成のための寄与（貢献）度について「◎、○、△」を記入するワークを行った。このことにより、参加教員一同、所属学科のカリキュラムにおける担当授業科目の位置づけやDPとの関係性について理解を深めた。

【★質疑応答・意見交換】

岡田 大学教育センター講師からの説明およびカリキュラム・マップに関するミニワークの後、以下のとおり質疑応答が行われた。

設問1 研修会に参加した感想はいかがでしたか？		
選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	2	7.7%
良かった	13	50.0%
どちらとも言えない	10	38.5%
あまり良くなかった	0	0.0%
良くなかった	1	3.8%
無回答	0	0.0%
合計	26	100.0%

Q1 高等学校への進学説明等を行う際に、新しいアドミッション・ポリシーを提示する必要性に迫られているが、改訂時期はいつ頃になるか。

A1 大学入試改革の動向を見ながらの判断になる。来年度には、政府の方から何らかの方針が提示されるのではないかとと思われる。

Q2 ナンバリングの導入に向けた検討が進んでいくと思われるが、ナンバリングにはどのような意義があるのか。

A2 授業科目のレベルを明示することで、学生の履修順序性やカリキュラムの階層性を説明することができる。また、留学生にとって、単位互換等において有意義であると考えられる。

(8) 農学部・創生科学研究科（農学系）

日時 平成 29 年 12 月 20 日(水) 13:30～14:00

場所 農学部大会議室

参加者 33 名（アンケート回答数 22 名）

担当者 木下 真（大学教育センター准教授）

内容

研修会の冒頭、阿座上弘行教授から研修会の主旨の説明があった。その後、図 1 のように木下准教授により、資料に沿って以下の説明があった。(1)3 つのポリシーを巡るこれまでの経緯、(2)カリキュラム・マップ(CUM)の見直しについて、(3)意見交換。

(1)については、平成 27 年 1 月の文部科学省による「高大接続改革実行プラン」の公表から、平成 28 年 3 月 31 日に大学教育部会から出された 3 つのポリシーの策定に関する「ガイドライン」発表、学校教育法施行規則の一部改正の省令交付までの国・文部科学省の一連の経緯について説明が行われた。その後、それを受けての本学の動きと 3 つのポリシーの策定と今年度 4 月の公開が説明された。

(2)については、ディプロマ・ポリシー（DP）の見直しを受けて、各科目と新しい DP が一体化しているかどうかの確認のために、カリキュラム・マップの見直しが必要であることが説明された。農学部で過去に策定された現行のカリキュラム・マップ、そして、新しく策定されたディプロマ・ポリシーが紹介された。なお、最後に、現行のカリキュラム・フローチャートが紹介され、カリキュラム・マップの見直し後はカリキュラム・フローチャートの見直しが必要であることが説明された。現行のカリキュラム・フローチャートは平成 23 年度に導入した新しい共通教育が反映されていないため、新しいものを策定する際は考慮する必要があることが付け加えられた。

研修会後のアンケートでは 72.7%が概ね良かったという意見だった。

(3)については、研修参加者からは以下のような質疑応答があった。

設問1 研修会に参加した感想はいかがでしたか？

選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	3	13.6%
良かった	13	59.1%
どちらとも言えない	6	27.3%
あまり良くなかった	0	0.0%
良くなかった	0	0.0%
無回答	0	0.0%
合計	22	100.0%



図 1 講演中の木下准教授



図 2 研修会の様子

(質問1) 同じ DP のところに○が偏在化する可能性があるが、それでもよいのか？

(回答) 専門教育の場合、○付けされた結果、そのような傾向が時々見受けられる。その際には DP の設定そのものがよかったのか、科目の編成がこのままでよいのかを考え直す必要がある。ただし、医学部保健学科のように職業資格に結び付いたコア・カリキュラムで運用されている場合にはカリキュラムそのものを変更することは難しいと考えられる。

(質問2) 今回のカリキュラム・マップの○付けと以前説明があった YU-COB-CUS とはどのような関係があるのか？

(回答) 今回の○付け作業は、DP が昨年度改訂されたことを受けて行われるものである。YU-COB-CUS の導入については、次年度あらためて作業の進め方を含めて各学部と協議していく予定である。

(9) 技術経営研究科

日程：平成 30 年 1 月 16 日（火）〔常盤地区〕 14:30～15:30

場所：大学院技術経営研究科棟 1 階 会議室

講師：岡田 耕一（大学教育センター講師）

参加者：11 名（アンケート回収 10 名）

【★説明内容】

岡田 大学教育センター講師より、「カリキュラム・マップ、カリキュラム・フローチャート、シラバス等について」と題して話題提供を行った。

まず、3つのポリシーに基づく大学教育改革の概要、近年の高等教育政策の動向、さらには、平成 28 年度に学内で行われた 3つのポリシーの改訂作業について概観しながら、今回のカリキュラム・マップおよびカリキュラム・フローチャートの見直しに関する概要説明を行った。本学では従来からポリシーに基づく内部質保証システムを確保してきたが、政府の高等教育政策の動向を追っていく



と、平成 17 年 1 月の中央教育審議会答申『我が国の高等教育の将来像』を契機として、3つのポリシーの策定による学習成果基盤型教育が推奨されるようになり、平成 25 年度末には、ほとんどすべての国立大学で 3つのポリシーが策定された状況が説明された。平成 26 年 12 月の中央教育審議会答申（高大接続答申）において、改めて、3つのポリシーの一体的な策定が求められるようになり、平成 27 年度には中央教育審議会大学分科会大学教育部会での検討を経て、平成 28 年 3 月末に、学校教育法施行規則の一部改正による 3つのポリシーの公表義務化、さらには、『「卒業認定・学位授与の方針」（ディプロマ・ポリシー）、「教育課程編成・実施の方針」（カリキュラム・ポリシー）及び「入学者受入れの方針」（アドミッション・ポリシー）の策定及び運用に関するガイドライン』が提示された。これに対応して、学内では、ディプロマ・ポリシー等検討ワーキンググループを設置して、当該ガイドラ

インに基づき、3つのポリシーの改訂を行った旨の説明があった。特に、ディプロマ・ポリシー（DP）とカリキュラム・ポリシー（CP）の一貫性の確保が重要であるとの言及があった。



次に、カリキュラム・マップおよびカリキュラム・フローチャートの意義や構成内容について説明があり、今回の 3つのポリシーの改訂に伴い、改めて、既存のカリキュラム・

マップの改訂を依頼する趣旨を説明した。

さらに、山口大学におけるシラバスの位置づけについて話題提供を行い、シラバスの作成に関する FD ハンドブックを参照しながら、シラバスの意義と背景、一般目標や行動目標記述のための行為動詞例、到達目標における 5 つの観点などについて説明があり、本学のシラバスは観点別に到達目標を示していることから、1 段階規準の Analytic ルーブリックと言えるのではないかという指摘があった。そのほか、学生授業評価・教員自己評価による授業改善や成績分布共有システムについて改めて説明を行い、その機能について理解を深めた。

【★質疑応答・意見交換】

岡田 大学教育センター講師
からの「カリキュラム・マップ、
カリキュラム・フローチャート、
シラバス等について」に関する話
題提供の後、以下のとおり質疑応
答が行われた。

設問1 研修会に参加した感想はいかがでしたか？		
選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	1	9.1%
良かった	9	81.8%
どちらとも言えない	0	0.0%
あまり良くなかった	0	0.0%
良くなかった	0	0.0%
無回答	1	9.1%
合計	11	100.0%

Q1 技術経営研究科では、DP に基づくカリキュラム・マップのほかに、MOT 分野のコアカリキュラムにおけるコンピテンシー・リストがあつて、ある意味で 2 系統のリストが存在しており、これらを一つにまとめられないかと考えているが、いかがか。なお、いずれは YU CoB CuS のように点数化したリストとしたいとも考えている。

A1 YU CoB CuS は DP に基づく各授業のウェイト付けをしているものである。技術科学研究科においては、コアカリキュラムにおけるコンピテンシー・リストを重要視しながら、カリキュラム・マップとの整合性を図れるような方策を調整していければと思う。

Q2 シラバスにおける授業外指示の書き方など、シラバスのマニュアル等においてサンプルを例示してもらえると助かるが、いかがか。

A2 今後、シラバスのマニュアル等の改訂を行う必要があると考えている。

このほか、シラバスにおける達成目標と向上目標について、知識・理解はテストで測定できるが、向上目標については教員個々の判断に委ねられており、到達度測定には課題を残しているとの指摘があった。

(10) 国際総合科学部

日時 平成 30 年 01 月 17 日(水) 13:00~13:50

場所 国際総合科学部本館 2 階 大会議室

参加者 27 名 (アンケート回収 20 名)

担当者 林 透 (大学教育センター准教授)

内容

「大学教育機構では学部に出向いて教育改善 FD 研修会をやっており、今年の全学のテーマは 3 つのポリシー改訂に伴うカリキュラム・マップ、カリキュラム・フローチャートの改訂を各学部でお話ししている。国際総合科学部では既に YU CoB CuS を運用されているので、YU CoB CuS の現状と課題と言うテーマについて、話題提供、状況報告、ディスカッションできればと設定させてもらっている。」と説明があり、「YU CoB CuS の現状と課題」と題して、昨年 6 月頃に実施した教員へのアンケートと、PROG テストの結果、YU CoB CuS との関連について次のような説明があった。

まず、学習成果の可視化における二つの流れとして、学生の学習成果のポートフォリオ化を行い、ディプロマ・サプリメントなどを組織的に作成されるようになってきている流れと、学習評価の転換(学修としての評価)の流れとについて紹介され、YU CoB CuS との関連について言及された。

また、AL ポイントで見る国総の教育・学修の状況として、国総は AL 科目多くを占めているため AL ポイントは全学で 70% くらいを目指している中 95% くらいあり、AL 度も高いことが数値からも見て取れること、AL の 6 つの指標として、グループワーク、ディスカッション、フィールドワーク、プレゼンテーション、振り返り、宿題があるが、昨年の AL ポイントを学部間比較すると、国総の特徴として、グループワーク、振り返りが他学部と比べて高い傾向が見られること、学生が、どのくらい AL 型の授業を経験しているか、学生一人当たりの単位取得科目における AL ポイント累積値が、国総 1 期生は他学部の平均が 150 くらいであるのと比べて倍以上の 350 くらいあること、等の情報提供がなされた。

次に、YU CoB CuS の有効性に関するアンケート調査結果(暫定版)から見えることについて、教員 20 名に 6 月、留学前の 2 年生 89 名に 5 月、帰国後の 3 年生 89 名に 12 月に取ったアンケートの質問紙を中心に説明があった。

教員の結果の概要では、基礎セミナーの担当教員への質問 Q1, Q2 の YU CoB CuS を用いてどう指導しているかや、学修が順調でない学生へのケアについての回答では、概ねリフレクシオンシートに従った個別指導、スコア低い分野についてのきめ細かい指導が見られたことに加え、

設問 1

研修会に参加した感想はいかがでしたか？

選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	5	25.0%
良かった	9	45.0%
どちらとも言えない	5	25.0%
あまり良くなかった	1	5.0%
良くなかった	0	0.0%
無回答	0	0.0%
合計	20	100.0%



DP と授業科目の関係性を問われると詳しい説明ができない、学生が順調でない学生については YU CoB CuS を元に指導している、そもそも学修が順調でない学生は YU CoB CuS に基づかなくてもわかるので YU CoB CuS なくても指導している等の意見が紹介された。Q3 からは全教員に聞いており、どういう教育に役に立つかや、基準スコアや DP との関連の妥当性について聞いており、YU CoB CuS と就職先の動向を分析しながら特徴が見られないかとか、ロールモデル的な物が示せるのではないかと言う意見、基準スコアの妥当性として、まだ学年進行中なので一概には言えないが能力をあまり厳密に数値に従って評価するのは難しいのではないかと言う意見、ある科目では細かく配分されているのでどう DP に貢献しているか分かり難いのではないかと言う意見もある中、全般的な意見としては、授業対象者全般の傾向が分かるとか、学生の得意不得意が分かるので参考になるという肯定的な意見も出ていた。

学生については、3 年生が後期のリフレクション前に行ったアンケートである事情も考慮に入れた上で、YU CoB CuS の結果を認識しているかについては、学年進行に従い 3 年生は当てはまるという回答が増えている、基準スコアを意識しているかについては、かなり当てはまるが 3 年生で増えている一方、あまり当てはまらないという回答も増えている。YU CoB CuS のスコアを通して学修の参考にしているかという質問には、3 年生で当てはまらないが増えている。改善に生かしているかについては、生かしている者も増えているが、ネガティブな部分も増えている。先生に聞いているかどうかについては、卒業要件になっているためか、聞いている傾向がある。自由記述では、YU CoB CuS について見難い、分かり難い、仕組みが分からないという学生が一部いる。就活の時期に入ってきているのでスコアが就職活動にどう関わるかとか、そのスコアが能力の証明になっているのか疑問を持っているというコメントがあった等の説明が行われた。

続いて、PROG テストについて、1 年生と 3 年生の結果について、リテラシーは 1 年時より 3 年時の方が上がっているが、1 期生と比べると 2 期生の方が高い。コンピテンシーについては、1 年時より 3 年時の方が上がっている。対人基礎力、対自己基礎力、対課題基礎力とあるが、対人基礎力は 1 期生が高い。基礎力の中が 9 項目に分かれていて、対人基礎力の協働力、統率力、対自己基礎力の行動持続力が 3 年になって下がっている。

今日のテーマのポイントとして、現在の 3 年生の PROG テストのスコアと YU CoB CuS の相関を見た場合に、ほとんど無相関だがリテラシーの情報収集力と課題発見力について、いわゆる知識理解 DP1 に少し弱い正の相関がある。これは妥当かと思われるが、問題はコンピテンシーで、統率力、行動持続力について DP2 に -0.3 程度の弱から中程度の負の相関があった。

コミュニケーションの科目が 3 年生までは言語系が多く、4 年生になると課題解決の科目も入ってくるが、大教センターの立場からいうと、今後、YU CoB CuS のウェイト見直す際には少し気になる等の情報提供が行われた。

最後に、学生の学修の観点として質問紙から見て取れる事として YU CoB CuS のスコア自体も大切だがそれを通して自律的な学習ができるようになるかが重要。質問紙を見るとまだまだ課題があるように見える。DP の達成度が卒業要件になっているが、あくまでスコアであり、どれだけ伸びたか、学年平均を超えているかどうかといった、学生の成長感が大切であり、レベルチェックシートやルーブリックのような形で学生に自己評価させることも今後必要かもしれない。

リフレクションシートについては、しっかり自分で振り返って書ける学生は良いが、そうでない学生にとってみると、レベルチェックシートのようなものがあるとリフレクションの手助けになると思われる。例え、ば岩手大学の事例では、新潟大学の NBAS を参考にした、「学位授与の方針」自己評価チェック・リスト」のようなものがある。各項目を見ると答えやすいチェック・リストになっているが、今後の参考になるであろう。最近の他の大学の取り組みを見ると、間接的な評価を重視すべきではないかと思う。

PROG テストと YU CoB CuS に YU CoB CuS のスコアでも行ったが、授業の到達目標と DP の整合性をもう一度検証する事もどこかで行われる必要があるかなと思う。カリキュラムマネジメントのサイクルを回しながら検証していく必要もある等の指摘を行い、話が締めくくられた。

質疑応答

以下のようなやり取りがあった。

Q: PROG テストというのはどのくらい認知度と言うか、傾向としてはあっているという話になっているのでしょうか。年次進行で能力が下がるという話もあったが、それがエラーバーの範囲ならあまり気にしなくてもよくて、だいたいこんなもんだという見方で良くて、シビアな話なら、YU CoB CuS に重み付けの数値がありますけど、今は適当でないと、正確に評価するには変えなくてはいけないとかいう話になってくるので、これをどれだけ信用するかということについてお聞きしたい。

A: PROG テストについては、一応大学業界では社会人基礎力を測る外部テストとしては一番信頼性が高い。マーケットも一番大きいです。10 万人くらい受けています。ベンチマークもできて、正直これ以外ないみたいな感じになっています。ただ、先生おっしゃるように下がり部分は、エラーバーと言うか、どうとらえるかとなると、0.1 とか 0.2 の値ですので、ここは少し経年見ながら積み重ねて見ていく必要あります。ただ、こういう傾向ありますということをお示しさせて頂いたのと、さっき言った相関で見たときに一定の傾向が少し見えますので、これも積み重ねていきたいと思います。質問紙の調査もそうですが、あくまで暫定的としておりますので、今後また 1 期生、2 期生、順番に取らせて頂いて、同じような傾向が見られるのであれば、これは更に検討しないといけないでしょうし、まずはそんな感じにとらえて頂いたらと思います。

Q: 今回 PROG テストの結果は、国際総合科学部の結果を出してもらえたが、他学部、他大学との違い、結局その値がどういう意味持っているかわからない感じがするが、いかがか。

A: 今日見せたかったのは PROG テストというよりも、後半の相関がメインで YU CoB CuS の有効性の話をしたかったために出していますので、そちらに関心を持っていただきたい。PROG テストの結果自体は YU-AP 事業推進委員会で毎年学部間の比較の物は 3 月の委員会で提供しています。また、必要なら提供することも可能です。

Q: 今回の学生調査概要では、学生は YU CoB CuS をよく見ているけど、実際に自分で利用していないと私は見えて、それから、相関を見ると、統率力とコミュニケーションのところ弱い負の相関なので、統率力があるという人はコミュニケーション力が低いみたいなそういう相関

があるというように感じたのですが、いかがか。また、YU CoB CuS と PROG の間が負の相関なので、あまり関係してないのかなとそういう見方をしたのですが、いかがか。

A : YU CoB CuS のスコアを確認するという意識は上がっていますと思います。今日の話で言いたかったのは、YU CoB CuS を通してセルフ・ディレクティッド・ラーニング (SDL) を目指されていると思いますので、自分の力と先生の助けも受けて、次の学習に進めているかという所について、まだ課題があるではないかという指摘をさせていただいた。

もう1点は、PROG テストと YU CoB CuS の関係性において、一部で負の相関が出ていることについて、カリキュラムのウェイト付けについて今後見直しを行う必要があるのではないかということ指摘させていただいたということです。



第2章 共通教育授業科目別部会のFD活動

1. FD活動を実施した授業科目別部会

(1) 情報処理部会（部会長：教育学部 中田 充）

H29年4月にTA/SA研修会において、新規採用のTA/SAを対象として、情報関係の授業におけるTA・SAの業務の概要と留意すべき内容、Windows 10の概要と操作方法等について研修を行った。さらに、H30年度から実施されるデータ科学と社会IIの統一教材に関するFD研修をH30年3月29日に実施した。

授業外学習時間の確保については、PCやソフトウェアの基本操作の修得については習熟度向上のための課題を毎週課すことで確保ができるが、受講学生の習熟度に大きな差があり、どのレベルの課題を課すかが難しい問題である。また、情報セキュリティモラル（データ科学と社会II）では、アクティブラーニング形式の授業で学生同士が協議することも有効であるが、現状の統一教材はそのような内容になっておらず、この点も課題がある。

適正な成績評価に関しては、授業担当者による成績評価のばらつきがやや大きい。同じ名前でも基本的には同じシラバスで実施している科目であるので、成績評価の分布の差を縮める事が今後の課題である。

(2) 運動健康科学部会（部会長：教育学部 上地 広昭）

運動健康科学における運動実習（筋力トレーニング実習およびステップ実習）の新規担当の教員は授業参観を行い、次年度の授業づくりについて意見交換を行った。

(3) 英語部会（部会長：人文学部 池園 宏）

部会としてFDと銘打った活動は特に実施していない。平成29年度は、前年度末に行った全英語科目担当教員（非常勤講師を含む）対象の新カリ用FDをもとに、実際に一年間を通してすべての授業を十全に運用することに重きを置いていたためである。この意味では、新カリの現状把握と課題対応に関する協議を繰り返し行った部会会議が、実質的なFD活動の役割を果たしたと言える。結果として新カリ初年度に生じた運用上の課題はおおむね解決に至ったが、同時に、今後もこのような点検作業を継続的に行っていく必要があると考えられる。

(4) 数学部会（部会長：創成科学研究科（理学） 中内 伸光）

工学部で2019年度より(7学科中の)5学科で導入される新科目『線形代数及び解析続論』（第2学年）の講義内容に関連し、2017年7月、工学部常勤の数学教員により、共通教育の「数学I」「数学II」との接続を含む数学教育の現状について話し合いがもたれた。

「共通テキスト」を用いている教員に集まってもらって、懇談会をおこなうことが企画されたが、今年度は実施されなかった。来年度以降の課題である。

(5) 物理学部会 (部会長：創成科学研究科 (理学) 野崎 浩二)

部会として取り組んだFD活動はない。

授業外学習時間については、他の共通教育科目よりも多い傾向にある。学生が授業内容に興味を持ち学習にしっかりと取り組んでいると思われる。

成績の評価については、成績分布には教員間でまだ隔たりがある。本部会に関係する授業科目の成績は各学科でクラス分けしている。そのため学生の高校までの履修科目や物理学に対する興味等が学科ごとに異なり、その「個性」が強く表れるためとも思われる。

複数教員が担当する一部の授業科目で成績評価上の課題が生じた事例があったようである。授業開始前に担当教員間で成績評価等についてしっかりと打ち合わせを行い、共有することを徹底したい。

(6) 化学部会 (部会長：創成科学研究科 (農学) 小崎 紳一)

化学実験テキストの改訂を常勤、非常勤の担当者を中心に行った。特に、物理化学実験「理論計算を用いた分子構造解析」で使用してきたパッケージソフトウェア ChemBioOffice の購入中止に伴い変更した項目について改善を行った。

1年間の化学実験の終了時(12月)に担当者から気づきを聴取し、改善点など検討した。

(7) 地球科学部会 (部会長：創成科学研究科 (理学) 永嶋 真理子)

2018年2月1日(木)に行われた理学部専門講義「技術者倫理」(後期木曜日9・10時限、担当者：太田 岳洋 准教授)のピアレビューを地球科学部会のFD活動とした。(理学部講義を対象としたのは、分科会所属21名中半数以上の12名が理学部地球科学分野所属という本分科会の実情を考慮したため)他部局所属の分科会構成員全員に事前に該当講義のシラバス、講義内容について周知し、参加を呼び掛けた。

講義では実際に技術士が直面する具体的な事例が説明された後、学生個人の意見出し → グループ内での意見集約 → 他者(他班)との議論という形式でおこなれ、アクティブラーニングの実践とその教育効果を検証するものであった。学生アンケートや参加した分科会員による授業評価を取りまとめた後、授業研究会(2月22日)を行い、アクティブラーニングの効果、問題点・改善点についてについて議論を行い、今後の地球科学分科会員による講義・実験に活かすこととなった。

(8) 日本語部会 (部会長：留学生センター 宮永 愛子)

特にFD研修という名目で活動を行っているわけではないが、学期終了時と授業期間中に1、2回、担当教員が集まり、最近の日本語教育の動向や、最新の教材、授業方法についての情報交換を行っている。今後は、関連学会で、実践研究の発表などを行った際には、部会でも報告会を行い、情報を共有できる機会を設けたいと考えている。

(9) 日本国憲法部会 (部会長：経済学部 平良 小百合)

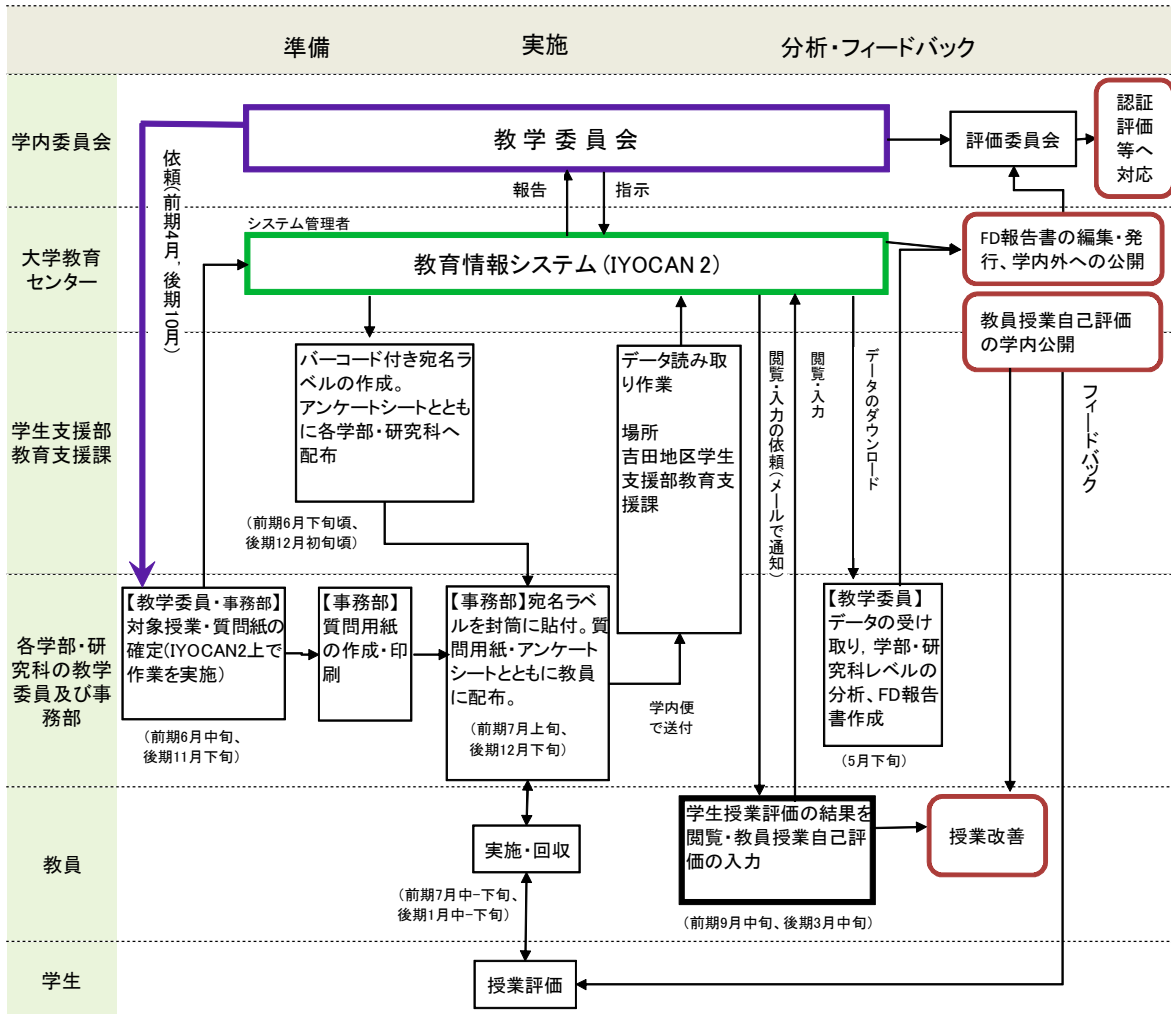
制度化したFD活動はないが、授業外学習を促進し授業外学習時間を確保するための取り組みや、定期試験の内容・方法などについて、教員間で適宜、情報を共有した。

第3章 学生授業評価及び教員授業自己評価

第1節 実施方法・実施状況

(1) 実施方法

1) 教育情報システム(IYOCAN)による学生授業評価・教員授業自己評価



※教育情報システム(IYOCAN2)は授業評価のデータベースであり、共通教育、医学部の除く6学部、一部の大学院研究科の評価を扱っている。医学部は独自のシステムで実施しているためこれには含まれない。

山口大学では、平成17年度前期より、旧大学教育職員能力開発(FD)委員会(～2008年3月)。現在は教学委員会)のもとで、学生による授業評価(以下、学生授業評価)および教員による授業自己評価(以下、教員授業自己評価)を全学的にスタートした。平成16年度までは7学部・共通教育でそれぞれ独自に学生授業評価を実施してきたが、効率化・簡便化を図る必要性や、認証評価への対応の必要性から、大学教育センターがこの実施業務を引き受け、現在まで統一的に実施している(医学部を除く)。下図はその一連の流れである。マークシートに記入された回答は教育情報システム「IYOCAN」(Information of YOur Course

ANalysis の略、いよかんと呼称)に蓄積され、教員は Web 上で結果の確認と自己評価を行っている。2010 年度からは新データベース「IYOCAN 2」を導入し、教務情報の新システム「修学支援システム」と連動することで様々な情報を授業評価に直接的に利用することが可能となった。

なお、以下に述べるように、医学部（医学科、保健学科）は全学に先駆けて Web による授業評価を実施しており、独自のデータベースを構築しているため IYOCAN は利用していない。

● 授業評価の閲覧・入力画面（大学教育センターホームページ上に配置）



2) 医学部医学科「医学教育総合電子システム eYUME」

平成 13 年度より、医学教育センターが管理する「医学教育総合電子システム eYUME」上で毎回の授業ごとにオンライン授業評価（進行評価）が実施されている。また、ユニット終了時にはマークシート方式による「ユニット学生振り返り評価」「ユニット責任者振り返り評価」が実施されている。その結果は同システム上で公開されている。

● 医学部医学科 医学教育総合電子システム



3) 医学部保健学科「山口大学医学部保健学科授業支援システム」

保健学科ホームページ上から「山口大学医学部保健学科授業支援システム」にログインし、教員が登録した授業評価メニューや出席確認メニューに対して、学生が教員から告げられた期間（時間）内にアクセスしてオンライン授業評価を行っている。

● 医学部保健学科 授業支援システム



(2) 質問紙の種類

質問紙は各学部・研究科ごとに異なっている。また、授業区分（講義、演習・実験・実習等）ごとに分かれており、学部・研究科独自の質問項目も設けられている（詳しくは4章以降の各学部・研究科のFD報告を参照のこと）。これは各学部・研究科のニーズに合った授業評価を実施するためである。

なお、本学のシラバスでは下表のように様々な授業区分が設けられているが、用いられる質問紙は大まかに分類して以下のようになっている(医学部を除く)。

シラバスの授業区分	質問紙の種類
「講義」の場合	講義用
「講義と演習」の場合	講義用
「講読」の場合	講義用
「演習」の場合	演習・実験・実習用
「実験・実習」の場合	演習・実験・実習用
「その他」の場合	講義用

共通教育では、上記に加えて、外国語系列の授業でシラバスの授業区分に関わらず「語学用」「TOEIC 準備用」の質問紙が使用されている。この2つの質問紙は基本的には「講義用」と同じであるが、授業技術を尋ねる質問の内容が異なっている。

シラバスの授業区分	質問紙の種類
共通教育・外国語系列 「講義」の場合	語学用（TOEIC 準備のみ TOEIC 準備用を使用）
共通教育・外国語系列 「演習」の場合	語学用

※「語学用」の質問紙は農学部専門授業の外国語科目でも使用されている

（３）質問項目

上述のように学部・研究科ごとに質問紙・質問項目は異なっているが、平成 17 年度からの統一的な実施に際して、全学共通の質問項目が 5 項目設定され、上記の「講義用」「演習・実験・実習用」「語学用」「TOEIC 準備用」の各質問用紙に盛り込まれた。この共通質問項目の導入によって山口大学全学の傾向の分析を行うことが可能となった。ただし、各学部・研究科では、共通質問項目に独自の質問項目を加えたオリジナルの質問紙を作成することができるので、これまで実施してきた学生授業評価との経年比較を行うことも可能となっている。

全学共通質問項目

- ①<授業外学習時間> あなたはこの授業のために授業時間以外にどのくらいの学習（予習・復習・宿題や関連した学習）を行いましたか？授業1コマ当たりの平均で教えてください
- ②<学習目標達成> あなたはシラバスに記載された学習目標を達成しましたか？
- ③<理解> あなたは授業の内容を理解しましたか？（講義、語学、TOEIC 準備）、内容理解や技能のレベルは向上しましたか？（演習、実験・実習）
- ④<満足> この授業はあなたにとって満足のいくものでしたか？
- ⑤<出席> あなたはこの授業にどのくらい出席しましたか？

（４）実施対象授業

1) 学部

基本的に全ての授業で実施しているが、授業評価の対象として適さない科目(例：教育実習、卒業論文等)については実施対象から除いている(詳しくは第 2 節「学生授業評価の結果について(全学)」の表を参照のこと)。なお、教員授業自己評価については学生授業評価を実施した授業を対象としている。

学生による授業評価実施要項（H17ー）

	実施対象科目	授業規模	その他
全学部 (学士課程)	全て。ただし、学生授業評価の対象として適さない授業科目については実施対象から除くことができる。	規模に関係なく全ての授業で実施。ただし回答者が 5 名未満の場合は授業担当者に結果を開示しないものとする。	非常勤講師についても実施

※評価を実施しない授業科目名は一覧にして質問項目とともに大学教育センターに情報を提供。

2) 研究科

平成 18 年度より大学院における授業評価は、a)学生授業評価は各研究科で最適な方法を決定・実施する(IYOCAN を利用してもよいし、自由記述形式等の独自の方式でもよい)、b)その代わり、学生授業評価の実施・非実施にかかわらず教員授業自己評価はすべての授業で実施し、授業の振り返りを通じた授業改善を促す、という方式で実施している。

●大学院・学生授業評価の実施方法 (H18-)

	実施対象科目	実施方法	その他
全研究科 (修士)	学生授業評価の対象として適する授業科目全て。	各研究科で選定した評価対象授業については、各研究科独自の方法で授業評価を実施する。学士課程と同様の方法を用いる場合は「いよかん」を利用できる。	独自で実施する場合は、質問項目の選定も自由とする

※実施方法および対象授業については大学教育センターに情報を提供。

●大学院・教員授業自己評価の実施方法 (H18-)

	実施対象科目	実施方法	その他
全研究科 (修士)	全て	学生授業評価の実施・非実施にかかわらず、全ての授業で自己評価を実施する。自己評価は「いよかん」で行う。 なお、評価項目については学士課程に準じるが、【28. 授業実施上の工夫】(10 項目)は任意とする。	

※授業形態の特殊性等の理由から学生授業評価を実施しない授業についても、教員自身による授業の振り返りを通じた授業改善を促す観点から自己評価については実施する。

なお、平成 23 年度前期からは以下のように変更することが平成 23 年度第 1 回教学委員会(平成 23 年 4 月 27 日開催)で承認された。

大学院における教員授業自己評価の対象授業選定方法の変更について(案)

大学教育センター

この度、大学院における教員授業自己評価の対象授業選定方法を以下のように変更する。

大学院・教員授業自己評価の対象授業

(現) 全て

(新) 学生授業評価と同じ (IYOCAN2 を利用する研究科)

対象として適する授業科目 (独自の方法で実施する研究科)

(理由)

現在、大学院における教員授業自己評価は、学生授業評価の実施・非実施にかかわらず「全て」の授業で実施されている(平成17年度第10回FD委員会承認)。これは、当時、大学院(修士)の授業は規模・形態の面で学生授業評価に適さないものが多いという意見が多数であったため、少なくとも教員授業自己評価だけは全ての授業で実施する、という方針が承認されたものであった。

しかし、現在、すべての研究科では学生授業評価が導入されており、修士論文に関係する科目(課題研究、演習、セミナー等)、集中講義、実習科目など、一部の科目を除いた大多数の授業で評価が実施されている。従って、これまでのように教員授業自己評価を一律に全て実施する必要はなくなっている。

加えて、修士論文に関係する科目や実習科目などは授業の形態上「担当時間数(分)」が入力しにくい面があることが指摘されている。

よって、今回、上記のように選定方法の変更を提案したい。

(5) 学生授業評価の結果の閲覧方法、教員授業自己評価の実施方法について

これまで各学部・共通教育では個々の教員への学生授業評価の結果の通知を印刷物で行ってきた。しかし、これは非常に手間がかかるため、より効率的で効果的な方法として、Web上での閲覧システムの導入が共通教育は平成16年度から、また専門教育は平成17年度から導入された(医学部医学科は平成13年度より)。

教員は大学教育センターのホームページにアクセスし、公式メールアドレスとパスワードを入力して教育情報システム「IYOCAN」にログインし、学生授業評価の閲覧と自己評価の入力を行うことができる。Web上では過去の評価結果も閲覧でき、PDFでダウンロードすることもできる。また、非常勤講師も学外からデータベースにアクセスできるようになっている。

なお、学生授業評価の回答者が5人未満の場合、集計結果は教員には開示されない。これは学生が特定される危険性を避けるためである。

閲覧・入力の手順で工夫したことは、学生授業評価の結果を見る前に、まず教員授業自己評価を行う点である。この目的は、自己の認識と学生による評価の「ずれ」を確認するためである。教員はこのずれを確認した上で、授業の反省点・改善点を記入することになっている。

(6) 学生への結果のフィードバックについて

平成18年度後期より、学生への結果のフィードバックの第一歩として教員授業自己評価の一部を学内公開した。具体的には【30.授業実施上の問題点・改善点(自由記述)】をWeb上で公開した。

●教員授業自己評価の学内公表用画面



The screenshot shows a web browser window titled "山口大学授業評価システム IYOCAN2". The page displays a list of course evaluations with the following details:

- 10023323001 美術鑑賞と作品記述 藤川 哲**
学生授業評価の結果は概ね好評だったと言えます。受講生の皆さん、有り難うございます。とても嬉しいです。評価指数による多角形グラフを見ると、唯一「家庭学習時間」の項目が2.5よりやや下と、大きくへこんでいる形になっていました。しかし、この評価項目で他と同じく4～5の指数を得るためには、毎回3時間以上かかるような宿題を課さなければなりません。ちょっと考えられません。むしろ1コマ90分の授業に対して、同程度の家庭学習時間が望ましい、という話を聞いたことがあります。したがって、新年度は、「30分未満」と答えた48.4%の学生さんたちの層から、少しでも多く「30分～50分程度」の家庭学習を行う層へと移行してもらえよう、復習や発展学習の指示を心配ります。
- 1002331027 経済学 兵藤 隆**
「新聞を読み習慣」という学習目標を達成するにはまだまだ高いハードルがある。若い学生たちの社会に対する関心度が低すぎるということもあるが、教員側もさらなる努力が必要であると感じた。
- 1002331032 産業倫理 笠谷 和男**
新学科として最初の年であり、また、非常勤講師の方の入院で急遽代理授業を行うなど、万全の講義が行えたわけではない。また、3年生の後期で一部の学生は就職活動のため休みがちであった。次は、学生の理解を促す工夫を重ねていきたい。
- 1002331035 地理学 荒木 一視**
ディスカッションが特定の学生に偏る。予習の指示はしているのだが決して十分ではない。
- 1002331036 産業倫理 佐伯 隆**

The bottom of the browser window shows a status bar with "ページが表示されました" and "インターネット | 保護モード: 有効".

第2節 授業評価の結果について(全学)

(1) 学生授業評価の実施状況

今年度も山口大学ではすべての学部・研究科(修士課程)において学生授業評価が実施された。次頁に掲載されている「2017年度山口大学学生授業評価および教員授業自己評価結果一覧(経年変化)」(2018年10月18日現在)は、教育情報システム(IYOCAN)で処理された学生授業評価と教員授業自己評価、および IYOCAN を利用しないで独自に授業評価を集計している学部・研究科のすべての授業評価の実施率をまとめたものである。また、学生授業評価の回答数については一覧表の後に別表(2012年度以降の経年変化)として掲載した。

2017年度の学生授業評価はすべての学部・研究科(修士レベル)・共通教育で実施され、回答数合計は119,272人(※IYOCANのみ)であった。

実施率が最も高かったのは国際総合科学部(95.0%)、続いて高かったのは農学部(93.2%)、医学部医学科(92.7%)であった。学部・研究科で全体的に昨年度より減少する結果となっており、改善充実が求められる。

(2) 教員授業自己評価の実施状況

教員授業自己評価は、医学部保健学科を除くすべての学部・研究科等で実施された。教員授業自己評価の実施率が最も高かったのは医学部医学科(100.0%)、国際総合科学部(79.9%)であった。多くの学部・研究科で昨年度より減少する結果となっており、改善充実が求められる。

2017年度 山口大学 学生授業評価および教員授業自己評価 結果一覧 (経年変化)

2018年10月18日 現在

<学部>学生授業評価

データベース	学部等	学生授業評価 (2005年度)	学生授業評価 (2006年度)	学生授業評価 (2007年度)	学生授業評価 (2008年度)	学生授業評価 (2009年度)	学生授業評価 (2010年度)	学生授業評価 (2011年度)	学生授業評価 (2012年度)	学生授業評価 (2013年度)	学生授業評価 (2014年度)	学生授業評価 (2015年度)	学生授業評価 (2016年度)	学生授業評価 (2017年度)	対象授業	
I Y O C A N 2	共通教育	89.1%	94.2%	94.4%	93.6%	90.2%	89.5%	91.5%	91.9%	90.9%	91.0%	86.6%	84.8%	89.7%	全て	
	人文学部	91.6%	90.8%	90.5%	89.2%	86.5%	83.4%	81.0%	87.9%	89.3%	90.1%	82.8%	84.3%	79.7%	卒業論文、集中講義、一部の演習を除く	
	教育学部	78.1%	85.6%	86.0%	80.3%	85.4%	84.4%	87.0%	87.3%	82.1%	84.7%	81.0%	82.6%	75.5%	卒業研究、教育実習、事前・事後指導、教職等体験実習を除く	
	経済学部	89.6%	90.4%	89.1%	92.1%	87.9%	88.0%	82.2%	86.4%	83.3%	81.6%	81.4%	79.3%	81.4%	卒業論文演習、演習I-IIを除く	
	理学部	96.9%	98.0%	97.3%	94.7%	94.7%	98.2%	97.6%	96.6%	93.2%	95.5%	89.3%	93.6%	92.5%	特別研究、集中講義、一部の演習等を除く	
	工学部	81.6%	95.4%	89.0%	90.6%	82.1%	87.6%	85.7%	89.7%	85.2%	88.3%	88.5%	90.1%	85.2%	卒業論文、国際実習、社会活動実習、インターンシップを除く	
	農学部(生物系)	82.7%	89.7%	93.0%	93.0%	83.9%	96.5%	98.7%	95.9%	93.0%	94.7%	89.2%	87.7%	93.2%	卒業論文、集中講義、特別演習、専攻演習、インターンシップ等を除く	
	78.9%						86.8%	87.2%	88.6%	88.9%	75.0%	73.3%	卒業論文、集中講義、特別演習、専攻演習、インターンシップ等を除く			
	農学部(獣医系)														卒業論文、集中講義、特別演習、専攻演習、インターンシップ等を除く	
	共同獣医学部														卒業論文、集中講義、特別演習、専攻演習、インターンシップ等を除く	
国際総合科学部														76.2%	89.9%	95.0%
独自	医学部(医学科)	96.7%	95.9%	100.0%	98.7%	98.7%	97.5%	97.5%	98.8%	98.8%	97.7%	91.6%	93.3%	92.7%	自己開発コース、臨床実習1、臨床実習2、を除く	
独自	医学部(保健学科)	48.6%	52.9%	55.2%	52.6%	66.7%	72.1%	85.0%	91.5%	97.5%	86.5%	72.3%	83.8%	81.1%	授業評価の必要なものに限定	

<学部>教員授業自己評価

データベース	教員授業自己評価 力率 (2007年度)	教員授業自己評価 力率 (2008年度)	教員授業自己評価 力率 (2009年度)	教員授業自己評価 力率 (2010年度)	教員授業自己評価 力率 (2011年度)	教員授業自己評価 力率 (2012年度)	教員授業自己評価 力率 (2013年度)	教員授業自己評価 力率 (2014年度)	教員授業自己評価 力率 (2015年度)	教員授業自己評価 力率 (2016年度)	教員授業自己評価 力率 (2017年度)	対象授業		
I Y O C A N 2	39.1%	43.6%	34.4%	36.5%	40.1%	47.1%	32.6%	39.9%	41.5%	34.8%	30.9%	全て		
	49.7%	68.8%	48.5%	50.9%	56.1%	51.1%	39.1%	44.7%	43.6%	31.1%	33.2%	学生授業評価と同じ		
	34.1%	47.0%	52.1%	54.2%	48.7%	54.5%	44.4%	50.1%	46.6%	40.1%	56.3%	学生授業評価と同じ		
	38.9%	47.5%	31.3%	43.2%	32.4%	26.8%	19.3%	38.2%	62.0%	61.7%	40.7%	学生授業評価と同じ		
	57.3%	64.9%	67.5%	62.0%	72.4%	62.9%	42.7%	49.4%	58.3%	35.9%	38.4%	学生授業評価と同じ		
	35.1%	36.7%	21.3%	34.3%	38.6%	25.2%	23.9%	35.2%	31.0%	27.1%	27.7%	学生授業評価と同じ		
	50.6%	66.2%	54.8%		71.1%	79.1%	80.8%	54.7%	73.3%	92.6%	57.3%	60.9%	学生授業評価と同じ	
					52.6%	78.9%	69.2%	37.1%	44.4%	100.0%	86.7%		学生授業評価と同じ	
								100.0%	60.0%	47.1%	98.3%	97.1%	48.6%	学生授業評価と同じ
										88.7%	70.4%	79.9%	学生授業評価と同じ	
独自	-	-	83.3%	100.0%	81.6%	100.0%	92.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	全て		
独自	-	-	-	-	40.0%	76.0%	97.5%	62.9%	51.1%	68.0%	66.4%	-		

<大学院>学生授業評価

データベース	学生授業評価 (2005年度)	学生授業評価 (2006年度)	学生授業評価 (2007年度)	学生授業評価 (2008年度)	学生授業評価 (2009年度)	学生授業評価 (2010年度)	学生授業評価 (2011年度)	学生授業評価 (2012年度)	学生授業評価 (2013年度)	学生授業評価 (2014年度)	学生授業評価 (2015年度)	学生授業評価 (2016年度)	学生授業評価 (2017年度)	対象授業	
I Y O C A N 2	理工学研究科	90%	79.7%	81.3%	68.7%	71.2%	84.7%	69.2%	81.6%	81.6%	79.5%	79.0%	47.8%	11.1%	学外特別演習、特別講義、演習、集中等を除く
	技術経営研究科	-	90.9%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	74.2%	69.6%	58.3%	53.6%	67.9%		全て
	医学系研究科	-	46.5%	54.5%	64.4%	51.5%	57.1%	52.4%	65.2%	54.7%	54.7%	51.8%	72.6%	65.8%	特別研究、オムニバスを除く
	教育学研究科	-	-	-	88.5%	73.1%	76.2%	71.5%	69.6%	64.7%	76.7%	66.3%	67.5%	62.4%	課題研究、総合研究、実習等を除く
	経済学研究科	-	-	-	54.3%	48.7%	39.6%	47.4%	32.9%	42.9%	30.0%	24.2%	8.1%	42.3%	演習、セミナーを除く
	創成科学研究科	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	71.6%	70.3%	
	教育学研究科(専門職学位課程)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	95.5%	78.5%	
	独自	人文科学研究科	-	-	-	24.1%	35.3%	36.8%	60.0%	53.3%	50.0%	54.5%	21.4%	87.5%	50.0%
独自	農学研究科	-	-	-	28.6%	54.6%	41.2%	36.4%	37.5%	32.0%	54.6%	66.7%	72.7%	47.6%	留学生特別コース対象の授業(日本語)による授業でも受講者の少ない授業は対象科目から除外

<大学院>教員授業自己評価

データベース	教員授業自己評価 力率 (2007年度)	教員授業自己評価 力率 (2008年度)	教員授業自己評価 力率 (2009年度)	教員授業自己評価 力率 (2010年度)	教員授業自己評価 力率 (2011年度)	教員授業自己評価 力率 (2012年度)	教員授業自己評価 力率 (2013年度)	教員授業自己評価 力率 (2014年度)	教員授業自己評価 力率 (2015年度)	教員授業自己評価 力率 (2016年度)	教員授業自己評価 力率 (2017年度)	対象授業
I Y O C A N 2	36.9%	33.1%	25.3%	29.5%	39.7%	35.1%	29.1%	39.8%	44.3%	33.7%	30.0%	全て(ただし、2011年度より学生授業評価と同じ)
	56.3%	29.4%	15.2%	67.6%	53.1%	40.0%	77.4%	69.6%	66.7%	14.3%	28.6%	"
	53.5%	28.8%	26.4%	31.5%	33.6%	30.3%	28.4%	22.1%	81.6%	15.9%	14.3%	"
	22.4%	38.0%	39.3%	31.8%	48.3%	52.7%	41.2%	47.3%	53.6%	40.2%	60.9%	"
	36.5%	58.1%	49.2%	48.1%	38.5%	35.4%	19.5%	35.0%	45.6%	58.6%	34.2%	"
	-	-	-	-	-	-	-	-	-	32.1%	27.7%	"
	-	-	-	-	-	-	-	-	-	59.1%	67.7%	"
	27.3%	38.0%	22.7%	48.5%	46.1%	41.1%	42.9%	33.3%	41.4%	40.9%	22.2%	"
	48.8%	70.8%	42.2%	48.7%	57.9%	95.5%	47.1%	65.0%	100.0%	0.0%	0.0%	"

なお、創成科学・医学系研究科の博士後期課程、および連合獣医学研究科、連合農学研究科、東アジア研究科(すべて博士後期課程)は実施対象から除いている

学生授業評価 回答数 (IYOCAN2 集計分のみ)

回答数	講義	講読	演習	実験・実習	語学(共通教育)	語学(農学部専門)	その他	未指定	全体平均
共通教育(2013)	44,296			2,263	6,883				53,442
共通教育(2014)	43,813			2,140	6,557				52,510
共通教育(2015)	42,894			2,207	6,109				51,210
共通教育(2016)	43,021			2,168	6,228				51,417
共通教育(2017)	40,142			2,101	9,661				51,904
人文(2013)	5,105	603	1,136				906		7,750
人文(2014)	5,316	634	1,434				255		7,639
人文(2015)	5,183	556	1,205				613		7,557
人文(2016)	5,644	631	1,386				374		8,035
人文(2017)	4,233	819	1,262				627		6,941
教育学部(2013)	7,313		759	623			2,872	113	11,680
教育学部(2014)	7,925		778	642			3,032		12,377
教育学部(2015)	6,895		851	584			3,009		11,339
教育学部(2016)	6,330		783	650			3,047		10,810
教育学部(2017)	5,732		743	615			3,090		10,180
経済(2013)	8,791								8,791
経済(2014)	8,894								8,894
経済(2015)	9,147								9,147
経済(2016)	9,696								9,696
経済(2017)	8,334								8,334
理(2013)	4,797		275	453				476	6,001
理(2014)	5,042		469	490					6,001
理(2015)	4,710		392	495					5,597
理(2016)	4,429		319	431				296	5,475
理(2017)	4,565		347	430				309	5,651
工(2013)	14,706		1,639	2,096				7	18,448
工(2014)	14,161		1,576	2,105				121	17,963
工(2015)	15,052		1,714	2,084					18,850
工(2016)	14,270		1,729	2,016					18,015
工(2017)	13,978		1,768	1,829					17,575
農(2013)	3,617			933					4,550
農(2014)	3,646			993					4,639
農(2015)	3,197			510					3,707
農(2016)	3,026			534					3,560
農(2017)	3,460								3,460
共同獣医(2013)	479			140					619
共同獣医(2014)	476			115					591
共同獣医(2015)	1,629			483					2,112
共同獣医(2016)	1,677			347			302		2,326
共同獣医(2017)	1,896			608					2,504
国際総合(2015)	4,298								4,298
国際総合(2016)	6,827								6,827
国際総合(2017)	8,137								8,137
大学院・理工(2013)	2,672								2,672
大学院・理工(2014)	2,737								2,737
大学院・理工(2015)	2,605								2,605
大学院・創成科学(2016)	3,571								3,571
大学院・創成科学(2017)	3,492								3,492
大学院・技術経営(2013)								325	325
大学院・技術経営(2014)								269	269
大学院・技術経営(2015)								312	312
大学院・技術経営(2016)								215	215
大学院・技術経営(2017)								238	238
大学院・医学系(2013)								311	311
大学院・医学系(2014)	175		97					54	326
大学院・医学系(2015)	300		74						374
大学院・医学系(2016)	148		38						186
大学院・医学系(2017)	79		14						93
大学院・教育学(2013)	220		105	2			152		479
大学院・教育学(2014)	117		86	1			126		330
大学院・教育学(2015)	218		78	13			138		447
大学院・教育学(2016)	179		79	12			54	71	395
大学院・教育学(2017)	236		52				26		314
大学院・教育学・専門職(2017)	276								276
大学院・経済学(2013)								164	164
大学院・経済学(2014)								166	166
大学院・経済学(2015)								96	96
大学院・経済学(2016)	37								37
大学院・経済学(2017)	173								173
合計(2013)	91,996	603	3,914	6,510	6,883	0	3,930	1,396	115,232
合計(2014)	92,302	634	4,440	6,486	6,557	0	3,413	610	114,442
合計(2015)	96,128	556	4,314	6,376	6,109	0	3,760	408	117,651
合計(2016)	98,855	631	4,334	6,158	6,228	0	3,777	582	120,565
合計(2017)	94,733	819	4,186	5,583	9,661	0	3,743	547	119,272

(3) 全学共通の質問項目に関する分析

次に、全学共通質問項目である5項目を取り上げ、各学部・研究科ごとに経年変化をみていく。各質問項目の選択肢1～5の平均値を算出し、授業区分別（講義、講読、演習、実験・実習、語学）に結果を整理した。また、全体平均については図にも示した。

なお、大学院については、IYOCANを利用した学生授業評価を行っている研究科とそれ以外の独自の方法で実施している研究科が混在しているため、ここではIYOCANを利用している理工学研究科、技術経営研究科、医学系研究科、教育学研究科、経済学研究科のみの結果を整理した。ただし、教育学研究科については共通質問項目「満足」のデータのみ尋ねているため他の項目はデータが存在しない。

(1) 共通質問項目1「授業外学習時間」

Q. あなたはこの授業において、授業外学習(予習・復習・宿題やレポート作成・試験勉強)をどれくらい行いましたか？総時間を平均し、授業1回あたりの時間に換算してお答えください。

1. 3時間程度または以上、2. 2時間程度、3. 1時間程度、4. 30分～50分程度、5. 30分未満

共通質問項目1は、授業1回あたりの授業外学習時間を尋ねたものである。平均値は1)3時間程度または以上を5点、5)30分未満を1点として授業区分別の平均値を算出した。

2017年度の平均値データは2016年度の平均値と比べると、学部段階では、共通教育、人文学部、工学部、農学部、共同獣医学部、国際総合科学部で増加傾向にある一方、教育学部、経済学部、理学部で減少傾向にある。特に、理学部及び工学部で比較的高い数値を示している。なお、各学部・研究科とも講義形式の授業は授業外学習時間が短く、演習や実験・実習の授業の方が授業外学習時間は長い傾向にあるのは昨年度までと同傾向である。

(2) 共通質問項目2「学習目標達成」

Q. あなたは、シラバスに記載された学習目標を達成したと思いますか？

1. そう思う、2. ややそう思う、3. どちらとも言えない、4. あまりそう思わない、5. そう思わない

共通質問項目2はシラバスに記載された学習目標を学生自身が達成できたかどうかについて尋ねたものである。山口大学はシラバスに観点別の到達目標を記載する方式となっており、「知識・理解の観点」「思考・判断の観点」「関心・意欲の観点」「態度の観点」「技能・表現の観点」の5つのうちから教員が用いる観点を選び、それぞれについて具体的な到達目標を学生に示すことになっている。これらの学習目標を達成できたかどうかについて、「1.そう思う」を5点、「5.そう思わない」を1点として平均値を授業区分別に算出した。

今年度はほとんどの学部・研究科で平均値が現状維持又は上昇している。2009度から修学支援システムが新たに導入されたため、受講登録の際にweb上でシラバスを読み、各授業の到達目標を理解して授業に臨んでいる者が増えていると推察される。授業の到達目標を知り、どのような成績評価方法で評価を受けるのかを事前に知って受講するのとしないうちでは大きな差がでる。新システムの導入が学生の受講態度や理解度にいい意味で影響を及ぼしているとするれば喜ばしいことである。

(3) 共通質問項目3「理解」

Q. あなたは、この授業の内容を理解したと思いますか？

1. そう思う、
2. ややそう思う、
3. どちらとも言えない、
4. あまりそう思わない、
5. そう思わない

共通質問項目3は授業の理解度について尋ねた設問である。多くの学部・研究科で昨年度を上回っており、特に共通教育は昨年度に比べ、上昇している。これは多くの学生が「そう思う」「ややそう思う」といった肯定的な回答をしていることを意味しており、授業担当の先生方の努力が実っていると考えられる。共通教育という大人数の授業が多い中でこのように高い理解度であることは喜ばしい状況にあるといえよう。

(4) 共通質問項目4「満足」

Q. この授業はあなたにとって満足のいくものでしたか？

1. そう思う、
2. ややそう思う、
3. どちらとも言えない、
4. あまりそう思わない、
5. そう思わない

共通質問項目4は授業の満足度について尋ねた設問である。多くの学部・研究科で平均値が上昇しており、概ね一定の満足度が得られていることが確認できる。学部段階では、すべての学部で高い数値を示している。

なお、講義よりも実験・実習や演習の授業の方が平均値は高い傾向にあるのは例年どおりである。

(5) 共通質問項目5「出席」

Q. あなたは、この講義にどれくらい出席しましたか？（括弧内は、15回講義の場合の出席回数参考値）

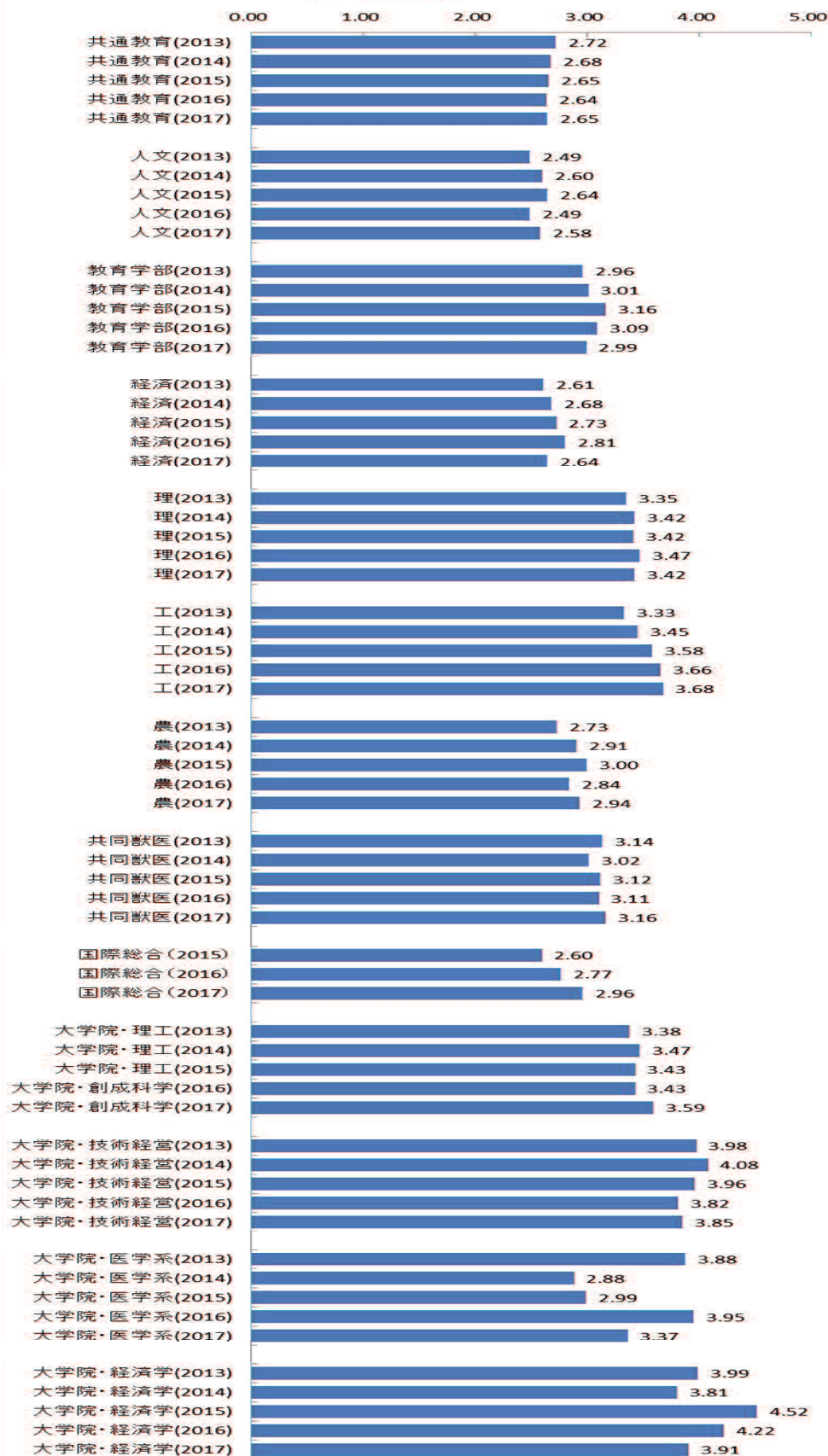
- | | | |
|-----------------|-------------------|------------------|
| 1. 90%以上（14回以上） | 2. 80～90%（12～13回） | 3. 60～80%（9～11回） |
| 4. 40～60%（6～8回） | 5. 40%未満（6回未満） | |

共通質問項目5は授業への出席状況について尋ねた設問である。本質問も選択肢1の90%以上を5点、選択肢5の40%未満を1として計算を行った。すべての学部・研究科で4.5を超える高い平均値となっている。全体的にみて山口大学の学生の授業出席率は非常に良好であるといえる。

< 全学共通質問項目 1 授業外学習時間 >

授業外学習時間	講義	講読	演習	実験・実習	語学(共通教育)	語学(農学部専門)	その他	未指定	全体平均
共通教育(2013)	2.47			3.67	4.02				2.72
共通教育(2014)	2.54			3.70	3.23				2.68
共通教育(2015)	2.52			3.72	3.20				2.65
共通教育(2016)	2.49			3.75	3.24				2.64
共通教育(2017)	2.49			3.80	3.04				2.65
人文(2013)	2.14	3.20	3.26				2.99		2.49
人文(2014)	2.32	3.22	3.27				3.15		2.60
人文(2015)	2.27	3.25	3.17				4.23		2.64
人文(2016)	2.18	3.31	3.18				3.15		2.49
人文(2017)	2.22	3.35	3.06				3.08		2.58
教育学部(2013)	2.76		3.33	3.66			3.20	3.48	2.96
教育学部(2014)	2.88		3.39	3.55			3.14		3.01
教育学部(2015)	3.04		3.39	3.67			3.27		3.16
教育学部(2016)	2.92		3.42	3.38			3.32		3.09
教育学部(2017)	2.90		3.39	3.40			2.99		2.99
経済(2013)	2.61								2.61
経済(2014)	2.68								2.68
経済(2015)	2.73								2.73
経済(2016)	2.81								2.81
経済(2017)	2.64								2.64
理(2013)	3.26		3.91	4.04				3.29	3.35
理(2014)	3.33		3.65	4.18					3.42
理(2015)	3.31		3.72	4.22					3.42
理(2016)	3.39		3.84	4.16				3.36	3.47
理(2017)	3.33		3.91	4.11				3.37	3.42
工(2013)	3.22		3.56	4.67				4.67	3.33
工(2014)	3.34		3.64	4.11				3.27	3.45
工(2015)	3.47		3.67	4.30					3.58
工(2016)	3.55		3.87	4.26					3.66
工(2017)	3.58		3.83	4.25					3.68
農(2013)	2.70			2.82					2.73
農(2014)	2.92			2.87					2.91
農(2015)	2.97			3.20					3.00
農(2016)	2.78			3.19					2.84
農(2017)	2.94								2.94
共同獣医(2013)	3.10			3.27					3.14
共同獣医(2014)	3.06			2.84					3.02
共同獣医(2015)	3.13			3.07					3.12
共同獣医(2016)	3.11			3.07			3.13		3.11
共同獣医(2017)	3.22			2.99					3.16
国際総合(2015)	2.60								2.60
国際総合(2016)	2.77								2.77
国際総合(2017)	2.96								2.96
大学院・理工(2013)	3.38								3.38
大学院・理工(2014)	3.47								3.47
大学院・理工(2015)	3.43								3.43
大学院・創成科学(2016)	3.43								3.43
大学院・創成科学(2017)	3.59								3.59
大学院・技術経営(2013)								3.98	3.98
大学院・技術経営(2014)								4.08	4.08
大学院・技術経営(2015)								3.96	3.96
大学院・技術経営(2016)								3.82	3.82
大学院・技術経営(2017)								3.85	3.85
大学院・医学系(2013)								3.88	3.88
大学院・医学系(2014)	2.26		3.39					3.98	2.88
大学院・医学系(2015)	2.91		3.32						2.99
大学院・医学系(2016)	3.88		4.24						3.95
大学院・医学系(2017)	3.46		2.86						3.37
大学院・経済学(2013)								3.99	3.99
大学院・経済学(2014)								3.81	3.81
大学院・経済学(2015)								4.52	4.52
大学院・経済学(2016)	4.22								4.22
大学院・経済学(2017)	3.91								3.91

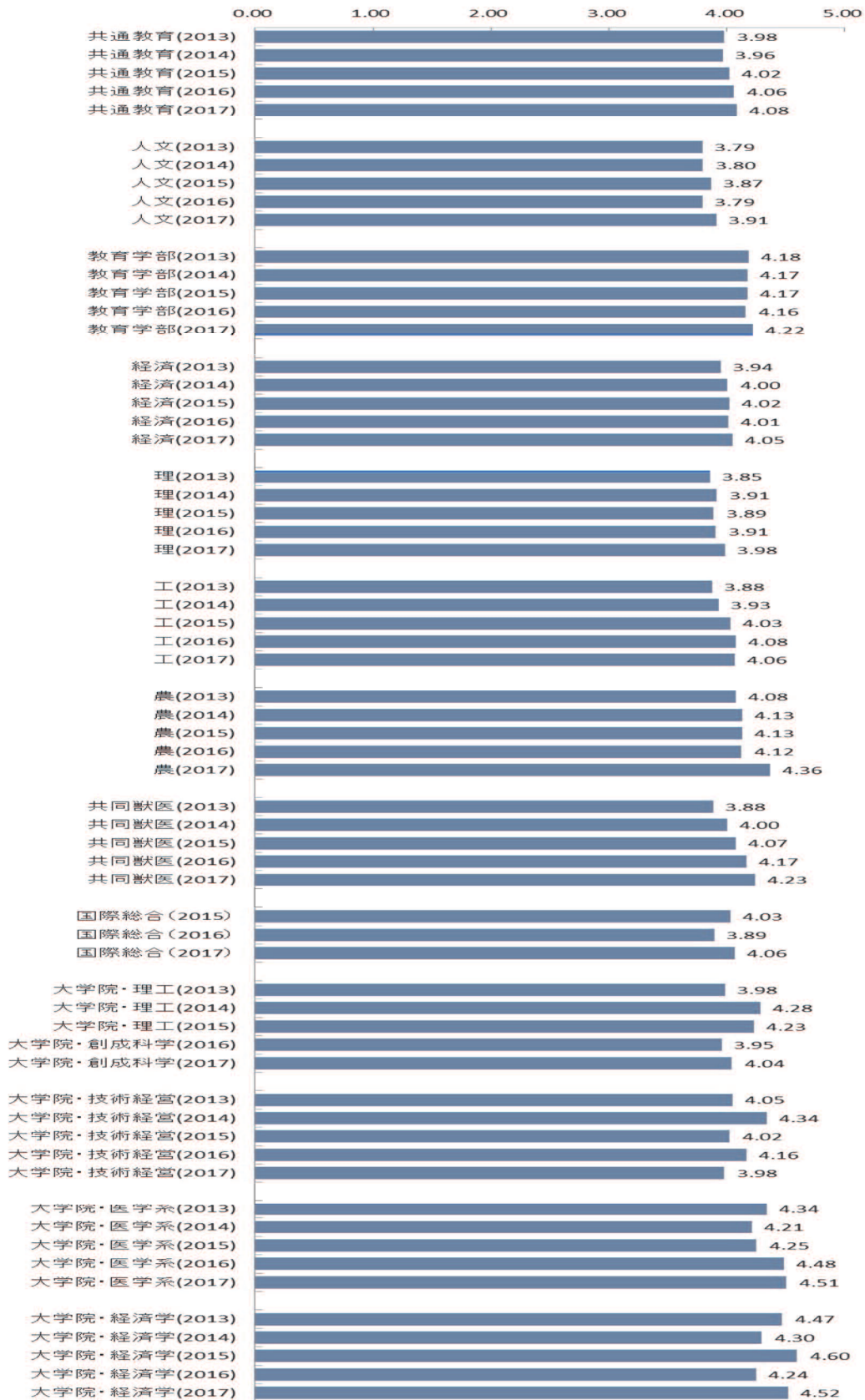
授業外学習時間(全体平均) — 経年変化 —



< 全学共通質問項目 2 学習目標達成 >

学習目標達成	講義	講読	演習	実験・実習	語学(共通教育)	語学(農学部専門)	その他	未指定	全体平均
共通教育(2013)	3.98			3.89	4.03				3.98
共通教育(2014)	3.93			4.32	4.08				3.96
共通教育(2015)	4.00			4.37	4.07				4.02
共通教育(2016)	4.03			4.45	4.12				4.06
共通教育(2017)	4.02			4.37	4.26				4.08
人文(2013)	3.72	3.89	4.02				3.84		3.79
人文(2014)	3.73	3.90	3.97				3.93		3.80
人文(2015)	3.76	4.01	4.00				4.35		3.87
人文(2016)	3.71	4.02	4.00				3.82		3.79
人文(2017)	3.87	3.96	3.95				4.05		3.91
教育学部(2013)	4.15		4.22	4.37			4.19	4.32	4.18
教育学部(2014)	4.15		4.20	4.33			4.19		4.17
教育学部(2015)	4.16		4.20	4.42			4.15		4.17
教育学部(2016)	4.14		4.28	4.20			4.15		4.16
教育学部(2017)	4.17		4.49	4.42			4.22		4.22
経済(2013)	3.94								3.94
経済(2014)	4.00								4.00
経済(2015)	4.02								4.02
経済(2016)	4.01								4.01
経済(2017)	4.05								4.05
理(2013)	3.82		4.10	4.17				3.73	3.85
理(2014)	3.88		4.00	4.19					3.91
理(2015)	3.84		4.02	4.20					3.89
理(2016)	3.86		4.12	4.14				4.02	3.91
理(2017)	3.95		4.10	4.23				3.98	3.98
工(2013)	3.85		3.93	4.03				3.86	3.88
工(2014)	3.90		3.97	4.07				4.17	3.93
工(2015)	4.01		4.00	4.17					4.03
工(2016)	4.07		3.98	4.16					4.08
工(2017)	4.04		4.10	4.20					4.06
農(2013)	4.08			4.07					4.08
農(2014)	4.21			3.85					4.13
農(2015)	4.16			3.95					4.13
農(2016)	4.13			4.10					4.12
農(2017)	4.36								4.36
共同獣医(2013)	3.81			4.12					3.88
共同獣医(2014)	3.94			4.28					4.00
共同獣医(2015)	4.03			4.22					4.07
共同獣医(2016)	4.12			4.38			4.20		4.17
共同獣医(2017)	4.19			4.37					4.23
国際総合(2015)	4.03								4.03
国際総合(2016)	3.89								3.89
国際総合(2017)	4.06								4.06
大学院・理工(2013)	3.98								3.98
大学院・理工(2014)	4.28								4.28
大学院・理工(2015)	4.23								4.23
大学院・創成科学(2016)	3.95								3.95
大学院・創成科学(2017)	4.04								4.04
大学院・技術経営(2013)								4.05	4.05
大学院・技術経営(2014)								4.34	4.34
大学院・技術経営(2015)								4.02	4.02
大学院・技術経営(2016)								4.16	4.16
大学院・技術経営(2017)								3.98	3.98
大学院・医学系(2013)								4.34	4.34
大学院・医学系(2014)	4.11		4.27					4.41	4.21
大学院・医学系(2015)	4.22		4.39						4.25
大学院・医学系(2016)	4.43		4.71						4.48
大学院・医学系(2017)	4.47		4.71						4.51
大学院・経済学(2013)								4.47	4.47
大学院・経済学(2014)								4.30	4.30
大学院・経済学(2015)								4.60	4.60
大学院・経済学(2016)	4.24								4.24
大学院・経済学(2017)	4.52								4.52

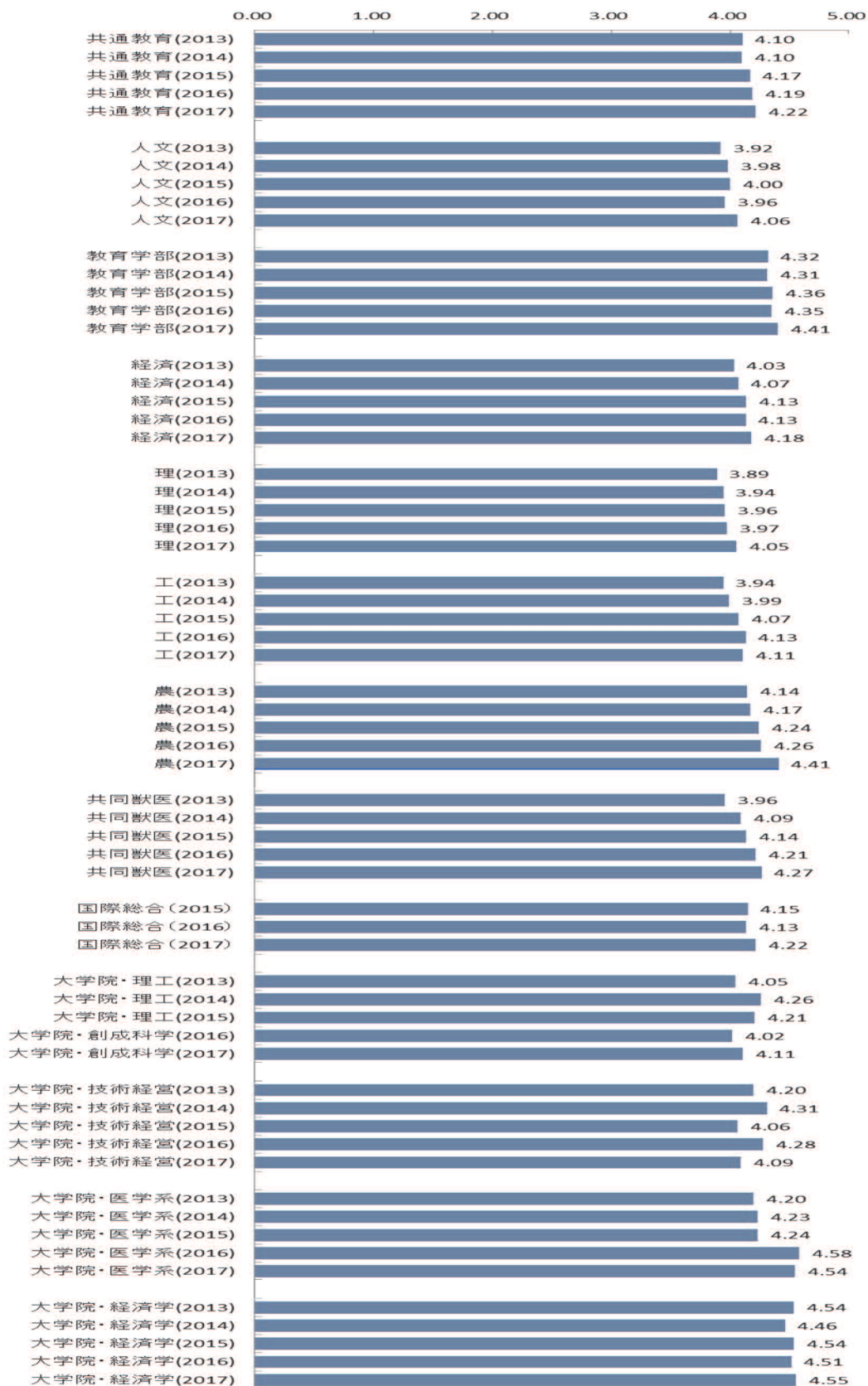
学習目標達成(全体平均) — 経年変化 —



< 全学共通質問項目 3 理解 >

理解	講義	講読	演習	実験・実習	語学(共通教育)	語学(農学部専門)	その他	未指定	全体平均
共通教育(2013)	4.07			4.47	4.20				4.10
共通教育(2014)	4.05			4.49	4.27				4.10
共通教育(2015)	4.13			4.49	4.28				4.17
共通教育(2016)	4.15			4.52	4.32				4.19
共通教育(2017)	4.15			4.43	4.44				4.22
人文(2013)	3.89	4.05	4.17				3.71		3.92
人文(2014)	3.91	4.09	4.12				4.36		3.98
人文(2015)	3.93	4.16	4.18				4.10		4.00
人文(2016)	3.88	4.11	4.18				3.98		3.96
人文(2017)	4.01	4.11	4.11				4.24		4.06
教育学部(2013)	4.30		4.42	4.54			4.29	4.37	4.32
教育学部(2014)	4.30		4.38	4.48			4.31		4.31
教育学部(2015)	4.35		4.40	4.52			4.33		4.36
教育学部(2016)	4.33		4.47	4.49			4.34		4.35
教育学部(2017)	4.35		4.58	4.58			4.43		4.41
経済(2013)	4.03								4.03
経済(2014)	4.07								4.07
経済(2015)	4.13								4.13
経済(2016)	4.13								4.13
経済(2017)	4.18								4.18
理(2013)	3.85		4.15	4.24				3.82	3.89
理(2014)	3.90		4.05	4.25					3.94
理(2015)	3.90		4.16	4.32					3.96
理(2016)	3.92		4.31	4.15				4.08	3.97
理(2017)	4.01		4.28	4.27				4.10	4.05
工(2013)	3.92		4.00	4.08				4.14	3.94
工(2014)	3.97		4.04	4.10				4.21	3.99
工(2015)	4.06		4.04	4.19					4.07
工(2016)	4.13		4.06	4.22					4.13
工(2017)	4.09		4.13	4.23					4.11
農(2013)	4.14			4.16					4.14
農(2014)	4.24			3.90					4.17
農(2015)	4.28			4.00					4.24
農(2016)	4.25			4.32					4.26
農(2017)	4.41								4.41
共同獣医(2013)	3.87			4.25					3.96
共同獣医(2014)	4.00			4.45					4.09
共同獣医(2015)	4.08			4.32					4.14
共同獣医(2016)	4.17			4.36			4.29		4.21
共同獣医(2017)	4.21			4.44					4.27
国際総合(2015)	4.15								4.15
国際総合(2016)	4.13								4.13
国際総合(2017)	4.22								4.22
大学院・理工(2013)	4.05								4.05
大学院・理工(2014)	4.26								4.26
大学院・理工(2015)	4.21								4.21
大学院・創成科学(2016)	4.02								4.02
大学院・創成科学(2017)	4.11								4.11
大学院・技術経営(2013)								4.20	4.20
大学院・技術経営(2014)								4.31	4.31
大学院・技術経営(2015)								4.06	4.06
大学院・技術経営(2016)								4.28	4.28
大学院・技術経営(2017)								4.09	4.09
大学院・医学系(2013)								4.20	4.20
大学院・医学系(2014)	4.16		4.27					4.37	4.23
大学院・医学系(2015)	4.17		4.51						4.24
大学院・医学系(2016)	4.51		4.87						4.58
大学院・医学系(2017)	4.50		4.79						4.54
大学院・経済学(2013)								4.54	4.54
大学院・経済学(2014)								4.46	4.46
大学院・経済学(2015)								4.54	4.54
大学院・経済学(2016)	4.51								4.51
大学院・経済学(2017)	4.55								4.55

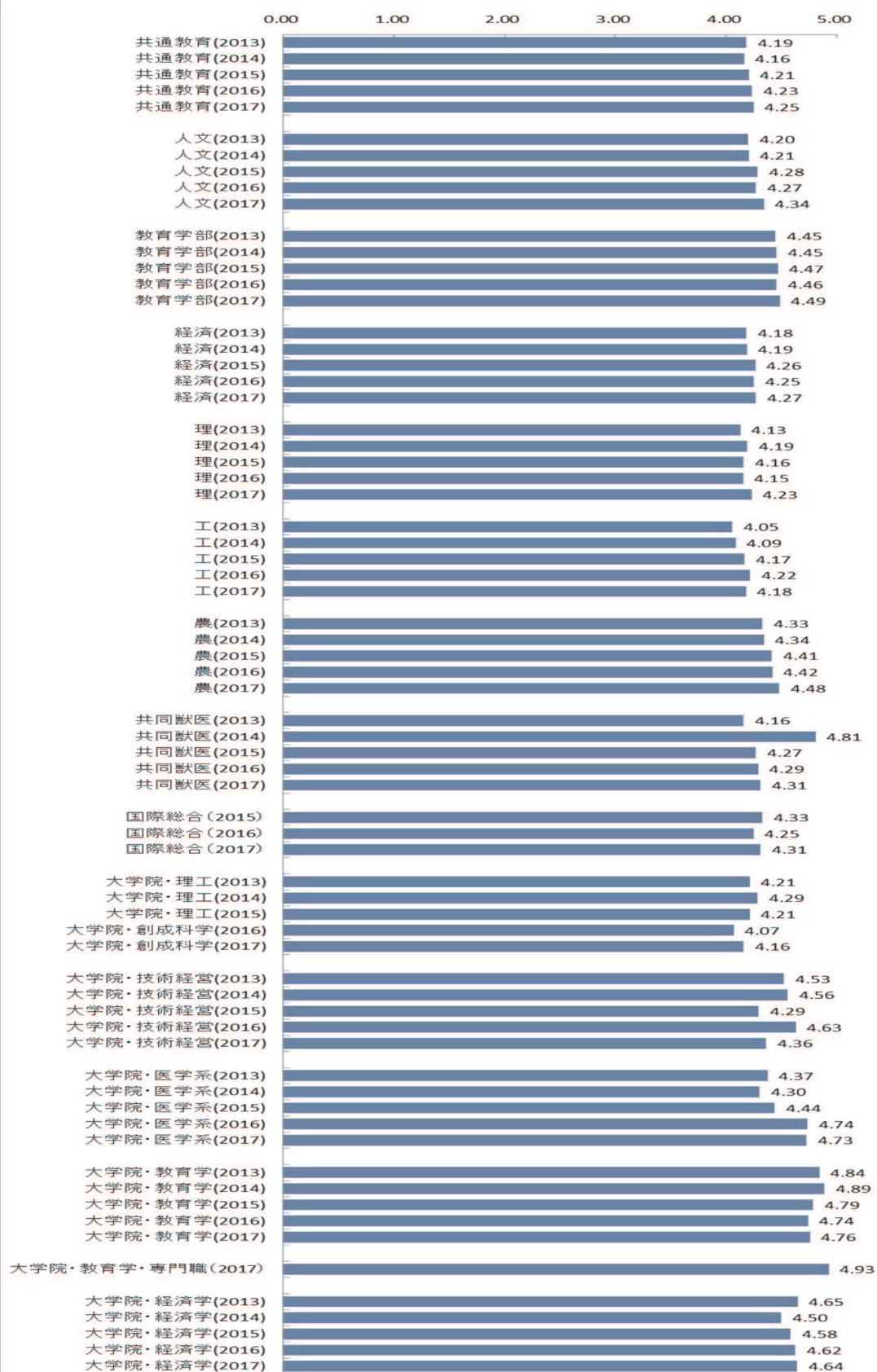
理解(全体平均) — 経年変化 —



< 全学共通質問項目 4 満足 >

満足	講義	講読	演習	実験・実習	語学(共通教育)	語学(農学部専門)	その他	未指定	全体平均
共通教育(2013)	4.15			4.57	4.27				4.19
共通教育(2014)	4.12			4.56	4.34				4.16
共通教育(2015)	4.17			4.54	4.33				4.21
共通教育(2016)	4.20			4.54	4.35				4.23
共通教育(2017)	4.18			4.40	4.49				4.25
人文(2013)	4.25	4.52	4.56				3.24		4.20
人文(2014)	4.28	4.49	4.48				0.36		4.21
人文(2015)	4.26	4.58	4.46				3.84		4.28
人文(2016)	4.17	4.56	4.50				4.33		4.27
人文(2017)	4.28	4.49	4.39				4.44		4.34
教育学部(2013)	4.43		4.60	4.65			4.42	4.60	4.45
教育学部(2014)	4.43		4.58	4.63			4.45		4.45
教育学部(2015)	4.46		4.57	4.62			4.43		4.47
教育学部(2016)	4.44		4.59	4.56			4.44		4.46
教育学部(2017)	4.44		4.71	4.65			4.49		4.49
経済(2013)	4.18								4.18
経済(2014)	4.19								4.19
経済(2015)	4.26								4.26
経済(2016)	4.25								4.25
経済(2017)	4.27								4.27
理(2013)	4.11		4.24	4.44				3.95	4.13
理(2014)	4.17		4.23	4.41					4.19
理(2015)	4.11		4.26	4.48					4.16
理(2016)	4.12		4.36	4.32				4.25	4.15
理(2017)	4.20		4.29	4.42				4.31	4.23
工(2013)	4.04		4.09	4.15				4.57	4.05
工(2014)	4.06		4.15	4.20				4.47	4.09
工(2015)	4.16		4.11	4.26					4.17
工(2016)	4.22		4.13	4.28					4.22
工(2017)	4.16		4.18	4.32					4.18
農(2013)	4.32			4.36					4.33
農(2014)	4.41			4.08					4.34
農(2015)	4.45			4.21					4.41
農(2016)	4.41			4.45					4.42
農(2017)	4.48								4.48
共同獣医(2013)	4.06			4.50					4.16
共同獣医(2014)	4.78			4.95					4.81
共同獣医(2015)	4.22			4.42					4.27
共同獣医(2016)	4.23			4.47			4.41		4.29
共同獣医(2017)	4.26			4.48					4.31
国際総合(2015)	4.33								4.33
国際総合(2016)	4.25								4.25
国際総合(2017)	4.31								4.31
大学院・理工(2013)	4.21								4.21
大学院・理工(2014)	4.29								4.29
大学院・理工(2015)	4.21								4.21
大学院・創成科学(2016)	4.07								4.07
大学院・創成科学(2017)	4.16								4.16
大学院・技術経営(2013)								4.53	4.53
大学院・技術経営(2014)								4.56	4.56
大学院・技術経営(2015)								4.29	4.29
大学院・技術経営(2016)								4.63	4.63
大学院・技術経営(2017)								4.36	4.36
大学院・医学系(2013)								4.37	4.37
大学院・医学系(2014)	4.49		3.86					4.51	4.30
大学院・医学系(2015)	4.39		4.62						4.44
大学院・医学系(2016)	4.68		4.97						4.74
大学院・医学系(2017)	4.68		5.00						4.73
大学院・教育学(2013)	4.79		4.92	5.00			4.87		4.84
大学院・教育学(2014)	4.91		4.81	4.00			4.92		4.89
大学院・教育学(2015)	4.75		4.82	4.77			4.84		4.79
大学院・教育学(2016)	4.80		4.63	4.58			4.79	4.71	4.74
大学院・教育学(2017)	4.77		4.74				4.66		4.76
大学院・教育学・専門職(2017)	4.93								4.93
大学院・経済学(2013)								4.65	4.65
大学院・経済学(2014)								4.50	4.50
大学院・経済学(2015)								4.58	4.58
大学院・経済学(2016)	4.62								4.62
大学院・経済学(2017)	4.64								4.64

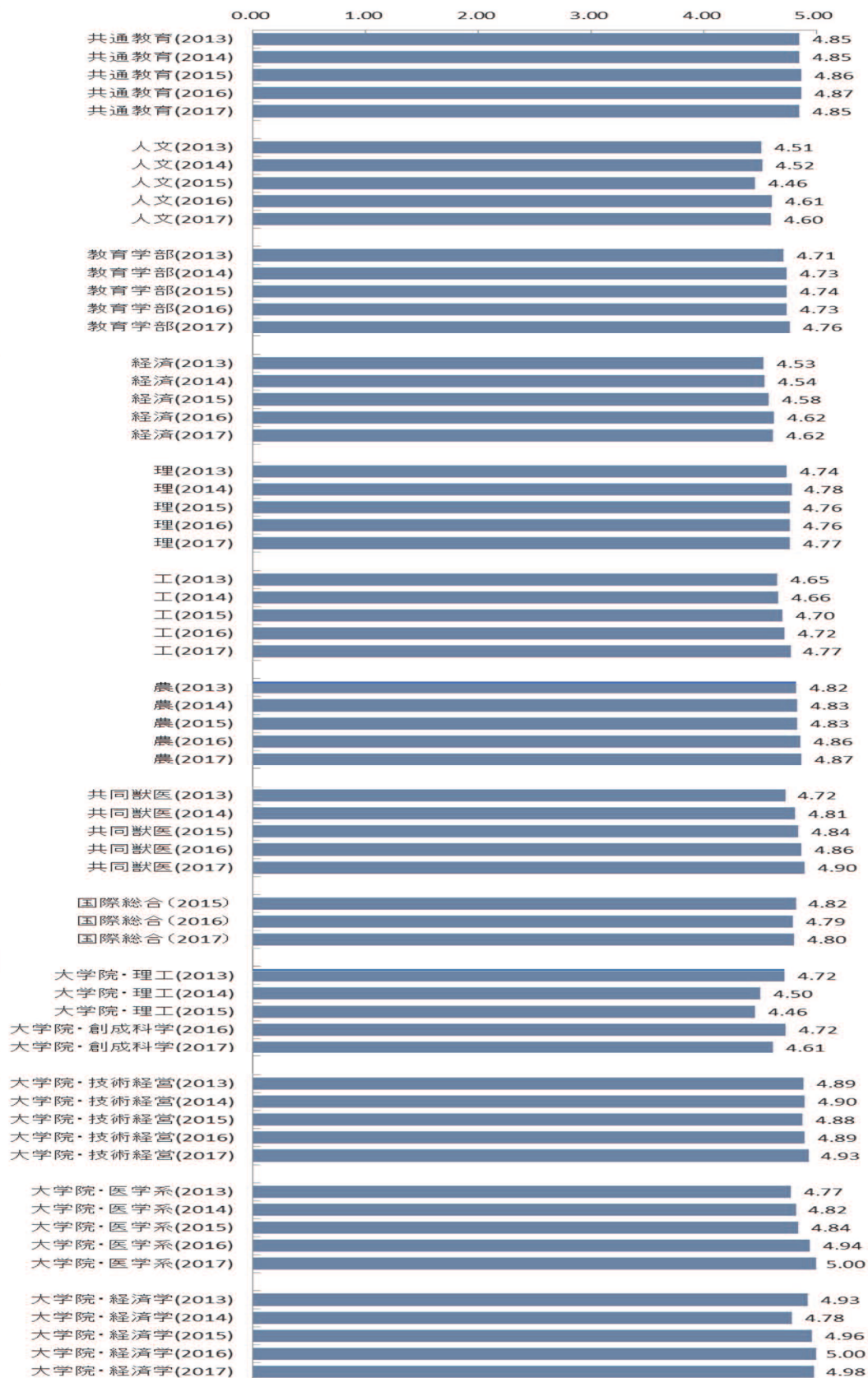
満足(全体平均) 一経年変化一



< 全学共通質問項目 5 出席 >

出席	講義	講読	演習	実験・実習	語学(共通教育)	語学(農学部専門)	その他	未指定	全体平均
共通教育(2013)	4.85			4.85	4.81				4.85
共通教育(2014)	4.86			4.88	4.78				4.85
共通教育(2015)	4.87			4.87	4.80				4.86
共通教育(2016)	4.88			4.89	4.81				4.87
共通教育(2017)	4.86			4.89	4.79				4.85
人文(2013)	4.49	4.51	4.41				4.79		4.51
人文(2014)	4.52	4.55	4.50				4.64		4.52
人文(2015)	4.59	4.55	4.56				3.09		4.46
人文(2016)	4.60	4.64	4.60				4.70		4.61
人文(2017)	4.58	4.66	4.61				4.60		4.60
教育学部(2013)	4.71		4.61	4.83			4.70	4.79	4.71
教育学部(2014)	4.73		4.63	4.78			4.76		4.73
教育学部(2015)	4.73		4.69	4.83			4.74		4.74
教育学部(2016)	4.73		4.70	4.72			4.75		4.73
教育学部(2017)	4.76		4.70	4.87			4.78		4.76
経済(2013)	4.53								4.53
経済(2014)	4.54								4.54
経済(2015)	4.58								4.58
経済(2016)	4.62								4.62
経済(2017)	4.62								4.62
理(2013)	4.72		4.80	4.91				4.70	4.74
理(2014)	4.75		4.86	4.95					4.78
理(2015)	4.75		4.82	4.90					4.76
理(2016)	4.74		4.83	4.93				4.77	4.76
理(2017)	4.74		4.89	4.92				4.76	4.77
工(2013)	4.63		4.67	4.79				4.57	4.65
工(2014)	4.64		4.65	4.78				4.51	4.66
工(2015)	4.69		4.73	4.80					4.70
工(2016)	4.71		4.73	4.76					4.72
工(2017)	4.76		4.79	4.84					4.77
農(2013)	4.78			4.98					4.82
農(2014)	4.80			4.93					4.83
農(2015)	4.82			4.94					4.83
農(2016)	4.84			4.97					4.86
農(2017)	4.87								4.87
共同獣医(2013)	4.65			4.96					4.72
共同獣医(2014)	4.78			4.95					4.81
共同獣医(2015)	4.82			4.92					4.84
共同獣医(2016)	4.86			4.94			4.79		4.86
共同獣医(2017)	4.89			4.93					4.90
国際総合(2015)	4.82								4.82
国際総合(2016)	4.79								4.79
国際総合(2017)	4.80								4.80
大学院・理工(2013)	4.72								4.72
大学院・理工(2014)	4.50								4.50
大学院・理工(2015)	4.46								4.46
大学院・創成科学(2016)	4.72								4.72
大学院・創成科学(2017)	4.61								4.61
大学院・技術経営(2013)								4.89	4.89
大学院・技術経営(2014)								4.90	4.90
大学院・技術経営(2015)								4.88	4.88
大学院・技術経営(2016)								4.89	4.89
大学院・技術経営(2017)								4.93	4.93
大学院・医学系(2013)								4.77	4.77
大学院・医学系(2014)	4.85		4.71					4.91	4.82
大学院・医学系(2015)	4.82		4.92						4.84
大学院・医学系(2016)	4.95		4.89						4.94
大学院・医学系(2017)	5.00		5.00						5.00
大学院・経済学(2013)								4.93	4.93
大学院・経済学(2014)								4.78	4.78
大学院・経済学(2015)								4.96	4.96
大学院・経済学(2016)	5.00								5.00
大学院・経済学(2017)	4.98								4.98

出席(全体平均) — 経年变化 —



第3節 学生授業評価の結果について（共通教育）

次に、第3節では共通教育に絞って2017年度の学生授業評価の結果を考察する。前節で示したデータのとおり、今年度の共通教育の学生授業評価実施率は89.7%、教員授業自己評価実施率は30.9%であった。学生授業評価実施率は昨年度に比べ回復傾向にあるが、引き続き改善充実が求められる。なお、回答数は合計51,904人であり、内訳は講義40,142人、実験・実習2,101人、語学9,661人であった。2013年度より、共通教育が大幅なカリキュラム改正が行われたため、新しい共通教育の科目系列・分野に応じて評価結果を再整理している。このため、2013年度を基点に新たな経年変化を見ていくこととしている。

なお、以下に示す学生授業評価の結果は質問紙の種類（講義用、語学用、TOEIC準備用、実験実習用の4種類）別に分野別の平均値の変化を経年で示したものである。各分野に含まれる授業科目および開設科目は附表に掲載した。また、詳しい質問項目は節末に質問紙を掲載したので、適宜ご参照いただければ幸いである。

（1）講義系科目の結果について

以下の表・図は4種類の質問紙のうち「講義」用を使用している講義系科目を系列・分野別に整理し、評定平均値を算出したものである。講義系科目には大きく分類して「教養コア」「一般教養（人文教養）」「一般教養（社会教養）」「一般教養（自然教養）」「一般教養（学際的教養）」「専門基礎」に分けられる。またそれぞれ分野別に細かく分かれている。

Q1の出席状況は「1. 90%以上（14回以上）」を5点、「5. 40%未満（6回未満）」を1点として平均値を計算したものである。すべて4.5を超えており良好である。

Q2の授業外学習は予習・復習・宿題やレポート作成、試験勉強を行った総時間を平均し、授業1回あたりの時間に換算した時間を尋ねたものである。「1. 3時間程度または以上」「2. 2時間程度」「3. 1時間程度」「4. 30-50分程度」「5. 30分未満」をそれぞれ5,4,3,2,1として平均値を算出した。最も高いのは「理系基礎」が3.54、次に高かったのは、アクティブ・ラーニング型科目である「山口と世界」が3.26、「基礎セミナー」が3.09である。なお、大学設置基準には「1単位の授業科目は45時間の学修を必要とする」と規定されており、この中には授業時間の他に予習、復習の時間が含まれている。例えば、2単位の講義を行う場合90時間の学修が必要であり、このうち授業の30時間を除く60時間が授業外学習となる。つまり、半期15回の授業では1回の授業2時間に対して4時間の授業外学習が必要という計算になる。単位の実質化という観点から、現在の傾向がさらに進むことが期待される。

Q3の教員の話し方が明瞭で聞き取りやすかったかについては「1. そう思う」「2. ややそう思う」「3. どちらとも言えない」「4. あまりそう思わない」「5. そう思わない」をそれぞれ5,4,3,2,1として平均値を算出した。すべての分野で3.5を上回っており4.0を超えている科目も多い。

Q4の専門用語や理論的な話が適切に説明されたかについては前問と同様に「1. そう思う」「2. ややそう思う」「3. どちらとも言えない」「4. あまりそう思わない」「5. そう思わない」をそれぞれ5,4,3,2,1として平均値を計算した。ほぼすべての分野で4.0を上回っており、全体的に昨年度よりもやや上昇している。

系列	分野	授業区分(質問紙)	Q1出席	Q2授業 外学習	Q3話し 方	Q4説明	Q5教材	Q6板 書・コン ピュータ	Q7質問 対応	Q8学習 目標達 成	Q9理解	Q10満 足
教養コア	基礎セミナー(2013)	講義	4.88	3.04	4.46	4.39	4.33	4.35	4.34	4.15	4.35	4.45
教養コア	基礎セミナー(2014)	講義	4.86	3.17	4.36	4.29	4.20	4.25	4.30	4.06	4.30	4.35
教養コア	基礎セミナー(2015)	講義	4.90	3.13	4.44	4.41	4.35	4.29	4.37	4.15	4.37	4.46
教養コア	基礎セミナー(2016)	講義	4.90	2.94	4.43	4.37	4.30	4.43	4.38	4.17	4.41	4.46
教養コア	基礎セミナー(2017)	講義	4.88	3.09	4.44	4.40	4.27	4.44	4.40	4.16	4.39	4.43
教養コア	情報処理(2013)	講義	4.94	2.49	4.15	4.19	4.13	4.41	4.14	4.02	4.15	4.20
教養コア	情報処理(2014)	講義	4.92	2.57	4.12	4.13	4.11	4.36	4.13	3.96	4.11	4.14
教養コア	情報処理(2015)	講義	4.93	2.51	4.14	4.17	4.16	4.38	4.14	4.00	4.20	4.19
教養コア	情報処理(2016)	講義	4.91	2.57	4.22	4.24	4.20	4.43	4.18	4.03	4.21	4.22
教養コア	情報処理(2017)	講義	4.92	2.45	4.17	4.20	4.18	4.45	4.19	4.06	4.20	4.21
教養コア	運動健康科学(2013)	講義	4.87	2.38	4.38	4.37	4.35	4.25	4.21	4.03	4.15	4.22
教養コア	運動健康科学(2014)	講義	4.87	2.34	4.40	4.35	4.34	4.23	4.20	3.96	4.15	4.23
教養コア	運動健康科学(2015)	講義	4.87	2.47	4.44	4.45	4.42	4.29	4.21	4.03	4.28	4.31
教養コア	運動健康科学(2016)	講義	4.88	2.25	4.39	4.43	4.40	4.24	4.19	4.07	4.28	4.33
教養コア	運動健康科学(2017)	講義	4.85	2.26	4.25	4.31	4.29	4.16	4.16	3.98	4.17	4.16
教養コア	山口と世界(2013)	講義	4.91	3.05	4.43	4.32	4.22	4.24	4.34	4.24	4.35	4.36
教養コア	山口と世界(2014)	講義	4.91	3.06	4.40	4.28	4.22	4.29	4.33	4.19	4.37	4.32
教養コア	山口と世界(2015)	講義	4.90	3.10	4.45	4.33	4.24	4.43	4.41	4.28	4.45	4.37
教養コア	山口と世界(2016)	講義	4.93	3.03	4.47	4.31	4.26	4.43	4.41	4.28	4.44	4.35
教養コア	山口と世界(2017)	講義	4.93	3.26	4.48	4.34	4.23	4.44	4.45	4.28	4.43	4.35
教養コア	キャリア教育(2013)	講義	4.91	2.27	4.20	4.13	4.21	4.33	4.11	4.01	4.16	4.09
教養コア	キャリア教育(2014)	講義	4.91	2.49	4.22	4.16	4.17	4.35	4.07	4.00	4.18	4.11
教養コア	キャリア教育(2015)	講義	4.91	2.69	4.28	4.24	4.24	4.30	4.15	4.07	4.22	4.13
教養コア	キャリア教育(2016)	講義	4.90	2.68	4.33	4.30	4.29	4.36	4.22	4.13	4.27	4.23
教養コア	キャリア教育(2017)	講義	4.88	2.52	4.21	4.20	4.22	4.31	4.15	4.04	4.20	4.10
一般教養(人文教養)	哲学(2013)	講義	4.82	2.04	4.20	4.20	4.06	4.02	4.04	3.87	3.88	4.11
一般教養(人文教養)	哲学(2014)	講義	4.78	2.08	4.16	4.11	4.02	3.92	3.99	3.74	3.73	3.97
一般教養(人文教養)	哲学(2015)	講義	4.79	2.04	4.27	4.21	3.90	3.96	4.03	3.85	3.87	4.07
一般教養(人文教養)	哲学(2016)	講義	4.84	2.04	4.46	4.38	4.21	4.26	4.24	4.04	4.10	4.30
一般教養(人文教養)	哲学(2017)	講義	4.82	1.82	4.45	4.48	4.23	4.35	4.24	4.04	4.19	4.36
一般教養(人文教養)	歴史学(2013)	講義	4.87	1.96	3.94	4.12	4.14	4.04	3.88	3.77	3.77	3.86
一般教養(人文教養)	歴史学(2014)	講義	4.81	2.13	3.97	4.09	4.19	4.08	3.93	3.74	3.77	3.85
一般教養(人文教養)	歴史学(2015)	講義	4.85	2.12	3.95	4.10	4.19	4.20	3.94	3.77	3.77	3.88
一般教養(人文教養)	歴史学(2016)	講義	4.86	2.05	3.96	4.17	4.20	4.07	4.04	3.90	3.93	4.01
一般教養(人文教養)	歴史学(2017)	講義	4.88	2.03	4.06	4.21	4.28	4.15	4.02	3.93	3.99	4.05
一般教養(人文教養)	社会学(2013)	講義	4.90	2.61	4.06	4.19	4.04	4.16	3.98	3.92	3.97	4.06
一般教養(人文教養)	社会学(2014)	講義	4.90	2.53	3.99	4.10	4.06	4.16	3.97	3.82	3.92	3.98
一般教養(人文教養)	社会学(2015)	講義	4.91	2.33	4.09	4.19	4.12	4.21	3.99	3.87	4.01	4.01
一般教養(人文教養)	社会学(2016)	講義	4.87	2.25	4.05	4.27	4.23	4.30	4.07	3.99	4.09	4.14
一般教養(人文教養)	社会学(2017)	講義	4.82	2.27	4.31	4.38	4.26	4.39	4.20	3.99	4.20	4.23
一般教養(社会教養)	経済と法(2013)	講義	4.87	2.29	4.19	4.28	4.23	4.19	4.12	3.92	4.04	4.15
一般教養(社会教養)	経済と法(2014)	講義	4.88	2.28	4.12	4.19	4.16	4.13	4.09	3.84	3.95	4.05
一般教養(社会教養)	経済と法(2015)	講義	4.87	2.25	4.28	4.37	4.40	4.28	4.18	3.96	4.13	4.24
一般教養(社会教養)	経済と法(2016)	講義	4.86	2.27	4.26	4.27	4.33	4.29	4.14	3.91	4.00	4.14
一般教養(社会教養)	経済と法(2017)	講義	4.84	2.24	4.28	4.31	4.33	4.25	4.19	3.94	4.05	4.15
一般教養(自然教養)	自然科学(2013)	講義	4.88	2.21	4.03	4.02	4.11	4.11	3.83	3.84	3.87	3.93
一般教養(自然教養)	自然科学(2014)	講義	4.86	2.17	3.84	3.92	4.07	4.10	3.80	3.75	3.78	3.82
一般教養(自然教養)	自然科学(2015)	講義	4.88	2.10	3.82	3.91	4.03	4.10	3.76	3.77	3.80	3.81
一般教養(自然教養)	自然科学(2016)	講義	4.86	1.99	3.82	3.97	4.03	4.12	3.77	3.81	3.83	3.85
一般教養(自然教養)	自然科学(2017)	講義	4.89	2.11	3.98	3.99	3.96	4.22	3.86	3.83	3.90	3.93
一般教養(学際的教養)	人間の発達と育成(2013)	講義	4.89	2.23	4.42	4.43	4.31	4.38	4.25	4.08	4.24	4.37
一般教養(学際的教養)	人間の発達と育成(2014)	講義	4.86	2.30	4.45	4.45	4.33	4.43	4.31	4.06	4.25	4.38
一般教養(学際的教養)	人間の発達と育成(2015)	講義	4.87	2.38	4.44	4.40	4.29	4.40	4.29	4.08	4.28	4.36
一般教養(学際的教養)	人間の発達と育成(2016)	講義	4.89	2.21	4.49	4.50	4.33	4.45	4.39	4.13	4.34	4.45
一般教養(学際的教養)	人間の発達と育成(2017)	講義	4.86	2.17	4.40	4.44	4.41	4.33	4.28	4.03	4.21	4.29
一般教養(学際的教養)	文化の継承と創造(2013)	講義	4.87	2.22	4.27	4.27	4.19	4.17	4.13	3.96	4.12	4.18
一般教養(学際的教養)	文化の継承と創造(2014)	講義	4.85	2.36	4.33	4.30	4.21	4.31	4.13	3.99	4.16	4.23
一般教養(学際的教養)	文化の継承と創造(2015)	講義	4.88	2.35	4.27	4.29	4.16	4.27	4.12	4.01	4.18	4.19
一般教養(学際的教養)	文化の継承と創造(2016)	講義	4.87	2.32	4.32	4.33	4.27	4.27	4.17	4.05	4.23	4.25
一般教養(学際的教養)	文化の継承と創造(2017)	講義	4.86	2.37	4.29	4.34	4.23	4.28	4.16	4.04	4.21	4.24
一般教養(学際的教養)	社会と医療(2013)	講義	4.88	2.00	4.23	4.26	4.29	4.39	4.00	4.01	4.17	4.24
一般教養(学際的教養)	社会と医療(2014)	講義	4.88	2.07	4.21	4.24	4.22	4.36	4.01	4.02	4.17	4.23
一般教養(学際的教養)	社会と医療(2015)	講義	4.87	2.03	4.30	4.32	4.25	4.44	4.05	4.03	4.23	4.30
一般教養(学際的教養)	社会と医療(2016)	講義	4.89	2.06	4.29	4.32	4.27	4.43	4.07	4.10	4.26	4.33
一般教養(学際的教養)	社会と医療(2017)	講義	4.86	1.95	4.34	4.36	4.32	4.47	4.08	4.12	4.25	4.30
一般教養(学際的教養)	科学技術と社会(2013)	講義	4.90	2.72	4.09	4.11	4.11	4.30	4.31	3.89	3.93	3.99
一般教養(学際的教養)	科学技術と社会(2014)	講義	4.91	3.07	4.25	4.30	4.35	4.40	4.35	4.01	4.12	4.13
一般教養(学際的教養)	科学技術と社会(2015)	講義	4.90	2.96	4.32	4.38	4.40	4.48	4.44	4.06	4.18	4.20
一般教養(学際的教養)	科学技術と社会(2016)	講義	4.90	3.06	4.23	4.30	4.35	4.36	4.20	4.02	4.13	4.12
一般教養(学際的教養)	科学技術と社会(2017)	講義	4.90	2.97	4.34	4.36	4.40	4.40	4.30	4.04	4.15	4.10
一般教養(学際的教養)	環境と人間(2013)	講義	4.91	2.58	4.06	4.06	4.13	4.28	3.86	3.87	3.94	3.98
一般教養(学際的教養)	環境と人間(2014)	講義	4.88	2.75	3.88	4.01	4.08	4.24	3.83	3.86	3.98	3.91
一般教養(学際的教養)	環境と人間(2015)	講義	4.86	2.87	4.17	4.18	4.18	4.30	3.96	4.00	4.13	4.07
一般教養(学際的教養)	環境と人間(2016)	講義	4.87	2.74	4.25	4.22	4.08	4.34	4.08	4.05	4.17	4.14
一般教養(学際的教養)	環境と人間(2017)	講義	4.86	2.81	4.22	4.26	4.12	4.36	4.11	4.07	4.16	4.14
一般教養(学際的教養)	食と生命(2013)	講義	4.86	2.47	4.35	4.33	4.27	4.40	4.04	4.06	4.23	4.28
一般教養(学際的教養)	食と生命(2014)	講義	4.84	2.51	4.32	4.31	4.23	4.38	3.98	3.98	4.17	4.22
一般教養(学際的教養)	食と生命(2015)	講義	4.83	2.35	4.41	4.43	4.27	4.47	4.04	4.07	4.30	4.31
一般教養(学際的教養)	食と生命(2016)	講義	4.86	2.46	4.47	4.45	4.34	4.49	4.13	4.13	4.34	4.39
一般教養(学際的教養)	食と生命(2017)	講義	4.85	2.35	4.41	4.41	4.23	4.50	4.09	4.07	4.29	4.31
専門基礎	理系基礎(2013)	講義	4.85	3.25	3.65	3.84	3.81	3.62	3.90	3.81	3.75	3.81
専門基礎	理系基礎(2014)	講義	4.82	3.40	3.68	3.84	3.80	3.66	3.89	3.74	3.76	3.80
専門基礎	理系基礎(2015)	講義	4.86	3.33	3.87	4.00	3.86	3.79	4.03	3.92	3.96	3.97
専門基礎	理系基礎(2016)	講義	4.86	3.45	3.76	3.94	3.87	3.83	4.00	3.85	3.83	3.87
専門基礎	理系基礎(2017)	講義	4.82	3.54	3.60	3.85	3.70	3.60	3.93	3.79	3.77	3.79

Q5 のテキストやプリントなどの教材が効果的に使われたかについてと Q6 の板書や OHP、ビデオ、コンピュータなどが効果的に使われたかについては Q4 と同様の計算方法で平均値を算出した。なお、これらの設問には「6. この授業は該当しない」という選択肢があるが、平均値の計算には含めていない。ほぼすべての分野で平均が 4.0 を超えており、良好である。

Q7 の学生の疑問や質問への対応は充分でしたか？という問いについては、すべての分野で平均が 4.0 前後であり、良好である。共通教育は規模の大きな授業が多く、質問への対応が小規模授業で比べて難しいと考えられるが、学生授業評価の結果は現在のところ良好である。

Q8 のシラバスに記載された学習目標を達成したかについては「1. そう思う」「2. ややそう思う」「3. どちらとも言えない」「4. あまりそう思わない」「5. そう思わない」を 5,4,3,2,1 とし、「6. 答えられない」は平均値の計算から除いた。これはシラバスを読んでいない学生や学習目標を忘れた学生のために設けられた選択肢である。平均値はすべての科目で 3.5 を上回っており良好である。

Q9 のこの授業の内容を理解できたかという質問についてはすべての科目で 3.5 を上回っており良好であった。

最後に Q10 のこの授業はあなたにとって満足のいくものだったかという質問については最も平均値が高かったのは基礎セミナー（4.43）であり、次に高かったのは山口と世界（4.35）、食と生命（4.31）と続く状況であった。

（２）語学教育科目の結果について

以下は「語学」の質問紙を用いた外国語科目の平均値である。「英語」「日本語」の 2 つの分野のそれぞれに含まれる授業科目の評価の平均値を表している。Q1 の出席は 4.5 を超えており良好である。Q2 の授業外学習について、英語分野が大幅に減少している。Q3 以降も 4.0 をすべて超えており大変良好な状況である。

英語分野については、2017 年度よりカリキュラム改編を行っており、2017 年度以降の経年変化の推移を注視していく必要がある。

系列	分野	授業区分(質問紙)	Q1出席	Q2授業外学習	Q3話し方	Q4説明	Q5教材	Q6質問対応	Q7演習時間	Q8学習目標達成	Q9理解	Q10満足
英語	英語(2013)	語学	4.76	3.51	4.43	4.38	3.96	4.32	4.39	4.14	4.27	4.35
英語	英語(2014)	語学	4.82	3.35	4.41	4.31	4.22	4.25	4.29	4.02	4.23	4.26
英語	英語(2015)	語学	4.77	3.49	4.49	4.49	4.22	4.39	4.48	4.21	4.35	4.43
英語	英語(2016)	語学	4.78	3.56	4.45	4.46	4.14	4.36	4.44	4.18	4.33	4.40
英語	英語(2017)	語学	4.81	2.95	4.46	4.49	4.21	4.47	4.54	4.23	4.43	4.47
専門基礎	日本語(2013)	語学	4.42	3.28	4.70	4.69	4.57	4.75	4.70	4.51	4.61	4.64
専門基礎	日本語(2014)	語学	4.49	3.45	4.73	4.74	4.69	4.80	4.64	4.64	4.70	4.72
専門基礎	日本語(2015)	語学	4.40	3.24	4.76	4.78	4.69	4.82	4.59	4.52	4.71	4.73
専門基礎	日本語(2016)	語学	4.59	3.35	4.69	4.69	4.72	4.80	4.53	4.54	4.70	4.68
専門基礎	日本語(2017)	語学	4.59	3.45	4.74	4.75	4.75	4.78	4.60	4.57	4.70	4.70

(3) 演習・実験・実習系科目の結果について

以下は「演習・実験・実習」の質問紙を用いた授業の平均値である。共通教育のうちこのタイプに当てはまるものは、「理系基礎(実験)」分野の実験科目である。Q2の授業外学習については4.40と非常に高いが、ここ数年減少傾向にある。Q3以降も4.0をすべて超えており大変良好な状況である。

系列	分野	授業区分(質問紙)	Q1出席	Q2授業外学習	Q3話し方	Q4指示の適切さ	Q5教材	Q6質問対応	Q7手本・示範	Q8雰囲気	Q9学習目標達成	Q10理解	Q11満足
専門基礎	理系基礎(実験)(2013)	演習・実験実習	4.94	4.50	4.40	4.44	4.51	4.48	4.49	4.57	4.47	4.40	4.51
専門基礎	理系基礎(実験)(2014)	演習・実験実習	4.96	4.47	4.38	4.43	4.50	4.51	4.45	4.56	4.29	4.41	4.51
専門基礎	理系基礎(実験)(2015)	演習・実験実習	4.94	4.49	4.37	4.39	4.50	4.46	4.46	4.55	4.33	4.42	4.47
専門基礎	理系基礎(実験)(2016)	演習・実験実習	4.95	4.43	4.38	4.43	4.53	4.50	4.51	4.59	4.44	4.45	4.48
専門基礎	理系基礎(実験)(2017)	演習・実験実習	4.92	4.40	4.26	4.30	4.44	4.34	4.37	4.48	4.31	4.33	4.28

附表 <各分野に含まれる授業科目および開設科目>

(1) 共通教育科目の授業科目及び単位数 (共同獣医学部を除く)

系列	分野	授業科目	単位数	系列	分野	授業科目	単位数	
教養コア	基礎セミナー	基礎セミナー	2	専門基礎	学	ドイツ語入門1	2	
	情報処理	情報リテラシー演習	1			ドイツ語入門2	2	
		情報セキュリティ・モラル	1			フランス語入門1	2	
	運動健康科学	運動健康科学	1			フランス語入門2	2	
	山口と世界	山口と世界	1			中国語入門1	2	
	キャリア教育	知の広場	1			中国語入門2	2	
キャリア教育		1	中国語初級1A			2		
英語	英語	英語Ⅰaまたは英語Ⅱa	2			中国語初級1B	2	
		英語Ⅰbまたは英語Ⅱb	2			中国語初級2A	2	
		英語会話Ⅰaまたは英語会話Ⅱa	2			中国語初級2B	2	
		英語会話Ⅰbまたは英語会話Ⅱb	2			ハングル入門1	2	
一般教養	人文教養	哲学	1			ハングル入門2	2	
		歴史学	1			ハングル初級1A	2	
		社会学	1			ハングル初級1B	2	
	社会教養	経済と法	1			ハングル初級2A	2	
		経済と法2	1			ハングル初級2B	2	
		経済と法3	1			医学のための統計学	2	
	自然教養	自然科学	自然科学1			1	数学概論	2
			自然科学2			1	医学のための物理学入門	2
	学際的教養	人間の発達と育成	人間の発達と育成1			1	医学英語1a	1
			人間の発達と育成2			1	医学英語1b	1
文化の継承と創造		文化の継承と創造1	1			医学英語2	2	
		文化の継承と創造2	1			医療英語	2	
社会と医療		社会と医療	1			基礎医療英会話	2	
科学技術と社会		科学技術と社会	1			医療心理学	2	
環境と人間		環境と人間	1			医療環境論1	1又は2	
食と生命	食と生命	1	医療環境論2			1又は2		
専門基礎	理系基礎	数学Ⅰ	2					
		数学Ⅱ	2					
		物理学Ⅰ	2					
		物理学Ⅱ	2					
		化学Ⅰ	2					
		化学Ⅱ	2					
		生物学Ⅰ	2					
		生物学Ⅱ	2					
		地球科学Ⅰ	2					
		地球科学Ⅱ	2					
		物理学実験A	2					
		物理学実験B	1					
		化学実験A	2					
		化学実験B	1					
生物学実験	2							
地球科学実験	2							

(2) 共通教育科目の授業科目及び単位数 (共同獣医学部)

系列	分野	授業科目	単位数	系列	分野・科目	授業科目	単位数	
専 門 修 得	日 本 語	日本語Ⅰ(総合)	2~10	一 般 教 養 教 育 科 目	文 化 と 芸 術	文化の継承と創造1	1	
		生活日本語	2~8			文化の継承と創造2	1	
		日本語Ⅱ(総合)	2~8			思 想 と 歴 史	哲学	1
		日本語Ⅱ(読む・書く)	2~4				歴史学	1
		日本語Ⅱ(聞く・話す)	2			人 と 社 会	社会学	1
		日本語ⅢA(総合)	2~4				経済と法1	1
		日本語ⅢB(総合)	2~4		経済と法2		1	
		日本語Ⅲ(読む・書く)	2~4		経済と法3		1	
		日本語ⅢA(聞く・話す)	2~4		人間の発達と育成1		1	
		日本語ⅢB(聞く・話す)	2~4		人間の発達と育成2		1	
		日本語ⅢA(文法)	2		自 然 科 学 系	自 然 と 科 学 技 術	自然科学1	1
		日本語ⅢB(文法)	2				自然科学2	1
		日本語ⅣA(総合)	2~4	科学技術と社会			1	
		日本語ⅣB(総合)	2~4	環境と人間			1	
		日本語ⅣA(読む・書く)	2~4	食と生命			1	
		日本語ⅣB(読む・書く)	2~4	生命科学概論			2	
		日本語ⅣA(聞く・話す)	2~4	綜 合 教 養 系	人 間 教 養 と 将 来 設 計	山口と世界	1	
		日本語ⅣB(聞く・話す)	2~4			知の広場	1	
		日本語ⅣA(文法)	2	体 育 ・ 健 康 科 目	健 康 と ス ポ ー ツ 分 野	スポーツ運動実習	1	
		日本語ⅣB(文法)	2			社会と医療	1	
		日本語ⅤA(総合)	2~4	初 階 教 育 科 目	導 入 教 育 系	生命倫理学	1	
		日本語ⅤB(総合)	2~4			コミュニケーション論	1	
		日本語ⅤA(アカデミックライティング)	2	情 報 科 学 系	情 報 科 学 系	情報セキュリティ・モラル	1	
		日本語ⅤB(アカデミックライティング)	2			情報リテラシー演習	1	
		日本語ⅤA(口頭表現)	2	外 国 語 科 目	英 語	英語Ⅰ	4	
		日本語ⅤB(口頭表現)	2			英語Ⅱ	4	
		日本語ⅤA(ビジネス日本語)	2	基 礎 教 育 科 目	数 学 ・ 理 科	基礎生物学	2	
		日本語ⅤB(ビジネス日本語)	2			基礎化学	1	
		日本語ⅥA	2			基礎物理学	1	
		日本語ⅥB	2			分子生物学	1	
		日本語ⅥA(アカデミックライティング)	2			畜産科学	1	
		日本語ⅥB(アカデミックライティング)	2			生物統計学	1	
		日本語ⅥA(口頭表現)	2			作物・草地学	1	
日本語ⅥB(口頭表現)	2	生物学実験	2					
日本語ⅥA(ビジネス日本語)	2							
日本語ⅥB(ビジネス日本語)	2							
国際 基礎	国際 基礎	日本語法	2					
		スポーツ運動実習	1					
教 養 関 連	国際 展開	国際展開科目	1又は2					
		海外英語研修	2					
	地域 展開	地域展開科目	1又は2					
		知財 展開	知財展開科目	1又は2				
ユニ バー サル デザイン 展開	ユニ バー サル デザイン	ユニバーサルデザイン展開科目	1又は2					



<参考> 共通教育 学生授業評価 質問紙（４種類）

共通教育 学生授業評価（講義）

このアンケートは、よりよい授業を作るために教員が参考にする統計資料を作成することを目的に行います。統計資料の作成以外の目的でこのアンケートを利用することはありません。また、成績評価とは無関係です。個人情報と同等の安全管理措置を講じますので、安心して率直な回答を行って下さい。回答は、あてはまる数字を選んで回答用紙の指示された欄にマークして下さい。

【授業科目名】 授業科目名を記入して下さい。

【担当教員名】 担当教員名を記入して下さい。

【学 年】 1. 1年生 2. 2年生 3. 3年生 4. 4年生 5. 5年生 6. 6年生

【学 生 区 分】 1. 一般学生 2. 留学生

【学 部】 1. 人文学部 2. 教育学部 3. 経済学部 4. 理学部 5. 医学部 6. 工学部
7. 農学部

【質 問 Ⅰ】

1	あなたは、この授業にどれくらい出席しましたか？（括弧の数字は15回授業の場合の出席回数参考値です） 1. 90%以上（14回以上） 2. 80～90%（12～13回） 3. 60～80%（9～11回） 4. 40～60%（6～8回） 5. 40%未満（6回未満）
2	あなたはこの授業において、時間外学習（予習・復習・宿題やレポート作成・試験勉強）をどれくらい行いましたか？ 総時間を平均し、授業1回あたりの時間に換算してお答えください。 1. 3時間程度または以上 2. 2時間程度 3. 1時間程度 4. 30分～50分程度 5. 30分未満
3	教員の話し方が明瞭で、聞き取りやすかったと思いますか？ 1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない
4	専門用語や理論的な話は、適切に説明されましたか？ 1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない
5	テキストやプリントなどの教材が、効果的に使われましたか？ 1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない 6. この授業は該当しない
6	板書やOHP、ビデオ、コンピュータなどが効果的に使われましたか？ 1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない 6. この授業は該当しない
7	学生の疑問や質問への対応は、充分でしたか？ 1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない
8	あなたは、シラバスに記載された学習目標を達成したと思いますか？ 1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう

	思わない 6. 答えられない
9	あなたは、この授業の内容を理解できましたか？ 1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない
10	この授業は、あなたにとって満足のいくものでしたか？ 1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない
11~30	<この問い以下は、担当教員の設問に従って回答してください>

【質問Ⅱ】 この授業に関する感想や要望等を率直に記述してください

この質問の回答については別に記入用紙を配布しますので、本紙には記入しないでください

共通教育 学生授業評価（語学）

このアンケートは、よりよい授業を作るために教員が参考にする統計資料を作成することを目的に行います。統計資料の作成以外の目的でこのアンケートを利用することはありません。また、成績評価とは無関係です。個人情報と同等の安全管理措置を講じますので、安心して率直な回答を行って下さい。回答は、あてはまる数字を選んで回答用紙の指示された欄にマークして下さい。

【授業科目名】 授業科目名を記入して下さい。

【担当教員名】 担当教員名を記入して下さい。

【学 年】 1. 1年生 2. 2年生 3. 3年生 4. 4年生 5. 5年生 6. 6年生

【学生 区分】 1. 一般学生 2. 留学生

【学 部】 1. 人文学部 2. 教育学部 3. 経済学部 4. 理学部 5. 医学部 6. 工学部
7. 農学部

【質問Ⅰ】

1	あなたは、この授業にどれくらい出席しましたか？ （括弧の数字は15回授業の場合の出席回数参考値です） 1. 90%以上（14回以上） 2. 80~90%（12~13回） 3. 60~80%（9~11回） 4. 40~60%（6~8回） 5. 40%未満（6回未満）
2	あなたはこの授業において、時間外学習（予習・復習・宿題やレポート作成・試験勉強）をどれくらい行いましたか？ 総時間を平均し、授業1回あたりの時間に換算してお答えください。 1. 3時間程度または以上 2. 2時間程度 3. 1時間程度 4. 30分~50分程度 5. 30分未満
3	教員の話し方が明瞭で、聞き取りやすかったと思いますか？ 1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない
4	テキストやプリントなどの教材が、効果的に使われましたか？ 1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない 6. この授業は該当しない

5	<p>板書やOHP、ビデオ、コンピュータなどが、効果的に使われましたか？</p> <p>1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない 6. この授業は該当しない</p>
6	<p>学生の疑問や質問への対応は、充分でしたか？</p> <p>1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない</p>
7	<p>教員は、授業内容の説明以外に、あなたたちに演習や練習の時間を十分に与えましたか？</p> <p>1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない</p>
8	<p>あなたは、シラバスに記載された学習目標を達成したと思いますか？</p> <p>1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない 6. 答えられない</p>
9	<p>あなたは、この授業の内容を理解できましたか？</p> <p>1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない</p>
10	<p>この授業は、あなたにとって満足のいくものでしたか？</p> <p>1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない</p>
11~30	<p><この問い以下は、担当教員の設問に従って回答してください></p>

【質問Ⅱ】 この授業に関する感想や要望等を率直に記述してください

この質問の回答については別に記入用紙を配布しますので、本紙には記入しないでください

共通教育 学生授業評価 (TOEIC 準備)

このアンケートは、よりよい授業を作るために教員が参考にする統計資料を作成することを目的に行います。統計資料の作成以外の目的でこのアンケートを利用することはありません。また、成績評価とは無関係です。個人情報と同等の安全管理措置を講じますので、安心して率直な回答を行って下さい。回答は、あてはまる数字を選んで回答用紙の指示された欄にマークして下さい。

【授業科目名】 授業科目名を記入して下さい。

【担当教員名】 担当教員名を記入して下さい。

【学 年】 1. 1年生 2. 2年生 3. 3年生 4. 4年生 5. 5年生 6. 6年生

【学生 区分】 1. 一般学生 2. 留学生

【学 部】 1. 人文学部 2. 教育学部 3. 経済学部 4. 理学部 5. 医学部 6. 工学部
7. 農学部

【質問Ⅰ】

1	<p>あなたは、この授業にどれくらい出席しましたか？（括弧の数字は15回授業の場合の出席回数参考値です）</p> <p>1. 90%以上（14回以上） 2. 80～90%（12～13回） 3. 60～80%（9～11回） 4. 40～60%（6～8回） 5. 40%未満（6回未満）</p>
2	<p>あなたはこの授業において、時間外学習（予習・復習・宿題やレポート作成・試験勉強）をどれくらい行いましたか？ 総時間を平均し、授業1回あたりの時間に換算してお答えください。</p> <p>1. 3時間程度または以上 2. 2時間程度 3. 1時間程度 4. 30分～50分程度 5. 30分未満</p>
3	<p>教員の話し方が明瞭で、聞き取りやすかったと思いますか？</p> <p>1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない</p>
4	<p>この授業を通して、TOEICテストの出題形式と問題内容に慣れることができましたか？</p> <p>1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない</p>
5	<p>授業中に（CD等で）英語の音声を聞く機会はたくさん与えられましたか？</p> <p>1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない</p>
6	<p>配布プリントやオンライン自習課題を有効に使って自習（復習を含む）を行いましたか？</p> <p>1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない</p>
7	<p>学生の疑問・質問などに答える機会（オンライン自習課題の質問機能も含む）が十分に与えられていましたか？</p> <p>1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない</p>
8	<p>あなたは、シラバスに記載された学習目標を達成したと思いますか？</p> <p>1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない 6. 答えられない</p>
9	<p>あなたは、この授業の内容を理解できましたか？</p> <p>1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない</p>
10	<p>この授業は、あなたにとって満足のいくものでしたか？</p> <p>1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない</p>
11～30	<p><この問い以下は、担当教員の設問に従って回答してください></p>

【質問Ⅱ】 この授業に関する感想や要望等を率直に記述してください

この質問の回答については別に記入用紙を配布しますので、本紙には記入しないでください

共通教育 学生授業評価（演習・実習・実験）

このアンケートは、よりよい授業を作るために教員が参考にする統計資料を作成することを目的に行います。統計資料の作成以外の目的でこのアンケートを利用することはありません。また、成績評価とは無関係です。個人情報と同等の安全管理措置を講じますので、安心して率直な回答を行って下さい。回答は、あてはまる数字を選んで回答用紙の指示された欄にマークして下さい。

【授業科目名】 授業科目名を記入して下さい。

【担当教員名】 担当教員名を記入して下さい。

【学 年】 1. 1年生 2. 2年生 3. 3年生 4. 4年生 5. 5年生 6. 6年生

【学生 区分】 1. 一般学生 2. 留学生

【学 部】 1. 人文学部 2. 教育学部 3. 経済学部 4. 理学部 5. 医学部 6. 工学部
7. 農学部

【質 問 Ⅰ】

1	<p>あなたは、この授業にどれくらい出席しましたか？（括弧の数字は15回授業の場合の出席回数参考値です）</p> <p>1. 90%以上（14回以上） 2. 80～90%（12～13回） 3. 60～80%（9～11回） 4. 40～60%（6～8回） 5. 40%未満（6回未満）</p>
2	<p>あなたはこの授業において、時間外学習（予習・復習・宿題やレポート作成・試験勉強）をどれくらい行いましたか？ 総時間を平均し、授業1回あたりの時間に換算してお答えください。</p> <p>1. 3時間程度または以上 2. 2時間程度 3. 1時間程度 4. 30分～50分程度 5. 30分未満</p>
3	<p>教員の話し方が明瞭で、聞き取りやすかったですか？</p> <p>1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない</p>
4	<p>演習・実習・実験の方法に関する指示は、わかりやすく説明されましたか？</p> <p>1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない</p>
5	<p>教材または器材が使用された場合、それらは適切に活用されましたか？</p> <p>1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない 6. この授業は該当しない</p>
6	<p>学生の疑問や質問への対応は、充分でしたか？</p> <p>1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない</p>
7	<p>教員から手本・示範が示された場合、それらは適切でしたか？</p> <p>1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない 6. この授業は該当しない</p>
8	<p>授業中は、演習や実習に集中できる雰囲気でしたか？</p> <p>1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない</p>
9	<p>あなたは、シラバスに記載された学習目標を達成したと思いますか？</p> <p>1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない 6. 答えられない</p>

10	<p>あなたは、この授業の内容を理解できましたか？</p> <p>1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない</p>
11	<p>この授業は、あなたにとって満足のいくものでしたか？</p> <p>1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない</p>
12~ 30	<p><この問い以下は、担当教員の設問に従って回答してください></p>

【質問Ⅱ】 この授業に関する感想や要望等を率直に記述してください

この質問の回答については別に記入用紙を配布しますので、本紙には記入しないでください

第2部 学部・研究科のFD活動

第4章 人文学部のFD活動

第1節 授業公開

(1) ピアレビュー実施形態の変更

平成24年度以降、人文学部のピアレビューは、平成28年度開始予定（当初は平成27年度開始予定）の学科・コース改編に向けたカリキュラム整備を学部全体の課題ととらえ、新コースのカリキュラム構築や運営に資すべく、分野内・分野間で教育に対する共通理解を深めることを目的として通常の授業を互いに広く参観しあうという形で実施されてきた。しかし、当初予定されていた新コース体制が教職課程との連携に比重を置いたものへと練り直された結果、既存の教育組織に大幅な入れ替えが生じる必要が無くなった。この結果、平成27年度には教員のピアレビューに関する意欲に減退傾向がみられるようになった。平成28年度に新コースカリキュラムが実際に始動したことともあわせ、ピアレビューを実施形態や企画趣旨のレベルから見直す必要が生じていた。

このため、昨年度は新カリキュラムの始動にあわせて改革された基礎セミナーを幅広く公開することにした。これは初年次教育のあり方について議論を深めるとともに、自身が担当する際に授業改善のヒントを得ることを目的としたもので、次年度（つまり本年度）基礎セミナー担当の教員の多くが参加するなど、その意図は十分果たされたものと考えられる。

しかしFD部会においてピアレビューのあり方を議論した結果、基礎セミナーの授業内容は大枠において統一されているものの、授業の進行状況には自ずと差がでるため、ピアレビューに適した授業が同日に行われる保証はなく、この方式を毎年続けることには困難が予想されるとの意見が出された。さらに近年教員の事務作業量が増加傾向にあり、十分な研究・教育の時間が得られていないことがピアレビューについての意欲の減退を招いている一因となっており、より簡素で効率的なピアレビューのあり方が求められるとの見解で一致したため、本年度は新たなピアレビューのあり方を試行することとなった。

(2) 具体的実施方法

本年度のピアレビューの具体的な実施方法は以下の通りである。

- ・人文学部の教員のなかから5名を選出し、その5名が任意の授業を参観する。「ピアレビュー参加シート」を記入し、提出する。
- ・参観者は、事前にその旨を授業担当の教員に連絡し、同意を得ておく。
- ・授業を公開する教員は、普段とかわらず授業を行う。ただし、参観者を考慮してプリントなどがある場合は多めに印刷しておく。
- ・参観者は授業後「ピアレビュー参加シート」を書き、提出してもらう。

第2節 学部・研究科主催FD研修会

平成29年度教育改善FD研修会(人文学部・人文学研究科)

日時 平成29年9月20日(水)14:30~15:10

場所 人文・理学部管理棟4階大会議室

参加者 36名

担当者 林透(大学教育センター准教授)



内容

本研修会では、カリキュラム・マップ(CUM)とカリキュラム・フローチャート(CFC)の見直しに関し、最初に担当者による詳細な内容説明、続いて参加者全員による具体的な見直し作業体験(ミニワーク)、最後に質疑応答が行われた。

1. 担当者による内容説明

最初に3つのポリシー(DP、CP、AP)を巡るこれまでの経緯説明がなされた。これらの策定については、特に平成27年度以降の国・文科省の動向、すなわち、高大接続改革実行プランの公表、大学教育部会によるガイドラインの公表、学校教育法施行規則の一部改正の省令交付等が背景にあることが述べられた。

続く本学の動きについての説明では、既に平成28年度において、各学部・研究科単位でのDPおよびCPの見直し作業とその公表が行われている点が確認された。これを受け、今後はそれらに対応するカリキュラム・マップとカリキュラム・フローチャートの見直し作業が求められることが解説された。また、それぞれの作業に必要な観点についても具体的な説明がなされた。

2. 参加者全員による見直し作業体験(ミニワーク)

上記説明の後、実際に人文学部用カリキュラム・マップのテンプレートを用い、参加者全員が自らの担当科目について、①到達目標を記入し、②DP達成のための貢献度に応じて◎、○、△印をつけるという作業を行った。短時間ではあったが、隣席の教員同士のフリートークを交えた体験作業で、今後行われる見直し作業のイメージ作りに寄与するものであった。

3. 質疑応答

二つの質問が出された。一つ目は、今回のミニワークでは教員個人の裁量で自分の科目に印をつけていったがこのような方法で良いのか?という質問で、担当者からは、最終的には学科やコース単位で調整していく必要もあるかと思うという回答がなされた。二つ目は、スライド資料の中に「大幅変更は「新テスト」が固まってから」という文言があるがDPやCPもまた見直すということなのか?という質問で、担当者からは、これはその直前に記されているAPのみに関する言及であるという回答がなされた。

設問 研修会に参加した感想はいかがでしたか?		
選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	1	6.3%
良かった	5	31.3%
どちらとも言えない	5	31.3%
あまり良くなかった	3	18.8%
良くなかった	2	12.5%
無回答	0	0.0%
合計	16	100.0%

平成29年度アラカルト研修会(人文学部)

『学習支援システムとして新修学支援システムはMoodleを代替できるか?—小テストやアンケート、レポート、ポートフォリオ機能等の紹介—』

日程：平成 29 年 12 月 20 日（水）〔吉田地区〕 14:30～15:15

場所：人文・理学部大会議室

講師：岡田 耕一（大学教育センター講師）

参加者：44 名（アンケート回収 14 名）

【★説明内容】

岡田 大学教育センター講師より、『学習支援システムとして新修学支援システムは Moodle を代替 できるか？—小テストやアンケート、レポート、ポートフォリオ機能等の紹介—』と題し、本学の学習支援システム（LMS：Learning Management System）として運用されている新修学支援システム（自己主導型学修総合電子システム（eYUSDL））及び Moodle の機能やメリット・デメリットについて説明があった。

まず、LMS で出来ることの整理があり、「①資料作成・配布等、②課題や演習の出題・回収・講評等、③小テスト・アンケート等、④学習活動の評価・採点等、⑤出欠の管理、⑥メッセージ・メール・掲示板・Wiki・チャット等のコミュニケーション」が挙げられた。その上で、LMS 利用のメリットとして「ペーパーレス化、省力化、双方向性」の 3 点、デメリットとして「LMS 自体の学習コスト、準備負担、周知に時間を要すること、設定ミスやシステムトラブルの可能性」の 4 点が指摘された。その後、新修学支援システム（eYUSDL）及び Moodle の動線等について説明があった。

次に、新修学支援システム（eYUSDL）の学習支援機能として、講義資料・レポート・小テストなどの機能について作成方法や教員・学生それぞれの画面表示方法などについて説明があった。同様に、Moodle の学習支援機能についても説明があり、Moodle については、コース作成や学生登録などの諸準備の必要性について説明があった。



【★質疑応答・意見交換】

岡田 大学教育センター講師からの説明の後、以下のとおり、幾つかの質疑応答が行われ、人文学部における学習支援システム活用のニーズと関心の高さが窺われた。また、アンケートの自由記述からは、システムを理解すること以上に、システムの使い方や活用のメリットを詳しく知りたいというコメントがあった。



Q1 日頃、Moodle を利用しているが、Moodle に登

録されている履修者データが実際の履修者データとずれている場合があるが、何か対応していただけないか。

A1 メディア基盤センターで対応いただく事項であるが、Moodle に履修者データが自動

設問1 研修会に参加した感想はいかがでしたか？

選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	1	7.1%
良かった	7	50.0%
どちらとも言えない	3	21.4%
あまり良くなかった	1	7.1%
良くなかった	2	14.3%
無回答	0	0.0%
合計	14	100.0%

登録されないケースが見られる。その際には、Moodle の利用準備に当たって、学生登録を別途行う必要がある。

Q2 新修学支援システム (eYUSDL) の小テスト機能において、公開期限終了後は閲覧可能ですか。また、学生による小テストの自己採点は可能ですか。

A2 公開期限終了後は閲覧できなくなる。また、学生による小テストの自己採点は設定によって可能である。

第3節 教育改善に関する活動

(1) 第1回基礎セミナー部会の開催

日時：平成30年1月18日(木)

場所：人文・理学部第一小会議室(人文・理学部管理棟4階)

参加者：FD部会・教務委員・平成30年度基礎セミナークラス担当教員

内容：

FD部会では例年、FD部会・教務委員および次年度の基礎セミナー担当者を参加者とし、次年度の授業概要・授業目標・授業計画のすりあわせを行う基礎セミナー部会を開催している。

FD部会では平成28年度から基礎セミナーの改革を実施し、第1クォーターで学生の人間関係構築やアカデミック・スキルの習得に重点を置いたクラス別指導を行い、第2クォーターで各コースにおける履修のあり方などに関する合同のガイダンスを行うこととした。そして平成29年度には、平成28年度の成果と反省をふまえ、授業の枠組については平成28年度のあり方を踏襲し、成績評価の方法を簡素化するという方向性が示された。

これをうけて、人文学部FD部会では平成30年度基礎セミナークラス担当教員を主な参加者として第1回基礎セミナー部会を実施し、次年度の基礎セミナー実施にむけて意見交換と情報の共有をはかった。平成30年度については基本的に平成29年度の方針を継続することとし、授業概要・一般目標・到達目標および合同授業の内容について下記の通り共有し、平成30年度基礎セミナークラス担当教員に対し、下記に基づいて統一的なシラバスを作成するようお願いした。

人文学部基礎セミナー授業概要・一般目標・到達目標および合同授業の内容

【授業概要】

人文学部に入学した皆さんが、はやく大学生活に馴染み、大学を勉学の間として活用してゆけるように導きます。あわせて、今後四年間の勉学について各自の方向性や目的意識がより明確になるよう促します。

【一般目標】

- (1) 自らの大学生活の目的について、明確な意識を持つことができる。
- (2) 大学の環境に適応し、大学を自らの勉学の間として活用できる。
- (3) 自らの勉学に必要な情報・文献を収集できる。
- (4) 日本語論述にかかわる基礎的知識を習得し、大学の授業で課されるレポートを作成できる。

【到達目標】

知識・理解の観点：自らの人生の展望を持ち、そのなかでの大学生活の位置づけを理解している。

思考・判断の観点：自ら問いを発見し、よく考える習慣を体得している。

関心・意欲の観点：人文学全般に広く関心を持つとともに、特に自身の素質に適い、自らが深く関心を持てる分野に気づいている。

態度の観点：大学生活を送る上で基本的な習慣やマナーを身につけ、主体性を確立している。

技能・表現の観点：大学の授業で課されるレポートの作成において、適切に情報を収集したり、文章を構成・表現したりする方法・技術を習得している。

【合同授業の内容】

- (1) 留学案内 第8回に実施予定 「人文学部生のための留学案内」 (国際交流部会と連携)
- (2) ポートフォリオとキャリア教育 第9回に実施予定
「人文学部生のためのキャリア教育」 (学生委員・就職支援部・学生支援センターと連携)
- (3) 各コースの紹介と履修モデルの解説 第10～14回に実施予定
「学際的視野を持つために (各コースの紹介と履修モデル)」 (各コースに委託)
- (4) 総括 第15回に実施予定
「ポートフォリオの返却・レポート課題アンケートの回収・授業アンケートの実施」 (FD部会)

第4節 学生授業評価・教員授業自己評価

(1) 平成29年度の状況

・学生授業評価

平成29年度の学生授業評価は、28年度の339科目実施率84.3%から302科目実施率79.7%となり、やや減少した。

以下、アンケートを実施した全授業における評価の平均値を28年度と比較して分析を行う。

【図2】平成29年度学生授業評価 全体平均

項目	28年度	29年度
授業外学習時間	2.49	2.59
学習目標の達成	3.79	3.91
理解度	3.95	4.06
満足度	4.27	4.35
出席率	4.61	4.6

平成29年度は授業外学習時間・学習目標の達成・理解度・満足度の各項目がやや改善し、出席率はほぼ横ばいであった。ただ、全体としては各項目とも高い水準を維持しており、変動は誤差の範囲を大きく超えるものではない。しかし授業外学習時間については低い傾向が続いており、何らかの具体的方策を立てる必要がある。なお、言うまでもないことではあるが、学生授業評価の高低はそのまま授業の質の善し悪しを示すものではない。

・教員授業自己評価

教員授業自己評価の実施率は27年度の31.8%から30.3%とやや減少した。なお、平成28年度の実施率が昨年度の報告書より上昇しているが、これは過去にさかのぼって入力が行われた結果によるものと考えられる。昨年度の報告書執筆段階と比較すると、実施率はやや増加していることとなる。平成29年度の数値も、さかのぼっての入力が行われることで上昇していく可能性はあろう。ともあれ、引き続き教員への周知徹底が今後の課題である。

以下、アンケートを実施した全授業における評価の平均値を28年度と比較して分析を行う。

【図3】平成29年度教員授業自己評価 全体平均

項目	28年度	29年度
学習目標の達成	4.26	4.22
理解度	4.21	4.23
満足度	4.08	4.08

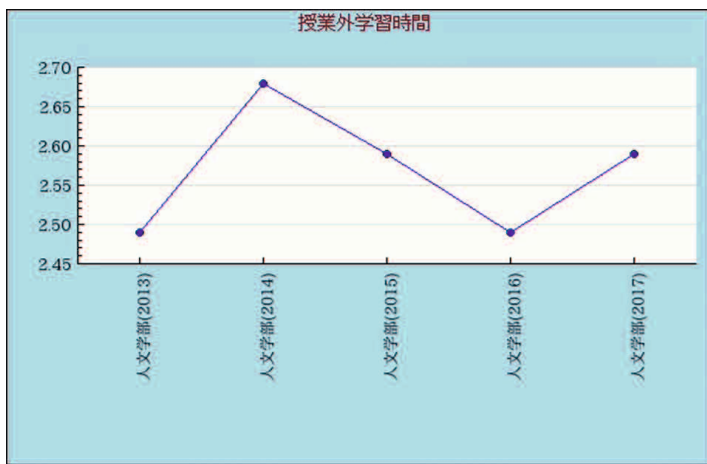
平成28年度と平成29年度を比較すると、学習目標の達成・理解度・満足度の各観点について大きな変化はみられず、ほぼ横ばいといえる。【図2】と【図3】を比較すると、学習目標の達成、理解度について、学生の評価より教員の自己評価が高い。一方で、満足度については教員の自己評価よりも学生の評価のほうが高い。これは平成28年度と同じである。このあたりの誤差をどの程度少なくできるかが今後の課題である。

(2) 経年変化

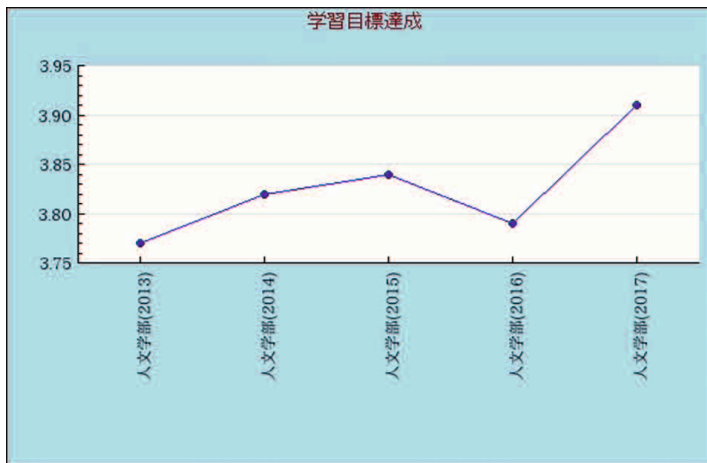
・学生授業評価

授業外学習時間、学習目標の達成、理解度、満足度、出席率について、平成25年度から29年度までの5年間の経年変化を【図4】～【図8】に示す。

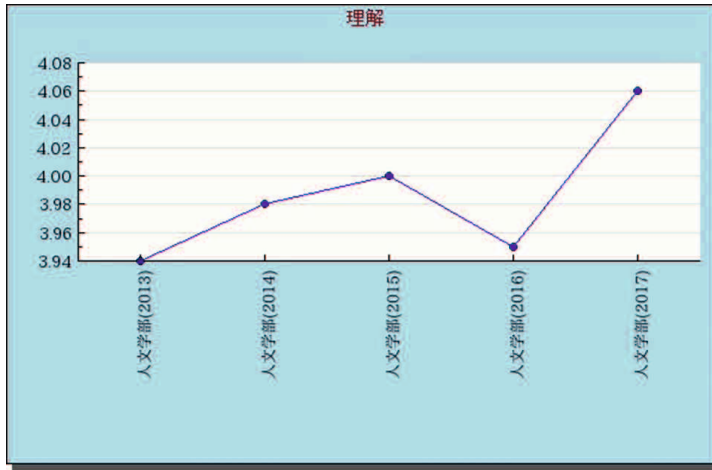
【図4】授業外学習時間 経年変化



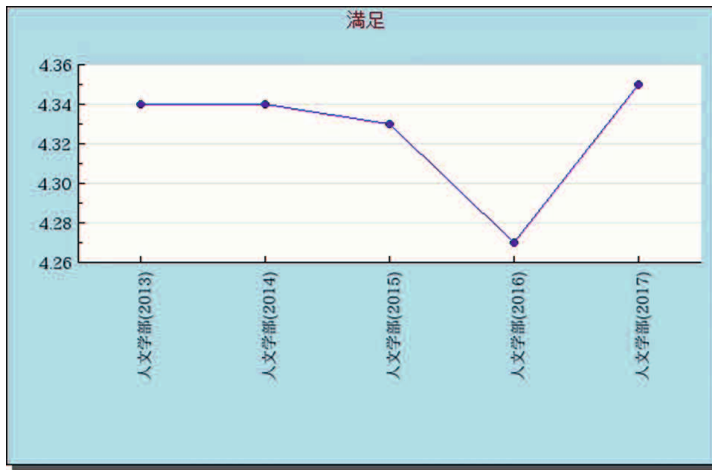
【図5】学習目標の達成 経年変化



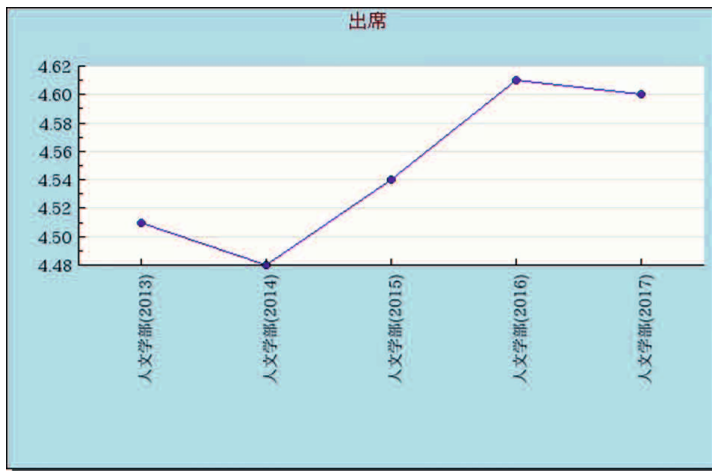
【図6】理解度 経年変化



【図7】満足度 経年変化



【図8】出席率 経年変化



・教員授業評価

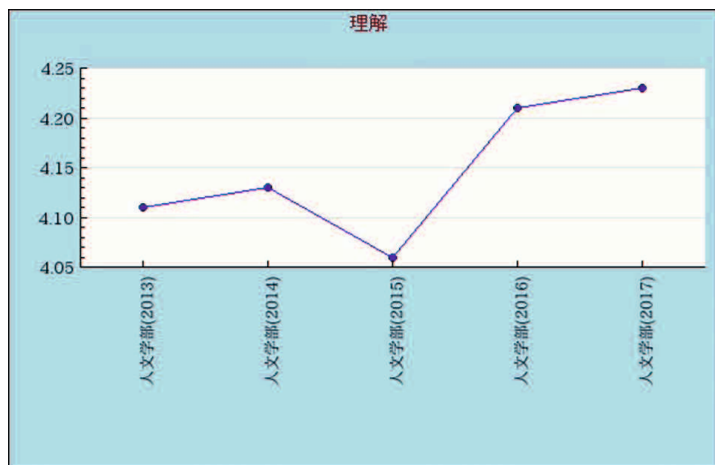
学習目標の達成・理解度・満足度について、平成25年度～29年度の5年間の経年変化を【図9】～【図11】に示す。なお、平成25年度～28年度の数値は、前年度の報告書と若干ズレている。こ

これは前述のように、過去にさかのぼって入力を実施された結果によるものと考えられる。

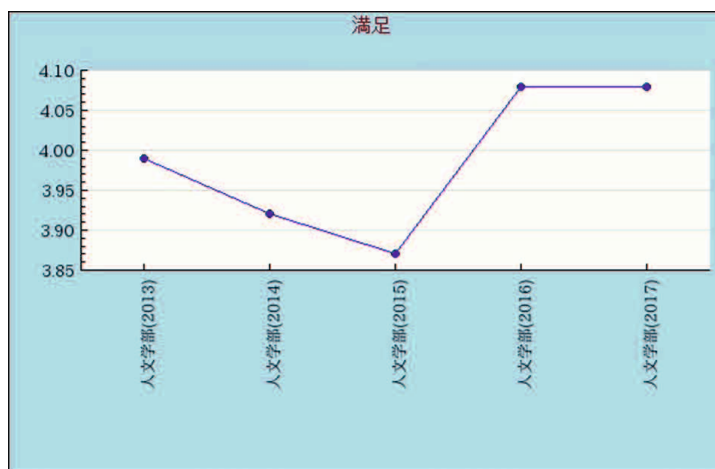
【図 9】 学習目標の達成 経年変化



【図 10】 理解度 経年変化



【図 11】 満足度 経年変化



(3) 今後の課題

授業外学習時間の向上が今後の課題といえる。山口大学では平成 27 年度より各授業でアクティブ・ラーニングの数值化が開始されたが、人文学部では平成 28 年度から新コースカリキュラムが実施され、その一環として PBL 授業も導入された。そのような授業の導入により、学生の受動的学習スタイルも大きく変化することが予測される。それに応じて、教員自らも、従来の授業スタイルから、新しいスタイルへの移行が求められる。

教員授業自己評価の入力率向上については、このままの方式では飛躍的に改善されるとは考えにくい。一斉メールでの通知や教務委員による会議時の周知徹底だけでは、入力率の飛躍的な向上は難しい。特に平成 29 年度の場合、今後上昇していく可能性はあるものの、現状の数値ではむしろ低下傾向が確認できる。数年指摘していることだが、現在の学習目標の達成・理解度・満足度・出席率という項目では、時間を割いて入力してもフィードバックされる部分が少ない。教員一人一人にとってもっと有用な調査、つまり教育改善にすぐさま反映できる項目であれば、自ずと入力率も向上するのではないであろうか。

第 5 節 FD 実施経費報告書

平成 29 年度の FD 活動において経費は使わなかった。

第 6 節 来年度の課題

(1) 教員授業自己評価の入力率向上に関する組織的な取り組み

第 4 節(3)を参照のこと。

(2) 授業外学習時間の確保（単位制度の実質化）

第 4 節(3)でも言及した通り、人文学部では平成 28 年度から新コースカリキュラムが実施に移された。その中でリテラシー教育の充実が大きな目玉となっており、その中に PBL 授業がある。今やアクティブ・ラーニングの導入は、大学全体の流れとして学部教育にも浸透しつつあるが、その具体的な方法は、人文学部の各学問分野により、自ずと変わってくるであろう。それぞれの分野に合ったアクティブ・ラーニングの研究開発が求められる。

一方、経済的事情などから、アルバイトに多くの時間を割かざるをえない学生も存在する。授業外学習時間の確保にむけた取り組みと同時に、学生への支援を手厚くし、彼・彼女らが学業に集中しうる環境を整えなければならないであろう。こうした点を含め、現状における適切なバランスについて、議論を深める必要がある。

(3) 適正な成績評価

基礎セミナーやオムニバス授業は、学部全体で統一した授業であり、難易度や成績評価に関して、ある程度の基準が求められる。FD 部会では、既述のように平成 28 年度より基礎セミナーを改革し、基礎セミナー部会を複数開催した。オムニバス授業についても、平成 27 年度に FD 研修会を開催した。こうした結果、評価基準や授業内容について、一定度の統一がはかられ、上述の諸点についてはかなり改善されたと考えている。なお、平成 28 年度よりはじまった新コースカリキュラムには、リテラシー科目群のなかに「必読名著」という必修授業があり、やはりこの授業に関しても、それが必

修としてカリキュラムに組み込まれている以上、ある程度統一した基準のもとで成績評価を行うことが求められよう。その成績評価の基準作成へ向けて、人文学部FD部会が主導的な役割を担う必要があると思われる。

(4) その他

くりかえし述べているように、人文学部では平成 28 年度より新コースカリキュラムが実施されている。平成 27 年度から 28 年度にかけてFD部会が基礎セミナーの改革に注力したのも、新コースカリキュラム一期生の入学にあたって、より良い初年次教育のあり方を模索したためであった。平成 29 年度から、新コースカリキュラムの一期生はリテラシーなどカリキュラムの目玉といえる授業をうけはじめている。そのなかで教育改善のヒントや、逆に思わぬ問題点が浮上する可能性はあろう。学生や教員の要望をくみとり、新カリキュラムの成果や課題点を共有することが必要となる。

第5章 教育学部のFD活動

第1節 授業公開

教育学部としての授業公開は実施していない。

第2節 学部・研究科主催FD研修会

平成29年度 教育学部のFD研修会は、今年度から学部独自の新任教員FD研修会を開催することとし、これを含めて計6回実施した。新任教員FD研修会および第3回FD研修会（幼小中一貫教育フォーラム）以外は、できるだけ多くの参加者を確保するために、いずれも拡大教授会時に実施した。

第1回FD研修会

「新任教員FD研修会」

講師：丹 信介，和泉研二，松田信夫（教育学部総務会）

日時：平成29年4月26日（水）14:30～15:30

場所：教育学部第1会議室

参加者：平成29年4月着任の新任教員9名

内容：教育学部のミッション、課程認定、学部・大学院・附属学校の現状と課題や改革の方向性など

第2回FD研修会

アラカルトFD研修会「著作権法改正に伴う教育活動への影響と対応」

講師：木村 友久

（知的財産センター）

日時：平成29年7月19日（水）

[吉田地区] 15:00～15:30

場所：教育学部21番教室

（吉田キャンパス）

参加者：78名（アンケート47枚回収）

内容

本研修会では、著作権法35条の改正によって大学教育の現場が受ける影響と想定しておくべき対応について説明が行われた。

著作権法35条と関連する最近の趨勢としては、著作者人格権を厳密に解釈する、あるいは著作権の支分権を精査して権利を行使する傾向がみられる。例えば「森のくまさん事件」については、これは太田プロに所属するパーマー大佐が馬場氏訳詞の「森のくまさん」の中間部分



表1 研修会に参加した感想はいかがでしたか？

選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	4	8.5%
良かった	27	57.4%
どちらとも言えない	10	21.3%
あまり良くなかった	4	8.5%
良くなかった	2	4.3%
無回答	0	0.0%
合計	47	100.0%

を除いて、そこに自ら作成した歌詞を挿入したことに端を発する。そうすると、これは財産権の侵害ではなくて、著作者人格権における同一性保持権の侵害となる。著作者人格権については、この例のように理解不足によるトラブルが多い。また、JASRACはCM等への楽曲の利用について、昨年4月1日から利用料金を相対で決定することになった。これは著作物の利用において、著作者の意向を反映しやすくする意図がある。研修会では、この他の事例として、H大学における学生論文改変事件、京都大学総長の入学式式辞をとりあげて、著作者人格権や支分権等の行使について解説がなされた。次に、JASRACが音楽教室に対して演奏権の対価を徴収するとして生じた紛争について解説が行われた。これについては、大学の音楽授業に対しても対価が徴収されるのではないかとの懸念があるが、JASRAC担当者は「当面は、大学の音楽授業における演奏権の対価は徴収しない」と発言している。これについては、JASRACは大学の音楽授業も徴収の対象とみなしているということであるから、今後この点について注視しておく必要がある。演奏権については、著作権法35条は複製を対象にしているため、論理的にみると演奏は入らないとの解釈が原則であると考えられるが、これまで十分な議論が尽くされていないため、実際に訴訟が起こった場合、どのような判断が下されるかは定かではない。

著作権法35条の改正の経緯については、昭和45年の年末までの旧法では、権利制限規定を定めた同法30条第3項で「普通教育上」と書かれている。したがって、旧法では大学等の高等教育機関はこの規定の対象外であり、普通教育における修身や読本において、正当な範囲でのみ抜粋蒐輯が可能であった。ところが、昭和45年に施行された現行法では、この部分が「学校その他教育機関」と改められ、当時の権利者団体は驚きを隠せなかったという。その後、権利者団体は権利制限規定から大学を除外するために機会を伺っていたが、2～3年前から海外事例の調査を行っている。その調査結果をもとに、他国の例に倣って、我が国においても補償金と引き換えに著作物の利用を許可する方向で、文化庁と共に検討を進めている。今回の法改正の動きはその延長線上にある。

著作権法35条については、現行法が施行された昭和45年時点では、現在のパソコンによるスライドの上映は存在しなかったため、規制の対象は印刷物を想定した複製のみを対象としていた。そのため、公衆送信を行わずにスライドを上映するところまでは、現在でもこの解釈が成り立つと解釈できる。その後、平成16年に第2項が設けられ、同時公衆送信であれば、当該授業を同時に受ける者に対して、スタジオからの配信は権利制限規定の範囲内と定めている。その一方で、スライドのデータを保存して、それを公衆送信する場合は異時送信に該当する。具体例としては、最近流行の反転授業などで、あらかじめ基本的な学習内容をビデオ映像データとしてホームページ上に配置して、これを学生に視聴させる場合がある。この場合については、現状では原則通り権利処理をしなければならないことになる。

権利団体との補償金の交渉では、現在では著作物の複製や公衆送信が容易に行えるため、著作物が流出すると甚大な被害が生じる懸念を踏まえて、異時送信については1年間に学生1人当たり500円年程度の補償金を支払う方向で検討が進んでいる。ただし、補償金を支払えば著作物を自由に使えるようにするのか、あるいはその射程範囲について今後検討を要する部分が残っている。

今回の法改正の検討では、その過程で様々な議論があったが、著作権法35条の1項と2項には変更を加えない方向での話し合いが進んでいる。その上で、補償金について第3項を新たに設けて条文化する案と、法改正は行わずに契約で対処する案が出ている。前者については、補償の範囲内での著作物の利用が学校教育のみに限定される反面、海外の権利者についてもそのまま対応ができると考えられる。後者については、海外の権利者には別途契約が必要となるなど難しい対応が生じると考えられる。これら2つの案についてどちらを採用するかについては現時点(7/19)では検討中である。

今後、大学は法改正に注視しながら、教育活動において異時送信を行わないのか、それとも異時送信について権利処理を行うか、オリジナルな教材を作るかについて熟考する必要がある。本日の研修会について質問があれば、後日個別に対応したいとのことであった。

説明後の質疑応答は、時間の関係で行われなかった。

研修会後のアンケートには、「きちんとした背景がわからない者にとっては、理解するのが難しかった。もう少しわかりやすく説明してほしい」、「著作権は研究とも深く関わる事項で、意識すべき事であり、新たな情報も得られて、貴重な会でした」、「時間が短く、もう少し話を聞きたい」、「もう少し時間をとって説明してほしい」、「よくわからなかった」、「音楽に関する現状が少し理解できた」、「法律として知っておくべき内容で、とても参考になりました。ただ、授業など自分の教育活動の中で、何をどう気をつけたらよいのかについて、さらに具体的なお話が聞きたいです」、「マイクの声が聞きとりにくかった」、「時間がタイトだったが、おもしろい内容だった」、「話の論点が見えなかった。話の内容がまとまっていなかったためと思われる」、「演者の話の論点がわからないような研修会は必要ないと思われる」、「情報が多くて消化できなかった。もう少し時間をかけて研修会を行うか、もう少し情報量を絞っていたら良かったかも」、「教育活動に直接関係する内容でよかった」、「テーマは重要で、気をつけなければいけない部分だと思いました。もう少し基本的な用語など分かりやすく解説していただけると助かります」との回答があった。また、今後希望する研修会については、「最新のハラスメント」、「法改正などで気をつけておくこと」、「大学入試改革について」、「今回の内容のさらに具体的なことを知りたい」、「今回の内容のように大学での教育活動に関する法律や制度の改正にかかわる内容」、「科研費に関する研修」、「Active Learning / ICT 活用」との回答があった。

第3回 FD 研修会

「幼小中一貫教育フォーラム “幼小中一貫教育を通した子供のより良い成長をめざして”

日時：平成 29 年 8 月 10 日（木）13:00～16:30

場所：大学会館大ホール

参加者：附属学校園教員 98 名，学部・研究科・教職センターの教職員 46 名，計 144 名

内 容：本学附属学校園では、山口地区と光地区とが相互連携しつつ、学校教育、教育実践研究、並びに教員養成等に取り組んできたが、その連携の取組を今後さらに充実・深化させていくために、第三期中期目標・中期計画（平成 28～33 年度）に幼小中一貫教育の推進を明記し、平成 28 年度よりその検討を開始した。この度、フォーラムを開催し、幼小中一貫教育を推進していくための運営組織、カリキュラム・マネジメント、教職員交流、合同行事、交流活動等の在り方について協議を深めることにより、教育学部、教育学研究科及び教職センターの教職員の幼小中一貫教育に対する意識を高めた。

プログラム：

(1) 開会行事

(2) 所管説明「山口大学教育学部附属学校園における一貫教育の推進について」(15 分)

山口大学教育学部学部長 丹 信介

(3) 行政説明「山口県における小中一貫教育の推進について」(15 分)

山口県教育庁義務教育課教育調整監 重枝謙二氏

(4) 実践発表

①下関市における小中一貫のよりよい推進のあり方 (20 分)

発表者：下関市立名池小学校教諭 常岡敏行氏

(山口大学教職大学院学校経営コース 2 年)

② 9 年間の学びをつなぐ小中一貫教育 (20 分)

～学びの基礎・基本となる「言語力の育成」を通して～

発表者：萩市立福栄小中学校教諭 重永美津子氏

(山口大学教職大学院学校経営コース 2 年)

③山口大学教育学部附属光小学校・光中学校による取組における現状と課題 (20 分)

発表者：山口大学教育学部附属光中学校校長 吉川幸男
(山口大学教育学部教授)

(5) パネルディスカッション (60 分+α)

“幼小中一貫教育を通じた子供のよりよい成長を目指して”

司会：山口大学教育学研究科 (教職大学院) 教授 佐々木司
パネリスト： 萩市立福栄小中学校 校長 柳林 浩一氏
萩市立福栄小中学校 教諭 重永美津子氏
下関市立名池小学校 教諭 常岡敏行氏
山口大学教育学部附属山口小学校 校長 岡村吉永
山口大学教育学部附属光中学校 校長 吉川幸男

(6) 質疑応答 (15 分)

(7) 閉会行事 (3 分)

(以上)

第4回 FD 研修会

「学校における危機管理について」

講師：静屋 智 (教職大学院)

日時：平成 29 年 9 月 20 日 (水) 16:00~16:30

場所：教育学部 21 番教室

参加者：70 名

第5回 FD 研修会

教育改善 FD 研修会「カリキュラム・マップおよびカリキュラム・フローチャートの見直しについて」

講師：小川 勤

(大学教育センター)

日時：平成 29 年 10 月 18 日(水)

[吉田地区] 15:00~15:30

場所：教育学部 21 番教室

(吉田キャンパス)

参加者：75 名(アンケート 49 枚回収)

内容

本研修会では、カリキュラム・マップおよびカリキュラム・フローチャート改訂の必要性およびその作業内容について説明が行われた。

本学では 3 つのポリシー (DP、CP、AP) が定められている。それぞれ、DP はディプロマ・ポリシー(卒業認定・学位授与の方針)、CP はカリキュラム・ポリシー (教育課程編成・実施の方針)、AP はアドミッションポリ



表1 研修会に参加した感想はいかがでしたか？

選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	3	6.1%
良かった	33	67.3%
どちらとも言えない	10	20.4%
あまり良くなかった	1	2.0%
良くなかった	1	2.0%
無回答	1	2.0%
合計	49	100.0%

シー（入学者受け入れの方針）を意味している。これらに基づいて、入学者選抜、授業、卒業認定・学位授与などの教育活動を実施し、各種の評価（学生授業評価等）と改善活動を行う一連のサイクルを回すことによって、大学教育の改善と改革を行っている。このサイクルを内部質保証のためのPDCAサイクルと呼んでいる。次期の大学評価では、このサイクルが実質的に機能しているかが問われることになる。これまで中教審は様々な答申（学資課程答申、質的転換答申、高大接続答申）を出しているが、これらを通じて大学に「出口管理」の強化すなわち学習成果基盤型教育(Outcome-based Education)を求めている。平成26年12月の高大接続答申では、センター試験を見直すなど大きな変化があった。また、平成28年3月31日には3つのポリシーの一体的な策定と法令上の位置づけのために学校教育法施行規則が改正され、大学にはポリシーの策定と公表が義務付けられることになった¹。これを受けて、本学では平成28年度にディプロマ・ポリシー等検討ワーキンググループによってDPとCPの見直し作業が行われ、学部・大学院の双方について3つのポリシーを既に公表している。なお、APについては、「新テスト」の方針決定を待たために、現段階では必要最小限の見直しにとどめている。今後は改定したDPやCPに基づき、カリキュラム・マップやカリキュラム・フローチャートの改訂が必要となる。研修会では教育学部および教職大学院のカリキュラム・マップが示され、これらの更新作業内容と締め切りについて説明があった²。

説明後の質疑応答では以下の質問と回答があった。

Q1 作業開始時期と締め切りはいつなのか。

A1 作業開始はこのFD終了後に部局長宛に依頼文書、作業手順書、カリキュラム・マップのテンプレート配布する予定である。これらが届いてから作業を開始していただければと思う。また、締め切りに関しては平成30年9月30日としている。

Q2 国語教育を例にとると、DPが非常に細かく設定してあるが、これ程細分化する必要があるのか。また、撰修によっては教科教育というよりも児童の発達全般をテーマにしているのだから、教科という形でDPを書かれると全て丸がつかなくなる。今後、このような実情に合わせてDPを作り直すことができるか。

A2 大学教育センターでは、昨年度に教育学部がまとめたDPやカリキュラム・ポリシーに沿って、カリキュラム・マップの枠組みを考えている。もしDP等の調整が必要ならば変更も可能である。他の課程等とも相談しながら学部で検討および調整をしていただければと思う。また、DPを変更された場合は、大学教育センターにもご連絡いただきたい。

Q3 カリキュラム・マップやカリキュラム・フローチャートの締め切りは来年の9月末とのことであるが、公開はいつから行うか。フローチャートには教職科目が入っているが、これについては現在コア・カリキュラムやナンバリング等を検討中である。平成31年度からの公開であれば教職大学院に一本化された科目で作成できると思うが、それよりも前に公開するのであれば、わずか半年のために別途作成が必要であるため、要する労力は大きい。平成31年4月に向けて新しいものを対象に作成するというのであれば無駄が無いと思うが、どうすればよいか。

A3 そのような事情があれば、平成31年度からを対象にカリキュラム・マップやカリキュラム・フローチャートを作成していただき、平成31年4月より公開していただければよい。

Q4 共通教育の部分のカリキュラム・マップは誰が作成するのか。カリキュラム・マップには授業科目名が記入されているため、実際に講義される開講科目の内容がわからないものもある。このよう

¹ 大学院についてはAPのみが義務化された。

² カリキュラム・フローチャートは学部のみ作成する必要がある。大学院については不要である。

な場合はどうするのか。

A4 ご指摘のような問題があるので、共通教育科目については、その概要を記載した資料³を添付するので、これを参考に丸付けをしていただければと考えている。

研修会後のアンケートには、「教育の質を高めることを、山口大学は早くから取り組みがなされていることを嬉しく思いました。3つのポリシーは重要だと思います」、「今後の作業が見えた点は良かった。但し、学部の事情等現実対応しやすい様、準備して頂けるとありがたい」、「教育学部の今後に対して言い方が失礼だと思います」との回答があった。また、今後希望する研修会については、「具体例を含んだ研修。今回もあったことはあったが、イメージがつかないものだった」との回答があった。

第6回 FD 研修会

アラカルト FD 研修会「カウンセラーとして関わった約 2400 名の大学生との泣き笑いを語る」

講師： 今井 佳子

(学生相談所 カウンセラー)

日時： 平成 29 年 11 月 15 日(水)

[吉田地区] 15:00～15:30

場所： 教育学部 21 番教室

(吉田キャンパス)

参加者：73 名(アンケート 35 枚回収)



内容

本研修会では、講師が本学のカウンセラーを務めた 15 年間について、様々な学生との出会いを振り返りながら、そこからみえてきた学生との向き合い方について講演が行われた。

講師は学生時代から本学教育学部と縁が深い。本学を卒業後、小学校で理科の教員を務め、後に様々な仕事を経験した。その後本学の大学院を修了し、病院等で臨床心理士を経験し、本学の学生相談所に赴任した。この職に就くまではさまざまな経験をし、それはストレートな道筋ではなかったものの、様々な学生の話聞く上では有意義であったと考えている。

カウンセリングでは、相談者の心の病気に向き合う日々が続く。世間では「目に見えることだけが現実とは限らない」というが、普段の我々は目に見えることを判断の拠り所とすることが多いと思う。その一方で、心の病気のケアでは目に見えないことを対象とする。医学が高度に進歩した現在にあっても、心の病の深刻さを数値化する客観的な指標は限定的であるため、そのケアは相談者との人間的な信頼関係を軸として成り立っていると考えられる。

カウンセラーを務めた 15 年間は、多くの若い人とかかわる機会があり、実に楽しく貴重な体験をした。学生の在学期間を通じて、長いスパンで関わるケースもあり、それはとても良い経験であった。学生たちとは様々な話をしてきたが、これらのかかわりからみえてきたもののうち、3 点ほど教職員

表1 研修会に参加した感想はいかがでしたか？

選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	25	71.4%
良かった	10	28.6%
どちらとも言えない	0	0.0%
あまり良くなかった	0	0.0%
良くなかった	0	0.0%
無回答	0	0.0%
合計	35	100.0%

³ 学生用の共通教育の履修案内に掲載されている内容。

にお願いしたいことがある。

ひとつ目は、学生と「生きる意味」について話をし、苦悩する学生の気持ちに寄り添っていただきたいと思う。相談所を訪れる多くの学生は「生きる意味」について話したがっている。講師が赴任した当初は、学生から生きる意味を問われて戸惑うこともあったが、「生きる意味」に向き合うことは、その対極の死を冷静に見つめることであり、ひいてはその学生が生きる方向性を見いだす源流となる。学生との対話を大事にして頂きたい。

ふたつ目は教員が発した言葉や文字が、学生にどれほど大きな影響を与えるかについて注意して頂きたい。同じ言葉であっても、教員が発した言葉は、学生に極めて大きな影響を与えることがある。このことについては、文字についても同様である。特に、SNS（ツイッターやフェイスブックなど）における発言についても十分ご注意頂きたい。

三つ目は教員養成についての要望である。教育実習をひかえた学生の中には、実習に不安や戸惑いを感じ、嫌なものにとらえている学生がいる。このような学生に対しては、不安や戸惑いを和らげるとともに、教科を教えることを通じて表現すること、人との関わりをもつ面白さについて説いて頂きたいと思う。

本学の学生相談所は昭和 28 年に開所し、今年度で 65 周年を迎える。これからも脈々と続いてゆくと思う。4 月からは新しいカウンセラーが赴任するが、今後もよろしくお願ひいたしたい。

講演後には以下の質疑応答があった。

Q1 教育実習に対して不安を抱えているとか、面白さがわかっていない学生がいるとの話があったが、それは実習を終えた後か。それとも前か。

A1 実習の前である。付属学校の先生は非常に高い授業技術をお持ちであるが、実習前にその授業を参観することによって、「先生のような授業はとてできない」と自信を失い、自己評価に疲れてしまう学生がいる。このような学生に対しては「付属学校の先生は特別に授業がうまい先生たちだ。先生にも色々な先生がいるので、実習では自分なりの先生でいいのだよ」と言い聞かせてきた。

研修会後のアンケートには、「カウンセラーとしての楽しさやご苦労が聞けて良かったです」、「今井先生には大変お世話になりました。最後の講演を聞けて、ありがとうございます」、「良かったです。良いご説明でした」、「とてもよかったです。お疲れさまでした」、「今井先生、長年の学生へのカウンセリングありがとうございました」との回答があった。また、今後希望する研修会については、「学生の指導にいかせる内容」、「学生のメンタル面に関する内容」、「学部の先生方の実践紹介。若手のロールモデル。ベテランにとっての刺激に」、「学生指導に役立つような内容」、「学生の動向や、メンタル面における指導事例等」、「業務改善」、「学生相談所の人の話をもっと聞きたい」、「情報セキュリティ」、「個人的な意見として、今回のような全体的な講義形式がよいと思います。時間的にも今回のような形式がよいと思います」、「授業改善、共同研究のすすめ方など」との回答があった。

第3節 教育改善に関する活動

特記事項なし。

第4節 学生授業評価・教員授業自己評価

平成30年4月にIYOCAN2システムで確認した平成29年度および過去5年間の学生授業評価、教員授業自己評価の実施率を図1に示す。平成29年度の実施率は、後期分がWeb入力期間中であるため確定していないが、学生授業評価および教員授業自己評価とも平成26年度以降減少傾向にあり、特に今年度の教員の実施率低下が著しく、教員の意識の低下が見受けられる。一昨年度まで全学FDワークショップや学部FD研修で、授業自己評価の意義や授業改善への取り組み等を啓発してきたので、今年度は特別な実施の呼びかけをしなかったが、このことが原因の一つと思われる。教員一人一人が取り組まなければならないという意識を持ち続けなければ、忘れてしまいがちである。呼びかけを強化するなどして実施率を回復することは、次年度に向けての課題である。さらに、IYOCAN2システムを利用すれば、授業科目ごとに教員授業自己評価の入力実施状況を確認できるので、学部としてこの情報を利用し、未入力の授業科目の担当教員へ直接実施を促す等の対策をとることも必要と思われる。

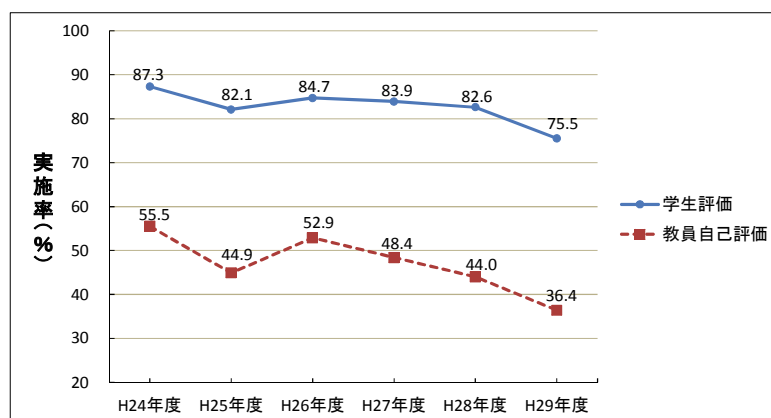


図1 授業評価アンケート実施率の経年変化

学生による評価のうち、授業外学習時間、学習目標達成、理解度、満足度および出席の平成24～29年度の評価値は、それぞれ3.0近傍（授業外学習時間：1時間程度に相当）、4.1近傍（学習目標達成）、4.3近傍（理解度）、4.4近傍（満足度）、4.7近傍（出席）で横ばいであった。

第5節 FD実施経費報告書

平成29年度教育学部FD活動において経費は使わなかった。

第6節 来年度の課題

平成29年度は、昨年度に引き続き、学部としての授業公開を実施しなかった。他方、教育学研究

科専門職学位課程（教職大学院）（第 14 章）では、原則すべての授業を公開している。学部においては、期間、授業を特定して授業を公開することがよいのか、それとも原則公開とするのがよいのか。授業の内容・形式、対象学年、授業担当者の思いなどがあるから、それを踏まえて、学部段階の授業公開のあり方について検討することが課題となる。

教員授業自己評価の入力率向上に関する組織的な取組みは、来年度の大きな課題のひとつである。特に、今年度は教員の入力率が未確定とはいえ、40%を切る事態になっており、入力されない理由を調べ、早急に入力を促す具体的な方法を検討すべきである。

授業外学習時間の確保について、単位制度では、山口大学は 1 単位＝40 時間と定めているので、たとえば、半期 2 単位の講義であれば、総授業時間数＝30 時間であるので、 $(2 \text{ 単位} \times 40 \text{ 時間} - 30 \text{ 時間}) / 15 \text{ 週} = 3.3 \text{ 時間}$ が授業 1 回あたり（1 週間あたり）の授業外学習時間ということになる。学生授業評価のデータによると、平成 24 年度以降、授業 1 回あたりほぼ 1 時間程度の横ばいのままであり、学部としても学生に対して周知をするとともに、各授業担当者からも授業ごとに指示・指導がなされているとは思いますが、その実態を組織的に把握できていないという課題がある。

第7章 経済学部のFD活動

第1節 授業公開

授業公開についてはそのあり方が議論されることとなり、昨年度に続き、今年度も実施しなかった。従来は、公開希望者を選出、公開当日都合のいい教員が授業を見学し、参加教員が感想を述べるというだけのものとなって実施の形骸化が進んでいた。公開希望者が一巡し、また、参加者の数も減少傾向にあったため、見直しをすることとなっていたが、よりよい具体的な改善案がでてこなかった。ただし、一般市民など対象とする公開授業の数を増やすなど必要な努力は続ける。

第2節 学部・研究科主催FD研修会

「科研申請推進会議」（計2回：平成28年3月9日、22日）

科研費申請数を増やすだけでなく採択率を上げるためになにができるのかを議論した。科研費申請への意識改革をすべく、今後の業績評価がいかに重要になってくるのか、昇任審査のあり方まで含めて長時間にわたりプレゼンが行われた。研究グループの設定、書類の相互チェック、採択経験者による指導など多岐にわたり改革のためのアイデアおよび採択後のインセンティブまで言及された。引き続き、科研費採択に向けて学部をあげて努力するよう決議された。

第3節 教育改善に関する活動

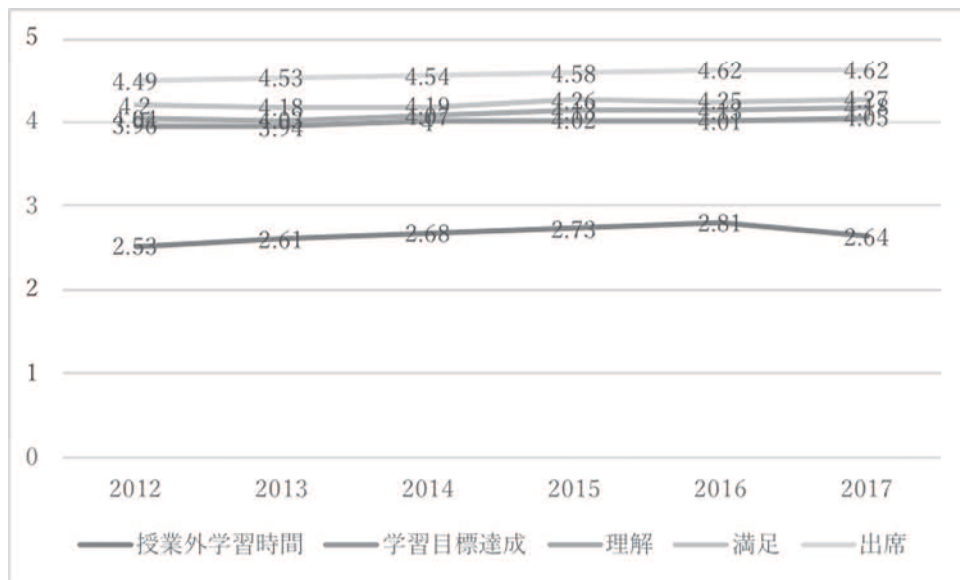
- ・ カリキュラム・ポリシー、アドミッション・ポリシーの見直し
- ・ YU Cob-Cus の実施に伴うカリキュラムマップの作成とチェック

第4節 学生授業評価・教員授業自己評価

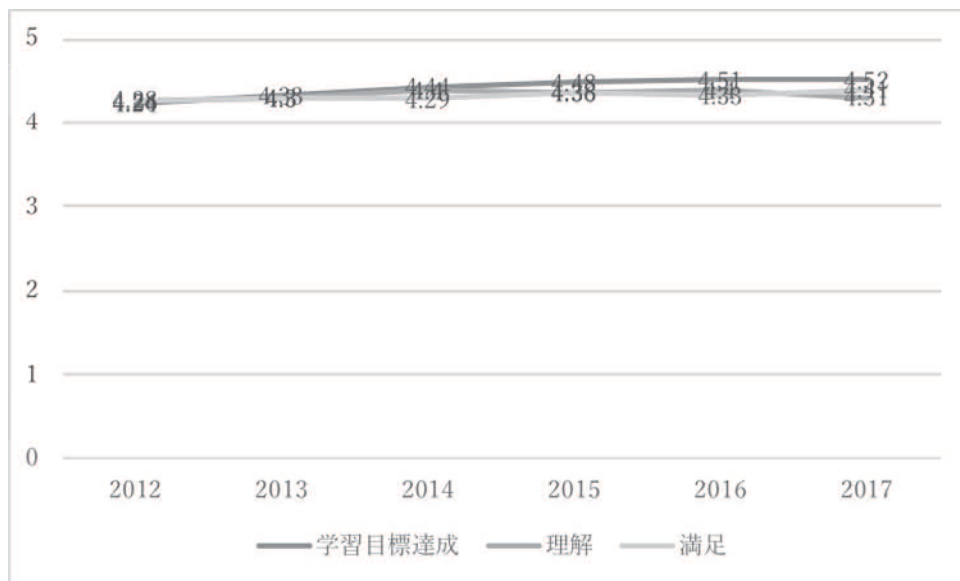
学生授業評価および教員授業自己評価の経年変化を調べてみたところ、以下のような特徴がみられる。

1. 学生による授業評価は、目標達成、理解、満足、ともに4.0以上の評価があり、質の高い授業を受けているという評価そのものに大きな変化はみられない。
2. ただし、授業外学習時間の確保という点については、他学部とも比較して満足できない状況にある。一方、その分だけ学生としてのプライベートの時間をアルバイトや部活動などに向けられる余裕ある環境だともいえる。
3. 教員による自己評価でも、目標達成、理解、満足ともに4.0以上を安定的にマークしており、学生、教員が共に質の高い授業の需要と供給ができていと推定される。

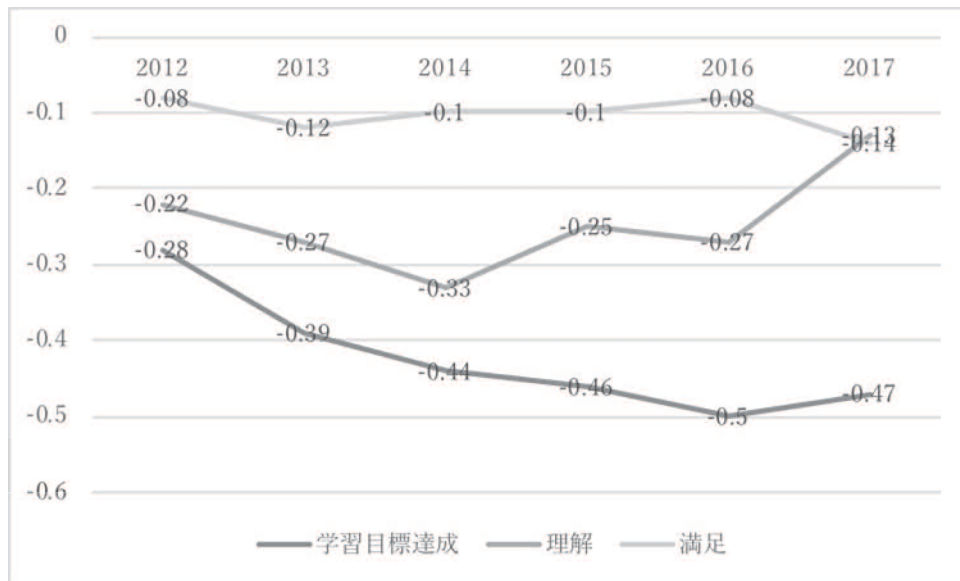
4. ただし、学生評価と教員自己評価を比較してみた場合、明らかに教員による自己評価が高くなっており、そのギャップは一旦縮小傾向にあったが、2013年度以降、そのギャップが拡大する傾向にあったがその後ギャップが少しずつ縮まっている。教員側が自己満足に陥ることなくこのギャップを埋める手立てを考えていかなければならないだろう。ただ、学習目標達成についてはギャップが広がりつつある。



グラフ 1:学生授業評価



グラフ 2:教員自己評価



グラフ 3:評価ギャップ (学生授業評価-教員自己評価)

第5節 FD実施経費報告書

経済学研究科において記述

第6節 来年度の課題

- ・ 教員授業自己評価の入力率向上を目指す。
- ・ 学生評価や成績分布共有システムなどの有効活用
- ・ 基盤科目のさらなる整備と情報共有化
- ・ 学生評価アンケートの項目等見直し
- ・ 外部研究費獲得のための工夫
- ・ 公開授業（ピア・レビュー）のあり方について引き続き議論する

第7章 理学部のFD活動

第1節 授業公開

1. 数理科学科のピア・レビュー

(1) 実施科目「数理科学基礎セミナー」

1) 概要

①日時：2017年6月13日(火) 3・4限

②対象学生：数理科学科2年生(約55名)

③授業概要：本授業では、90分間の試験と、試験問題に関するプレゼンテーションを交互に繰り返すという形で授業を行っている。プレゼンテーションでは学生が少人数(10~12名)のセミナー形式で前回の授業で受けたテストの内容についてプレゼンテーションを行い、それに対し担当教員から更なる質問を受け、それに答えることによって理解を深めていくという形式で授業が進められる。各グループの担当教員は学生のプレゼンテーションに対し、理解の浅い点や曖昧な点を指摘し、学生の数学に対する理解を深めると共に、プレゼンテーションの方法についても指導を行う。

④授業担当教員：廣澤 史彦、倉富 要輔、鍛冶 静雄、菊政 勲、大関 一秀

レビュアー：近藤 慶、中内 伸光、木内 功、宮澤 康行、幡谷 泰史

2) レビュー結果

何れのグループでもレビューシートの評価欄にはほぼ全て「4」又は「5」の評価があり、効果的な授業が行われていることが確かめられた。

レビューシートの自由記述欄には以下のような記述があった。

(優れた点)

- ・ポイントとなる点を教員が板書して、学生の理解を定着させる指導がなされていた。
 - ・発表者の理解力に応じた質疑がなされ、丁寧かつ適切な指導がなされていた。
 - ・関連する基本事項の確認など、学生の理解を深める指導がなされていた。
- 学生が考えてきた解答以外に、知っていれば役に立つであろう公式や事実を教え、それを用いた別証明をその場で学生に行わせていた点。また、発表に関し知識が不十分な学生に対しては、その知識(事実)を分かりやすく本質を説明することで理解をうながしていた。
- ・発表しやすい和やかな雰囲気づくりがなされ、学生との意思疎通が十分に取れていると感じた。
 - ・このクラスには、公開されていない発達障害の学生がいて、今回は本人の精神状態が悪いため途中で退席したが、教員は適切な対応を行っていた。このような学生に対しては難しい対応を迫られる場面が多いと思うが、教員の努力により、これまでも適切に対応してきた様子が見える。
 - ・学生の学力や状態を考慮しながら、授業が進められており、また、内容的にも、微分積分学と線形代数学の基礎を実践的に習得させるという、この授業の趣旨に沿った指導が行われていた。
 - ・発表者が板書中に、発表していない学生を巡回し、適宜質問を受け付けたり、不明な点への解説を行ったりと時間を有効に活用できていた。
 - ・日の浅い学生は、孤立した知識を散積させるだけではそれらを活用できず苦悩する。活用するためにはその事実の様々な分野の近傍まで知識を貯め秩序立てて有機的につなげ、様々な状況に活用した

経験を備えることが必須である。それらを書物の自習だけで修得することは難しい。学生の点在した知識をつないただけという混迷した思考を明晰な論理へと導くことは、講義・演習・セミナーにしか果たせない役割である。本担当教員はそれらを本セミナーで魅力的に展開することで、学生には今後の勉学のモチベーションをも提供していたように思われた。

(改善点)

・今回は問題数が通常より多いとのことで、時間の都合上、発表者と教員とのやり取りが主であったが、欲を言えば、もう少し発表者以外の学生が発表者へ質問するなど積極的に授業に参加できる機会があるとよいと思う。

2. 物理・情報科学科のピア・レビュー

(1) 実施科目「相対論」(後期)

1) 概要

①日時：平成30年1月18日(木) 12:50~16:00

場所：共通教育物理学実験室

②対象学生：物理・情報科学科1年生(約60名) 選択必修科目

③授業概要：60名の受講者が2人1組のグループ30グループに対し12種類の内の1つの実験テーマを割り当て、各グループが実験を行った。実験方法等は教科書に示されているので、受講者は予習をしてくるように指導している。実験中の具体的な指導は、3名の教員と4名のTAが行った。授業時間の後半には、3名の教員が分担して受講者の実験結果や実験ノートを見ながら、それぞれのグループに対して事後指導やレポート作成に向けた指導を行った。

④担当教員：笠野裕修, 野崎浩二, 岸本祐子(非常勤講師)

レビュアー：朝日 孝尚, 坂井 伸之

2) レビュー結果

レビュアーから以下のコメントを頂いた。

・10年前までこの実験を担当していました。その頃に比べて大きな改善は、

(1) 実験開始前に概要や注意点の説明があること、(2) 実験結果の報告を聞く際に、どういう実験で何を測定することを目的としているか、学生に説明させていること、の2つだと思いました。実験指導書に従って、ただ手順をこなして結果を出すだけでなく、内容を理解させるのに有効であるだけでなく、コミュニケーション能力の育成も意識されているのでしょうか。また、いくつかのテーマで、実験装置の改良がされていることにも気づきました。

・教員3名のTA4名をうまく配置して、目の行き届いた実験でした。

本授業について特に言うことはありません。

実験系授業に対する一般論になりますが、今後は教員数が更に減り、必要なだけ人員を配置するというこれまでのやり方が難しくなると思います。個々の授業をより良くするための改善を進める一方で、少ない教員数で実施できるようなカリキュラム改善も必要ではないかと思いました。

(2) 実施科目「確率論と情報理論」(後期)

1) 概要

日時、場所：平成29年12月22日(金) 12:50-14:30 理学部2号館15番講義室

対象学生：物理情報科学科3年生情報コース必修科目

授業担当者：野崎隆之

レビュー方法：授業に参加し、終了後、問題点や改善点等を担当者に口頭または文章で指摘する。

授業概要：授業を2名の教員が授業前半・後半に分かれて担当している。前半は確率論、後半は情報理論の説明を行っている。今回のピア・レビューは情報理論で行った。授業方法は、15番教室を使用しているため、ホワイトボードの半分にプレゼン資料を映し、残り半分を黒板として利用して授業を進めている。

レビュアー：松野浩嗣、西井淳、浦上直人、川村正樹

2) レビュー結果

レビュアーから以下のコメントを頂いた。

使用しているプレゼン資料は、公開されており、学生は授業中にタブレットやノートパソコンで見られるようにしており、スクリーンが見にくい座席にいる学生にも配慮していた。また、講義中に演習問題を学生に解かせており、その際にも資料が役立っているようであった。

3) 改善点

- ・若干、早口であるので、もう少しゆっくり話した方が良いかもしれない。
- ・出席の確認はどうしているのか？遅刻した学生への対応は？
- ・プレゼン資料は便利であるが、その反面、ノートを取っていない学生も散見される。
- ・問題を解答させる際、後ろの学生を指名すると、学生は前に座るようになるかもしれない。

3. 生物・化学科のピア・レビュー

3. 1. 生物学コースのピア・レビュー

(1) 実施科目「分子遺伝学」

1) 概要

①日時：平成30年1月10日(水) 5・6時限 理学部12番教室

②対象学生：生物・化学科、生物学コース2・3年生(48名)

③授業の概要：分子遺伝学では、初回の授業で半年を通じての授業内容や進め方の説明をし、大きく3つの到達目標にそって毎回の授業を行っている。毎回の授業の最初に前回の授業の復習を行い、理解度を高めるようにしている。授業の項目としては、DNA, RNAの化学的性質、複製、転写による生体内での合成の仕組み、タンパク質の性質、翻訳の仕組みについて、そして、遺伝子発現の調節機構を原核生物、真核生物に分けて解説している。受講する学生にとっては高校の「生物」の延長線上から、徐々に高度な内容へとレベルを上げることで理解しやすいような工夫をしている。また、中間テストを行うことで基本事項を整理して理解するよう促している。

1月10日の授業では、前回の授業における「遺伝子発現調節3」の翻訳調節、翻訳後調節についての復習を行い、その後、ゲノムと遺伝子の関係、C値パラドックス、ゲノムの進化について解説した。

④授業担当教員：堀 学

レビュアー：上野 秀一、宮川 勇(生物・化学科 生物科学分野)

⑤レビューの方法：90分の演習全体を聞いていただき、終了後、指導方法について改善点などを文書で指摘して頂く

2) レビュー結果

授業に対して、レビュアーより以下の指摘を頂いた。

レビュアー1

講義はまず15分程度で前回、前々回の講義を復習することから始まり、穴埋め問題も設けることで学生の理解を促す工夫がなされていた。講義内容はゲノムに関するもので、主題はゲノムサイズと遺伝子数及び生物の複雑性との関連について説明されていた。また授業担当教員のゲノム解析に関する経験も紹介することで、学生の関心を引く工夫もなされていた。

大筋では生物種間で比較した際のゲノムサイズと遺伝子数の増加に比例関係が見られないのは何故かといった問いかけを行い、実際には遺伝子数ではなく遺伝子産物（タンパク質）数との比例関係が保たれる結論を導くストーリー性を持たせていた。このストーリーの中で原核と真核生物での遺伝子配置の違いやゲノム重複、再編成やエクソンシャッフリングや選択的スプライシングの知識が順序良く説明する工夫がなされていた。

一方、資料のほとんどが文章のみで構成されていた。適度に図等も用いた資料があった方がいいように見受けられた。また具体例をより詳しく示すことで理解が深まる点が期待される点が幾つかあった。例えばエクソンシャッフリングの概念は示されたが、具体例がなかった。一方、講義前半でのゲノム比較による脊椎動物とナメクジウオ、ホヤの近縁性について、その判断基準に触れられるのは講義後半でのゲノム再構成の際の遺伝子配置 (Synteny) の説明の時点だった。ゲノム比較の話題はゲノム再構成の後の方がわかりやすいかもしれない。この際も遺伝子配置の種間の比較図があった方がより良い資料になると思われる。

レビュアー2

講義の最初に、真核生物と原核生物の遺伝子発現や、真核生物の選択的スプライシングについて、前回の復習があった。本日の授業と関連する内容を復習することは、記憶を呼びおこして本日の内容にスムーズに入るためにとっても役立つと思われる。

講義はほとんどがパワーポイントの内容を説明する方式で行われた。パワーポイントの場合、メモがとれないくらいに説明が速くなってしまうケースが時々見受けられるが、本授業では1枚ずつの説明が丁寧でありメモをとる時間があった。パワーポイントの文字の大きさが適切であり、教室の後ろからも見えるように工夫されている。

一方、学生の席を見渡すと、ノートをとっている学生もいたが、まったくノートをとっておらず話だけを聞いている学生が数名いた。また、自分のPCを開いてWEB上の資料を見ている学生もいたがノートをとっていなかった。WEB上に資料を公開しているのは、学生が学習をする上で大変役立つ工夫である。一方、ノートをとるという作業によって頭が整理されるということもあるため、大事な箇所については板書するか、パワーポイント上の文章をノートに写させるといった工夫も必要ではないかと思う。本日はゲノムに関する授業であり、ゲノムサイズ、遺伝子数、タンパク質の数、生物の複雑性の関係が興味深く説明されていた。また、脊椎動物のゲノムサイズの増大が、全ゲノム重複によるものであり、この現象によってどのように新しい遺伝子が生じたかを示す興味深い授業内容であった。

二人のレビュアーからのコメントを参考にして、授業の改善に取り組みたい。

予習・復習を促すために、講義資料や理解度小テストなどを Moodle においているが、講義資料がweb上でいつでも手に入るため、板書から自分のノートを作るという作業が欠如しているという指摘をいただいた。大変もったもんなご指摘であり、今後はwebの資料以外にも板書を増やしてノートを作らせるように改善していきたい。また、今回の授業では、具体例や図が少ないとの指摘も頂いた。授業の資料には、図を使って具体的に説明するように意識しているが、理解度を向上させるために、今後は説明の順番を再考し、具体例をもっと図を使って解説していくように改善したい。

3. 2. 化学コースのピア・レビュー

(1) 実施科目「量子化学及び演習 II」

1) 概要

①日時・場所：平成 29 年 7 月 24 日（月）9・10 時限、理学部 2 号館 第 1 計算機実習室

②対象学生：生物・化学科 化学コース 3 年生（35 名）

③授業概要：「量子化学及び演習 I」を基礎とし、分子に対するシュレーディンガーの波動方程式の適用例を紹介する。水素分子イオンに対して分子軌道法を適用し、エネルギーと波動関数を求める過程を示す。原子価結合法と分子軌道法の二つの方法で水素分子の解を求める。2 原子分子や多原子分子の分子軌道の取扱いを紹介する。多原子分子について、結合の極性、電子密度、結合次数等を説明する。パイ電子系の分子に対してヒュッケル近似を適用し、さらに高度な近似計算法である半経験的分子軌道法と非経験的分子軌道法についても触れる。分子軌道計算プログラム「Gaussian 16W」を用いて実際に分子軌道やエネルギーを求める方法を説明する。

授業の到達目標：水素分子イオンと水素分子に対してシュレーディンガーの波動方程式を適用し、原子価結合法と分子軌道法により解を得る。二原子分子や多原子分子の結合について理解する。ヒュッケル近似でパイ電子系の波動関数とエネルギーを求める。分子軌道計算プログラムを用いて二原子分子の平衡構造や軌道エネルギーを求め、分子軌道を可視化する。

④授業担当教員 谷 誠治

レビュアー 石黒勝也・藤井寛之・安達健太

⑤レビューの方法：実施後のアンケート調査により、授業内容、授業の進め方、その他改善を要する点についての意見を用紙またはメールにて回答

2) レビュー結果

レビュアーから以下のような意見が寄せられた。

1. 授業内容に対する意見

- ・高度な計算技術を簡単な分子に適用し、基本の演習を行っていた。
- ・学生からの積極的な発表がなく残念であった。

2. 授業の進め方

- ・相当量の資料が準備されており、演習前の準備が素晴らしいと感じた。

3. 改善を要する点

- ・例年のことではあるが、計算がコンピュータを使う作業だけとなり、計算結果の意味を理解できていない学生がいる。また、学生の分子軌道計算に対する習熟度にばらつきがあるので、TA による丁寧な個別対応が必要である。
- ・配布されている資料を見れば分かるが、スクリーンに表示されている資料の字が小さく見えにくい。

(2) 実施科目「化学ゼミナール I・II」

1) 概要

①日時・場所：平成 29 年 12 月 27 日（水）13：00～16：15、人文学部大講義室

②対象学生：大学院創成科学研究科・地球圏生命物質科学系専攻（博士前期）

化学コース M1・M2 年生

③授業概要：化学ゼミナール I・II の履修者が、各自の研究課題に関するフラッシュプレゼンテーシ

ョン（3分）とポスター発表（45分間）を行い、同時に他の学生の研究発表を聞き相互に評価し合う。

授業の到達目標：

- ・各自の研究テーマを分かりやすく発表する。
- ・同級生の研究発表を聞き、批判的・建設的に討論を行う。

④授業担当教員 川俣純（化学分野長）

レビュアー 山崎 鈴子・石黒 勝也・本多 謙介・村藤 俊宏・村上 良子・藤井 寛之・安達 健太・綱島 亮・上條 真・鈴木 康孝・谷 誠治・檜木野 宏

⑤レビューの方法：実施後のアンケート調査により、授業内容、授業の進め方、その他改善を要する点についての意見を議論する。

2) レビュー結果

①授業内容

- ・一人当たり約3分間のショートプレゼンテーションの後、発表番号の偶数・奇数番号に分かれてそれぞれ、45分間のポスター発表を行った。
- ・発表件数は、26件であった。

②意見

レビュアーから以下のような意見が寄せられた。

1. 授業内容に対する意見

- ・修士1年間の研究内容を発表させるという形式であった。
- ・ポスター発表形式で十分に時間が取れており、学生・院生同士のディスカッションが活発にできる点が良かった。
- ・就職活動に直結した時期である点が良いと思います。
- ・M1以外の学生にも「判りやすいプレゼンとはどのようなものか？」ということを考える場になって良いと思います。
- ・自分の研究を他人に評価してもらい良い機会です。良い試みと思います。今後も継続して頂きたいです。
- ・時間・スケジュール構成とも適切であったと思う。
- ・ショートプレゼンでの概要報告、ポスター発表での詳細な質疑応答ということで大学院学生にとって教育的効果（プレゼン能力・質疑応答能力の向上）が大きいと思われる。

2. 改善を要する点

- ・評点を付けた方が良いのではないかと感じる。
- ・発表賞があれば盛り上がるのではないかと？（投票は学生が記名投票で責任をもって行うなども視野に入れるべき）
- ・会場が講義室のため、移動がし難かった。
- ・ポスター発表を聞き終えて、特に何もすることがなく部屋に残って騒いでいる対象外学年の学生が多かったのが気になった。
- ・ポスター発表にて本会場（人文大講義室）の壁面では発表者と聴講者との間に十分なスペースがないため、会場の改善が必要（来年度以降？）
- ・同研究室内の仲間内で会談する発表者もいる。教員・学生を含めた全員が審査員となる最優秀発表賞などを設けるのが良いのではないかと？モチベーションのアップにも繋がる。

4. 地球圏システム科学科のピア・レビュー

(1) 実施科目「技術者倫理」

1) 概要

①日時：平成30年2月1日(木) 16:10~17:40 理学部11番講義室

②対象学生：地球圏システム科学科2年生(地域環境科学コース必修：2単位)

③授業の概要

「技術者倫理」は2年次後期に開講されるが、3年次進級時にコース選択が行われる地域環境科学コースにおける必修科目であり、地域環境科学コース選択希望者が履修する。授業では、近年の科学技術の発展が社会の発展に貢献している一方で、技術の利用にともなう公害問題や技術の不適切な利用による事件・事故などの科学技術の発展の負の側面や科学技術の過信による自然災害の深刻化などにともない、科学技術者や研究者に求められる基本的な倫理観について解説し、説明責任、製造物責任、知的財産権、守秘義務について具体的な事例を紹介しながら説明している。また、具体事例や仮想事例などについて、グループワーク、ディスカッションなどを行い、技術者の倫理観を自ら考え、身に付けてもらうことを目的としている。

2月1日の授業は最後の授業となるため、これまでの授業で個別の倫理的問題に関する事例で学んだことをもとに、履修学生が将来経験するであろう地質調査業務における倫理的問題について、地質技術者の観点、発注者の観点から考えさせたいと、グループでのディスカッション、代表者による発表を行い、他のグループの意見を聞いて改めて考えたことをレポートさせた。

④授業担当教員：太田岳洋

レビュアー：今岡、宮田、大和田、坂口、川村、大橋

⑤レビューの方法：講義後に行う学生授業アンケート(無記名)とレビュアーによるコメント(授業観察カード記載)、授業研究会の開催

2) レビュー結果

① 発表技術に関して(声の大きさ、話の速度、プレゼンテーション一般)

授業における説明時の声の大きさは適度でよく聞こえ、説明、議論、レポート、グループワークと時間配分されており、高い教育効果が期待できると評価されるが、進行が少し速いことと資料やスライドに少し見づらいものがあるとの指摘があった。また、学生の発表や質疑応答が、教室形式のため教卓に向かっての発言になり、後ろの席では聞きづらいので、教員が復唱し全員に聞かせるようにするほうがよいとの意見があった。

② 発表会の運営・構成に関して(会場設定に関する準備等)

良い点として、個人の意見出し→グループ内での集約→他社との議論、の流れでブレインストーミングができていて、学生に資料とレポート課題を配布し議論に参加を義務付けていることとそれにより学生が様々な視点からの意見を考えることができていて、学生の発表に対する解説にフィードバック効果が期待できること、などがあげられた。一方、専門用語が多く、事例がすぐに理解できないので、もう少し詳しい説明が必要である、との意見があった。

③ 授業の目標に対する達成度や理解度に関して

現場の体験に基づいた題材により生きた授業になっており、学生の理解度が高いと感じたとの意見があった。また、学生が自分の意見を固めたのちに、互いに相談する点も評価された。一方、スライド内の記号がすべて説明されず、また少し説明も早いため、理解度が落ちる点が指摘された。

④ 学習活動、学生の参加度に関して(学生の質問など)

良い点として、学生全員が集中して取り組んでおり、意欲が高そうである点、多くの学生が様々な観

点から意見を述べ、質問に対してきちんと解答できており、アクティブラーニングが成り立っている点、などがあげられた。一方、学生の発表、発言が聞きにくい点やグループディスカッション時の参加度に温度差がある点、学生がメモを取っていない点、などの問題点が指摘された。

⑤ 学生の授業アンケートについて

項目「自分自身が考えるこの授業の学習達成度」に関しては、9割の学生が70%以上、1割の学生が50～70%未満であった。また、「この実習の内容に興味をもてましたか」という項目に関しては、7割強の学生が「もてた」、「非常にもてた」と答え、「もてなかった」が1名であった。自由回答では、「今後社会に出て技術者として働く時の助けになる」、「将来、技術者になった時に、どのように対応すればいいかわかった」、「地学とは関係なしに、とても必要なことを学べた」と好意的な意見が多く寄せられた。また、「倫理観が人によって違うことと、判断の難しさを学べた」、「具体的に自分の身に起きるかもしれないことは、今の自分とその時の自分の考え方は変わらと思う」など、技術者の倫理問題の難しさを指摘する意見もあった。一方、「倫理は答えがないものなので、レポートなどで考えるときに少し苦しく感じた」といった意見など、授業にかなり負担感があったことがうかがえる意見もあった。

3) 授業研究会

日時：平成30年2月22日（木） 17:00～17:30

出席者：今岡、宮田、阿部、坂口、太田、川村、永畷、大橋

研究会概要：

学生アンケートとレビュアーによるコメント（授業観察カード）をもとに授業研究会を開催し、意見交換を行った。授業技術に関して、黒板の使い方の効果が評価された一方で、スライドの構成などについて改善点があげられた。アクティブラーニングについて、シラバスにおけるポイントより明らかに高いので、シラバスを実情に合わせるほうがよい、との指摘があった。また、学生の参加度を高めるための方策について、継続的なグループディスカッションの必要性や複数の学生による板書の活用、などがあげられるなど、多くの指摘と議論があり、次年度につながる有意義な場となった。

第2節 学部・研究科主催FD研修会

1. 教育改善FD研修会（理学部・創成科学研究科（理学系））

日時 平成29年9月8日（金）15:00～15:30

場所 人文・理学部管理棟 4階 大会議室

参加者 39名

担当者 岡田 耕一（大学教育センター講師）

内容

研究会の初頭、松野理学部長から研修会の主旨の説明があった。その後、岡田講師によって、以下の順で説明があ



った。

1. 3つのポリシーを巡るこれまでの経緯
2. カリキュラム・マップ(CUM)の見直しについて
3. 意見交換、カリキュラム・マップの「〇付け作業体験」
4. カリキュラム・フローチャート(CFC)の見直しについて

1. のポリシーを巡るこれまでの経緯
平成 27 年 1 月の文部科学省による「高大接続改革実行プラン」の公表から、平成 28 年 3 月 31 日に大学教育部会から出された 3 つのポリシーの策定に関する「ガイドライン」発表、学校教育法施行規則の一部改正の省令交付までの国・文部科学省の一連の動きにして説明された。その後、それを受けての本学の動きと 3 つのポリシーの策定と今年度 4 月の公開が説明された。

2. カリキュラム・マップ(CUM)の見直しについて

新しいカリキュラム・ポリシーとディプロマ・ポリシーが一体化しているかどうかの確認のために、カリキュラム・マップの見直しが必要であることが説明された。理学部で過去に策定された現行のカリキュラム・マップ、そして、新しく策定されたディプロマ・ポリシーが紹介された。

3. 意見交換、カリキュラム・マップの「〇付け作業体験」

準備しておいたカリキュラム・マップの雛形が配布され、各教員が自分の担当している授業科目について、到達目標を記入し、◎、○、△付け作業を行った。その後、他の教員とカリキュラム・マップについて意見交換を行った。

4. カリキュラム・フローチャート(CFC)の見直しについて

最後に残りの 5 分間で、現行のカリキュラム・フローチャートが紹介され、カリキュラム・マップの見直し後はカリキュラム・フローチャートの見直しが必要であることが説明された。特に、現行のカリキュラム・フローチャートは平成 23 年度に導入した新しい共通教育が反映されていないので、新しいものを策定する際は考慮しなければならないことが付け加えられた。

参加者からの質問はなかった。

理学部教育改善FD研修会		
平成29年9月8日		
参加者数:42名 アンケート回収:34枚		
設問1 研修会に参加した感想はいかがでしたか？		
選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	1	2.9%
良かった	20	58.8%
どちらとも言えない	9	26.5%
あまり良くなかった	0	0.0%
良くなかった	0	0.0%
無回答	4	11.8%
合計	34	100.0%
設問3 興味ある内容の研修会があれば、今後も参加したいとお考えですか？		
選択肢	人数	割合(%)
是非参加したい	1	2.9%
できるだけ参加したい	31	91.2%
あまり参加したくない	1	2.9%
参加したくない	0	0.0%
無回答	1	2.9%
合計	34	100.0%
設問6(1) 実施時期		
選択肢	人数	割合(%)
良い	33	97.1%
良くない	1	2.9%
無回答	0	0.0%
合計	34	100.0%
設問6(3) 実施場所		
選択肢	人数	割合(%)
良い	34	100.0%
良くない	0	0.0%
無回答	0	0.0%
合計	34	100.0%

2. アラカルト FD 研修会「受け入れ留学生の理解と対応 留学生と簡単日本語コミュニケーション」(理学部 FD 研修会)

日時 平成30年03月14日(水) 15:00~13:40
 場所 人文・理学部管理棟 4階 大会議室
 参加者 51名 (アンケート回収 47名)
 担当者 中溝 朋子 (留学生センター准教授)

内容

理学部 FD コーディネーターより、理学部でも昨年度からサマースクールで海外の学生を受け入れたりという事で国際化が徐々に進んできている。今後は各先生方の研究室にも留学生がぼちぼち入ってくるのではないかと思う。既に留学生を受け持っておられる先生方にとっては復習的なことになるかもしれないが今から留学生を迎え入れるというような先生方にとっては良いお話になるのではないかと思うと説明があり、講師の中溝先生から以下のような話が合った。

本学の留学生数は、去年5月1日現在で403人、11月1日現在で430人となっており、4月には100名を越える留学生が入学予定である。中期目標では平成31年に26年の80%増という目標が掲げられており、具体的には約550名に相当する。現状ではこの目標は厳しいかもしれないが、短期を含めれば現在でも約700名を越えている。

以下、初めに留学生に関する留学生支援室、留学生センターのサポートについて。留学生の生活を中心になって支えているのが、共通教育棟2階のアドバイザールームに常駐する野原アドバイザーと渋谷アドバイザーの2人。具体的なサポートとしては、渡日時のワンストップサービスなど。ワンストップサービスは、福岡空港への出迎え、ビザ・外国人登録・銀行などの手続きや市役所・警察からの生活上の留意点(ゴミの分別・交通ルール等)についての話、宿舎別のオリテ(YUシェアハウス居住者のみ自転車講習会の後、自転車の貸与するサービス有)、図書館オリテ、日本語授業や生協からのサービス(携帯電話、クレジット関係等)紹介などが含まれている。

また留学中の問題について。健康上の問題については留学生も原則、国民健康保険、学研災、OSSMAに加入している。現在3棟ある宿舎は原則入居は半年で、残りの期間は民間アパート等に住むことになる。その際、機関補償という制度がある。また理系の大学院生では既婚者も多く家族の呼び寄せの問題も生じ得る。その他学業や研究、人間関係、経済的問題なども生じ得る。

このように様々な問題もあるが、これらを大きく発展させないための鍵としてひとつはチューター制度の活用が重要と考える。理系の院生などの場合、チューターと留学生の年齢や人生経験の差などによりペアの活動が難しい場合も考えられるので、研究室全体の人間関係や協力が大切と考える。も

設問1

研修会に参加した感想はいかがでしたか？

選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	14	29.8%
良かった	27	57.4%
どちらとも言えない	6	12.8%
あまり良くなかった	0	0.0%
良くなかった	0	0.0%
無回答	0	0.0%
合計	47	100.0%



う一つは日本語学習。センターの日本語授業は入門から上級まで5レベル。受講者の大半は交換留学生だが、院生や研究生も一緒に受講している。理系留学生の受講が多い入門レベルは来年度は前期週4コマ、後期は週4コマと週2コマの2コースを開講予定。理系の留学生の予定を考慮し1コマ目に集中させているので、渡日後すぐの学期の受講を勧めて頂けたらと思う。また毎週土曜、国際交流会館で市民ボランティアによる日本語クラスもあり家族の受講も可。

以下、サブタイトルの簡単日本語コミュニケーションの具体例について。まず初級の日本語学習者と話すときのコツ。一つ目は、文は短く、ゆっくり、はっきり。短くするには、一文には述語は一つ。例えば「家に着いたら、電話してください」は分けて「リさんが家に帰ります。そしたら私に電話をしてください」と言う。また名詞修飾を使わない。例えば「明日発表する人は、だれですか」は「明日の発表は誰ですか」「明日誰が発表しますか」とすると理解され易い。二つ目は「です・ます体」を使う。「行く・行かない」のような「で・ある体」は活用の変化が大きく初級教科書の後半で扱われる。「です」でも「明日、授業に来ないんですか」は不可。三つ目は、漢語よりは和語で。例えば朝食より朝ご飯。日常の会話で聞きなれているのは和語。初級教科書でも和語が先に導入される。中国語話者でも会話では和語のほうがわかりやすい。四つ目は視覚情報を効果的に使う。身振りや実物、図など。特にスケジュールなど数字は書いて確認を。最後は情報は分けて、確認しながら話を進める。例えば「レポートは15日までに、研究室のドアのポストに出してください」は「レポートの締め切りは15日です」「研究室のドアにポストがありますよね」「そこに出してください」のように文を区切って確認しながら進めると理解されやすい。

一方、中・上級でも誤解が生じるケースはある。日本語が上手で、文字通りの意味は理解していても日本人と同じように思考しているわけではなく文化的な背景や談話的な知識が不足している場合もある。日本人が無意識に期待しているやり取りや行動と異なる言動をする場合はすぐに評価や判断を下すのではなく、理由を聞くといった対応があるとお互いに誤解が生まれにくい。

最後にムスリムの学生について。宗教と生活がとても結びついているのでより注意を払った対応が必要。名古屋大学のHP¹の冊子、ハラル食についてはHalal JapanのHP²に詳しい説明がある。ハラル食については留学生センターで行事や見学の際にも考慮している。今年の7月からはボーノでもハラル食が提供されている。去年より国際交流会館1階に全宗教で使用可能なお祈り部屋がも設置された。

最後に、本学でもますます増えるであろう留学生の受け入れであるが、学内のサービスや日本語授業を効果的に利用していただき、それぞれの留学生に対応したコミュニケーション、対応がなされて進んでいくことが大切と考える。

¹名古屋大学「ムスリムの学生生活とともに学ぶ教職員と学生のために」

<http://acs.iee.nagoya-u.ac.jp/doc/interculture/201510muslim.pdf>

²Halal Japan

<https://www.facebook.com/pages/Halal-Japan/503821533010825>

質疑応答

以下のようなやり取りがあった。

Q:最初の方で研究室全体で関わるようにと言う話があったが、謝金が出る出ないと言う差があつてみんなに頼みにくいというのがあるが、全員に払うことは可能か。

A:現在の制度で可能かは確認してみなければわからないが、今までは二人以上に支払ったケースはなかったと思う。(後日確認したところ、現制度では同時期の2人以上への支払いは不可)

Q:オリエンテーションを5年前に受けたが、その時は日本語のスライドと日本語だけでされていたが、それは改善されたか。

A:申し訳ございません。来年度については確認して改善したいと思う。



アンケート

以下のような内容が見られた。

感想

- ・留学生が使う日本語テキストに即したコミュニケーションの仕方がためになった
- ・日本語の話し方
- ・チューターの数を増やしてほしい
- ・たいへんわかりやすかったです。
- ・チューターに関して制度をあまり知らなかったので勉強になった
- ・知らないことがたくさんあって、良い研修会でした
- ・ポストドクへの制度も聞いてみたいと思った
- ・留学生との文化の違いを改めて理解できた
- ・時間がやや長かった
- ・特に伝わりやすい日本語の例がためになりました。また無意識に期待している事の言語化も。
- ・サポート体制や問題点など大変勉強になりました。
- ・留学生を今後受け入れる上で参考になった。
- ・留学生による問題発生ケーススタディを数多く紹介して頂きたい

希望の研修内容

- ・心のケアが必要な学生に対する対応法等
- ・入試問題等における正しい日本語表現
- ・(前もあったが)「問題学生と親の対応」
- ・特にイスラム教の学生への対応についての話を聞きたい
- ・発達障害の学生に対する対応の具体例
- ・発達障害学生
- ・なんでも
- ・特になし
- ・思いつかず

参加したくない理由

- ・有意義な内容ではないことが多い

第3節 教育改善に関する活動

1. 「サイエンス実習」、「数理科学企画研究」、「数理科学トピック」における学士力育成の取り組み

理学部では平成20年度から、学生の問題発掘解決能力、プレゼンテーション能力、コミュニケーション能力の育成のため、数理科学科以外では「サイエンス実習Ⅰ、Ⅱ」（各1単位）を、数理科学科では「数理科学企画研究」（2単位）と「数理科学トピック」（2単位）を実施している。

履修学生は、科学理解増進活動事業（例えば、山口大学理学部サイエンスワールド）に向け、自らが企画立案し、計画をたて、準備を行い、効果的な展示・説明を考案し、一般市民に対して科学を分かり易く伝えることを目標に、プレゼンテーションを行う。それらを通して上記の能力を身に付けさせることが「サイエンス実習Ⅰ、Ⅱ」、「数理科学企画研究」および「数理科学トピック」の目的である。ここでは、その取り組みの一例として、生物・化学科生物学コースにおける「サイエンス実習Ⅰ、Ⅱ」について報告する。

生物・化学科生物学コースにおける実習例及び学生による運営について

2017年11月12日に開催されたサイエンスワールド2017では、「さあ来い！アーティスティックサイエンスフェスタ」と銘打って、山口大学理学部を中心として教育学部理科教育講座や近隣の博物館の協力のもと、大人から子供まで科学の面白さを体験できるイベントの開催を目的として、様々なブースとミステリーツアーの出展が企画された。本年度は新たな試みとして、山口情報芸術センター（YCAM）とのコラボ企画も実施され、学園祭との同日開催ということもあり多数の来場者が会場を訪れた。本報告では、生物学コースから出展された「目指せ！君もチリモンマスター！～海の小さな仲間たち～」と「秘密の光～実は私光るんです～」の2つの企画について、その内容を報告する。

まず、ブース出展で行われた「目指せ！君もチリモンマスター！～海の小さな仲間たち～」では、生物に実際に触れることで生物や生命現象を身近に感じてもらい興味をもつきっかけを提供することを目的として、「チリメンモンスター」と呼ばれる多種多様な海洋生物が含まれる食品を用い、ルーペや実体顕微鏡を使ってそれらの生物を探するという内容が実施された。この「チリモン探し」に先立ち、ちりめんじゃこやチリメンモンスターについての基本的な説明や、日本近海の生態系や生物の多様性についてクイズ形式で解説を行うことで、小学生や未就学児に対しても無理なく予備知識を導入する工夫がなされていた。次に「チリモン探し」では、学生が自分たちで手作り「チリモン図鑑」を片手にそれぞれの生物についての名前や生態について解説を加えることで、単純なチリモン探しのゲームに終わることなく、子供から大人まで楽しみながら学べる出展内容となっていた。

次に「秘密の光～実は私光るんです～」はミステリーツアーの一部として実施され、10名前後の参加者を対象として各回17分の内容を合計11回行われた。内容としては植物の葉に含まれるクロロフィルを題材として、光合成に利用される光エネルギーの一部が蛍光として放出される現象に着目し、実際にクロロフィルが発する蛍光を観察するというものであった。まず、蛍光ペンを用いたお絵かきを通じて「蛍光」という概念を小さな子供たちでも興味を持てるような工夫が施され、その後に「緑色」の葉を実際にすりつぶし、その抽出液が「赤色」に光る様子を観察してもらい、普段目にするのがない「不思議」を体験することでサイエンスに対して興味をもつきっかけ作りがなされていた。さらに、パワーポイントを用いてクイズ形式で蛍光に対する原理の説明や、身近に蛍光を発する生物

の話、それがどのような分野に応用されているかなどの付加的な情報を加えることで、「不思議」を体験することに留まらず、それがどのような「原理」によって生じるのか、またそれがどのような応用に繋がるのかなど、基礎研究と応用研究に両面に通じる構成になっており、子供だけでなく保護者をも巻き込み優れた出展内容となっていた。

2. 理学部における低年次教育改革

理学部では、「理学教育企画センター」が中心となり、さまざまな教育改革の取り組みを実施している。平成23年度には、学長裁量経費を申請し、低年次教育改革を実施した。それ以降、平成29年度も引き続き、改革のための取り組みを行った。以下に、理学部全体および各学科におけるそれぞれの取り組みの一部を報告する。

(1) e-ラーニングを積極的に利用した教育の取り組み

1) 数理科学科におけるe-ラーニングの活用事例

本年度、数理科学科では以下の科目でe-ラーニングを活用した。

授業科目名：数理科学入門セミナー

対象学生：数理科学科1年生（約55名）

活用方法：この授業では授業外学習時間の増加を狙ってe-ラーニングの活用を行っている。内容は高校レベルの数学の復習ができる内容の宿題を一定回数課すという形式である。成績の10パーセントをe-ラーニングのテストの成績で評価している。多くの受講生は意欲的に取り組んでいて、自学自習をする上で有効であったと考えられる。その一方で、少数の受講生はe-ラーニングによる学習に手が付かなかったとの報告も受けている。

授業科目名：数理科学基礎セミナー

対象学生：数理科学科2年生（約55名）

活用方法：内容は1次年次の復習及び、2年次の専門科目で履修をしている微分積分学や線型代数学の内容の問題を2週間に1回解答させるというものである。成績の10パーセントをe-ラーニングのテストの成績で評価しており、ほぼ全ての受講生がe-ラーニングを活用した。e-ラーニングを積極的に活用し、自習に役立てている受講者がいる一方で、殆ど手を付けていない学生も僅かにいるなど、受講者の意識に偏りが見られる。学生の授業外学習時間増加に一定の成果が挙げられていると考えられるが、意識の低い受講生への対応が今後の課題として挙げられる。

2) 物理・情報科学科におけるe-ラーニングの活用事例

物理・情報科学科では数学関連科目を中心とする以下の科目でe-learningシステムを活用している。

- ・「物理と情報のための基礎数学 I」
- ・「物理と情報のための基礎数学 II」
- ・「物理と情報のための応用数学 II」
- ・「ロジカルシンキング II」
- ・「計算モデル論 I」

- ・「計算モデル論演習 I」
- ・「計算モデル論 II」
- ・「計算モデル論演習 II」
- ・「数値解析」
- ・「情報リテラシー演習」
- ・「プログラミング演習 I」
- ・「バイオインフォマティクス」
- ・「確率論と情報理論」
- ・「情報ネットワーク」

昨年度と同様、上記の科目で宿題や自習のための小テスト配信、講義資料配布、出席管理、レポートの相互採点等を行うために必要な教材の改訂およびコンテンツの追加を行った。「物理と情報のための基礎数学 I、II」、「ロジカルシンキング II」では講義時間の不足を補うため、e-learning システム上にビデオ講義を用意し、これを見ることを理解度確認のための小テストとともに宿題とする取り組みを継続している。学生へのアンケート結果から授業で理解できなかった内容を e-learning を通して理解している学生も多く、また、e-learning の問題を解くことが授業の理解につながっていると回答する学生も多い。年々、少しずつであるが教材の充実を行っている。

(2) 学力別クラス編成の導入

物理・情報科学科では、「低年次導入教育の改革」の取り組みとして、平成 23 年度に 4 つの授業で学力別クラス編成授業を試行した。その結果に基づいて、平成 24 年度には、1 年生、2 年生の 5 つの必修科目で学力別クラス編成を本格導入した。その後、学力別クラス編成の改編を行い、平成 27 年度では、「物理と情報のための基礎数学 I、II、III」、および「力学 I」において、学生の学力に応じた授業を行った。ただし、何れの授業においても、学力別クラスに関係なく期末試験は同じ問題を使用し、単位修得の基準も統一しており、今年度も引き続き学力別クラス編成により授業を行った。改編後今回で 3 年目ということであり、学力別クラス編成が定着してきたと思われる。今後も学生の習熟度を確認しながら、引き続き、改編等を行っていく予定である。

第 4 節 学生授業評価・教員授業自己評価

2017 年度に理学部で開設している専門科目 241 科目のうち、学生授業評価対象科目は 179 科目である。そのうち、実際に学生の授業評価を実施したのは 161 科目で、実施率は 89.9%であった。

下図は 2017 年度における学生授業評価および、教員自己評価実施アンケートの年度推移である。

図 1 から図 5 までは、学生の授業評価項目である。図 1 は学生の授業外学習時間の年度推移、図 2 は学生の授業目標達成の自己評価に関する年度推移、図 3 は学生の授業理解度についての年度推移、図 4 は学生の授業満足度に関する年度推移、図 5 は学生の授業出席の自己評価の年度推移である。いずれの項目も数値が高く、全体的に安定している。

一方、図 6 から図 8 までは教員側から見た授業自己評価である。図 6 は教員側から見た学生の授業目標達成の年度推移、図 7 は教員側から見た学生の授業理解度の年度推移、図 8 は教員側から見た学

生の授業満足度を示す。教員側から見た評価は年度毎に増減幅が大きい傾向にある。教員側の自己評価について、今後各学科・コースで評価基準に関し検討する機会を設けたい。

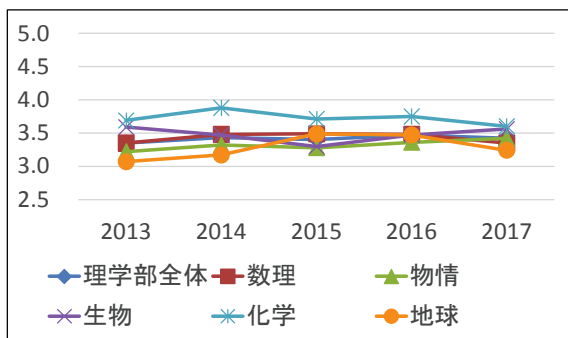


図1 学生の授業外学習時間

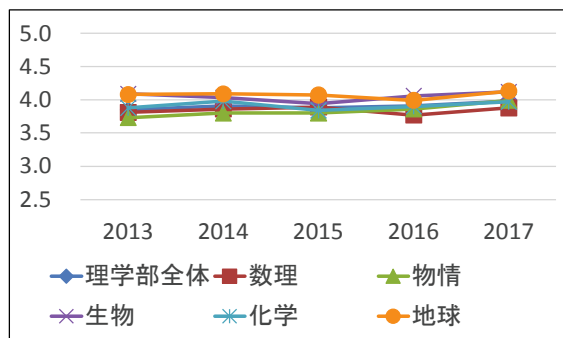


図2 学生の授業目標達成の自己評価

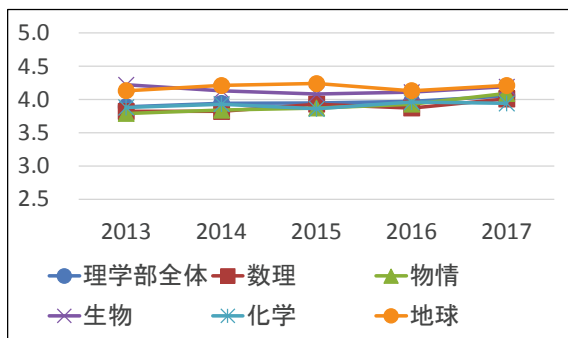


図3 学生の授業理解度の自己評価

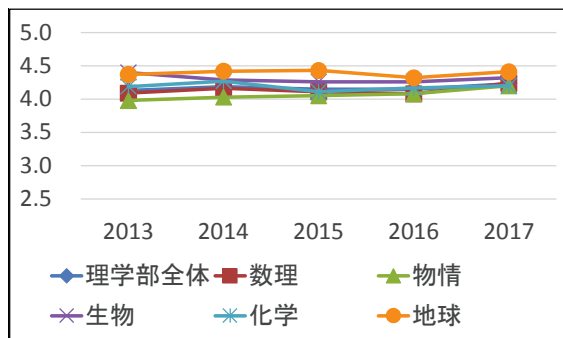


図4 学生の授業満足度

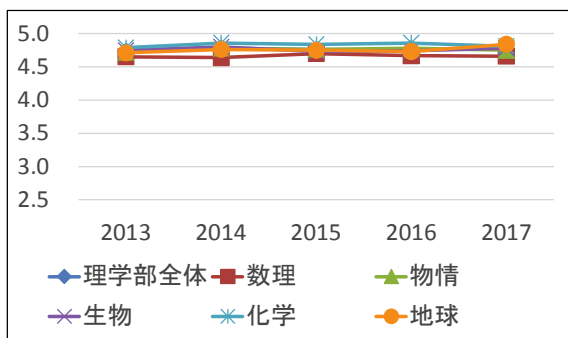


図5 学生の授業出席の自己評価

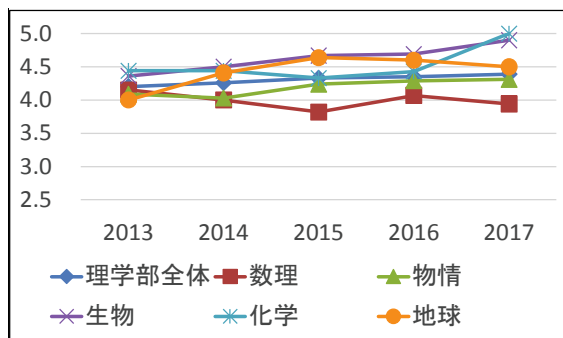


図6 教員側からみた学生の授業目標達成度

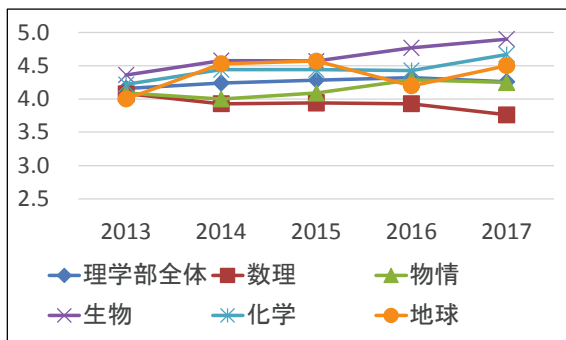


図7 教員側からみた学生の授業理解度

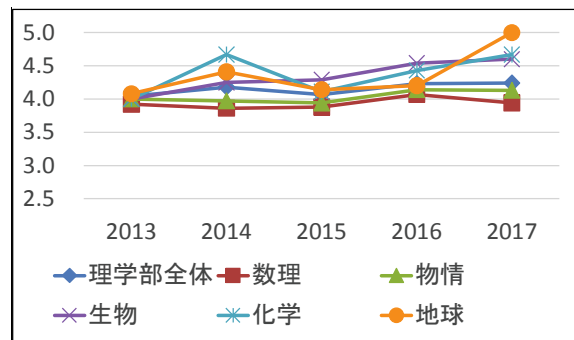


図8 教員側からみた学生の授業満足度

第5節 FD実施経費報告書

今年度は理学部ではFD実施経費を使用していない。

第6節 来年度の課題

各学科・分野のピア・レビューにあるように、授業内容に基づいた工夫・改善が毎年積み重ねられ続けられている。ピア・レビュー結果や授業評価アンケート結果を生かし、次年度の教育がよりよくなるように改善していきたい。

学生の学習時間の向上と教育効果の向上を狙い、eラーニングの活用が進みつつある。Moodleの利用実績も増えてきている。次年度以降もeラーニングの活用を推進していきたい。

学生授業評価の経年変化は、概して軌道に乗っているものと思われる。一方で、教員授業自己評価の経年変化は、年度毎に数値が増減し、安定していない。評価基準に関する教員へのFDが必要と思われる。

第8章 医学部のFD活動

第1節 授業公開

1.医学科

実施なし

2.保健学科

開催日時：平成29年12月6日（水）10：20～11：50

開催場所：S3教室

科目および対象学年：臨床病態学演習 検査3年

担当教員：山本 健教授

参加教員：19名

授業の内容：Case5 大球性貧血とLDH上昇を示した症例の検討
大球性貧血とLDH上昇を示した症例について

(1)あらかじめ与えられた課題症例の検査データからその病態の推論を行い

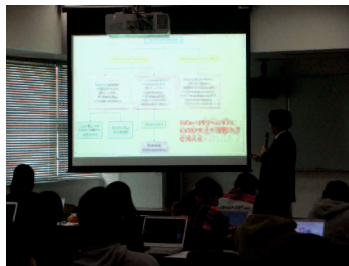
(2)授業で推論内容を発表する

(3)実病態の提示を受ける

という形式で展開された。



(2) 病態の推論の発表



(3) 山本教授から、病態の提示と解説 学習の整理とまとめ



授業前に、山本教授から、これまでの授業の流れと本授業の目的が話された。

授業では、大球性貧血とLDH上昇を示した症例のグループ発表の後、学生相互のディスカッションが活発に行われた。学生は熱心に事前学習をしており、自分の推論との比較をしたりグループへの質問を積極的に行った。議論が出尽くした後に、山本教授から、実際の病態について解説があった。学生はその解説を理解した上で、事前の自己課題を整理しまとめを行った。

本授業について、ピアレビューに参加した教員からは、演習の方法が学生相互の知的好奇心をかきたてるものであり、アクティブラーニングの効果的な方法を学んだというコメントが多く聞かれた。同時に、学習支援システムを利用した学生へのテストや課題提示などが解説され、教材提示の方法や評価の方法にも多くの示唆を得たというコメントがあった。

第2節 学部・研究科主催FD研修会

1. 医学科

医学科主導FD研修会

(1) 国試対策セミナー

- 1) テーマ：医師国家試験対策 セミナー
- 2) 開催日時：平成29年4月21日
- 3) 実施時間/回数：合計1.50時間 1.50時間/1回
- 4) 主催者：医学教育センター
- 5) 開催場所：学内
- 6) 企画立案者：医学教育センター
- 7) 講演出席者：講演者：4人 聴衆者：130人（6年生、コーチ関係者）
- 8) 講演1：国試の現状について
講演2：合格体験記
- 9) 演者/専門：学内教員/医学教育
- 10) 講演時間：1.50時間
- 11) 主な内容：医師国家試験対策についてのセミナー

(2) CBT問題ブラッシュアップ講習会及びワークショップ

- 1) テーマ：CBT問題ブラッシュアップ講習会及びワークショップ
- 2) 開催日時：平成29年4月21日
- 3) 実施時間/回数：合計3.00時間 3.00時間/1回
- 4) 主催者：医学部長
- 5) 開催場所：学内
- 6) 企画立案者：医学教育センター
- 7) 講演出席者：講演者：1人 聴衆者：33人
- 8) 講演1：CBT作問について
- 9) 演者/専門：学内教員/医学教育
- 10) 講演時間：3.00時間
- 11) 主な内容：CBT作問ブラッシュアップに関する説明とワークショップ

(3) 医学科教育主任説明会

- 1) テーマ：医学部医学科教育主任説明会
- 2) 開催日時：平成29年5月16日
- 3) 実施時間/回数：合計1.00時間 1.00時間/1回
- 4) 主催者：医学部長
- 5) 開催場所：学内
- 6) 企画立案者：医学教育センター

- 7) 講演出席者： 講演者：1 人 聴衆者：20 人
- 8) 講演 1：医学科教育主任の業務について
- 9) 演者/専門： 学内教員/医学教育
- 1 0) 講演時間： 1.00 時間
- 1 1) 主な内容： 平成 29 年度における医学科各講座教育主任の業務の説明

(4) 国際認証受審準備対応講演会

- 1) テーマ： 国際認証受審予定大学の講師による講演会
- 2) 開催日時： 平成 29 年 5 月 25 日
- 3) 実施時間/回数： 合計 1.50 時間 1.50 時間/1 回
- 4) 主催者： 医学部長・教務部委員会・教育 FD 部会・医学教育センター
- 5) 開催場所： 学内
- 6) 企画立案者： 医学教育センター
- 7) 講演出席者： 講演者：1 人 聴衆者：30 人
- 8) 講演 1： 岡山大学の国際認証の取り組みについて
- 9) 演者/専門： 学外講師/医学教育
- 1 0) 講演時間： 1.50 時間
- 1 1) 主な内容： 国際認証・分野別認証に向けての教育改善について

(5) 臨床実習入門実施担当者講習会

- 1) テーマ： 臨床実習入門実施についての説明会
- 2) 開催日時： 平成 29 年 7 月 5 日
- 3) 実施時間/回数： 合計 2.00 時間 2.00 時間/1 回
- 4) 主催者： 医学部長
- 5) 開催場所： 学内
- 6) 企画立案者： 医学教育センター
- 7) 講演出席者： 講演者：1 人 聴衆者：24 人
- 8) 講演 1： 臨床実習入門について
- 9) 演者/専門： 学内教員/医学教育
- 1 0) 講演時間： 2.00 時間
- 1 1) 主な内容： 臨床実習入門ユニットの実施について

(6) 医学科学生・教員合同研修会 (FD 部会企画講演会)

- 1) テーマ： カリキュラム説明と要望、魅力ある臨床実習
- 2) 開催日時： 平成 29 年 10 月 3 日
- 3) 実施時間/回数： 合計 1.50 時間 1.50 時間/1 回
- 4) 主催者： 医学部長・FD 部会・教務部委員会・医学教育センター
- 5) 開催場所： 学内
- 6) 企画立案者： 医学教育センター
- 7) 講演出席者： 講演者：4 人 学生 30 人 教員 8 人
- 8) 講演 1： 現行のカリキュラムへの要望等について 一学生の立場から一
講演 2： 今後のカリキュラムの編成の骨子について

講演3：魅力ある臨床実習のための取り組みについて

- 9) 演者/専門：学内教員/医学教育
- 10) 講演時間：2.00時間
- 11) 主な内容：カリキュラム説明と要望

(7) 展開系チュートリアルワークショップ

- 1) テーマ：医学科 プレ臨床実習チュートリアル説明会
- 2) 開催日時：平成29年12月12日
- 3) 実施時間/回数：合計2.00時間 1.00時間/2回
- 4) 主催者：医学部長
- 5) 開催場所：学内
- 6) 企画立案者：医学教育センター
- 7) 講演出席者：講演者：1人 教員14人
- 8) 講演1：展開系チュートリアルについて
- 9) 演者/専門：学内教員/医学教育
- 10) 講演時間：2.00時間
- 11) 主な内容：展開系チュートリアルの実施について チューター対象の講習

(8) シラバス作成講習会

- 1) テーマ：医学科 シラバス更新説明会
- 2) 開催日時：平成29年12月19日
- 3) 実施時間/回数：合計2.00時間 2.00時間/1回
- 4) 主催者：医学部長
- 5) 開催場所：学内
- 6) 企画立案者：医学教育センター
- 7) 講演出席者：講演者：1人 教員54人
- 8) 講演1：シラバスの更新について
- 9) 演者/専門：学内教員/医学教育
- 10) 講演時間：2.00時間
- 11) 主な内容：医学部シラバス(e-YUME)の更新について
ユニット責任者及びシラバス担当者への講習会

(9) 臨床実習ログブック説明会（教育改善FD研修会）

- 1) テーマ：医学科 臨床実習ログブック説明会
- 2) 開催日時：平成30年1月23日
- 3) 実施時間/回数：合計2.00時間 2.00時間/1回
- 4) 主催者：医学部長
- 5) 開催場所：学内
- 6) 企画立案者：医学科教育FD部会・教務委員会・医学教育センター
- 7) 講演出席者：講演者：1人 教員24人
- 8) 講演1：臨床実習ログブック改訂の概要説明
- 9) 演者/専門：学内教員/医学教育

- 1 0) 講演時間： 2.00 時間
- 1 1) 主な内容： 臨床実習ログブック改訂の概要説明
記載・評価方法の説明、miniCEX 説明

(1 0) CBT 試験問題作成講習会

- 1) テーマ： CBT 試験問題の作問
- 2) 開催日時： 平成 30 年 3 月 26 日
- 3) 実施時間/回数： 合計 2.00 時間 2.00 時間/1 回
- 4) 主催者： 医学部長
- 5) 開催場所： 学内
- 6) 企画立案者： 医学教育センター
- 7) 講演出席者： 講演者：1 人 聴衆者：37 人
- 8) 講演 1： CBT 作問について
- 9) 演者/専門： 学内教員/医学教育
- 1 0) 講演時間： 2.00 時間
- 1 1) 主な内容： CBT 作問に関する説明

2. 保健学科

保健学科主導 FD 研修会

(1) 第 1 回保健学科 FD 研修会

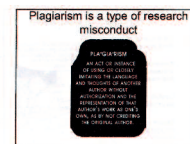
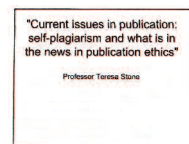
開催日時：平成 29 年 7 月 3 日 (月) 17:30~18:00

開催場所：HD1-1

講師：N&HS 編集長 テレサ・ストーン先生

参加者： 39 名

テーマ：論文作成における最新課題：自己盗用と今話題の倫理について
Nursing & Health Sciences 講演会との共催



上記はパワーポイントのタイトルと資料の一部

論文の盗用については深刻な倫理的な問題であるが、自分自身の論文を引用する際の手続きができていないと自己盗用につながるという内容であった。講演では、論文査読の演習を通して、どこに倫理的な問題があるのかを検討した。他者の尺度を使用する際の手続きや、インフォームドコンセントの具体的内容、個人情報表現の範囲等、通常見過ごしがちな事柄を、演習を通して倫理的課題として検討し、有意義な FD となった。

(2) 第 2 回保健学科 FD 研修会

開催日時：平成 29 年 8 月 2 日 (水) 14:30~16:00

開催場所：HD1-1

講師：山口大学名誉教授 市原清志 特命教授、地域・老年看護学 堤 雅恵 教授

参加者：40 名

テーマ：交流集会：科研申請のポイント

科研審査委員経験を有する保健学科内の 2 名の教授に、申請書の書き方のポイントをそれぞれ 20 分間レクチャーしていただいた後、質疑応答を通してインパクトのある内容豊かな申請書の作成について検討した。講師の市原清志特命教授は基盤 A の助成金を獲得されており、助成金を獲得できた場合と、出来なかった場合の申請書を比較して、ポンチ絵で分かりやすく表現することの重要性等を講演された。堤雅恵教授は、科研審査員表彰を受賞された経験から、インパクトのある申請書とはどのような申請書かを講演された。両教授の講演は、申請のポイントを強調しつつも、研究の原点（研究の目的やデザインの一貫性等）について述べられた。

講演の後の質疑応答では、(今回から申請書類が変わるため) 書類に関することや、業績の記述に関する事等、積極的なディスカッションが行われた。

7 月 31 日の科研申請事前講習会『基本の“き”』研修会の 2 日後に行った研修会であったが、70% 強の教員の参加があった。

平成 30 年度の科研交付金内定一覧によると、新規に 10 名の教員の内定が報告されており、FD の効果は十分に発揮されたと思われる。

(3) 第 3 回保健学科 FD 研修会 (看護学科)

開催日時：平成 30 年 2 月 9 日 (金) 16:00~17:30

開催場所：HD1-1

講師：文部科学省 高等教育局医学教育課看護教育専門官 齊藤しのぶ先生

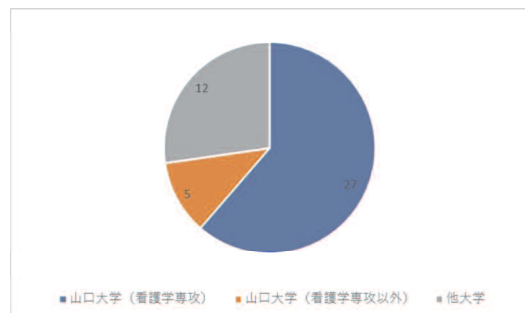
我が国における看護学教育の課題と 我が国における看護学教育の課題と国における看護学教育の課題と 我が国における看護学教育の課題と看護学教育モデル・コアカリキュラム」

平成 29 年 10 月に「大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会」から「看護学教育モデル・コア・カリキュラム」が報告された。それを受けて、看護学領域では、守田領域長、教務委員を中心に、看護学領域の教員全員が、看護学領域のカリキュラムがモデル・コアカリキュラムの教育内容を網羅できているか検証してきた。その結果、本領域のカリキュラムはモデル・コア・カリキュラムを網羅していることがわかった。(このプロセスも重要な FD であった。)

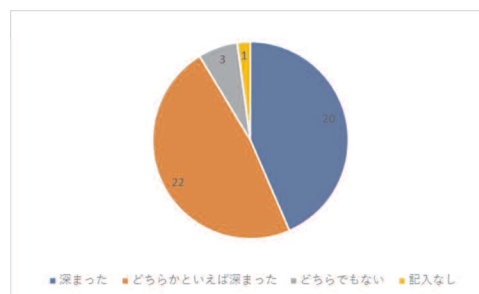
このことを踏まえて、齊藤専門官は、なぜ今モデル・コア・カリキュラムなのか、といった内容を講演された。講演には、山口県立大学、フロンティア大学の教員も参加され、講義後は、活発な議論が行われた。以下は講演の評価である。

FD 評価結果

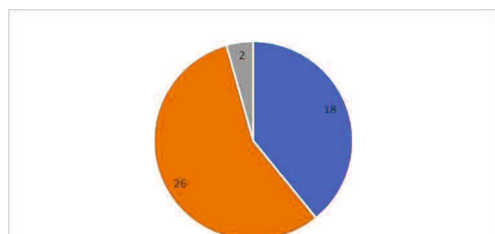
1. 所属



A. 看護学教育の課題に対しての理解は深まりましたか？



B. コア・カリキュラムに対しての理解は深まりましたか？



自由記載

A について

- ・背景や経緯を聞かせていただいたので理解が深まった。
- ・よく理解できた。
- ・新しい情報はなかったが、情報の確認はできた。

3. 大学教育機構との共催FD研修会

(1) 医学科

平成29年度 教育改善FD研修会 (医学部医学科・医学系研究科)

日時 平成29年10月11日(水) 13:00～13:50

場所 医学部本館 6階 第1会議室

参加者 43名(アンケート回収32名)

担当者 林 透 (大学教育センター准教授)
白澤 文吾 (大学院医学系研究科 教授)

内容

はじめに、医学部FDコーディネーターの藤宮教授から本研修会の概要説明が行われ、その後、林准教授及び白澤教授によって、以下の順で説明があった。

1. 3つのポリシーを巡るこれまでの経緯
 2. カリキュラム・マップ、カリキュラム・フローチャート(CFC)の見直しについて
 3. カリキュラム・マップの「○付け作業体験」、意見交換
 4. 新コアカリキュラムについて
 5. 質疑応答
- 以下にまとめる。

1. 3つのポリシーを巡るこれまでの経緯

概ね次のような内容で講話があった。ここ10年近く日本の大学教育の在り方として3つのポリシー(DP, CP, AP)に基づいた大学教育の質保証、マネジメントが行われてきており、本学でもPDCAサイクルの中で質保証を図ってきたが、カリキュラム・マップ、CFCを見直しながらカリキュラムの充実を図っていきたいというのが今日のポイントである。平成17年辺りから中教審答申でもAPはもとよりCP, DPを明確化して学生の教育の質保証、学習成果をしっかりと担保できるようなアウトカムベースの教育をしてくださいというトーンが強くなってきたのがこの10年くらいの動き。高大接続で確かな学力を育成するというトーンが強くなる中で3つのポリシーの重要性が増しており、法令の改正の中で3つのポリシーを策定して公表することが義務化され平成29年4月には公表することがマストになった。

本学では昨年、ディプロマ・ポリシー検討ワーキンググループで見直しを図ってきた。次の段階としてカリキュラム・マップやCFCの見直しをしていこうという話を今日させて頂いている。どう見直したかと言うと、文科省のガイドラインでも示されていたが、従来よりも育成する力が明確化する形でDPを成文化して頂いたと思う。CPにおいてもカリキュラムの詳細な構成、6年課程での階層性、順序性、その中で学生の成果、評価を明文化してくださいというのが今回の3つのポリシーの見直しのポイントで、きちんと見直してもらったと思う。APは入試改革が確定してないところがあるのでマイナーチェンジで留めており、今後見直しもあろうかと思う。その中で今日、カリキュラム・マップ、カリキュラム・フローチャートも見直しを確認していく作業の説明をしている。

2. カリキュラム・マップ、カリキュラム・フローチャート(CFC)の見直しについて

設問1

研修会に参加した感想はいかがでしたか？

選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	4	12.5%
良かった	23	71.9%
どちらとも言えない	5	15.6%
あまり良くなかった	0	0.0%
良くなかった	0	0.0%
無回答	0	0.0%
合計	32	100.0%



カリキュラム・マップと CFC とは何であるかについて説明があり、今日は先生方の授業科目で寄与する DP の重み付けを見てもらい、各先生方にカリキュラム・マップの意味 CFC の意味、個々の授業がカリキュラムの中でどういう位置付けにあるかについて共通認識を持って頂くための研修会であること、すべての科目がいずれかの DP に寄与していないとカリキュラムの一要素を成していないことになるのでしっかり確認いただきたい事、それに基づくカリキュラムマネジメントのためのチェックリストにして頂きたい事等の説明があった。

3. カリキュラム・マップの「○付け作業体験」、意見交換

現在医学教育センターで作成中のカリキュラム・マップを元に、担当科目の○付けの状態を確認してもらった後、医学部以外でもカリキュラム・マップを作ってもらっているが、教務担当の一部の教員だけでまとめて、作ってそれまでというところもあったので、自分の授業科目と DP の関係性を確認して頂くと共に、カリキュラム・マップを完成させた後も、カリキュラムは動く物であり、時代の変化によって育成するものも変わってくるので学科内での点検、FD の材料にしてもらいたいと説明があった。

その後、数分程度時間を取り、担当科目のカリキュラム・マップへの○付けについて隣の先生と意見交換を行ってもらった。

4. 新コアカリキュラムについて

講師の交代を行い、白澤教授よりトピックスということで、今回改定になった医学教育モデル・コア・カリキュラムについての以下のような説明があった。

各大学が策定する「カリキュラム」のうち、全大学が共通して取り組むべき「コア」の部分抽出し、「モデル」として体系的に整理したものであり、各大学における具体的な医学教育は、学習時間数の 2/3 程度を目安にモデル・コア・カリキュラムに準拠し、残り 1/3 程度は各大学が地涌的に編成することになっている。そのような中で今後、日本医学教育評価機構による医学教育分野別評価基準が始まるので、整合性が今後の課題になる。医学教育において、国際基準としての必要事項をカバーするために必要最低限な学習項目に加えて残り 1/3 の部分を上手く使って大学の自主性保つようになっている。

だいたい 7~8 年周期で改定があり今回が改定 3 回目で、多様なニーズに対応できる医師の養成が今回のキャッチフレーズになっている。専門教育のみならず総合診療、地域、在宅もろもろ含めて大学で教育しなさいと言うことになると思う。その中で医師として求められる基本的資質能力として新たにプロフェッショナリズムが明確に出されてきたのと、もう 1 点は、再来年度から全大学で一斉に始まる臨床実習終了後の OSCE、今は 4 年生の冬にやって臨床実習に入っているが、それが終わった後に卒業試験と同等のような感覚で POST CC OSCE を全大学同時にやらなくてはならないということが決まっている。このために、おそらく 6 年生の夏くらいにそういう日を設けて一斉にやらないといけない状況になると思う。その見返りとして今年度から国家試験が 3 日から 2 日に短縮され問題数も減っていく流れになっている。

eYUME の中に今年度の医学教育コアカリの資料を入れている。印刷すると 3~400 枚あるので先生方全員にお配り出来ないし紙代の経費も掛かるので各自でご覧いただきたい。

改定の概要、1 つ目は臨床研修の到達目標との整合性を合わせる、もう 1 点はモデル・コアカリの中で国試の出題基準や臨床研修の到達目標、生涯教育との整合性も合わせる、山大にダイレクトに関係するのは、医師として求められる基本的な資質・能力を実質化、診療参加型臨床実習の充実、地域医療や地域包括ケアシステムの教育体制の構築、腫瘍についてさらにページが割かれる状況となっている。

残りは指導の方略への言及、準備教育、目標の整理として一般目標と到達目標を狙いと学修目標に、総量はスリム化されていて、医学用語の表記の整理と、世界へ発信するようなことをやってください

という内容になっている。

現在医学科のカリキュラムの流れは、1年で共通教育・医学入門やって、2年～3年にかけて基盤系社会医学系科目、高度自己修学があって、そのあと展開やって、OSCE、CBT やって臨床実習に入っていく。卒業試験のところに2年後には POST CC OSCE が正式に入ってくる。で、国家試験。もう1つはすべての学年にわたって、Open Science Club や SCEA, AMRA コースがなされているという状況になっている。

医学部医学科の7つのDPで、7番の統合的診療能力として統合された知識・技能・態度に基づき、全身を総合的に診療する実践的能力を習得する。その中で、患者中心のチーム医療を安全に実践できるということで、臨床推論力、診療技能、医療安全力等が求められている。

本コアカリに関しては本学のDPとマッチしているということで今回はDP7番の総合的診療能力を臨床部分のチェックで切り出している。

臨床実習で求められている物の1つは診療チームの一員として一定の役割、責任を担いながら行うということ。正統的周辺参加というような言い方がされるが、学生に出来るようなところから少しずつ責任を持たせてやっていく。それが診療参加型の1つの方策だという風になっている。

その中で、臨床推論力や基本的診療技能、実践的診療能力、医療安全力を高めていくことになる。

その項目の中には病歴聴取、判別診断、検査の結果を解釈、診療録を記載する、これを指導医に口頭でプレゼンテーションするというところが基本的な流れ。こちらに関しては、このような流れになるように既に教育主任会議等を通じて各診療科の先生にお願いしている所。

もう1つ、基本的臨床手技については、目的、適応、禁忌、合併症と実施法について事前に十分に理解するということが必要になってくる。今日は省くが、その中でコアカリの「F 診療の基本」の中に記載されているので、こちらの方でしっかり確認して頂いてから基本的臨床手技を行って頂くという流れになる。

臨床検査についても、基礎知識、臨床推論、身体診察等もろもろのところを大事にしていかなければならないという風になっている。

具体的な臨床実習の大きな柱の1つとして、今日先生方に覚えておいて頂きたいのは、新コアカリでは、内科、外科、小児科、産婦人科、精神科というのはそれぞれコアカリが列挙されているが、それら以外の診療科についてはそれ以外という風になっている。ですから今後は時代の流れと共に、内科、外科、小児科、産婦人科、精神科をしっかりとやって、それ以外は各大学の裁量の中でやってくると。傾斜して教育していけるという流れにいずれなっていくのではないかと思っている。内科を履修する場合の狙いは、1番に内科医にならない場合にも必要な内科領域の診療能力について学ぶということになっている。2番目が内科医のイメージを獲得するというような事になっている。外科に関しても外科医にならない場合と、要するにそういう事を求められているということが今回のコアカリの狙いの特徴になっている。

学修目標に関しては通常通りだが、一番最後に必ず、どのように内科にコンサルテーションすれば良いか分かったと、こういう事をしっかりと学生の時代には臨床実習では指導しなさいというような流れになっているのが大きな違いかと思う。

今年度、モデル・コアカリが改定になっている。2年後には分野別認証評価も実施するというような流れとなっているので、臨床実習の充実化と言うことで、臨床推論の具体化が一つと、もう1点は学修と評価の記録の具体化と言うところを進めていかななくてはならない。そのような中で Mini-CEX の説明会を来月行いますが、実際に患者さんを学生に診察させて、それを横で指導医が見ながら評価して、形成的評価を相互にするというようなことを少しずつ初めて行かなければならないということになっている。

最終的には、臨床実習期間は延長した。今後、診療参加型臨床実習の充実化と学修記録と評価法の整理、一言で言うと、とりあえず出来ることとして、ログブックの充実等がある。現在は学生が出したり、出さなかつたりなので、教員サイドも各科によって方針が違っているように思いますが、毎回

臨床実習が終わる毎に少し時間を取って頂いて学生と指導医の間で相互評価を行って形成的評価を行うというような事が積み重なって行って最終的な総括評価というような流れになっていくという風に考えている。

5. 質疑応答

以下のような質問があった。

Q: 私担当している救急では4年生に講義するが、系統講義においてDPにどう該当するか確認すればよいか?

A: そう。ご自身の担当の科目について。

Q: 最初のミニWSについて教えてほしい。カリキュラム・マップとCFCがあって、僕の理解していたのはCFCを作ってそれぞれ今回の7つの力を付ける事を1年~6年のどの学年、どの領域でやってもらうかを作った後に各診療科の講義がそれに該当するという風に理解した。今日はミニWSなので先生たちが教えている講義がどれに該当するかというWSという理解で良いか?

A: その通りです。順序性からいうと、今日の資料3の裏面に医学科から頂いた学年教育進行プログラムでDPの6年間の階層性の説明があって、多分まずこういうのがその後CFCも準備されているので、まずこのフローチャートがあったうえでカリキュラム・マップを作って頂くという作業になる。ただ、今日はWSと言うことで先生方個々の到達目標とDPの関係性を共通認識持つてほしいという辺りに重きを置いています。

A: 資料3の裏で、進行プログラムがプロフェッショナリズムを中心にまとめてある。理屈上は先にDPがあってカリキュラムがあるが実際問題今までの歴史的物があって、コース、ユニットがあって、それからDPとの関係になる。参考資料2は正式に決まってない案の段階だが、左にDPと言う格好で医療基盤力、地域・国際対応力、医療プロフェッショナリズム等載っている。下位項目は医学部長、病院長会議の方から卒業時の医学教育モデル・コア・コンピテンシーという形で出ていて、これも先に医学部長会議から出てきているけれど、こういったのを卒業時まで身に付けてもらいたいという形で出ている。山口大学のDPは元々コアカリをもの凄く意識して作っているのだから、医学部長会議のモデル・コア・コンピテンシーを丁度上手い具合に入れ込むことが出来て、単純に入れ込んだのがこの形になっているので、おそらくこれを認めてもらったらこういった格好になる。聞いてもらおうと総合的診療能力のところを自分たちで決めると結構大変だが、医学部長会議の方で、医療面接、身体診察、臨床技能、診療録、プレゼンテーション、救急医療、慢性期医療等がずっと載っておりまして、ある意味、医学部長、病院長会議の方からこういうのを教えろというかそういう形になっているかと思うのでご参考をお願いします。

Q: これはお知らせだが、資料2でミニWSで◎とか○とか見て頂いたが、あれは医学教育センターの方で、まっさらな状態で確認して頂くと非常に手間でお手をお煩わせるということで、とりあえずこちらで◎○△している。別にすごく細かく考えて悩み上げてこういう風に記載しているわけではないので、これに関してはいずれ近いうちに各ユニットの責任者にお送りして確認して頂いて修正したものをこちらの方で取りまとめて、それを次年度に使っていくというような流れにしているのでそのように思ってください。

A: 現在とりあえず作って頂いた主題とか到達目標について修正等がありましたら医学教育センターの方にご連絡してもらえたらと思います。

A: 今の関係で全学的な動きの事をお知らせしておきます。今日は研修会と言事でWS入れさせていただいたが、この後、教育学生担当の副学長名で今のカリキュラム・マップ、CFCの作成の正式な依頼をさせて頂くことになると思う。ここで作って頂いて割と時間を取っている。来年の9月末までに全学では整備するという流れなので医学科は早めに進んでいるので、学部で確定の作業進めてもらうのと、お知らせ頂ければ大教センターでもサポートするのでお願いします。

Q: 後半のプレゼンの事で教えて欲しい。臨床実習が内科、外科、小児科、産婦人科、精神科、後の領域がその他になっていて、僕は救急ですけど、救急は必ずしも必修化されずに選択になっている可能性があるということですか？

A: すみません。おそらく救急も独立してありました。それとはまた別の質問だと思いますが、将来的にはとりあえず必ず教えなくてはならないところを優先してやれというような流れになっているみたいです。いくつかの大学は先進的に先んじて、例えば3つくらいの科は2つ選択とかやってみてほしいんです。ただ、それは必ずしも上手く行かなかったと。一つにはやっぱり日本の医学部の場合には医局へのリクルートが同時に絡んでいるんですね。それがあって、結局いろいろあってまた元のような全ての診療科が必修という感じに戻っていつてしまっているところがあるらしいです。ですので、まだすぐとは思いませんけどもうしばらくすると2週間ずつの21診療科と言うようなことを臨床実習1でやっていくというのがどうなるのかと言うところは感じています。その分を臨床実習2のところで選択制で充実させるというやり方もあるみたいなのですが、一応基本的にはすべて同じ比率ではありませんよと言うようなニュアンスではあるようです。

Q: 質問したかったのは今日のカリキュラム・マップ、系統講義のことやりましたけど臨床の方しか僕知りませんが、やはり臨床実習でプロフェッショナリズムがいろいろ教えていく、総合判断力あると思うんです。そこがもし実習が削られていくとか、もし選択制になるなら系統講義をかえないといけないので、またお知らせがあったら教えてください。

A: 基本的には大学の裁量権の中で出来るとは思っていますが、確かにそういう事ございますのでまた何かありましたらよろしくお願いします。

Q: 成績評価の方ですけど、これも確か、ルーブリック評価でやるとなると、DPの7つのコンピテンシーに当てはめるとなった場合に特に医学部の教育の場合は非常に偏っていますので、そうなった場合に大学本部の評価のルーブリックでやるというのは非常に難しいと思いますけど、そのところは従来通りの評価で良いのか、あるいは大学本部の新しい評価方法でやらなくちゃいけないか、非常に医学部の場合はアダプテーションが難しいように思うのですが如何でしょうか？

A: まず個々の授業科目については、今のカリキュラム・マップ、到達目標あると思うので、そこにおいてしっかりと成績評価していただければいいと思います。その大きな風呂敷としてカリキュラム・マップとかあってその中に位置付けられていけばまずそれでいいのかなと思います。いろんな動きありますが、まず先生方、今、各授業で求められているところについて、それからいろんな評価方法も新しい物も求められていますけど、そこをまず着実にやって頂くというところがまず大事かなと思っています。

A: そこも大事なところですけど、まだ決まってないので、また検討していきたいと思っています。

アンケートでは以下のような意見があった。

感想

- 成績評価(ルーブリック)は大学の中期目標にも入っており、今後導入していかなければならないと思うが医学部の講義をどのように適合させるか問題がある。
- DP、etc がわかった
- 教育カリキュラムの全体像がよくわかった。
- カリキュラムを改めて確認することができよかったです。
- 具体的にブラッシュアップしてみないと、どのように変更・対応すべきかよくわからなかった。

希望する研修内容

- 新しい講義法、評価法など
- 学んでいけないといけないと思うので教員は教育についてよく知らないなので教育についてのFDがあればよいと思う。
- 教育手法について学びたい。

- 今日のような内容が良いです。
- 他大学又は外国との相違など。
- 作業が発生する内容だと、いやおうなく出席するモチベーションとなる。
- 行うべき作業を一部行うなど、より具体性が高い内容が良い。
- 他大学の現状(例えば中国地方及び地方別)の共有があると、特色の再認識できるのではないかと。
- 教員としての質を向上させるような内容のセミナー
- 私は医学部の基礎系講座に所属していますが、私の **back ground** は医学部ではない為、臨床で特に重要と思われる個所・観点に自信がなく、もし機会があれば、臨床の先生と重要な個所の話し合い **or** 指てきする時間があると、今後どのような実習・講義をすればよいか方針が立てられ嬉しいです。
- 他大学でのモデルケースなど(どのようにカリキュラム改革を行ったかなど)、アクティブ・ラーニングの実例の紹介、※実例を示していただくとイメージがつかみやすくなると思います。

参加したくない理由

- 例えば **diploma policy** を本当に理解している人間が上にもいるのか?(20~30年前の日本の医学教育でも国際的に活躍する **Dr.** は多数出ている)
- 具体性に欠けてよく分からない。言葉の独り歩きのような気がします。毎回聞いていてイライラする。

実施時期

- 夕方が良いです。
- 複数日で開催しないと参加できない人がいると思います(全員参加義務ならば)。
- 診療が終わっていませんでした。

実施場所

- 教授以外の **Dr.** は入りにくいです。
- 席がすわりにくかった。教授席だと。
- もう少し広い場所が良いのではないかと。
- 総合研究棟 1階 **S1** がよい。
- **S1**、もしくは第 3 講義室(全員参加義務ならば)。

その他

- いつも教員の参加が少なく勿体ないと思いますので例えば各講座の教育主任は出来るだけ中心的に積極的に参加などある程度必修化することも必要ではないかと思いました。

以上



(2) 保健学科

平成 29 年度 教育改善 FD 研修会 (医学部保健学科)

指定研修：教育改善FD

開催日時：平成 29 年 8 月 23 日 (水) 14:30~16:00

開催場所：総合研究棟 HD1-1 教室

講師：大学教育センター 副センター長 小川 勤 教授、木下 真 准教授

テーマ：カリキュラムマップ、カリキュラムフローチャートについて

参加者：32 名

内容

研修会は 2 部構成実施された。第 1 部の冒頭、医学部保健学科田中愛子教授から研修会の主旨の説明があった。その後、図 1 のように木下准教授により、資料に沿って以下の説明があった。①3 つのポリシーを巡るこれまでの経緯、②カリキュラム・マップ(CUM)の見直しについて、③意見交換。

第 II 部では領域別に班を編成し、カリキュラム・マップの「○付け作業体験」ワークショップを実施した。その後、発表や意見交換が行われた。

①については、平成 27 年 1 月の文部科学省による「高大接続改革実行プラン」の公表から、平成 28 年 3 月 31 日に大学教育部会から出された 3 つのポリシーの策定に関する「ガイドライン」発表、学校教育法施行規則の一部改正の省令交付までの国・文部科学省の一連の経緯について説明が行われた。その後、それを受けての本学の動きと 3 つのポリシーの策定と今年度 4 月の公開が説明された。

②については、ディプロマ・ポリシー (DP) の見直しを受けて、各科目と新しい DP が一体化しているかどうかの確認のために、カリキュラム・マップの見直しが必要であることが説明された。医学部保健学科で過去に策定された現行のカリキュラム・マップ、そして、新しく策定されたディプロマ・ポリシーが紹介された。

第 II 部では、カリキュラム・マップの「○付け作業体験」、意見交換ワークショップと意見交換が行

設問1 研修会に参加した感想はいかがでしたか？		
選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	2	7.1%
良かった	20	71.4%
どちらとも言えない	4	14.3%
あまり良くなかった	1	3.6%
良くなかった	0	0.0%
無回答	1	3.6%
合計	28	100.0%



図 1 講演中の木下准教授

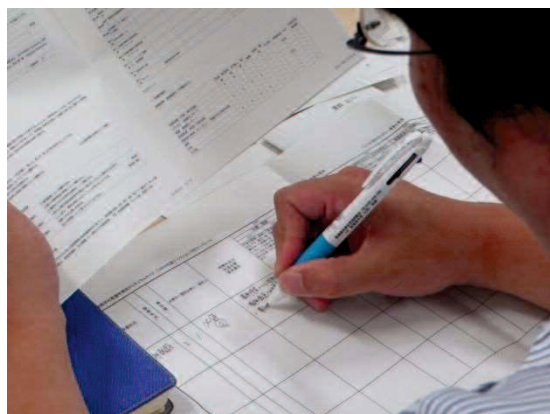


図 2 個人ワーク



図 3 グループワーク

われた。予め準備しておいたカリキュラム・マップの雛形が配布され、図2のように各教員が自分の担当している授業科目について、到達目標を記入し、◎、○、△付け作業を行った。その後、図3のように同じ領域の他の教員とカリキュラム・マップについて意見交換を行った。

最後に、現行のカリキュラム・フローチャートが紹介され、カリキュラム・マップの見直し後はカリキュラム・フローチャートの見直しが必要であることが説明された。現行のカリキュラム・フローチャートは平成23年度に導入した新しい共通教育が反映されていないため、新しいものを策定する際は考慮する必要があることが付け加えられた。

研修会後のアンケートでは78.5%が概ね良かったという意見だった。

なお、研修参加者からは以下のような質疑応答があった。

(質問1) 今回のカリキュラム・マップの○付けと以前説明があったYU-COB-CUSとはどのような関係があるのか？

(回答) 今回の○付け作業は、DPが昨年度改訂されたことを受けて行われるものである。YU-COB-CUSの導入については、次年度あらためて作業の進め方を含めて各学部と協議していく予定である。

(質問2) 同じDPのところ○が偏在化する可能性があるが、それでもよいのか？

(回答) 専門教育の場合、○付けされた結果、そのような傾向が時々見受けられる。その際にはDPの設定そのものがよかったのか。科目の編成がこのままでよいのかを考え直す必要がある。ただし、医学部保健学科のように職業資格に結び付いたコア・カリキュラムで運用されている場合にはカリキュラムそのものを変更することは難しいと考えられる。



図2 気付きの発表の様子



図3 質疑応答の様子

第3節 教育改善に関する活動

1.医学科

(1) カリキュラムマップ等の見直し

医学科のディプロマポリシー・カリキュラムポリシーの改定に伴い、カリキュラムマップの作成とカリキュラムフローチャートの見直しのために、授業科目の主題及び到達目標の作成を行った。

新 eYUME の改定検討に当たり、授業科目の主題及び到達目標を記載するようにした。平成 28 年度 3 月に医学教育コア・カリキュラムが改訂されたので、それに従って改善を行いつつある。

(2) 新 eYUME への改訂準備

平成 30 年度から新 eYUME の運用を目指して検討が行われた。平成 28 年度末に改訂された「医学教育モデル・コア・カリキュラム」では、「学修成果基盤型教育 (outcome-based education) を骨組みとし、学生が卒業時までには修得して身に付けておくべき実践的能力を明確にして、客観的に評価」することが求められている。これに対応し、H30 年度より、授業毎に身に付けるべき”学修目標”を設定し、eYUME に掲載するように改定した。学生は、講義の都度、設定された学修目標がどの程度身に付けることができたかを自己評価する。また、ユニット毎に山口大学独自の”到達目標”を設定しており、学生はユニット終了後に、”到達目標”もどの程度身に付けることができたかを自己評価できる。これらの自己評価により、学生毎の”学修目標”と”到達目標”の達成度合を、担当教員が把握することも可能となっている。

臨床実習についても、診療科ごとの評価を、eYUME を通じて把握し、その結果を診療科にフィードバックすることにより、臨床実習の向上にも役立つように改定を行った。

このように、eYUME を活用することにより、学生と教員が双方向での情報交換が可能となり、教員が学生の学修成果を把握し、最終的に、国民から求められる倫理観、医療安全、チーム医療、地域包括ケアシステム、健康長寿社会などのニーズに対応できる実践的臨床能力を有する医師を養成することが可能になると考えている。

(3) カリキュラムの国際認証に向けての準備の加速

国際的教育基準に合わせてカリキュラム改革が行われてきたが、医学教育分野別評価懇談会を設置し、世界医学教育連盟の「医学教育の国際基準 2015 年版」に準拠した日本版医学教育分野別評価基準について各項目を詳細に自己点検し、必要な小ゴールとプロセスを割り出してきた。合計 5 回の会議が開催され、その内容は、1)使命と学修成果、2)教育プログラム、3)学生の評価、4)学生、5)教員、6)教育資源、7)プログラム評価、8)統轄及び管理運営、9)継続的改良と多岐にわたり、多くの課題が検討された。随時、医学科会議で課題として提言がなされた。また、とアウトカム基盤型教育導入への認識の向上を図った。特に、統轄及び管理運営項目にあたる教育関係の組織建てについての検討が行われた。

(4) 拡大カリキュラム改善 WG の設置とカリキュラム改善検討

カリキュラム改革の内容については、学生と教務委員等からなる拡大カリキュラム改善 WG を開き、学生のカリキュラム等への要望を聞き、国際的教育基準に合わせた教育改革へ向けてのカリキュラム改善の検討を行った。特に、授業コマ数の削減とユニット配置時期などが検討された。

(5) eLearning 導入の加速とルーブリック評価普及の試み

Moodle と eYUSDL を活用して、ルーブリック評価を授業に導入する試行が行われた。eYUME の中でも、電子ポートフォリオ等の内容も新たに設置した。1～4 年生を対象にした電子ポートフォリオは eYUSDL を使用する予定である。

関連して、YU-AP と医学教育センターの共同企画の FD・SD ワークショップとして、「ルーブリックを活用した学修評価ワークショップ ～ルーブリックの観点と記述に着目して～」が平成 29 年 11 月 10 日、吉田キャンパスにて開催され、「学科チュートリアル教育におけるルーブリック活用実践」と題して医学教育センター副センター長の藤宮教授が講演し、eYUSDL を活用したルーブリック評価を紹介した。

(6) ログブックの改訂と FD 開催

24 年度から、臨床実習の手引き、さらには臨床実習ログブックを、毎年作成し配布するようになり 6 年が経過した。これは、臨床実習が始まる 4,5 年生、および 6 年生を対象としたものである。山口大学の医学部医学科 4～5 年生は、一年間、大学病院の全診療科を 1-2 週間ずつ、一班 5 人のグループでローテーションする形式での臨床実習を行う。さらに 5～6 年生は、合計 24 週間、大学病院外の施設も含め、自由選択で研修を行うカリキュラムとなっている。国際認証を受審するにあたって、ローテーション先での実習内容はアウトカム基盤型のクリニカル・クラークシップ型へ転換が求められている。そのため、臨床実習の手引き・ログブックでは、その診療科で経験、学習可能な内容を明らかにし、その上で実習の目標を明確にしている。学生は、ログブックに各診療科での日々の実習で経験した内容を毎日記録する。さらに、一週間の終わりには、本人の感想、振り返りを記入し、その上で指導教員がフィードバックとしてのコメントを記入する。いわゆる、ポートフォリオ形式のログブックを活用することで、学生と教員とのコミュニケーションに役立つのみならず、それぞれが経験した内容を振り返り、成長の過程を自身が確認するようになっている。これらが実際にどのように学生教員に活用されているかを昨年度の 3 月にも調査し、多くの評価を得た。この調査の中で評価の高かった臨床実習部門について公表し、その教室の実習内容については学生と教員合同の FD を開催して「魅力ある臨床実習のための取り組み」として発表され、有益な情報交換が行われた。

また、国際的教育基準(分野別認証評価)と改訂された医学教育モデル・コア・カリキュラム(平成 28 年度版)に合わせて、臨床実習のアウトカム基盤型教育への改革の一環として、ログブックの改訂準備が行われた。特に、学生自己評価と教員評価の部分が改訂された。また、miniCEX 等の新しい実習評価方式の導入が試みられ、アウトカム基盤型教育へ向けて着実な準備を行った。

(7) 入試委員会による入試制度改革の検討

編入学試験の入試制度改革への対応と入試の改善に向けて入試委員会と学生委員会とが分離され、本年度から新しい入試委員会の活動が開始された。

既に、学士編入学の 2 年次編入が導入されて久しいが、編入学学生の質の検討の時期となった。入学試験時期や入学者の動向調査等を行い、入試改善の必要との意見が散見される様になったため、入学試験時期の変更案が検討され、了承され、その手続きが開始された。また、面接試験の方式についての検討がなされた。

一般入試については、大学入試制度の変革などの情報があり、それに対応するための検討を行った。

(8) 学生委員会の新設と担任制の導入、学生支援の充実化

本年度から新しい学生委員会の活動が開始された。学生支援の充実化を行い、個別案件に対応した。2年生秋からの担任制が導入・開始され、その学生配分等が検討された。

医学科の場合、卒業後に国家試験を受験し、その合格率が全国共通の教育成果の評価尺度としてある。これに加えて臨床実習が開始される前の時点で、共用試験 CBT、および OSCE が施行され、知識、技能、および態度に関する全国レベルの評価を受けることになっている。これらを勘案した結果、在学中の早い時期から成績不振者へ介入の行うべきであるとの方針に達し、2年生の段階からの個別指導を行ってきた。また、現行で行われている5年生からの個別指導（特別指導コース）も対象者を更に拡充して、卒業留年の6年生にまで広げて引き続き行っている。成績不振者を含めて6年生には国試対策セミナーを開催し、学生とコーチ担当の教員における意識の向上を図っている。

学業不振学生の指導や自主退学と再入学についての検討が行われた。これに伴い、再入学試験についての検討が行われ、再入学試験が行われた。2名受験し、1名が合格して6年生に再入学した。

(9) 教育主任制度の展開

平成25年度より、各講座、診療分野毎に、教育主任制度を開始した。これは、医学教育センターと、実際の教育を担当する教員グループとの情報の伝達、共有を密にすることにより、複雑化する医学教育を円滑に進めることを目的としたものである。教員間の戸惑いや伝達ミス等も散見されたが、概して軌道に乗りつつあると思われる。平成31年度の分野別認証評価の受審や新コアカリキュラムへの改訂に伴うカリキュラム改革の普及が行われた。

(10) 学外での地域医療実習の継続(6年目)

医学教育モデル・コア・カリキュラムに示されているように、これからの卒前医学教育は、幅広い臨床現場での、診療参加型の臨床実習が求められる。大学病院の高度先進医療とは異なる医療の教育を行うことが必要であり、大学病院外の地域の施設での臨床実習の充実が課題となってくる。このため、将来選択する専門領域に関わらず、プライマリ・ケアや地域医療に一定の理解・能力を有する医師を養成することが必要になってきており、医学科6年生を対象に、山口大学医学部近辺の各診療科同門の診療所を中心とした診療参加型地域医療臨床実習を3年前に導入した。山口大学医学部附属病院での全診療科をローテーションして行う実習（臨床実習1）が終了した6年生120名を対象に、必修臨床実習の一部として、平成29年4月に一週間行った。実習対象施設は、各診療科から大学近辺の同門診療所や病院を中心に推薦してもらい、臨床研修指定病院となっている施設については、本実習の趣旨と異なるために除外した。一施設あたりの学生は1~2名程度とした。実習内容としては、外来見学、診察、採血、処置、褥瘡・緩和ケア、予防接種、症例カンファレンス発表、訪問診療同行、巡回診療、あるいは、一次・二次救急体験等の、大学病院や臨床研修指定病院での実習経験が困難と考えられる内容を期待し、学生、および指導医を対象に、別々に説明会を開催した。学生の評価は、当学部が導入している臨床実習ログブックへの記入による形成的評価と、各施設の指導医からの総括評価で行った。

2.保健学科

国家試験対策

<看護学領域>

看護学科では、4年生を対象に看護師と保健師の模試を実施し、その結果を卒業研究のゼミ単位で面接等を通してフィードバックし、学習内容や学習方法の相談を行っている。少人数を対象とした学習相談で効果を上げている。平成29年度は、保健師 合格者 73名（不合格者7名）、助産師 合格者8名（不合格者なし）、看護師 合格者79名（不合格者1名）で、全国平均の保健師合格率 81.4%（新卒 85.6%）、助産師合格率 98.7%（新卒 99.4%）、看護師合格率 91.0%（新卒 96.3%）よりもはるかに高い結果であった。

<検査技術科学領域>

開催日時：平成29年9月21日、23日、25日、26日、27日 9:00～、13:00～、16:00～

開催場所：保健学科 第二研究棟3階HD1-1講義室

内容：4年生に対する講義及び問題演習

	10:30～	13:00～	14:30～
9/21(木)		臨床検査総論(山本健)	臨床科学(徳田)
9/23(金)		病理組織検査学(山本美佐)	臨床血液(山本美佐)
9/25(月)	細胞診(小林)	臨床微生物(常岡)	医用工学(西川)
9/26(火)		医用工学(小室)	臨床生理(田中伸)
9/27(水)	環境衛生(岡野)	臨床免疫(野島)	

臨床検査技師国家試験の合格率は70%台であり、国立大学においても同程度の合格率の大学がある中、看護、検査ともに常にほぼ100%の合格率を長年維持していることは、医学部保健学科の教育活動が優れていることを如実に表している。

第4節 学生授業評価・教員授業自己評価

授業評価については、医学科では医学教育総合電子システム[eYUME]上で、保健学科は、保健学科授業支援システム[FHS Web Campus]上で、教員自己評価及び学生による授業評価を引き続き行っている。またその結果については、教員へ直接フィードバックし、次年度以降の参考にしている。

第5節 FD実施経費報告書

FD研修・FD活動の内容	経費の用途 (購入物・旅費謝金等)	執行額(千円)	FD活動の効果(簡潔に)
国際認証受審準備対応講演会	講師謝金・旅費 1名 配付資料・消耗品他	90	今後の本学部の国際認証受審のために大いに参考になった。

第6節 来年度の課題

1.医学科

(1) カリキュラムの国際認証に向けての準備の更なる加速

卒前の医学教育の中では、米国 ECFMG (Educational Commission for Foreign Medical Graduates) が 2010 年 9 月に出した通達に端を発した教育カリキュラムの国際認証が、大きな話題となっている。これは、国際認証を受けた医科大学部卒業生に ECFMG の受験資格を限定するもので、米国での臨床医学の修練を受けるために試験の受験する必要条件として医科大学が評価されるようになった。これをきっかけに単に ECFMG の受験資格というより、グローバル化に対応した医学教育が求められてきている。日本国内では、この評価機関に対応する認証機関 JACME が立ち上げられ、国際基準に基づく認証評価制度が確立されようとしている。一部の先進的な大学では、すでに米国の認証機関の評価を受け、一部では国内の認証機関の受審が試験的に開始されている。この中でアウトカム基盤型教育 (OBE) と診療参加型臨床実習が求められ、本学でも、臨床実習 (時間数、内容) の大幅増加や、授業時間の 90 分から 45 分授業への変更が行われた。さらに、PDCA サイクルに基づいた、医学教育改善のシステムの構築が求められ、それを外部から評価されることになる。患者安全の観点からも、医学教育の質の担保は、近年の大きな流れの一つであり、本学でも、これに対する準備を組織的に進めていく必要がある。今後は OBE のためのカリキュラム改訂を予定し、教務委員会、学生委員会、入試委員会で分担して教育改革を行う予定である。

平成 31 年 10 月 28 日～11 月 1 日に分野別認証評価の受審が決定した。これに伴い、平成 30 年の夏頃から実質的な自己点検評価を行う必要があり、今後、委員会の設置・改変等から開始して行く予定である。

(2) 入試委員会による入試制度改革の検討

学士編入学の 2 年次編入が導入されたが、編入学学生の質の検討の時期となった。入学試験時期や入学者の動向調査等を行い、入試改善の必要との意見が散見される様になったため、入試委員会で検討されているが、更に進めていく予定である。また、大学入試制度の変革などの情報があり、それに対応するための検討を行う予定である。

(3) 学生委員会による担任制導入など学生支援の充実化

平成 29 年度より開始された担任制をさらに進展していく予定である。また、既存の特別指導コース (5・6 年生) との整合性の検討を行う予定である。

(4) 教育主任制度の更なる充実によるカリキュラム改革の普及

平成 25 年度より、各講座、診療分野毎に、教育主任制度を開始した。これは、医学教育センターと、実際の教育を担当する教員グループとの情報の伝達、共有を密にすることにより、複雑化する医学教育を円滑に進めることを目的とした。教員間の戸惑いや伝達ミス等も散見されたが、概して軌道に乗ったものと思われる。来年度は、今まで以上にこの制度の更なる活用により、より充実した内容

の教育を目指していく予定である。

(5) 学外での地域医療実習の更なる充実

将来選択する専門領域に関わらず、プライマリ・ケアや地域医療に一定の理解・能力を有する医師を養成することが必要になってきた。そこで、医学科5～6年生を対象に、山口大学医学部近辺の各診療科同門の診療所を中心にした診療参加型地域医療臨床実習を、3年前より導入した。次年度は、施設関係者との密なコンタクトを行い、実習内容の細かな検討、あるいは学生アンケート等を実施して実習の更なる充実を図りたい。

(6) 成績不振者への個別指導の更なる充実と対象学生の拡充

今年の医師国家試験では個別指導を受けた受験者13名中、合格者は10名(77%)であった。成績不振者はそれまでの個別試験で成績不良であった学生と卒業留年学生が選抜されており、この合格率は個別指導の効果があったと判断してよいと思われる。個別指導等の更なる充実と拡充に向けて、議論を加速させた。また個別指導対象学生のアウトカム調査も行い、それなりの効果があったことを確認できた。今後の課題として、低学年時の個別指導体制の構築と、医学科全体の対応としての担任制についても審議していく予定である。

(7) 臨床実習の充実化、miniCEXの普及

臨床実習の更なる充実に向けて、ログブックの改訂を行った。学生と指導教員の双方にログブックの有用性を理解してもらい、積極的な活用を今後も働きかける予定である。また、miniCEXの普及を予定している。

(8) eYUMEの改定とeLearningの普及

eYUMEを学生にとっての利便性向上に向けて改訂が行われた。医学教育コアカリキュラム改訂に伴うカリキュラム改革も本年度予定されており、eYUMEの改善の必要性に迫られている。臨床実習の更なる充実に向けて、ログブックの改訂を行った。学生と指導教員の双方にログブックの有用性を理解してもらい、積極的な活用を今後も働きかける予定である。

2. 保健学科

保健学科では、医療の変化や国際化に対応でき、医療チームの一員として活躍できるとともに地域医療の向上に貢献できる人材の育成を教育目標としており、この視点から現在の教育を更に充実させる予定である。国家試験については、今後とも高い合格率を維持するとともに、キャリア教育等の充実により進路への意識を高め、学生がスムーズに社会人として医療人として活躍していく環境を整えていきたい。加えて、大学院への進学者の増加についても取り組んでいきたい。

(1) 国家試験対策とその成果

授業外に教員が率先して、国家試験対策の講義をシリーズで企画し、行っている。保健学科ではほぼ100%の国家試験合格率を継続して達成している。臨床検査技師国家試験の合格率は全体では70%台で

あり、卒業研究、論文作成、多くの講義・実習をこなしながら、高い合格率を達成していることを内外に強くアピールする必要があると考えている。

(2) 国際交流と APAHL (Asia-Pacific alliance of Health Leaders)

国際交流活動に関しては、平成 29 年度は、APAHL が行われなかったため、チェンマイ大学看護学部との学部間交流、チェンマイ大学大学院医療研究科との大学院生交流を行い、国際交流マインドの醸成に努めた。その活動成果は報告書にまとめた。次年度は、APAHL (Asia-Pacific alliance of Health Leaders) などを通し、より国際的な人材育成のための努力を行っていきたい。APAHL への参加にあたっては、学生に対する英会話能力等の向上を促す取り組みを充実させる必要がある。

(3) 成績不振の学生や学習に何らかの困難を持つ学生の指導

成績不振の学生の中で、医学の学習に意欲を持っていない学生については、将来、医療従事者になることがほぼ確定的な医学部での学習を継続すべきか、長期的な視点で考え、個人面談等を行っている。一方、意欲はあるが、知識不足、能力がやや不足している学生について、特に国家試験対策において、グループを編成し、毎週国家試験勉強会を企画している。また模試の結果の不良の学生は課題を与え国家試験勉強を促しているが、今後も継続させていく必要がある。

第9章 工学部のFD活動

第1節 授業公開

工学部では毎年、前期と後期に公開授業を実施している。今年度も学部の全開講授業を対象に、前期は7月、後期は12月に実施した。参観者は「公開授業参観感想表」を提出し、授業を行った教員にその参観感想表が配布され、授業改善に役立てることになっている。

今年度の学科別参観者数と参観率を以下の表に示す。全体的な参観率は3%であった。昨年度は11%である。低参観率であることは否めない。工学部では各教員が年に最低1回は授業参観することを目標として参観を呼びかけているが、目標の達成には全く至っていない。この件については制度設計の見直しを含めて今後の改善が必要であるが、後述の学生授業評価から判断すると、ほとんどの授業は好評価されており、これまでの授業改善の取り組みの成果と言える。

	教員数合計	29年度前期参観者	29年度後期参観者	参観者合計	参観者(実人員)	未参観者数(実人員)	参観率
機 械	25	0	0	0	0	25	0.00
社会建設	25	0	0	0	0	25	0.00
応用化学	24	0	0	0	0	24	0.00
電気電子	22	0	0	0	0	22	0.00
知能情報	23	2	0	2	2	21	0.09
感性デザイン	18	0	0	0	0	18	0.00
循環環境	17	2	0	2	2	15	0.12
工学基礎教育	11	1	0	1	1	10	0.09
計	165	5	0	5	5	160	0.03

第2節 学部・研究科主催FD研修会

以下の要領で教育改善FD研修会を実施した。

日程：平成29年11月8日(水) [常盤地区] 14:20~14:50

場所：工学部D棟 D11講義室

講師：岡田 耕一(大学教育センター講師)

参加者：29名(アンケート回収 26名)

【研修内容】

岡田大学教育センター講師より、「カリキュラム・マップおよびカリキュラム・フローチャートの見直しについて」と題し、3つのポリシーに基づく大学教育改革の概要、近年の高等教育政策の動向、さらには、平成28年度に学内で行われた3つのポリシーの改訂作業について概観しながら、今回のカリキュラム・マップおよびカリキュラム・フローチャートの見直しに関する趣旨説明があった。

まず、本学では従来からポリシーに基づく内部質保証システムを確保してきたが、政府の高等教育政策の動向を追っていくと、平成17年1月の中央教育審議会答申『我が国の高等教育の将来像』を契機として、3つのポリシーの策定による学習成果基盤型教育が推奨されるようになり、平成25年度末には、ほとんどすべての国立大学で3つのポリシーが策定された状況が説明された。平成26年12月の中央教育審議会答申（高大接続答申）において、改めて、3つのポリシーの一体的な策定が求められるようになり、平成27年度には中央教育審議会大学分科会大学教育部会での検討を経て、平成28年3月末に、学校教育法施行規則の一部改正による3つのポリシーの公表義務化、さらには、『「卒業認定・学位授与の方針」（ディプロマ・ポリシー）、「教育課程編成・実施の方針」（カリキュラム・ポリシー）及び「入学者受入れの方針」（アドミッション・ポリシー）の策定及び運用に関するガイドライン』が提示された。これに対応して、学内では、ディプロマ・ポリシー等検討ワーキンググループを設置して、当該ガイドラインに基づき、3つのポリシーの改訂を行った旨の説明があった。特に、ディプロマ・ポリシーとカリキュラム・ポリシーの一貫性の確保が重要であるとの言及があった。

次に、カリキュラム・マップおよびカリキュラム・フローチャートの意義や構成内容について説明があり、今回の3つのポリシーの改訂に伴い、改めて、既存のカリキュラム・マップおよびカリキュラム・フローチャートの改訂を依頼する趣旨を説明した。

その後、カリキュラム・マップの「〇付け作業体験」と題して、配布されたカリキュラム・マップ様式に従い、参加教員各人が担当授業科目の到達目標と所属学科のディプロマ・ポリシーを確認しながら、ディプロマ・ポリシー達成のための寄与（貢献）度について「◎、○、△」を記入するワークを行った。このことにより、参加教員一同、所属学科のカリキュラムにおける担当授業科目の位置づけやディプロマ・ポリシーとの関係性について理解を深めた。



【質疑応答・意見交換】

岡田 大学教育センター講師からの説明およびカリキュラム・マップに関するミニワークの後、以下のとおり質疑応答が行われた。

Q1 高等学校への進学説明等を行う際に、新しいアドミッション・ポリシーを提示する必要性に迫られているが、改訂時期はいつ頃になるか。

A1 大学入試改革の動向を見ながらの判断になる。来年度には、政府の方から何らかの方針が提示されるのではないかとと思われる。

Q2 ナンバリングの導入に向けた検討が進んでいくと思われるが、ナンバリングにはどのような意義があるのか。

A2 授業科目のレベルを明示することで、学生の履修順序性やカリキュラムの階層性を説明することができる。また、留学生にとって、単位互換等において有意義であると考えられる。

【アンケート結果】

研修会後のアンケート調査結果は下表の通りであり、約 58%の参加者が良い研修会であったとの感想を記入している。

設問1	研修会に参加した感想はいかがでしたか？	
選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	2	7.7%
良かった	13	50.0%
どちらとも言えない	10	38.5%
あまり良くなかった	0	0.0%
良くなかった	1	3.8%
無回答	0	0.0%
合計	26	100.0%

第3節 教育改善に関する活動

工学部では、以下の様な教育改善に関する活動を実施している。

(1) ディプロマ・ポリシーとカリキュラム・ポリシーの見直し

学部における各学科、大学院研究科における各コースのディプロマ・ポリシーとカリキュラム・ポリシーについては見直しがなされており、新しい各学科、各コースのディプロマ・ポリシーとカリキュラム・ポリシーは大学ホームページで公開している。

(2) 工学部サロン

平成 18 年度（2006 年度）から、吉田キャンパスの研究 1 号館の 1 階に「工学部サロン」を開設している。「工学部サロン」では工学部 1 年生のいろいろな相談にいつでも対応できるように、工学部教員の OB、大学院生が待機している。また、工学部のいろいろな情報提供も行い、学生交流の場としても利用できるようになっている。

(3) 工学教育研究センター

先駆的な教育実践活動について情報を収集・分析して新しい企画を提案し、教育実践活動をとりまとめ、学内外に公表するための工学部付属のセンターである。また、「山口大学工学教育」の発刊も行っている。

(4) 「山口大学工学教育」の発刊

(3)で触れた「山口大学工学教育」は、工学教育に関する論文、調査報告、学外シンポジウムなどの参加報告、各学科における教育改善の事例報告などが掲載されており、工学部における教育改善に役立っている。

(5) グローバル技術者養成センター

平成 25 年度（2013 年度）から常盤台キャンパスに「グローバル技術者養成センター」が設置され、工学部と理工学研究科（平成 28 年度より創成科学研究科）のグローバル化教育プログラム開発が実施されてきた。教員の FD 研修として海外研修プログラム開発や専門科目のバイリンガル化が進められると同時に、グローバル教育プログラム実施のための英語テクニカルコミュニケーション教材やアクティブラーニング教材などの開発が進められてきた。また、教員に対する SD 研修プログラム開発とその実施が行われ、教職員のグローバル教育力の向上のための体制を整備する取り組みが推し進められた。本年度からは、(3)の工学教育研究センター内に組織変更され、学生の海外留学の支援を実施している。

(6) ステップアップノートの配布

平成 23 年度（2011 年度）から全学科の 1 年生に対して「ステップアップノート」の配布を始めている。また、平成 24 年度（2012 年度）に「ポートフォリオ」として利用することが工学部学生委員会で承認された。今年度においても 1 年生にステップアップノートが配布された。

第 4 節 学生授業評価・教員授業自己評価

工学部の点検・評価委員会では、学生授業評価データを利用して、優秀授業の表彰を行っている。優秀授業の選考は、「学生授業評価表彰実施要綱」（平成 19 年制定、平成 25 年、平成 29 年改正）に従って実施しており、その概要は以下の通りである。

まず、学生授業評価の質問項目の中から下記の 3 項目の合計点を出す。

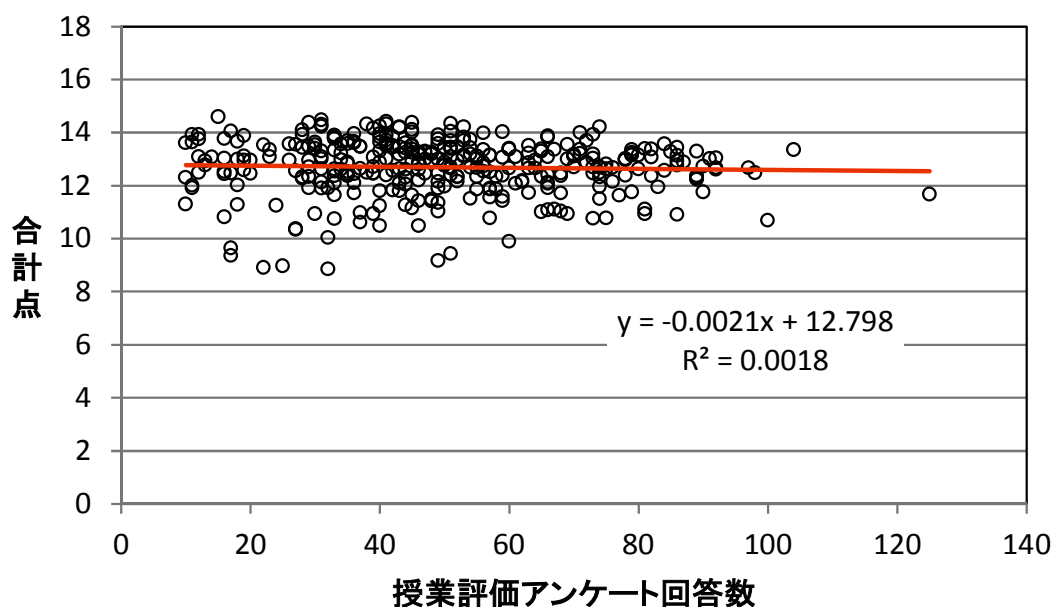
- 項目 2：理論や考え方、専門用語などがわかりやすく説明されましたか？
 項目 9：あなたは授業の内容を理解しましたか？
 （実習・演習の場合は、内容理解や技能のレベルは向上しましたか？）
 項目 10：この授業はあなたにとって満足のいくものでしたか？

次に、授業評価アンケート回答数と合計点の相関を考慮した補正式から補正合計点を算出する。この補正合計点により学部では全開講科目数の 10%、大学院では 20%を「優秀授業」としている。ただし、授業評価アンケート回答数が 10 未満の授業は正確な評価が期待できないとして「優秀授業」の対象から除いている。

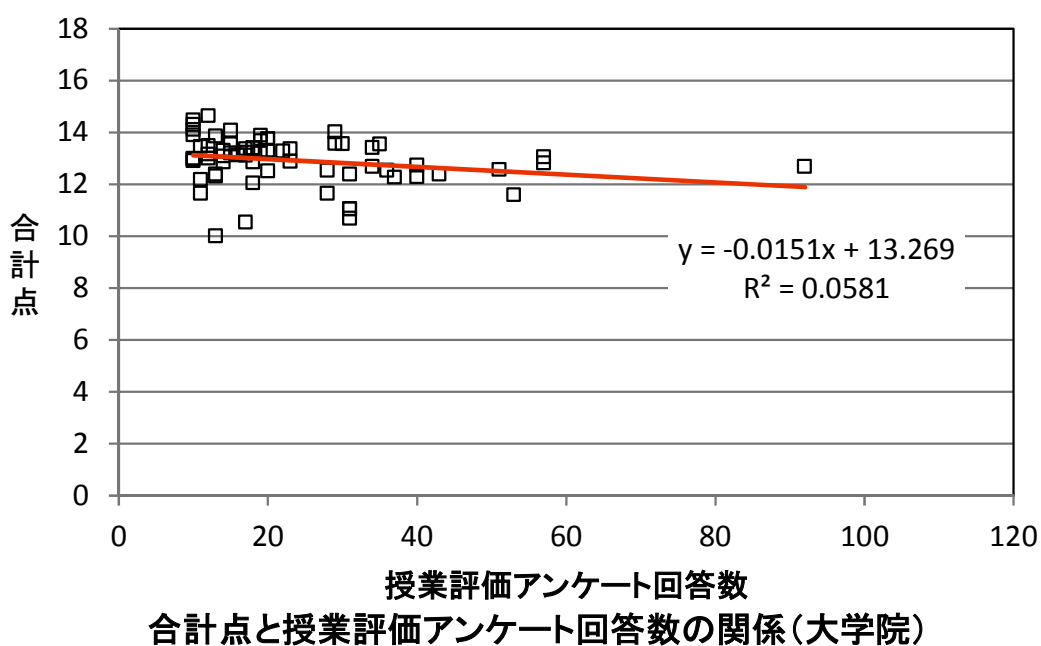
学部の「優秀授業」に関しては、本年度、「学生授業評価表彰実施要綱」を一部改正し、学科間のバランスを考慮し、「各学科の補正合計点の上位 3 授業」とそれら以外の「学部全体での補正合計点の上位授業」を「優秀授業」とするよう選考方法を変更した。また、大学院に関しては、これまでと同様、研究科全体での補正合計点の上位 20%の授業を「優秀授業」としている。

また、学部では学部全体と各学科の最高点の授業を、大学院では各専攻の最高点の授業を「最優秀授業」として、これらの授業の担当教員を表彰している。

平成 28 年度 (2016 年度) 開講の工学部と大学院博士前期課程 (工学系) の授業について、上記 3 項目の合計点と授業評価アンケート回答数の相関 (授業評価アンケート回答数が 10 未満を除く) を以下に示す。全開講授業数は、学部は 383 科目、大学院は 108 科目である。授業評価アンケート回答数が 10 未満を除く授業数は、学部は 353 科目、大学院は 65 科目である。



合計点と授業評価アンケート回答数の関係(学部)



前述の3項目の質問に対する学生の回答は、「そう思う」が5点、「ややそう思う」が4点、「どちらとも言えない」が3点、「あまりそう思わない」が2点、「そう思わない」が1点である。したがって、合計点が12点以上であれば「良い評価」、9点以上12点未満であれば「概ね良い評価」と考えて良い。

学部では12点以上の科目が全開講授業383科目の内309科目、9点以上12点未満の科目が70科目、9点未満の科目が4科目であった。全体平均値は12.8点であった。比率で表すと、「良い評価」が80.7%、「概ね良い評価」が18.3%で、両者を合わせると99.0%であった。なお、前年度(平成27年度[2015年度])は、全体平均値が12.8点、「良い評価」が84.8%、「概ね良い評価」が14.7%であり、平成28年度は「良い評価」が若干減少しているものの、全体平均値はかわらず、昨年度同様良好な結果である。

大学院では12点以上の科目が全開講授業108科目の内94科目、9点以上12点未満の科目が13科目、9点未満の科目が1科目であった。全体平均値は13.0点であった。比率で表すと、「良い評価」が87.0%、「概ね良い評価」が12.0%で、両者を合わせると99.0%であった。なお、前年度(平成27年度[2015年度])は、全体平均値が12.9点、「良い評価」が79.8%、「概ね良い評価」が20.2%であり、平成28年度も昨年度同様、良好な結果である。

しかしながら、このような評価に満足せず、今後も授業改善のための活動を進めていきたい。以下に平成28年度の学部および大学院の優秀授業の一覧を記載する。

平成28年度優秀授業一覧表(学部)

連番	開設科目名	担当(主担当)教員名	学科	学年	回答数	評点
1	ものづくり創成実習II	野田 淳二	機械工学科	2～	41	14.40
2	常微分方程式及び演習	堀田 一敬	機械工学科	2～	74	14.38
3	機械設計論	古賀 毅	機械工学科	3～	71	14.14
4	流体工学I	望月 信介	機械工学科	2～	45	14.10
5	応用物理学I	嶋村 修二	機械工学科	2～	66	14.01
6	流体工学I	望月 信介	機械工学科	1～	41	14.00
7	測量学	吉本 憲正	社会建設工学科	3～	73	14.07
8	防災工学	鈴木 素之	社会建設工学科	4～	11	13.94
9	エンジニアリングコミュニケーション基礎II	植村 隆	社会建設工学科	2～	19	13.92
10	分析化学	吉本 信子	応用化学科	2～	86	13.61
11	生物化学II	赤田 倫治	応用化学科	2～	104	13.57
12	応用化学工学実験III	赤田 倫治	応用化学科	3～	89	13.48
13	電気設計	山田 洋明	電気電子工学科	4～	28	14.16
14	電気回路II	山田 陽一	電気電子工学科	2～	59	14.15
15	半導体工学I	山田 陽一	電気電子工学科	3～	72	13.85
16	プログラミング演習I(実習を含む。)	瀧本 浩一	知能情報工学科	1～	84	13.74
17	オペレーティングシステム	山口 真悟	知能情報工学科	2～	69	13.69
18	プログラミングI	瀧本 浩一	知能情報工学科	1～	81	13.56
19	建築設備工学	小金井 真	感性デザイン工学科	3～	41	14.50
20	空気調和計画法	小金井 真	感性デザイン工学科	3～	40	14.32
21	空間デザイン論	内田 文雄	感性デザイン工学科	2～	53	14.32
22	地球環境論	長井 正彦	循環環境工学科	3～	31	14.55
23	移動現象論	佐伯 隆	循環環境工学科	2～	45	14.46
24	確率・統計学	佐伯 隆	循環環境工学科	2～	51	14.46
25	廃棄物処理工学	今井 剛	循環環境工学科	3～	29	14.43
26	反応工学	通阪 栄一	循環環境工学科	3～	38	14.40
27	応用解析I	堀田 一敬	循環環境工学科	2～	31	14.37
28	環境倫理・法規	樋口 隆哉	循環環境工学科	3～	43	14.30

29	環境高分子化学	比嘉 充	循環環境工学科	3～	31	14.30
30	応用物理学I	嶋村 修二	循環環境工学科	2～	43	14.28
31	界面物理化学	比嘉 充	循環環境工学科	3～	39	14.23
32	環境プロセス論及び演習	佐伯 隆	循環環境工学科	3～	45	14.20
33	環境管理論	新苗 正和	循環環境工学科	2～	51	14.15
34	環境情報学I及び演習	田中 一宏	循環環境工学科	2～	56	14.10
35	異文化セミナー	今井 剛	循環環境工学科	3～	17	14.10
36	単位操作II	中倉 英雄	循環環境工学科	3～	36	14.04
37	環境微生物学	通阪 栄一	循環環境工学科	3～	40	14.03
38	常微分方程式及び演習	栗山 憲	循環環境工学科	2～	49	14.01
39	テクニカルコミュニケーション基礎	植村 隆	全学科共通	2～3	15	14.62
最優秀授業: 優秀授業の中で、各学科と工学基礎教育の最上位						
優秀授業 : 全383科目の各学科別上位3科目とそれらを除く全体上位18科目=39科目 (アンケート回答数が10人未満の科目は除く)						

平成28年度優秀授業一覧表(大学院)

連番	開設科目名	担当(主担当)教員名	専攻	回答数	評点
1	機械システム設計工学特論	古賀 毅	機械工学系専攻	10	14.451
2	公共政策学	榊原 弘之	建設環境系専攻	10	14.631
3	メンテナンス工学	高海 克彦	建設環境系専攻	13	14.046
4	社会システム分析特論	榊原 弘之	建設環境系専攻	19	13.967
5	電子化学特論	森田 昌行	化学系専攻	12	14.821
6	化学工学技士特論 I	佐伯 隆	化学系専攻	30	14.013
7	溶液化学特論	藤井 健太	化学系専攻	15	13.767
8	環境化学特論 I	遠藤 宣隆	化学系専攻	23	13.717
9	化学系特論	酒多 喜久	化学系専攻	57	13.681
10	材料分析学特論	中塚 晃彦	化学系専攻	18	13.672
11	システム制御工学特論 II	田中 幹也	電気電子情報系専攻	29	14.448
12	電力変換工学特論 II	山田 洋明	電気電子情報系専攻	15	14.297

13	大規模データ解析特論	中村 秀明	電気電子情報系専攻	10	14.251
14	電子システム工学序論	久保 洋	電気電子情報系専攻	19	14.177
15	電気電子情報系特論	長 篤志	電気電子情報系専攻	92	14.069
16	システム制御工学特論 I	若佐 裕治	電気電子情報系専攻	35	14.069
17	電力変換工学特論 I	田中 俊彦	電気電子情報系専攻	20	14.052
18	磁性工学特論	山本 節夫	電気電子情報系専攻	20	14.052
19	計算機工学特論	福士 将	電気電子情報系専攻	10	14.051
20	微細加工技術特論	横川 俊哉	電気電子情報系専攻	29	14.008
21	超伝導工学特論	原田 直幸	電気電子情報系専攻	34	13.923
22	固体物性論特論	嶋村 修二	電気電子情報系専攻	57	13.911
	最優秀授業: 優秀授業の中で、各専攻の最上位				
	優秀授業 : 全108科目の上位20%=22科目(アンケート回答数が10人未満の科目は除く)				

第5節 FD実施経費報告書

昨年度実施したFD実施経費を下表に記載する。

平成29年度 各学部・研究科FD実施経費報告票				
部 局	FD研修・FD活動の内容	経費の用途 (購入物・旅費謝金等)	執行額(千円)	FD活動の効果(簡潔に)
工学部	工学部ポートフォリオ(ステップアップノート)の改訂	消耗品, 印刷費	72千円	平成30年度学部生に対する教育改善の準備
		計	72千円	

第6節 来年度の課題

来年度の課題として、以下のようなことを検討したい。

(1) 公開授業の参観率の向上

参観率は、昨年度11%、本年度3%と極めて低い値である。工学部の点検・評価委員会で各学科委員を通して参観を呼び掛けているが、参観率改善にはつながっていない。引き続き、改善策について点検・評価委員会で検討していくが、制度の目的の再確認とともに制度設計の見直しも検討したい。

(2) 教員授業自己評価の入力率向上に関する組織的な取組み

これまでも、入力率向上のために学科長・専攻長会議などにおいて、学科長などを通して入力を促すことをしている。今後もこのような対応をお願いしていく。

(3) 授業外学習時間の確保，適正な成績評価

工学部では、JABEE に代表されるように、工学教育における学習時間の確保，適正な成績評価についての十分な理解とその実践がなされているが、引き続き、各学科に実践をお願いしたい。

(4) 共通教育における試験監督体制

引き続き、問題点を整理した上で適正な試験監督体制を検討したい。

第10章 農学部のFD活動

第1節 授業公開

1. 生物機能科学科の授業公開（ピアレビュー）

生物機能科学科では、「生物機能科学科セミナー」として、教員の授業を公開し、複数教員によるピアレビューを実施してきた。本年度も、公開授業が行われ、教員どうしの意見交換が活発に行われた。以下に、本年度に実施した公開授業（8件）を示す。

- (1) 合成代謝経路の構築による有用物質生産
日時：平成29年4月28日（金）17時 ～ 片岡 尚也 助教
- (2) ニオイの不思議
日時：平成29年5月26日（金）17時 ～ 赤壁 善彦 教授
- (3) 原子レベルでの立体構造情報に基づく 植物プラスチドの還元力供給系タンパク質の機能解析
日時：平成29年6月30日（金）17時 ～ 木股 洋子 准教授
- (4) 哺乳類の骨格筋細胞に関する適当な話
日時：平成29年7月27日（木）17時 ～ 宮田 浩文 教授
- (5) 活性酸素の謎を解く鍵物質 活性カルボニル種
日時：平成29年10月7日（金）17時 ～ 真野 純一 教授
- (6) 耐熱性好中温微生物の耐熱性機構と高温育種による耐熱化～研究の取り組みとそれから見えてきたもの～
日時：平成29年11月24日（水）17時 ～ 山田 守 教授
- (7) 炭素循環に関わる微生物の探索と性状解析
日時：平成29年12月25日（月）17時 ～ 藤井 克彦 准教授
- (8) 酢酸菌の耐熱性に関する研究
日時：平成30年1月22日（金）17時 ～ 薬師 寿治 准教授

第2節 学部・研究科主催FD研修会

農学部では、各種FD研修会を以下の内容で開催した。

第1回 研修会名：「講師派遣型アラカルト研修会」

日程 平成29年7月19日(水) [吉田地区] 13:30～14:10

場所 農学部会議室

講師 松原 敏郎（保健管理センター准教授）

参加者 28名(アンケート回収23名)

第2回 研修会名：「教育改善 FD 研修会」
 日時 平成 29 年 12 月 20 日(水) 13:30～14:00
 場所 農学部大会議室
 講師 木下 真 (大学教育センター准教授)
 参加者 22 名

平成 29 年度 アラカルト研修会「大学生にみられる精神障害の基礎知識と対応について（農学部）」

日程 平成 29 年 7 月 19 日(水) [吉田地区] 13:30～14:10
 場所 農学部会議室
 講師 松原 敏郎 (保健管理センター准教授)
 参加者 28 名(アンケート回収 23 名)

内容

研修会の前半では、松原先生から大学生にみられる精神障害の基礎知識として学生のライフサイクルに関係したストレスに応じた精神疾患が発症するという事実がまず示された。思春期・青年期の代表的な精神疾患として発達障害、統合失調症、少し年齢が上がると気分障害である躁うつ病等が発症するケースが多くなる。特に思春期の女性に顕著にみられるのは摂食障害（拒食症・過食症）である。そしてこの時期同様に顕著によくみられるようになるのが発達障害である。以前は広汎性発達障害といわれていたが、最近では ASD（自閉症スペクトラム）と呼ばれ、幼少期から顕在化し、その数が大学でも急激に増加している。これはアクティブ・ラーニング等の学生間コミュニケーションを重視する授業形態の増加が背景にある。また、生涯通して出現しどの年代でも発症するのがストレス反応である「適応障害」である。ストレスがかかり過ぎで自分のキャパシティをオーバーすると不安、抑うつ、不眠という症状が一過性に出現する。就職活動や研究、友達関係が上手くいかないといったことが原因となって発症するそうだ。保健管理センターにもこのような学生が来診するが、このような学生には薬を服用せず環境調整等で適切に対応することで改善に向かうケースがあるそうだ。したがって、大学に入ってくる以前から発達障害や摂食障害等の元々脆い部分を持っていた学生と入学後に自分自身のキャパシティオーバーとなってストレス反応を起こしてしまう学生という大きく分けて 2 種類の学生がいることやどちらのタイプの学生かによって支援方法が異なってくるこ

設問1 研修会に参加した感想はいかがでしたか？

選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	11	47.8%
良かった	12	52.2%
どちらとも言えない	0	0.0%
あまり良くなかった	0	0.0%
良くなかった	0	0.0%
無回答	0	0.0%
合計	23	100.0%



図 1 講演中の松原准教授



図 2 研修会の様子

とが明らかにされた。

後半には、これらの精神疾患に関する対応方法について説明があった。多くの学生は上記でも記したように「環境調整」すなわち、指導教員とのコンタクト、作業量の軽減、家族や友人に悩みの打ち明け等により回復する学生がほとんどであるようだ。これらの支援のために保健管理センター、学生相談所、学生特別支援室（SSR）が連携を取りながら本人、先生方等の支援を対応している。また、早期からのコミュニケーションこそが対応の基本であることが示された。また、早急な対応が必要な学生を先生方や支援者が見極めることも大切だそうだ。

講演の中で大学生のストレスでは保健管理センターで摂食障害や躁うつ症等総合的な精神状態のスクリーニング検査を入学時の健康診断の際に行っていることが明らかにされた。その結果、全新生 2000 名の内、ハイリスクの学生が全体の約 10%程度いることが明らかになった。その後、松原先生が診察して要観察・要治療の学生が 52 人、全体の 2.6%いたそうだ。これらの学生は大学入学前から精神障害・疾病や発達障害の診断や治療を継続的に受診してきた学生が大部分を占めているようだ。

また、本学の自殺者の過去 20 年間に調査したところ、3, 4 年生が過半数を占め、男子学生が約 9 割を占めているようだ。これらの学生は休学や留年、不登校等の何らかのトラブルを抱えている学生で毎年の健康診断に 2~3 年来ていない学生が大半を占めているようだ。この結果から、大学生のストレスを考えると、就活、研究、卒論などが出てくる 3, 4 年生の時期にストレスがかかり精神疾患に陥りやすい危うい時期と考えた方がよいという見解が示された。したがって、先生方は不調を訴えてきそうな学生の様子を早期に察知して対応し声をかけてやる等が重要であることが示された。

質疑応答では以下のようなものがあった。

Q: 男子学生に自殺者が多い背景や理由はなぜか？

A: 日本だけでなく海外の統計を見ても男子の方が女子より自殺者が多い。その理由としては、女子学生の場合、周りに学生や保護者とのコミュニケーションが男子学生より比較的取りやすい（ネットワークを形成しやすい）ため、悩みを打ち明けることができるため自殺に至らないケースが多い。しかし、男子学生の場合、そのようなネットワークを作りにくく、「男らしさ」から相談しにくいいため自殺者が多いと考えられている。

Q: 精神障害のある学生の対応には早期発見、早期対応が重要だということ話だったが、場合によってはハラスメントと捉えられる可能性はないか？

A: 先生方が思っていることと、学生が思っていることが異なっている（ズレがある）とそのようなケースがあるかもしれないが、研究室で一緒に研究して社会に出ていくという流れから見た時に、当該学生が支援してくれた先生方に対して感謝するケースが圧倒的に多いと感じている。また、ハラスメントを避けるため、当該学生に対して教員が声掛けをし、顔色や精神状態を観察するだけでもよいと考えている。先生が自分のことを気にかけてくれているというように当該学生に感じさせるだけでもよいのではないか。

Q: 心配になる学生に何度も声掛けをしたり、電話連絡を取っているが、最近では着信拒否や電話にあえて出なかったりする学生がいるが、そのような場合、教員はどのように対応したらよいのだろうか？

A: このようなケースの場合、保護者を巻き込んだ（連絡を取り合った）支援を考えていく必要があると考えている。教員は親ほどの親身になった支援は無理だからである。

Q: スライド中、平成 27 年度入学時のスクリーニング検査結果が示されているが、検査項目の専門用語を説明してもらいたい。

A: EAT は摂食障害、UPI は全体的な精神的不調、SDS はうつ状態を示している。今後は発達障害のスクリーニングをどのように調査するか考えている。なお、この調査は学生自身が記入回答する自

記式という形態を取っている。また、この調査は病院の IRB の許可を得て実施している。

Q: 現在、初年次の共通教育から「山口と世界」のようなアクティブ・ラーニング型授業が導入されたことにより、人とのコミュニケーションが苦手とする発達障害のある学生の存在が顕在化してきたといわれている。彼らが専門教育に進学した際に専門教育の内容に興味・関心を持って、小人数教育ではうまく対応できるものなのか、それともその障害特性ゆえにやはり専門教育でも対応は難しいのでしょうか？

A: アクティブ・ラーニング型授業に対して発達障害学生がどのような手段や支援を行えば上手く対応できるのかを様々な検証を行い、データを収集し分析する必要があると思う。その結果、アクティブ・ラーニング型授業そのものを変えていくのか、アクティブ・ラーニングに代わる授業形態を新たに考えていくのが明らかになってくると思う。

Q: 4年生になって研究室に来なくなった学生への対応をどのようにしたらよいか？親とも相談しているが、SSR や保健管理センター等への相談などといったそこまで大げさな対応を避けて欲しいという保護者からの要望がある。また、保護者と当人とのコミュニケーションも充分取れていないようだ。まず、教員自身が SSR や保健管理センター等へ相談に行った方がよいのだろうか？

A: それによって先生自身の対応がどのように変わるかわからない。もし、学生の不調の理由がどうしてもわからないのであれば、医学的な相談も含めて、学外の医療機関を受診するわけでないので、学校の保健室に相談に行くといった感覚で学内の保健管理センター等にまず当該学生に受診をすすめたらどうだろうか。

研修会後のアンケート結果では、「非常に良かった (47.8%)」および「良かった(52.2%)」であり、参加者全員の満足度が非常に高い研修会であった。自由記述でも、「興味が持てる内容であった」という意見があった。開催時期および開催場所も概ね「良い」という意見が大半を占めていた。

平成 29 年度 教育改善 FD 研修会 (農学部・創成科学研究科 (農学系))

日時 平成 29 年 12 月 20 日(水) 13:30~14:00

場所 農学部大会議室

参加者 22 名

担当者 木下 真 (大学教育センター准教授)

内容

研修会の冒頭、阿座上弘行教授から研修会の主旨の説明があった。その後、図 1 のように木下准教授により、資料に沿って以下の説明があった。(1)3 つのポリシーを巡るこれまでの経緯、(2)カリキュラム・マップ(CUM)の見直しについて、(3)意見交換。

(1)については、平成 27 年 1 月の文部科学省による「高大接続改革実行プラン」の公表から、平成 28 年 3 月 31 日に大学教育部会から出された 3 つのポリシーの策定に関する「ガイドライン」発表、学校教育法施行規則の一部改正の省令交付までの国・文部科学省の一連の経緯について説明が行われた。その後、それを受けての本学の動きと 3 つのポリシー

設問1 研修会に参加した感想はいかがでしたか？		
選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	3	13.6%
良かった	13	59.1%
どちらとも言えない	6	27.3%
あまり良くなかった	0	0.0%
良くなかった	0	0.0%
無回答	0	0.0%
合計	22	100.0%



図 2 講演中の木下准教授

の策定と今年度4月の公開が説明された。

(2)については、ディプロマ・ポリシー (DP) の見直しを受けて、各科目と新しい DP が一体化しているかどうかの確認のために、カリキュラム・マップの見直しが必要であることが説明された。農学部で過去に策定された現行のカリキュラム・マップ、そして、新しく策定されたディプロマ・ポリシーが紹介された。なお、最後に、現行のカリキュラム・フローチャートが紹介され、カリキュラム・マップの見直し後はカリキュラム・フローチャートの見直しが必要であることが説明された。現行のカリキュラム・フローチャートは平成 23 年度に導入した新しい共通教育が反映されていないため、新しいものを策定する際は考慮する必要があることが付け加えられた。

研修会後のアンケートでは 72.7%が概ね良かったという意見だった。

(3)については、研修参加者からは以下のような質疑応答があった。

(質問1) 同じ DP のところに○が偏在化する可能性があるが、それでもよいのか？

(回答) 専門教育の場合、○付けされた結果、そのような傾向が時々見受けられる。その際には DP の設定そのものがよかったのか、科目の編成がこのままでよいのかを考え直す必要がある。ただし、医学部保健学科のように職業資格に結び付いたコア・カリキュラムで運用されている場合にはカリキュラムそのものを変更することは難しいと考えられる。

(質問2) 今回のカリキュラム・マップの○付けと以前説明があった YU-COB-CUS とはどのような関係があるのか？

(回答) 今回の○付け作業は、DP が昨年度改訂されたことを受けて行われるものである。YU-COB-CUS の導入については、次年度あらためて作業の進め方を含めて各学部と協議していく予定である。



図 2 研修会の様子

第3節 教育改善に関する活動

昨年度、改定のあったアドミッションポリシー、カリキュラムポリシー、ディプロマポリシーに変更はない。31年度のYuCoBCuS導入に備え、これらのポリシーにマッチしたカリキュラムマップやカリキュラムフローチャートの作成を検討した。また、授業科目のナンバリングについても検討を行った。

共通教育におけるアクティブ・ラーニング（以下、AL）の授業実践に顕著な成果をあげた教員を表彰する「AL ベストティーチャー」の第2回受賞者14名が選出された。AL ベストティーチャー表彰制度は、本学が平成26年度に採択された文部科学省・大学教育再生加速プログラム（AP）の一環として平成28年度に制定された制度で、シラバスのALポイント、学生授業評価、成績評価分布などを指標に審査し、受賞者を決定している。本年度は、基礎セミナーおよび生物学実験において、本学部の11名の教員がAL ベストティーチャーとして表彰された。

区 分	授業科目名	所属・職名	氏 名
基礎セミナー	基礎セミナー	創成科学研究科（農学）・准教授	井内 良仁
		創成科学研究科（農学）・准教授	藤井 克彦
演習・実験・実習	生物学実験	大学研究推進機構・教授	真野 純一
		創成科学研究科（農学）・教授	横山 和平
		創成科学研究科（農学）・教授	松井 健二
		創成科学研究科（農学）・教授	阿座上 弘行
		創成科学研究科（農学）・教授	内海 俊彦
		創成科学研究科（農学）・教授	宮田 浩文
		創成科学研究科（農学）・助教	高坂 智之
		創成科学研究科（農学）・助教	肥塚 崇男
		創成科学研究科（農学）・助教	片岡 尚也

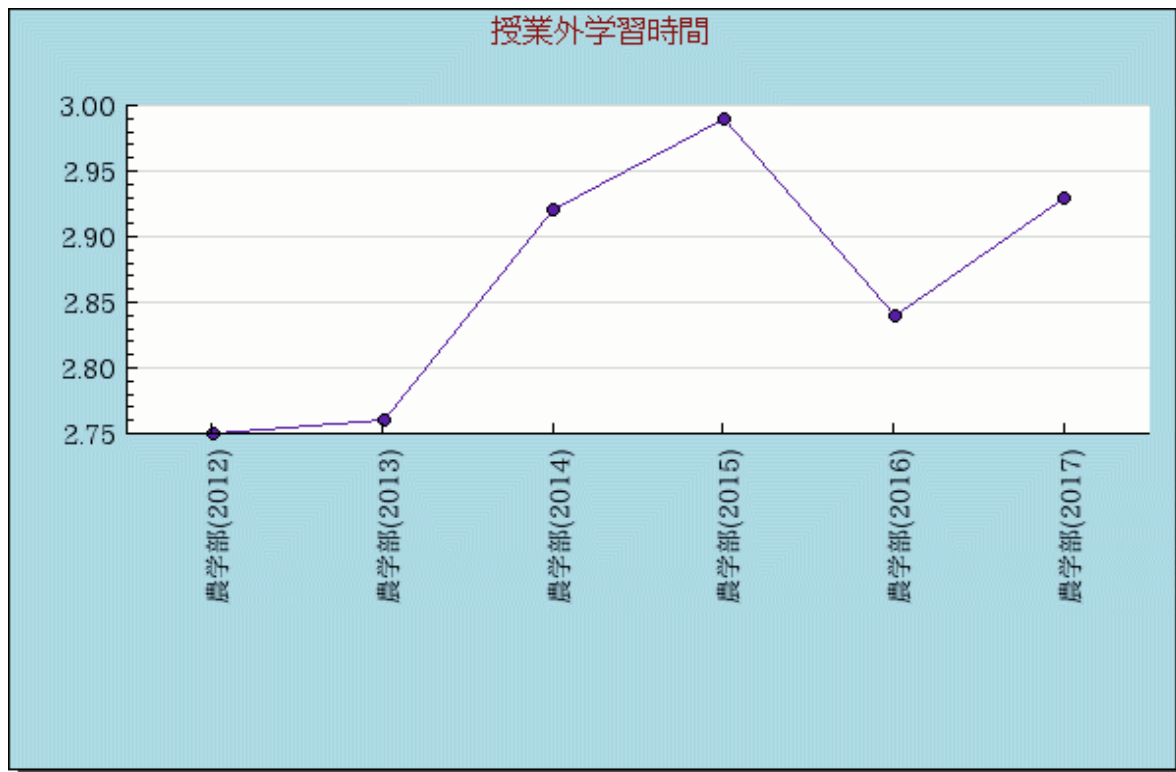
第4節 学生授業評価・教員授業自己評価

1. 学生授業評価

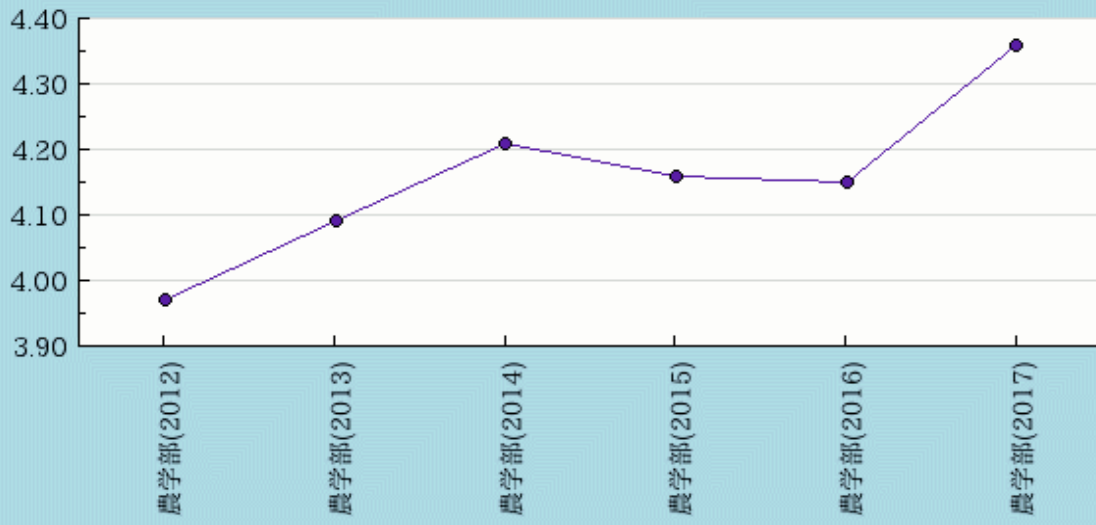
5すべての項目において、前年度を上回っており、またここ数年の経年変化を見ても右肩上がりの傾向にある。項目とも減少傾向にある。いずれの項目の値も比較的高いレベルを維持できているので今後もこの傾向を保持していきたい。

回答数

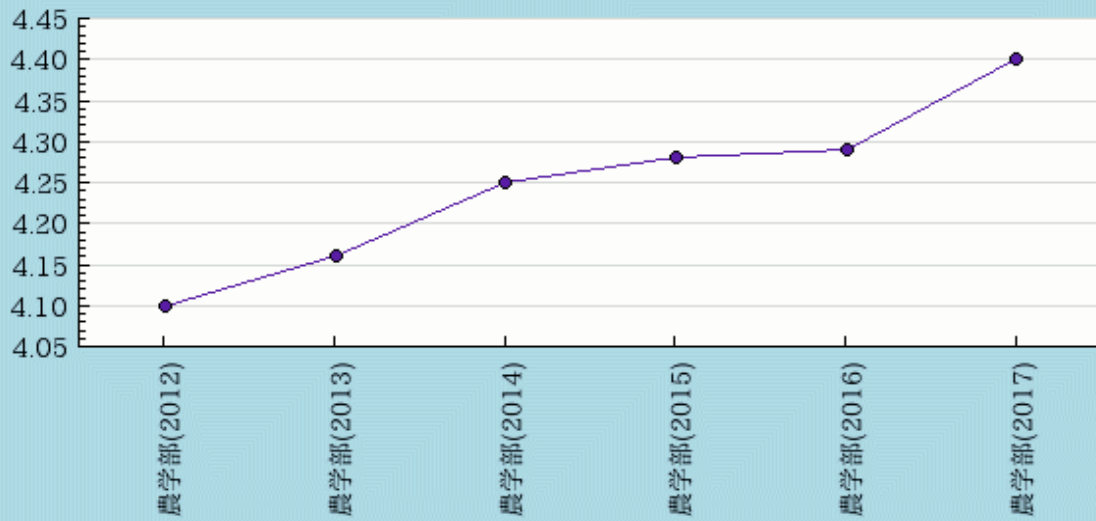
	講義	講読	演習	実験・実習	語学 (共通教育)	語学 (農学部 専門)	その他	語学 (人文学部 専門)	未指定	合計
農学部(2012)	3575			697						4272
農学部(2013)	3512			750						4262
農学部(2014)	3458			894						4352
農学部(2015)	3019			609						3628
農学部(2016)	3026			513				21		3560
農学部(2017)								3414		3414

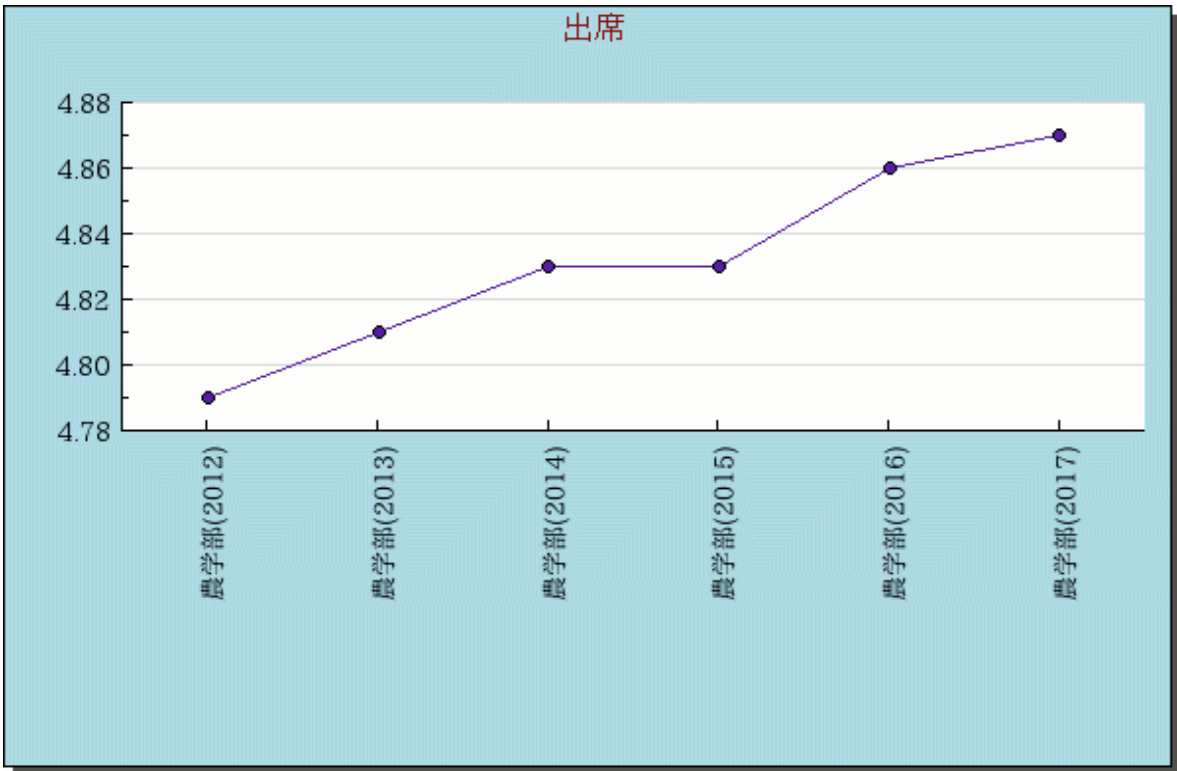
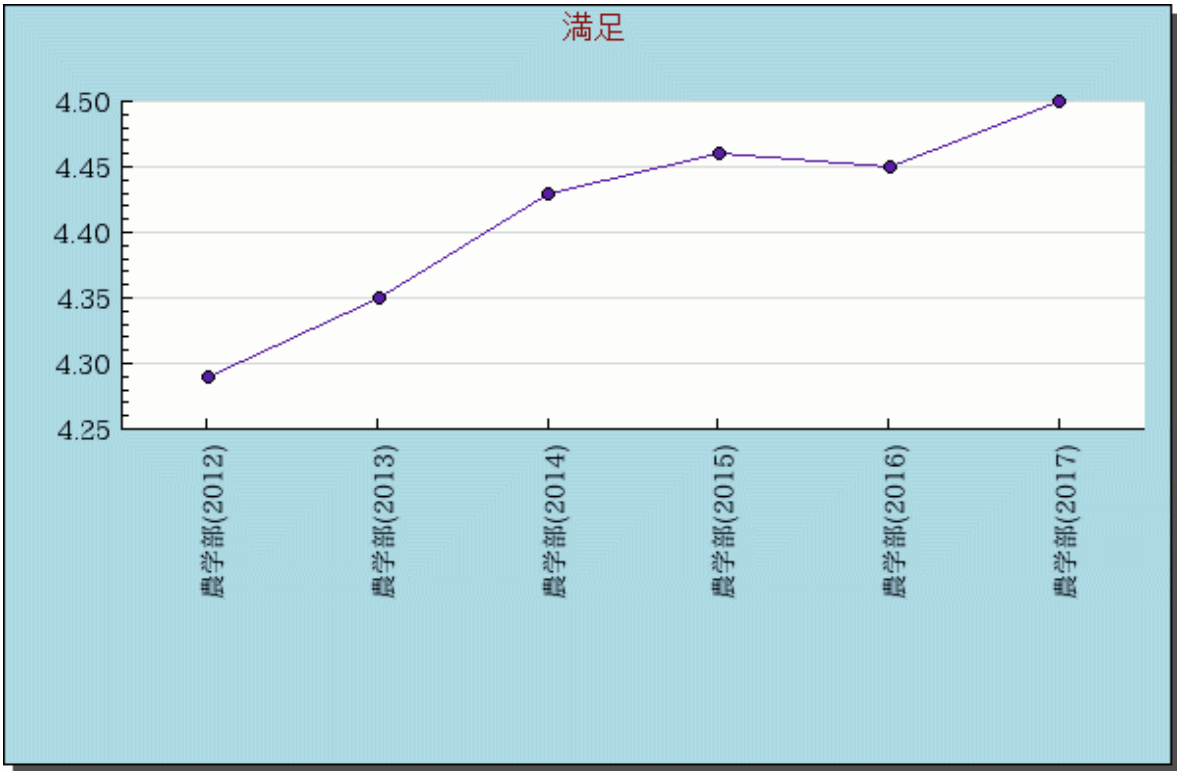


學習目標達成



理解



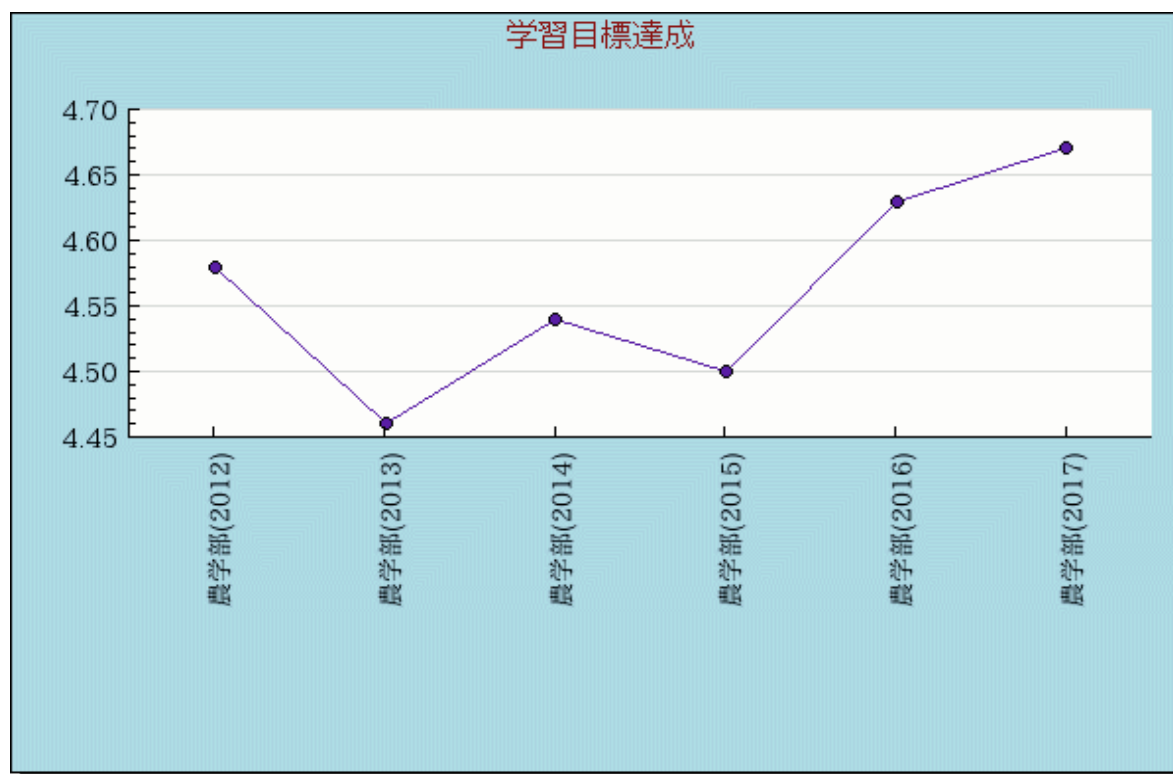


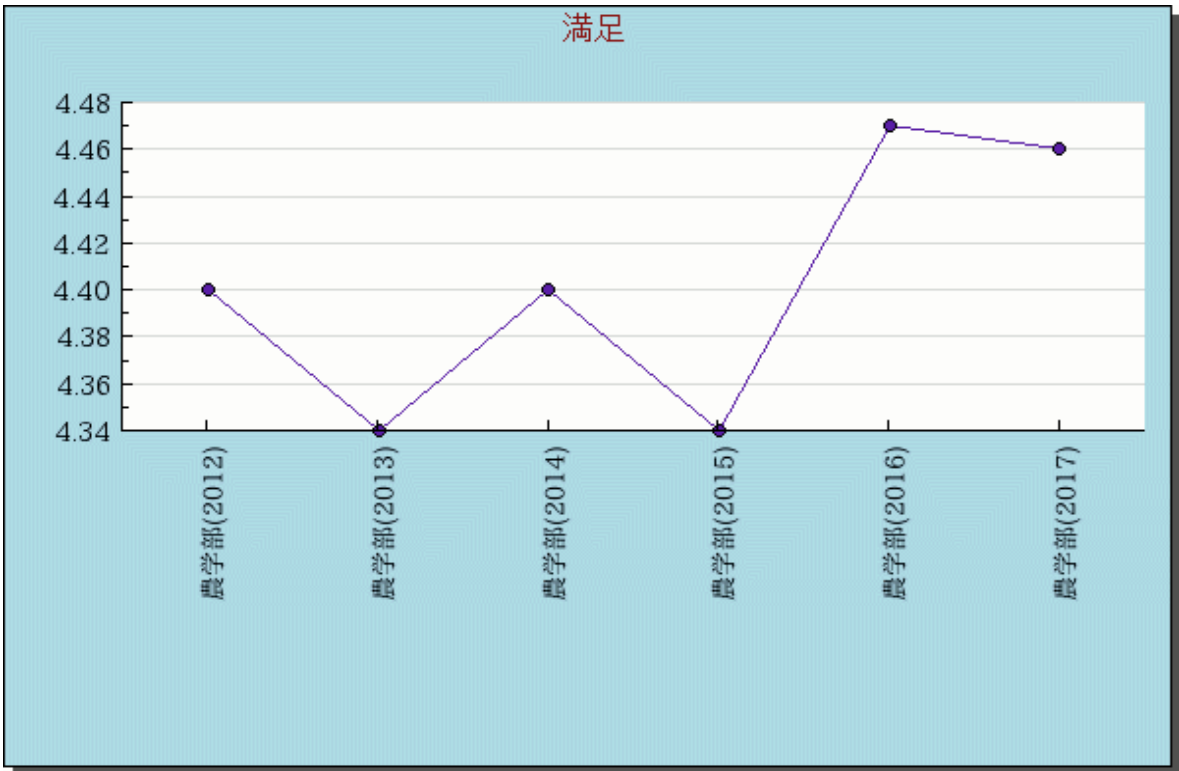
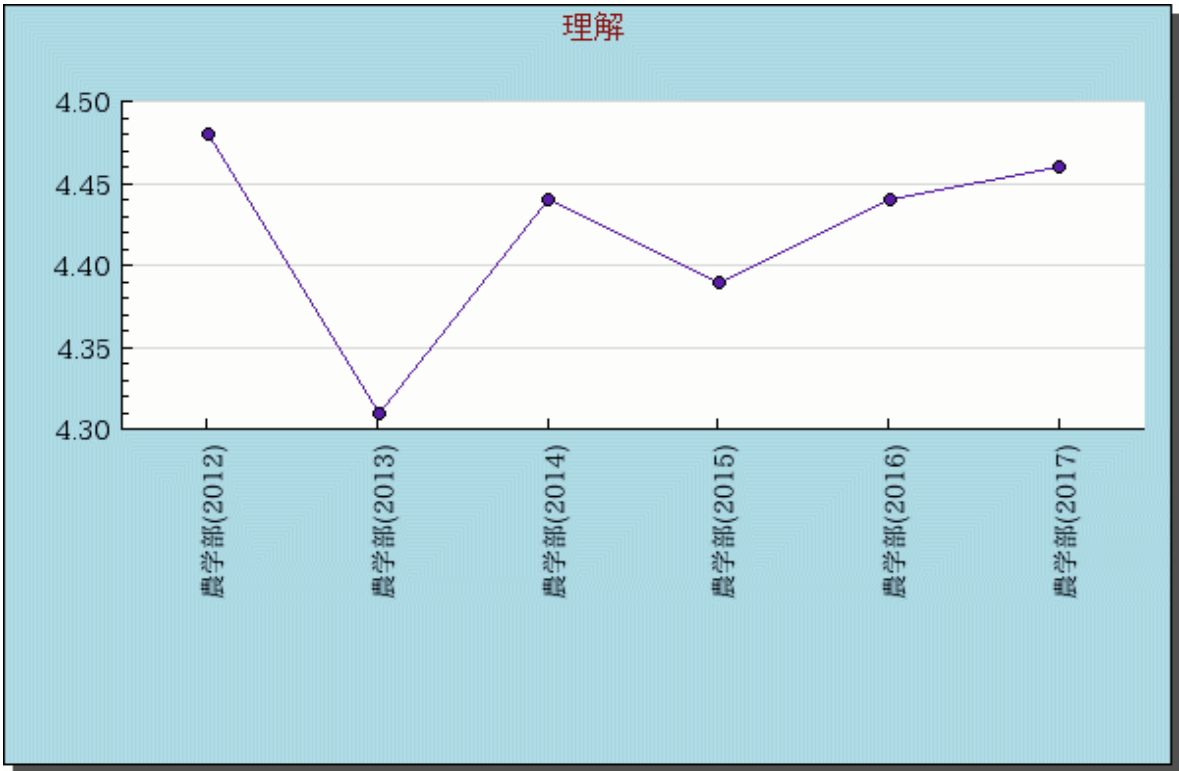
2. 教員授業評価

本年度はいずれの項目も前年度より高い評価点数が得られた。昨年に引き続き高評価であった。教員自身が授業に対して高い意識を持つようになった現れかもしれない。今後もこの傾向を保持していきたい。

回答数

	講義	講読	演習	実験・実習	語学(共通教育)	語学(農学部専門)	その他	語学(人文学部専門)	未指定	合計
農学部(2012)	80			25						105
農学部(2013)	50			18						68
農学部(2014)	79			33						112
農学部(2015)	75			34						109
農学部(2016)	50			16					2	68
農学部(2017)									24	24





第5節 F D実施経費報告書

本年度はF D実施経費の申請はなかった。

第6節 来年度の課題

1. ピアレビュー

本年度も、生物資源環境科学科におけるピアレビューが実施されておらず、農学部全体で本件を進める機運が落ちている。次年度は、これまで一度もピアレビューに関わったことがない教員に対してピアレビューへの参加を勧めるとともに、ピアレビュー実施数を多くしたい。また、農学部では授業経験のない助教が増えていることから、ピアレビューとは別にこれらの教員が他の教員の授業を参観できるようなシステムについても検討したい。

2. 学生授業評価および教員授業評価

昨年度と比較すると本年度の評価点は、学生授業評価および教員授業評価ともに軒並み上昇した。次年度の結果が注目されるが、この傾向が続くようならば、その背景を解析し、さらに評価点の向上につなげたい。

第11章 共同獣医学部のFD活動

第1節 授業公開

(1) 授業公開（獣医学セミナー）

- 1) 「マボヤの被囊軟化症 ―魚病における新興感染症の一例―」
講師：柳田哲矢 先生（山口大学獣医寄生虫学）
日時：平成29年4月19日（水）17:00～18:00
場所：iCOVER 1階 101 形態構造学実習室
- 2) 「細胞が栄養を感知し利用する仕組み ～ 疾病への応用～」
講師：渋谷周作 先生（山口大学獣医衛生学）
日時：平成29年5月17日（水）17:00～18:00
場所：iCOVER 1階 101 形態構造学実習室
- 3) 「家猫における外来性及び内在性レトロウイルス」
講師：三宅在子 先生（山口大学感染免疫学）
日時：平成29年6月21日（水）17:00～18:00
場所：iCOVER 1階 101 形態構造学実習室
- 4) 「大学で牛を診る ～ 二次診療としての産業動物診療～」
講師：檜山雅人 先生（山口大学獣医外科学）
日時：平成29年10月18日（水）17:00～18:00
場所：iCOVER 1階 101（2階 201に同時配信）
- 5) 「病理のお仕事，盛り合わせ」
講師：坂井祐介 先生（山口大学獣医病理学）
日時：平成29年11月22日（水）17:00～18:00
場所：iCOVER 1階 101（2階 201に同時配信）
- 6) 「牛群における飼料由来マイコトキシン汚染と繁殖性への影響」
講師：高木光博 先生（山口大学獣医繁殖学）
日時：平成29年12月20日（水）17:00～18:00
場所：iCOVER 1階 101（2階 201に同時配信）

(2) 授業公開（総合臨床セミナー）

- 1) 第12回 山口大学動物医療センター総合臨床セミナー
日時：平成29年12月10日（日）12:30～17:00
場所：連合獣医学研究科棟4F大講義室
演題：教育公演
「犬と猫のワクチン接種プログラムを考える ―WSAVAガイドラインのすすめ―」
「DICと血栓症 ―臨床に直結する最新の診断法と治療薬―」
辻本 元（東京大学）

2) 第13回 山口大学動物医療センター総合臨床セミナー

日時：平成30年3月4日(日)12:30~17:00

場所：連合獣医学研究科棟4F大講義室

演題：教育公演 「腹腔の外科」

「肝臓の外科」

谷 健二 (山口大学)

「内視鏡外科」

原口友也 (山口大学)

「泌尿器の外科」

板本和仁 (山口大学)

「病理診断に繋がるサンプル採取のコツ」

下ノ原 望 (アイデックス・ラボラトリーズ株式会社)

(3) 授業公開 (共同獣医学部特別セミナー)

1) 「Optogeneticを用いた脳機能の解明 ~嫌悪記憶形成におけるノルアドレナリン神経の役割~」

講師：植松 朗 先生 (理化学研究所脳科学総合研究センター 記憶神経回路研究チーム 研究員)

日時：平成29年7月24日(月)16:30~

場所：iCOVER 1階 101 形態構造学実習室

2) 「オートファジーやリソソームに異常がある新しい疾患の発見」

講師：大友 孝信 先生 (川崎医科大学 病態代謝学)

日時：平成29年11月1日(水)17:00~18:30

場所：iCOVER 1階 101 形態構造学実習室

3) 「アメリカで専門医になる方法」「米国における放射線治療」

講師：永田 浩一 先生 (ジョージア大学 College of Vet. Med.)

日時：平成29年12月25日(月)17:00~18:30

場所：iCOVER 1階 101 形態構造学実習室

4) レクチン受容体を介する異物認識と免疫応答」

講師：山崎 昌 先生 (大阪大学微生物研究所)

日時：平成30年1月17日(月)17:30~18:30

場所：iCOVER 1階 101 形態構造学実習室

5) 「牛白血病ウイルス感受性・抵抗性牛を利用した新しい牛白血病制圧戦略」

講師：間 陽子 先生 (国立研究開発法人 理化学研究所)

日時：平成30年2月16日(金)16:00~17:00

場所：iCOVER 1階 101 形態構造学実習室

第2節 学部・研究科主催FD研修会

(1) 大学教育センターから講師を派遣して実施する研修会

平成29年度 アラカルトFD研修会「著作権法改正に伴う教育活動への影響と対応」(共同獣医学部FD研修会)

日程 平成29年12月13日(水)
[吉田地区] 13:30~14:20
場所 農学部・共同獣医学部大会議室
(吉田キャンパス)
講師 木村 友久
(大学研究推進機構 知的財産センター
副センター長)
参加者 25名(アンケート16枚回収)



内容

本研修会では、今後予定されている著作権法改正が、大学での教育活動にどのような影響をおよぼすのか、どのように対応すべきなのかについて説明が行われた。

現行の著作権35条では、著作物を教育目的に利用する際の権利制限が記載されている。現行法は昭和46年1月1日に施行されたが、それ以前の著作権法では、授業のための複製については普通教育(小学校や中学校)のみに認めていた。その後、昭和46年に改正が行われた際は、普通教育以外の教育機関にも権利制限が拡大され、権利者団体は驚愕したという。この時以来、権利者団体は他国では権利者団体には著作物の対価が支払われていることを一貫して訴え続けてきた。2年前にこの運動が実を結び、35条を改正して、料金を徴収する方向で改正することになった(平成30年6月に国会で成立予定)。文化審議会によると、混乱を避けるために、第1項と第2項については変更を加えず、新たに設ける第3項で異時送信について言及するという。これに向けて権利者団体は既に料金を徴収する団体を設立しており、大学に対して学生1人当たり年間500円年程度の補償金(補償金額は増減両方の案がある)を要求することになる。本学では、1万2千人の学生が在籍しているの、500円の場合年間の支払額は600万円にも上る。

昨今は反転授業のために、授業に先だって学生にネット上でビデオなど様々なコンテンツを提供し、学習させることがある。このような授業以外の場でのネットワークを介した教材の配布は、異時送信に該当し、この教材に他人の著作物が含まれる場合は、教育目的であるにもかかわらず著作権法に基づいた権利処理が必要となるので細心の注意が必要である。

今後の法律改正のスケジュールは、平成30年6月ごろに35条の第3項について法改正案が出され、平成31年の1月1日に施行し、権利者団体が教育機関に対して料金を徴収するという流れが予想される。大学は同法の改正に注視しながら、教育活動における異時送信を行わないのか、それとも異時送信について権利処理を行うか、オリジナルな教材を作るかについて熟考する必要がある。特に、完成後の教材の権利処理は非常に大きな労力がかかるため、なるべく早期に検討を開始する必要がある。各部局でどのように対応するか早急に検討を始めていただきたい。知識財産センターは助言を行いた

表1 研修会に参加した感想はいかがでしたか？

選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	8	50.0%
良かった	7	43.8%
どちらとも言えない	0	0.0%
あまり良くなかった	1	6.3%
良くなかった	0	0.0%
無回答	0	0.0%
合計	16	100.0%

いと考えている。

講演後には以下の質疑応答があった。

Q1 獣医の場合は鹿児島大学と授業の資料を作成していて、パワーポイント資料等に他人の著作物が含まれる。これらの資料を授業の1週間ぐらい前に、視聴者が特定の学生に限られるサイトに掲載して、閲覧できるようにしている。こういう場合も、著作権法に抵触するようになるのか。また、もしそうであれば、ライセンス料500円を支払うことで、解決できるのか。それと、この授業内容を録画して、両大学の学生に限定して復習のために視聴できるようにしているが、これも法に抵触することになるのか。

A1 法的には、2つの場合とも異時送信に該当し違法になる。これらについては、現状は個別に権利処理をする必要があるが、法改正でこの点は包括的なライセンス料支払いで解消される。

Q2 授業である出版社の本を教科書として用いていて、その本に掲載されている図などを授業のパワーポイントに用いているが、その出版社に授業のスライドに用いてよいかを照会し、許可が出ればそのまま使用してよいのか。

A2 一般的には、その本を教科書として学生が購入していれば、許可が得られることも少なくないと思う。このあたりについては、出版社に対して直接的に問い合わせの方が得策と考えられる。

Q3 学生に資料を配布する場合、例えば学生が資料をダウンロードした後に、国家試験に備えて学生どうして過去問や関連する資料を集めて試験対策をするとき、学生がそれらの資料に含まれる画像等を、獣医系の他大学の学生と融通しあった場合の責任は誰が問われるか。あらかじめ教員が2次配布を禁止することを学生に明示していたとしても、教員の責任が問われるか。それとも、そのようなことをした学生のみが責任が問われることになるのか。

A3 2次配布禁止については、授業の際に口頭で著作権侵害になることを含めて学生に伝えるとともに、資料にも明示するようにはしていただきたい。そうすれば、今の例では権利侵害の主体は当事者の学生であるので、教員の責任が問われることはない。

Q4 ライセンス料を支払えば、様々な出版社等のコンテンツを教材等に利用しても、合法ということか。

A4 法律で定めるといことは、そういうことである。

このようなライセンス料支払いについては、不公平なところもある。出版社はこのようにライセンス料の支払いがあるが、その本を書いた著者者について、このライセンス料の分配が実際に回るかどうか見通しがついていない。大学の教員は研究者であり、現行の著作者という立場であることも少なくないので、このように権利団体が徴収するライセンス料から分配金を支払うことを要求してもよいのではないかと考える。先生方が本を出される場合には、著作権の許諾を出版社は求めてくるが、今後はこのような点を面倒と考える出版社側が、大学の先生方には知識がないと思って、著作権の譲渡を求める場合も増えるかもしれない。このよう場合は、著作権を譲渡しないようにしていただきたい。また、出版契約で著作権を許諾する際に、何らかの著作物を出す場合、特定の出版社を通してドラマ化権など全てのハンドリングを行うとの条項が含まれていることが多いが、この条項を外すように要求していただきたい。日本の出版物のかなりの部分は大学の教員が著作者になると思うので、このあたりについてはご留意いただければと思う。

知的財産センターとしては、個人的にもご相談いただければと思うので、ご連絡いただければと思う。

研修会後のアンケートには、「IT 時代が故の権利の帰属の考え方が難しいことを改めて学んだ」との回答があった。また、今後希望する研修会については、「引き続き著作権」との回答があった。

第3節 教育改善に関する活動

鹿児島大学共同獣医学部との共同 FD 研修会を開催した。以下に、その報告書の抜粋を記載する。

1. はじめに（目的および概要）

本年度(平成 29 年度)は、第 4 回目の合同 FD 研修会として鹿児島大学共同獣医学部主催により、平成 29 年 9 月 16 日(土)に鹿児島大学で実施され、鹿児島大学共同獣医学部教員および山口大学共同獣医学部教員約 70 名が参加した。まず、前夜の 9 月 15 日(金)夜に情報交換会が実施され、翌日の研修会におけるワークショップの準備が行われた。研修会当日の 9 月 16 日(土)朝より、宮本篤学部長挨拶の後、麻布大学獣医学部獣医学科微生物学第 1 研究室の阪口雅弘教授による教育講演が実施され、その後に 4 分野(基礎・応用、産業動物臨床、伴侶動物臨床、学生生活)に分かれてワークショップが実施された。その後に、鹿児島大学共同獣医学部の新動物病院およびその他関連施設の見学会を山口大学教員向けに実施された。

2. 研修会次第

日時：平成 29 年 9 月 16 日(土) 9:00 ～

場所：鹿児島大学共同獣医学部(双方向システムは未使用)

1) 学部長挨拶(9:00～9:10, 鹿大 307 教室)

宮本篤 鹿児島大学共同獣医学部 学部長

2) 教育講演(9:10～10:10, 鹿大 307 教室)

講師：阪口雅弘(麻布大学獣医学部獣医学科微生物学第 1 研究室)

演題：学生にとって分かりやすく・国家試験対策につながる教材作成

要旨：講演では、学生にとってわかりやすく国家試験対策につながり、なによりも学生にとって楽しい授業づくりのためのテクニックや工夫について丁寧に説明がなされた。講演は、4つの部分、すなわち、講義用のスライド作成、講義の進め方、定期試験の進め方、および国会試験・CBT への対応に分かれて進められた。講義用スライドは、冬休み期間の自学復習として学生に作らせるなどの工夫が紹介され、その実例が数点示された。また、教材として利用価値の高い書籍、デジタルコンテンツ(画像や動画)が紹介された。それらを使って、学生の興味を維持して学習効率を上げる方法、すなわち講義の進め方が説明された。さらに、試験の実施方法においては、出題する問題(穴埋め 150 題、レポート課題 50 題、国会試験 300 題)はすでに配布しておき、その中から出題することで、学生が無駄な勉強をせずに重要な項目を優先的に勉強するように工夫されていた。

最後に、6 年後期に獣医学特論として獣医微生物学の過去問題解析を実施して、国家試験対策を行っていることの説明があった。これらの教育法を通じて、比較的教えるにくい獣医細菌学を学生から特別に評価されるレベルで教育していることが感じられた。

講演を聴講した全教員にとって、有用な情報がたくさん含まれた講義内容であり、多くの教員の明日からの講義に応用できるエッセンスおよびチップスが満載であった。



阪口先生による講演風景



講演風景（教室前方から）

3) 教育ワークショップ（10:20～11:50, 301, 302, 303 教室および 33 セミナー室）

(1) 基礎・応用（302 セミナー室, 24 名）

テーマ：基礎・応用獣医学に関連したカリキュラムについて

議題案：① 食品衛生関連の参加型実習（と畜検査, 食肉加工実習など）

② 病理学実習

③ 実験動物

④ その他

(2) 産業動物（303 セミナー室, 15 名）

テーマ：産業動物臨床獣医学に関連したカリキュラムについて

議題案：① 参加型臨床実習の効果的な方法

② 参加型臨床実習の評価方法

③ 参加型臨床実習の学生アンケートについて

④ その他

(3) 伴侶動物（301 セミナー室, 23 名）

テーマ：伴侶動物臨床獣医学に関連したカリキュラムについて

議題案：① 参加型臨床実習の効果的な方法

② 参加型臨床実習の評価方法

③ 臨床実習における動物の代替に関する対策

④ 夜間臨床実習の方法

⑤ 双方向講義での習熟度

(4) 学生生活（33 セミナー室, 15 名）

テーマ：学生生活に関連した事項

議題案：① Glexa に関する学生アンケートの結果について

② 国家試験模試・CBT 対策問題

③ その他

4. 施設見学（12:00～）

(1) 動物病院（小動物診療センター）

(2) 大隅産業動物診療研究センター（悪天候のため中止とし、学内の大動物施設の見学に変更した）

5. 情報交換会（平成 29 年 9 月 15 日 18:00～20:30）

場所：ジェイドガーデンパレス

合同 FD 研修会前日の 18 時からジェイドガーデンパレスにて情報交換会が行われ、翌日の合同 FD 研修会で協議する予定の議題について予め議論された。両大学で 67 名の参加者であった。

第4節 学生授業評価・教員授業自己評価

(1) 学生授業評価アンケート

平成29年度の学生授業評価アンケートは実施率が88%となっており、2015年度（平成27年度）から継続して80%を超えて推移している（表2）。

表2 学生授業評価アンケート実施状況の推移

2015年度			2016年度			2017年度		
科目数	実施数	実施率	科目数	実施数	実施率	科目数	実施数	実施率
83	75	90%	99	81	82%	100	88	88%

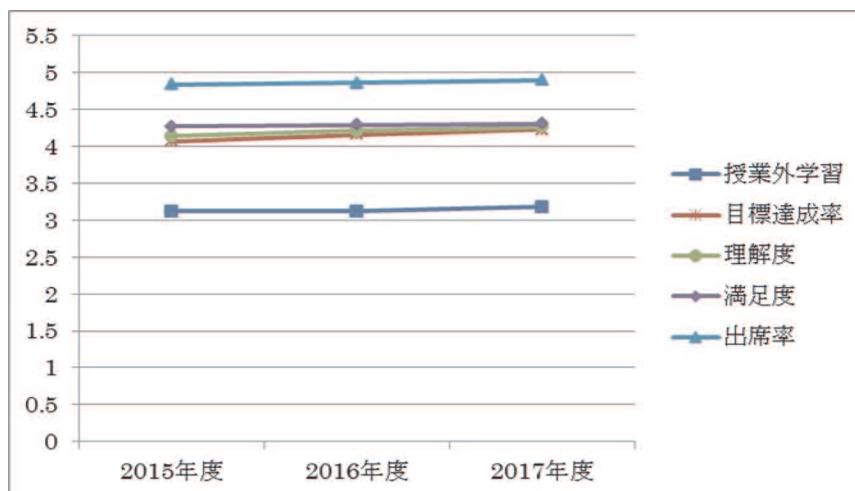
全額共通の質問5項目（授業外学習時間、目標達成、満足度、理解度、出席）については、ほぼ前年度と同様の数値となっており、僅かずつではあるが、全ての項目において数値が上昇している。近年の経年変化においても全ての項目で上昇傾向にある（図1）。

授業外学習時間については、クリニカル・スキルスラボを整備し、シュミレーターを用いた基本的なトレーニングや録画講義の閲覧、コアカリに準拠教科書を始めとした図書を備え、学生の自主的な学習の場としての活用が見込まれるため、学習時間の増加が期待される。

表3 平成29年度の学生授業評価アンケート全学共通項目における全体平均

授業外学習時間		目標達成率		理解度		満足度		出席率	
講義	実験・実習	講義	実験・実習	講義	実験・実習	講義	実験・実習	講義	実験・実習
3.22	3.05	4.19	4.37	4.21	4.44	4.26	4.47	4.89	4.93

図1 学生授業評価アンケート全学共通項目における全体平均の推移



(2) 教員授業自己評価

平成 29 年度は、前年と比較して実施数が少なく、実施率も 47.9%であった。これまでは、未入力
の教員に対してFD担当委員が入力依頼を行っていたが、FD担当教員の異動により、十分な督促が
できなかったことが原因と考えられる。また、全教員間で教員授業評価を実施することについて、再度、
共通した認識を持ち実施することが重要である。

表 4 対象科目における教員授業自己評価実施状況の推移

2015 年度			2016 年度			2017 年度		
科目数	実施数	実施率	科目数	実施数	実施率	科目数	実施数	実施率
59	58	94.1%	70	51	72.9%	72	34	47.9%

第 5 節 F D 実施経費報告書

部 局	FD研修・FD活動の内容	経費の用途 (購入物・旅費謝金等)	執行額(千円)	FD活動の効果(簡潔に)
共同獣医学部	FD研修会参加	旅費	447	獣医学教育の改善・充実についての情報収集、ワークショップの受講。
計			447	

第 6 節 来年度の課題

共同獣医学部は、欧州獣医学教育認証機構(EAEVE)による認証取得に向けた教育改革事業に
学部全体で取り組んでいる。世界標準の教育を担保するため、教育改善を行うとともに、教員の教育
力向上のため、鹿児島大学共同獣医学部と合同FD研修会を行ってきた。積極的に対面でのFD研修
会を行い、物理的に困難な場合には双方向遠隔講義システムの利用によって研修会の開催を企画して
いる。

学生授業評価及び教員授業自己評価については、その結果を教育改善に繋げていくことが重要であ
る。また、教員授業自己評価の入力率向上のため、FD担当教員による未入力者への督促等を行い、
入力率の向上に取り組んでいくことにより、改善することができる。と考える。

授業外学習時間の確保については、クリニカル・スキルスラボを整備したことにより、学生の学習
内容・学習環境が改善され、主体的な学習が期待される。

また、適正な成績評価のため、成績評価に関する異議申立制度について、全学生へオリエンテーシ
ョン開催時に説明を行っている。併せて、授業毎の成績分布状況を全教員が確認し、今後、必要に応
じて評価方法の改善等を行うことができるよう取り組んでいく必要がある。

第12章 国際総合科学部のFD活動

第1節 授業公開

平成29年度は、ピア・レビューは実施しなかった。

第2節 学部・研究科主催FD研修会

1. 概要

本学部では、教務委員会、学生・国際交流委員会（就職部会を含む）、PDF委員会がそれぞれ必要に応じてFD研修会を企画し、FD委員会がこれを取りまとめる形をとっている。平成29年度は、大学教育センターによる教育改善FD研修会およびアラカルト型FDを含めて、全10回のFD研修会を開催した。特に後期から本格化するPBLおよび就職活動については、教職員が共通認識をもつ必要があったため、PBL関連3回、就職活動関連4回の計7回を占めることになった。教務関連では、グループワークが多い本学部教育の特性上、精神的その他の事情でこれに参加できない学生への対応に苦慮していることもあり、関連するアラカルト型の講師に依頼してFD研修会を開催した。

2. 学部教育改善に関わるFD研修会

第1回 国際総合科学部FD研修会

- ・ テーマ：就職指導について その1：基本方針に関する意見交換
- ・ 話題提供：崎山智司教授（学生・国際交流委員会）
- ・ 日時 6月21日 15:00~16:00
- ・ 場所 国際総合科学部大会議室
- ・ 参加者 27名
- ・ 概要

就職担当の崎山教授より本学部における就職支援の基本方針案について以下のような提案があった。

就職は、学生にとって一生を決めることであるのはもちろんのこと、学部にとっては教育成果を評価される最も重要な指標の一つであり、教職員にとっては教育の質、教職員の能力(質)が評価される指標でもある。新設学部である国際総合科学部では、通常の文系学部のように就職支援室にまかせきりにするのではなく、学部として組織的に就職を支援していく体制を整えることが求められる。学生の希望を優先した就職支援を原則としつつも、学部内に設けた就職支援委員会(仮)が本学部の就職支援業務を統括し企業より推薦枠を確保するなど、就職先の調整・斡旋業務を行う。一方担任教員は担当学制の就職状況を把握し、必要があれば面接や履歴書の書き方の指導を行う。

また以上に加えて、キャリア教育において個々の学生の自立心等を養う「マインド育成」の重要性が指摘され、「世界がもし100人の村だったら」を活用した基礎セミナーでの教育事例が示された。

- ・ 質疑応答

主に以下の点について質疑応答・ディスカッションがなされた。

- (1) 就職支援室と学部就職支援体制の棲み分け
- (2) 学生の就活マインド育成
- (3) 企業が主催するインターンシップへの対応

- (4) TOEIC、YU CoB CuS 等で卒業要件を満たせない学生への対応
- (5) 就活についての担任の業務
- (6) 学部推薦の扱い

第2回 国際総合科学部FD研修会

- ・ テーマ：PBLについて その1:教員の役割・授業設計
- ・ 話題提供：PBL委員会
- ・ 日時 7月19日 15:00~16:00
- ・ 場所 国際総合科学部大会議室
- ・ 参加者 25名
- ・ 概要

2018年度より始まるPBLに関して、今年度Q3以降のスケジュールとQ4以降の授業設計、また各プロジェクトの進捗の説明及び質疑応答が行われた。

プログラムコースについての詳細の実施内容および進捗について配布資料を基に説明があった。一部当初計画していたプロジェクトの実現性に関して変更の可能性があることが共有された。

プロジェクトの定義や担当教員の役割、授業設計について資料を基に説明された。

プログラムコースの学生選考方法について資料を基に説明された。

構想書の書き方について説明された。基本はすでに共有された資料の通りであるが、学生配属が決まってから書くというプロジェクトもある。先行研究を調べる時間がないなどの問題もあるので、実情に応じた記載で問題ないという説明があった。

- ・ 質疑応答

主に以下の点について質疑応答・ディスカッションがなされた。

- (1) パートナーとの契約についての情報共有
- (2) プロジェクトの成果のあり方
- (3) 構想書の予算計画の書き方
- (4) 3年後期の時間割上の扱い
- (5) PBL関連の教員負担の評価
- (6) プロジェクトの山口との関連の基準

第3回 国際総合科学部FD研修会

- ・ テーマ：特別学生支援と合理的配慮 ※ 学生特別支援室（SSR）のアラカルト研修会
- ・ 話題提供：講師・話題提供：岡田菜穂子 田中亜矢巳カウンセラー（教務委員会）
- ・ 日時 9月20日 15:00~16:20
- ・ 場所 国際総合科学部大会議室
- ・ 参加者 23名
- ・ 概要

年4月から障害者差別解消法が施行され国立大学では合理的配慮の不提供や障害者に対する差別的取り扱いの禁止が法的義務となっている。そこで本学では学生特別支援室（以下、SSR）を設置し、合理的な配慮を実施している。そこで、岡田講師から合理的な配慮の内容や学内の支援体制の概要、SSRの業務内容について説明があった。この中で相談件数は年々倍増していることや配慮願の作成・配布方法等について詳細に説明があった。さらに、SSRではサポート学生の育成を行っている。スキルトレーニングだけでなく、本年度からは正規授業として単位化し、アクセシビリティの考え方を理

解し、障害者と企業や組織等の社会とのさまざまな仲介ができる人材を大学から輩出することを目指していることが明らかにされた。

田中カウンセラーからは発達障害の概容とアクティブ・ラーニングでの対応について説明があった。発達障害者は、最近では神経発達症の言う分類に含まれるようになった。発達障害には自閉症スペクトラム症 (ASD)、注意欠陥多動性症 (ADHD)、学習障害 (SLD) 等があることが示された。アクティブ・ラーニングにおける配慮に関しては、グループ分けに対して注意を払う必要や情報が取れていない状態があるのでプリント配布や板書等が情報を確実に使えるのに有効であることが紹介された。後半は、国際総合学部で現在、支援の申請書を提出している学生を題材に、当該学生の配慮願の内容を元に SSR としてこれまでどのような支援を行ってきたかを岡田先生より説明があった。その後、学部で当該学生の授業を担当しているまたは支援に関わっている3名の先生方から、基礎ゼミや授業等での支援の状況や支援に対する本人の反応等について意見交換が行われた。また、後期にアクティブ・ラーニング型授業を担当予定の先生方から心配になっていることについて協議が行われた。この中で本人が特に興味関心がある題材を話のきっかけにすると本人とのコミュニケーションが比較的上手に進むことが報告された。一般的に障害学生支援というと、問題を解決するというどちらかというネガティブ対処療法的な支援を主に想像されがちであるが、本人が持っている良さを上手く引出すというポジティブな支援も大切であることが協議を通じて共有することができた。SSR や学部としても今後は授業担当者の先生方に本人から自分が苦手とすることや配慮願の内容を説明できる能力 (セルフ・アドボカシー能力) を育成できるように学部や授業担当者の先生方と協力していきたいとの意見があった。

・ 質疑応答

主に以下の点について質疑応答・ディスカッションがなされた。

(1) アクティブ・ラーニング型授業における配慮のあり方、指示漏れの回避。

指示漏れについてはメール等による告知の徹底を心がける。グループ・ワークについてはそれとなく本人に困っていることがないかを聞く、など。

(2) 他学生とのバランス

本人に授業の履修条件やルールをよく理解してもらおう。なお本人の承諾無く他学生に障害に関わることを知らせてはならない、など。

第4回 国際総合科学部FD研修会

- ・ テーマ：就職指導について その2：基本方針に関する意見交換
- ・ 話題提供：学生支援センター 平尾元彦教授 (学生・国際交流委員会)
- ・ 日 時 10月4日 15:00~16:00
- ・ 場 所 国際総合科学部大会議室
- ・ 参加者 22名
- ・ 概 要

本学部の一期生の2019年就職・採用活動の指導対策として、本学学生支援センターの平尾先生より、就職活動の現状や山口大学での就職支援に関する取り組み、その他教員の対応の方法について、講義いただいた。主なトピックは以下の通り (詳細内容は割愛)

(1) 昨今の採用活動の時期の変動とその影響や対策について

(2) 学生の就職活動と企業の採用活動について、応募の方法や基本的な情報の獲得に関する内容

(3) 学生支援センター／就職支援室の取り組みの詳細についての紹介と説明や山口大学におけるキャリア教育の実践内容について

(4) 本学の就職支援の課題について

(5) 教員の指導方法に関するポイントや注意点について

・ 質疑応答

主に以下の点について質疑応答・ディスカッションがなされた。

(1) 会話の苦手な学生や発達障害の学生への対応

学生支援センターでその都度対応する

(2) いくら情報を提供しても響かない学生への対応

流れに乗れない学生については、無理に動かそうとせず、時期をみてサポート

(4) 就職サイト等しか見ていない視野の狭い学生への対応

業界団体を見て、山口にある企業を調べるなど。ナビが全てではないことを伝える必要

第5回 国際総合科学部FD研修会

- ・ テーマ：就職指導について その3：具体的戦略
- ・ 話題提供：平原克己アドバイザー（学生・国際交流委員会）
- ・ 日 時 10月18日 15:00~16:00
- ・ 場 所 国際総合科学部大会議室
- ・ 参加者 21名
- ・ 概 要

平原アドバイザーより、以下の解説とアドバイスをいただいた。

現在の就職状況の特徴は、売り手市場であり、運送、サービス、飲食は充足率低いことである。就職先を決めるに当たって学生はマイナビ等のサービスからスタートすることが多く、教員もこれを把握しておく必要がある。ただし学生は業種、職種、エリアからクリックしがちであるため、企業研究が足りず、ミスマッチによる退職が多い現状があることに注意を払う必要がある。いい会社はつぶれな、そしてリストラがない会社であると仮定するならば、県内の中小企業の場合、自己資本比率：30%以上、経常利益率：5%以上、業歴50年以上が指標となるであろう。大企業でも倒産やリストラのリスクがないとは言い切れない。

ナショナルブランド3社 出身県3社、山口県3社 10社ぐらいをチョイスして検討してほしい。企業のホームページ ①売上、②業歴、③従業員数、④海外展開 をチェックするよう指導する。トップのバナーに採用の欄がないページは採用に消極的と考えられる。

OB・OG訪問は、企業人事課との電話でのやりとりやアポ取りなど、それ自体社会勉強になるので推奨する。エントリーシートは、自分の言葉で書き、やっていないことは書かない。コピーアンドペーストをやってはいけない。余白があまりないようにし、絵を入れるなどの工夫があってもいい。本学部の場合、海外留学経験とPBLがセールスポイントとなりうる。企業が求める人材と本学部のディプロマポリシーは合致していると考えられる。

・ 質疑応答

外資系や海外航空企業希望者の注意点についての質問があった。地域限定枠を使うのも一つの方法である。ただし外資系は求められる水準が高いのできびしく、リスクがあるため、その点を目配りしてあげる必要があるとの回答を得た。

第6回 国際総合科学部FD研修会

- ・ テーマ：第1部 PBLについて その2：プロジェクト管理(1)、redmine 講習
第2部 学生指導について (YU CoB CuS を中心に)
- ・ 話題提供：第1部：星野晋准教授・杉井学准教授 (PBL委員会)

第2部：川崎勝教授（教務委員会）

- ・ 日 時 11月1日 15:00～16:30
- ・ 場 所 国際総合科学部大会議室
- ・ 参加者 22名
- ・ 概 要

第1部：PBL管理・Redmineの使い方について

資料に基づき、PBLのプロジェクト管理の方法とそれを日常的に実施するRedmineというシステムの講習があった。

- ・ 質疑応答

Redmineの使用法についての技術的な質問がいくつかあり、杉井PBL委員の方がそれらに答えた。Redmineの話題とは別に、PBLにおける自家用車の使用についての質問があった。旅費が発生しない範囲でも、学研災がおりないため、学生自身の自家用車は認められないとのことであった。ただし教員運転の自家用車での引率は可能である。

第2部：修学指導・CobCusについて

修学指導について、YU CoBCuSについて説明があった。

Q4に一期生に対して卒業に向けた修学指導としての面談を行う。その際に担任教員も卒業要件を確認し適宜指導する必要がある。125単位取得だけではだめで、YU CoBCuSにおけるカテゴリーごとに求められる単位数が十分かをチェックしなければならないなどのことが確認された。

第7回 国際総合科学部FD研修会

- ・ テーマ：第1部 PBLについて その3：プロジェクト管理(2)、PDMについて
- ・ 話題提供：杉井学准教授（PBL委員会）
- ・ 日 時 12月6日 15:00～16:00
- ・ 場 所 国際総合科学部大会議室
- ・ 参加者 17名
- ・ 概 要

2018年度より始まるPBLに関して、プロジェクトの進捗管理ツールであるPDM（プロジェクト・デザイン・マトリクス）の説明があった。ツールの考え方、詳細の使い方に関する説明のあと、出席者による質疑応答があった。

- ・ 質疑応答

主な質疑応答は以下のとおりである。

Q： PDMの単位とPBLのプロジェクトの単位は同じか？

A： まずはプロジェクト全体の大まかなプランを作る。最初のレベル感は、1年間で目指す指標を作り、作業単位で細かくしていく。

Q： 必須なのか？またこれは、学生が作るのか？

A： マトリクス作成後、提出してもらうことを想定している。

Q： 作成したものを全て提出する必要があるのか？

A： PDMに従って進めている限りは提出が必要。

Q： PBLにおいてはプロセスのマネジメントのみに最低限使うという理解でいいか？

A： そういうこと。ツールとして使いやすい形で使う想定で行う。

Q： 最初のバージョンと最後のバージョンを提出するというでいいのか

A： エビデンスでとして残すという意味では、節目で残せていけばいい。

第8回 国際総合科学部FD研修会

- ・ テーマ：インバウンド・アウトバウンド留学- 問題点の整理と意見交換
- ・ 話題提供：マルク・レール教授（学生・国際交流委員会）
- ・ 日時 2月21日 15:15～16:30
- ・ 場所 国際総合科学部大会議室
- ・ 参加者 21名
- ・ 概要

交換留学の現状および問題点についてマルク・レール教授より説明があり、その後、質疑応答がなされた。

(1) 交換留学全体

アウトバウンドは欧米希望者が多く、インバウンドはアジアからの留学生が多いというアンバランスの問題がある。

(2) アウトバウンド

学生は欧米・オセアニアを好んで、中国を敬遠する。その結果、思ったところに行けなかったと引きずる学生が発生する。行き先によっては、履修できる授業科目が少ない、履修できる授業科目の専門性が高くてついていけないなどの問題もある。

(3) インバウンド

日本語コミュニケーション能力の高い学生は履修できる科目が多い（全学）が、低い学生は履修可能科目が少ない（国総・日本語教育のみ）。また英語で開講される専門的な科目は少ない。関心のあるテーマもバラバラであるため、学生の希望に応えにくい。授業科目のプログラム化が必要と考えられる。学生生活面ではメンタルケアのサポート体制を考えていく必要もある。

・ 質疑応答

(1) アウトバウンド

希望から外れた学生への選択肢の示し方について、そもそも希望をとる意味はあるのか？抽選ではいけないのか？という質問に対しては、学生のモチベーションを維持するには希望調査に意義があるとの回答があった。

学習の中身ではなく国で行き先を選んでいる。行き先に対する偏見がある。このことについては、幅広い知識・視野・教養等はどこに行っても得られるということを学生にどのように伝えるかが肝要である。地理と歴史が重要。アジアについての知識・教養が抜けている。1年生の段階で地歴を学ぶ機会を設ける必要があり、カリキュラム改定の必要という意見があった。

またこれに関連して、英語圏に行かなかった学生は損をする（英語能力のみ評価）という指摘もあった。英語以外の言語習得に対しても評価する仕組みが必要との意見があった。

留学によって前後の学習が分断されているという指摘もあったが、これについては、前後の連続性を保持すべく、留学中に課題を与える必要もあるとされた。

(2) インバウンド

韓国人留学生で、履修科目が帰国後専門科目ではなく教養科目に数えられるケースがある。この点については、シラバスは公開されており、出身大学の方針・ルール・判断に従うしかない。

インバウンドも中身ではなく日本に来やすいから学生が多く、授業内容に対するモチベーションが低い。だからといって授業のレベルを下げる必要はないということが確認された。

第9回 国際総合科学部FD研修会

- ・ 特別講演会「外資系企業で働くこと」

- ・ 話題提供：イーベイ・ジャパン株式会社 カテゴリーマネジメント部部長 岡田雅之
- ・ 日 時 2月21日 15:15~16:30
- ・ 場 所 国際総合科学部大会議室
- ・ 参加者 15名 (学生10名程度も聴講)
- ・ 概 要

演者は、1997年山口大学経済学部卒業後、アクセンチュア株式会社、Apple Japan 株式会社等を経て、2017年より現職に就かれた。その経験を踏まえて、国内企業と外資系企業、外資系の中でも主に参入型と定着型のそれぞれが、意思決定、裁量、給与、有給休暇、残業、人事異動等の面でどのように異なるか、その特徴、メリットとデメリット等について解説した。その上で学生に向けて、外資系企業に就職する際の条件や求められるスキル、準備しておくべきこと等についてお話しいただいた。

教育改善FD研修会 (大学教育センターとの共催FD研修会)

- ・ テーマ：YU CoB CuS の現状と課題
- ・ 話題提供：林 透 (大学教育センター准教授)
- ・ 日 時 1月17日 13:00~13:50
- ・ 場 所 国際総合科学部大会議室
- ・ 参加者 27名 (学生10名程度も聴講)
- ・ 概 要

林大学教育センター准教授より、AL ポイントの状況、昨年6月頃に実施した教員へのアンケートの結果およびPROG テストの結果とYU CoB CuS との関連等について説明があった。

ALについては、AL ポイントは95% くらいあり、また学生一人当たりの単位取得科目におけるAL ポイント累積値は、国総1期生は他学部の平均が150 くらいであるのと比べて倍以上の350 くらいあるなど、AL科目がひときわ多い学部の特徴が表れているとのことであった。

YU CoB CuS の有効性に関する教員対象のアンケート(教員20名対象に6月実施)では、授業対象者全般の傾向や学生の得意不得意が分かるので参考になるという肯定的な意見が見られる。しかしその一方で、各授業に設定された基準スコア(DPに対応)の重み付けの妥当性、さらにはYU CoB CuS が本学部の目指すDPの卒業時点における達成を適切に反映しているかは、初年度生が卒業に至っていない現時点ではまだ評価できないという話しになった。今後、就職先の動向等とも関連づけながら注視していく必要がある。

学生対象のアンケート(留学前2年生89名5月実施、帰国後3年生89名12月実施)では、3年生の方がYU CoB CuS および基準スコアを意識している学生が増える傾向にある。選択科目が増え、卒業要件や就職活動が意識されはじめる高年次学生ほど、基準スコアを学修の参考にしたりその改善に活かしたりする学生は増加するが、その一方でネガティブにとらえる学生も増える傾向にあるとのことである。

つづいてPROG テスト(1年生と3年生に実施)の結果については、YU CoB CuS の相関はほとんど見られないが、リテラシーの情報収集力と課題発見力について、いわゆる知識理解DP1に少し弱い正の相関がある。問題はコンピテンシーで、統率力、行動持続力についてDP2に-0.3程度の弱から中程度の負の相関があった。

質問紙の回答からは、自律的学修という側面でまだ課題があることが指摘された。このことについては岩手大学の『学位授与の方針』自己評価チェック・リストを引用しつつ、間接的な評価を重視すべきとの提案があった。

- ・ 質疑応答

PROG テストの認知度や信頼性、結果の他学部や他大学との比較について質問があった。PROG テ

ストの受験者は10万人ぐらいで、大学業界では社会人基礎力を測る外部テストとしては一番信頼性が高いとされているが、結果の分析・評価については、今後経年的にデータを積み重ねていく必要があるとの回答があった。

学生アンケートからは、YU CoB CuS をよく見ているけど、実際に自分で利用していないともとれる。また統率力とコミュニケーションのところが弱い負の相関なので、統率力があるという人はコミュニケーション力が低いみたいなそういう相関がある。そして、YU CoB CuS と PROG の間が負の相関なので、あまり関係してないとれるがどうかという質問があった。

これに対して、YU CoB CuS を通してセルフ・ディレクティッド・ラーニング (SDL) を目指す上で、自分の力と先生の助けも受けて、次の学習に進めているかという所に、まだ課題があるではないかということ、また PROG テストと YU CoB CuS の関係性において、一部で負の相関が出ていることについて、カリキュラムのウェイト付けについて今後見直しを行う必要があるのではないかということが今回の研修会で指摘したいことであったとの回答があった。

第3節 教育改善に関する活動

学生が本を読まない・読めないという問題に対応するために、教務委員会が中心になって各教員より推薦図書とその解説を集め、ブックガイドを作成した。配布は次年度初めごろである。

第4節 学生授業評価・教員授業自己評価

学生授業評価について、学部として組織的な分析は行っていない。教員授業自己評価については、専任教員はほぼ100パーセント入力しているが、特に教育改善に活かすような組織的な活動はしていない。

第5節 FD実施経費報告書

部 局	FD研修・FD活動の内容	経費の用途 (購入物・旅費謝金等)	執行額(千円)	FD活動の効果(簡潔に)
国際総合科学部	「外資系企業で働くこと」(岡田雅之氏講演)	講師謝金・旅費 1名	72	外資系企業に就職を希望する学生に対する指導の参考になった
計			72	

第6節 来年度の課題

今年度本学部では、教務委員会、学生・国際交流委員会(就職部会を含む)、PBL委員会(来年度からは教務委員会の下位部会となる)の3つの委員会からFD研修会案を出してもらい、FD委員会でこれを統括するスタイルを整えたが、来年度はこれをさらに推し進めて、研修会の司会・運営や議事録作成も含めて各委員会がとり仕切り、FD委員会がスケジュール管理等を行う形に合理化する。来年度は完成年度にあたるため、共通理解促進のためのFD研修会は削減するが、PBL関連では、授業内容や方法の問題点を抽出し今後の改変につなげるべく、振り返りのFD研修会を開催する予定である。また教務委員会は、これまで行われていなかった授業のピア・レビューを実施することになっている。

第13章 人文科学研究科のFD活動

第1節 授業公開

人文科学研究科としての授業公開は実施していない。

第2節 学部・研究科主催FD研修会

本年度は、研究科主催のFD研究会は行わなかった。

第3節 教育改善に関する活動

人文科学研究科としての教育改善活動は特に実施していないが、後述するように大学院生アンケートを実施している。

第4節 学生授業評価・教員授業自己評価

(1) 学生アンケート

受講学生数が少ないことから、IYOKAN2 を利用した学生授業評価は実施しておらず、人文科学研究科独自の様式による学生授業アンケートを実施してきた。平成29年度もこれを踏襲した。アンケート実施時期については、大学院生の多くが出席する「修士論文報告会」に行うとし、平成30年2月19日の同報告会において配布・回収した。アンケート提出者は3名で、回収率は50%であった。

アンケートの質問項目と回答は以下の通りである。

(1) 人文科学研究科の授業（講義・演習）について、良いところ、このまま継続してほしい点があれば、お教えてください。

- ・知財の授業まで幅広い授業が存在すること
- ・成績発表のタイミングが早いこと
- ・講義で学部生の時とはちがって教員と一つの課題に対して深い議論ができるところ。

(2) 人文科学研究科の授業（講義・演習）について、今後できれば改善してほしい点があれば、お教えてください。

- ・チャイムがないと時間の枠をオーバーして次の授業に間に合わなくなることもあったので、チャイムをつけてほしい。
- ・前期の人文科学総論の課題について、オムニバス方式なので統一してほしい。
- ・オムニバスで毎度先生が変わるのは内容はともかく課題の負担が大きいです。

(3) 研究環境（例えば、大学院生用研究室など）についてご要望があれば、お教えてください。

- ・院生室の使用人数がおそらく当初想定していたよりも多くなり、コンセントの数やイス・机のキャパシティに限界があるように感じる。来年度は4人ほど入るらしく、院生室のこれからをどうしようか考える必要があるように思われる。
- ・研究室にあるPCのワードが中国語なので日本語にしてほしい。
- ・コンセントを増やしてほしい（人数が増えたら足りないと思うので）。

・院生室について、人数に対してせまいかもしれないので、1人で広いスペースを占拠することなく、各自良識をもって使用することが必要と感じる。

(4) その他、ご意見ご要望ご感想があれば、お教えてください。

・TAなどというものに高い給料を払っていただきありがとうございます。支払われる給与に見合う仕事ができるようがんばりたいと思います。

(2) 教員授業評価

人文科学研究科の在籍院生数は少なく、授業数も限られている。平成29年度の実施率は16.7%であった。

第5節 FD実施経費報告書

人文科学研究科で実施したFD活動にともなう経費執行はない。

第6節 来年度の課題

人文科学研究科は規模が小さいため、研究科独自のFD活動は展望しにくい。少人数であるがゆえに、よりきめ細やかな大学院生アンケートを継続させて、院生の要望をよく聴取し、院生の研究や研究環境の充実・改善にむけた提言を行っていくべきである。

第14章 教育学研究科のFD活動

第1節 授業公開

平成28年度から発足した専門職学位課程（教職大学院）教職実践高度化専攻では、原則、すべての授業を公開しており参観を認めている。教職大学院担当教員であれば、その授業担当者に断って普段から多数参観をしている。また教職大学院担当教員以外の参観希望者には、3週間程度前に授業担当者に参観希望を伝え、許可を得た上で参観してもらうようにしている。

従来の授業公開は、特定の期間、特定の授業を公開するかたちで行われてきたと思われるが、それでは、参観したくても予定が合わない、普段とは違うよそ行きの授業を意識してしまうといったことが生じてしまう。授業公開を日常的なものにすることで、授業者としての不断の努力、教育力の向上を、また学生の緊張感維持と学習成果の向上を期待して制度化したものである。

平成29年度中の授業公開の外部参観者は、案内不足のため、ごく数人程度であった点は反省点である。

第2節 学部・研究科主催FD研修会

平成29年度、教育学研究科主催というかたちでのFD研修会は実施していないが、専門職学位課程（教職大学院）教職実践高度化専攻では下記の通り計6回のFD研修会を実施した。

第1回教職大学院FD研修会（教育学部・教育学研究科に公開）

「教職大学院のカリキュラム、履修方法等を再確認する」

担当：教職大学院担当教員

日時：平成29年4月4日（火）8:40～11:50

場所：教育学部43番教室

参加者（概数）：30名（院生含む）

第2回教職大学院FD研修会（教育学部・教育学研究科に公開）

「教職大学院における指導・研究の進め方（事例紹介から相互に学び合う）」

担当：教職大学院担当教員

日時：平成29年4月6日（木）8:40～11:50

場所：教育学部43番教室

参加者（概数）：30名（院生含む）

第3回教職大学院FD研修会（教育学部・教育学研究科に公開）

「教職大学院の活動概要について」

講師：佐々木司（教職大学院担当教員）

日時：平成29年4月19日（水）15:00～15:20

場所：教育学部21番教室

参加者（概数）：90名

第4回教職大学院FD研修会

「魅力ある学校づくり～不登校の未然防止～」

講師：板垣育生（教育学部教授（特命））

日時：平成29年10月12日（木）10:20～11:50

場所：教育学部43番教室

参加者（概数）：40名（院生含む）

概要：講師は、平成22・23年度及び平成26・27年度の計4年間、周南市立岐陽中学校長、平成24・25年度は周南市教委学校教育課長を歴任。この間、国立教育政策研究所の指定を受け、不登校の未然防止を目指した「魅力ある学校づくり」調査研究事業の取組に着手。当日は、事業の具体的な紹介と、校長・行政職員として経験された危機管理に関する事例等について語っていただいた。

第5回教職大学院FD研修会

「役割とつながりを基調とする学校経営と未来創造型の生活科・総合的な学習の時間のデザイン」

講師：岡崎智利（教育学部教授（特命））

日時：平成29年10月12日（木）12:50～14:20

場所：教育学部43番教室

参加者（概数）：40名（院生含む）

概要：講師は、山口県内小学校教諭、附属光小学校教諭、指導主事を経て、山口市内で小学校教頭、宇部市・周南市で小学校長を歴任。この間、全国小学校生活科・総合的な学習教育研究協議会全国理事、山口県小学校教育研究会生活科・総合的な学習部会部長などの役職を兼務。当日は、生活科と総合的な学習の時間を軸に、つながりのある教育課程について話していただいた。

第6回教職大学院FD研修会

「認証評価について学ぼう」

【第1部】認証評価の概要説明（基礎的事項の共有）

【第2部】認証評価への実務的対応検討・質疑応答（詳細な事柄を検討、訪問調査に向け具体化をはかる）

講師：佐々木司（教職大学院担当教員）

日時：平成30年2月28日（水）12:50～15:00

場所：教育学部43番教室

参加者（概数）：35名（院生・事務職員含む）

概要：認証評価は、評価委員（6名）ほか計10名程度による訪問により行われ、調査（10月～11月の連続した2日）が含まれ、その際、教員との面談、教育委員関係者との面談、学生との面談、修了生との面談、授業視察、学習環境の状況調査（施設等内覧）、連携協力校視察及び当該校校長・教員との面談などが実施される。教職大学院はこの認証評価を、今後5年ごとに受審することになる。

第3節 教育改善に関する活動

特記事項なし。

第4節 学生授業評価・教員授業自己評価

平成30年4月にIYOCAN2システムで確認した平成29年度および過去5年間（専門職学位課程は平成28・29年度のみ）の学生授業評価、教員授業自己評価の実施率を図1に示す。平成29年度の実施率は、後期分がWeb入力期間中であるため確定していないが、学生授業評価および教員授業自己評価とも平成26年度以降減少傾向にあり、特に今年度の教員の実施率は、修士課程、専門職学位課程とも40%を切っており、教員の意識の低下が見受けられる。IYOCAN2システムから授業科目ごとの教員授業自己評価の入力実施状況を確認できるので、研究科としてこの情報を利用し、未入力の授業科目の担当者へ直接実施を促す等の対策を講じることが必要である。

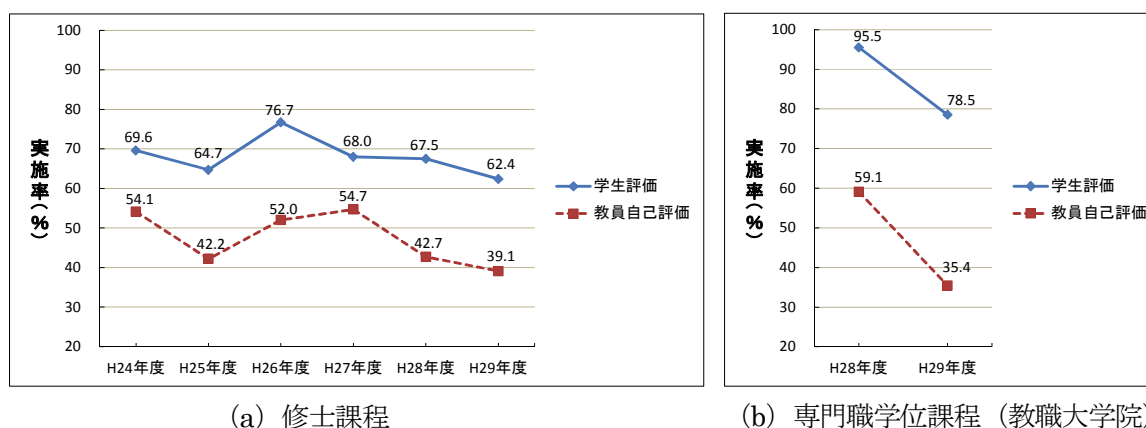


図1. 授業評価アンケート実施率

なお、学生による授業評価のうち満足度は、修士課程においては今年度および過去5年を通して4.8近傍の横ばいで、専門職学位課程においては、昨年度4.61、今年度4.92という良好な評価であった。

第5節 FD実施経費報告書

平成29年度教育学研究科FD活動において経費は使わなかった。

第6節 来年度の課題

平成28年度に発足した専門職学位課程（教職大学院）は、広報が不十分であったとはいえ、原則、すべての授業を公開するという方針で行っている。他方、修士課程および教育学部（第5章）は、そのような体制をとっていない。授業には様々な形態、対象学年、授業担当者の思いがあるから、公開を一律に制度化することが良いとは思えないが、それを踏まえ、教育学研究科としては修士課程における授業公開のあり方について検討することが課題となる。

教員授業自己評価の入力率向上に関する組織的な取り組みは、教育学研究科においても大きな課題で

ある。特に教員授業自己評価実施率が40%を切るというのは、早急にその原因を特定し、改善策を講ずべき課題である。

授業外学習時間の確保については、研究科としても学生に対して周知をするとともに、各授業担当者からも授業ごとに指示・指導がなされているとは思いますが、実態そのものを組織的に把握できていないという課題があり、善処したい。

第15章 経済学研究科のFD活動

第1節 授業公開

授業公開についてはそのあり方が議論されることとなり、今年度も実施しなかった。従来は、公開希望者を選出、公開当日都合のいい教員が授業を見学し、参加教員が感想を述べるというだけのもとなつて実施の形骸化が進んでいた。公開希望者が一巡し、また、参加者の数も減少傾向にあったため、見直しをすることとなったが、よりよい具体的な改善案がでてこなかった。

第2節 学部・研究科主催FD研修会

- 「公共管理コース担当教員のための語学FD研修」
 - ・ 大学院公共管理コースでは、全ての講義を英語で開講している。担当教員の英語能力を高め、留学生とのディスカッションをより円滑にするため同研修を執り行った。
 - ・ 開催日
 - 2017年9月21日(木) 13:00~16:00 東アジア・経済学研究科棟205研究室
 - 2016年9月28日(木) 13:00~16:00 東アジア・経済学研究科棟205研究室
 - 2017年9月29日(金) 9:00~12:00 東アジア・経済学研究科棟205研究室
 - ・ 方法：参加者の講義等の資料を講師が添削した。
 - ・ 講師：尊田望
 - ・ 参加人数：3人程度
 - ・ 論文の作成、指導において、ライティングの能力を高めるのに役立った。

第3節 教育改善に関する活動

経済学に関する基礎知識のない学生(特に留学生)の基盤教育をどのようにするべきか議論をした。大学院共通科目のようなものを設置して基盤教育を支える仕組みが学部同様に必要なのではないかということになった。文系大学院全体の改革にともなつて、知的財産に関する講義、アカデミックライティングなどが共通科目として設けられることが決まったので、実施に向けて内容の精査に努める。

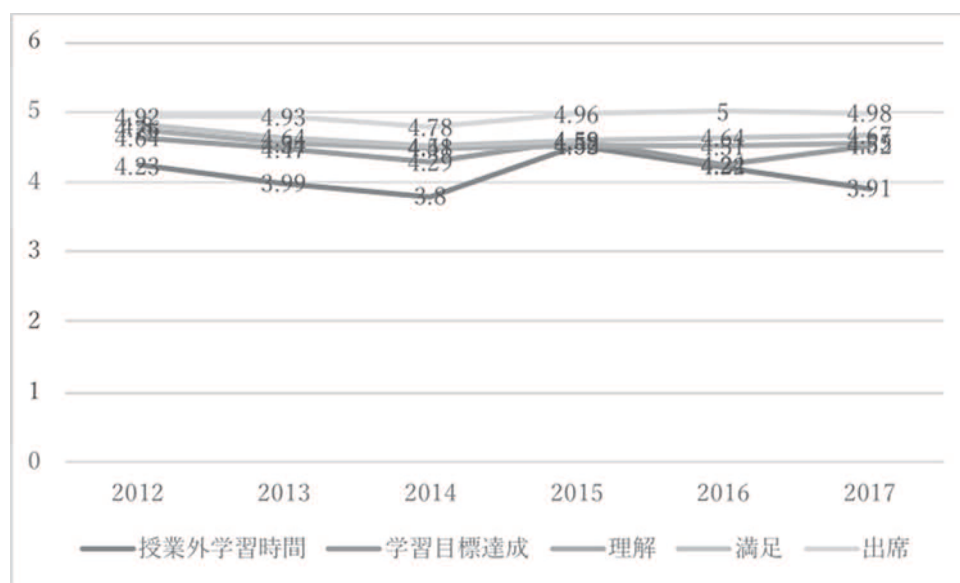
さらに、論文作成時の倫理問題(引用と盗作の違いなど)をどのように指導するかなども議論の対象となった。

第4節 学生授業評価・教員授業自己評価

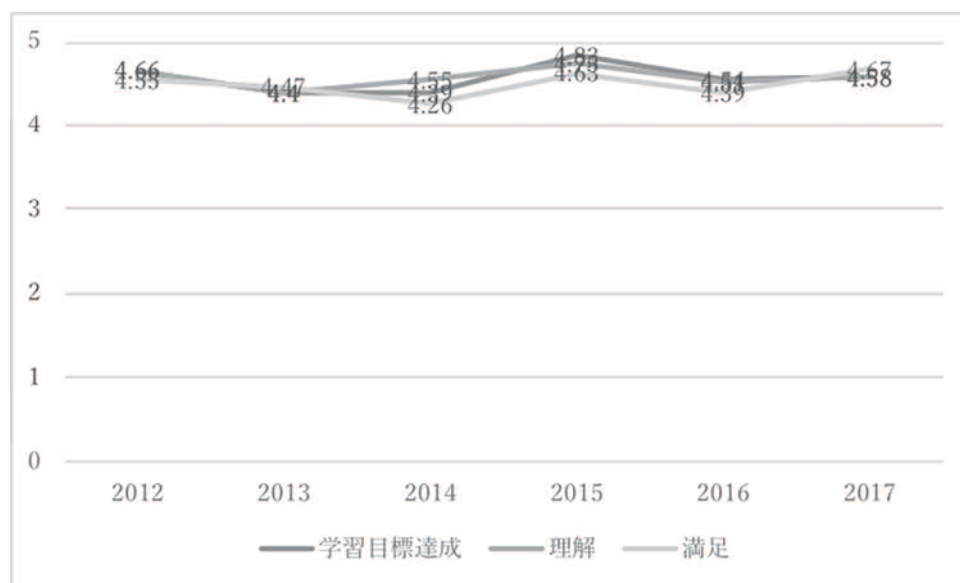
大学院講義については公共管理コースの充実などにより学生アンケート収集が可能となっていたようである。改めて検証してみた。

以下の点が特徴的である。

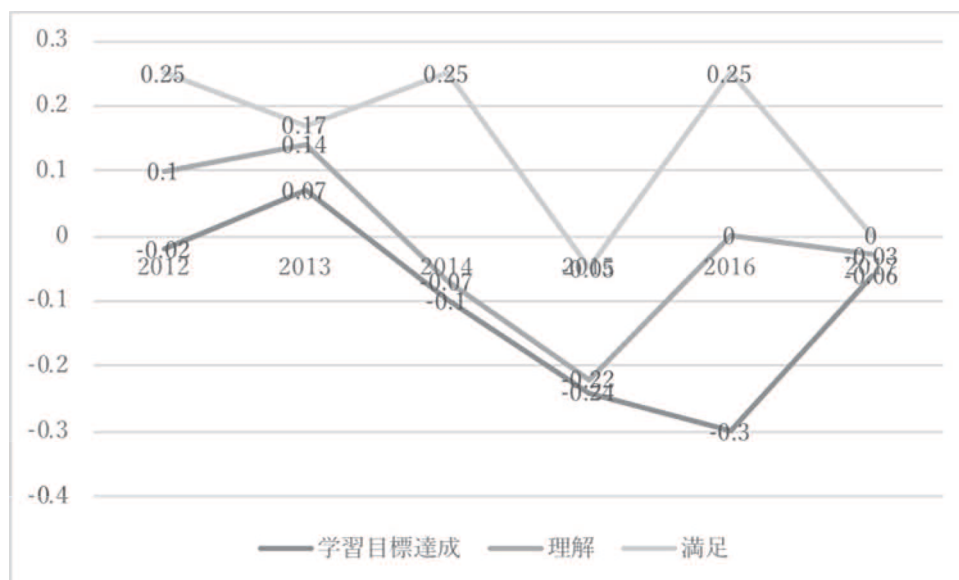
1. 学部教育と比較して学生、教員ともに学習目標達成、理解、満足ともに評価が高い。
2. 経済学研究科の場合、留学生の比率が高いことなどが心配材料であったが、目標を持って進学した学生であることもあり、教員、学生ともに相互努力をしている様子がみられる。
3. 公共管理コースにおいては、教員側が英語で講義をする必要があるが苦勞が報われる形となっている。
4. ギャップについては学習目標達成を除いてプラスであり、学部教育と比較して学生側の評価が高いことが特徴である。しかしながら、変動が大きくなっていることには注意が必要である。
5. 多くの講義が少人数による受講であることで、従来とは逆に何らかの非効率性を生み出している可能性がある。



グラフ 1:学生授業評価



グラフ 2:教員自己評価



グラフ 3:評価ギャップ (学生授業評価-教員自己評価)

第5節 FD実施経費報告書

語学研修のために、外部講師を招き、講師料として5回分6万円を支払った。また、諸経費(印刷・ポスターなど)に2万円経費計上させていただいた。

第6節 来年度の課題

- ・ 教員授業自己評価の入力率向上を目指す
- ・ 学生評価や成績分布共有システムなどの有効活用
- ・ 低い自己評価の実態を共通認識とし、改善点を追求する
- ・ 学生、教員の語学研修について新しいシステムを考える
- ・ 外部研究費獲得のための工夫
- ・ 公開授業(ピア・レビュー)のあり方について議論する

第16章 医学系研究科のFD活動

平成21年度より、医学部と医学系研究科において「学部と研究科のFD企画をできるだけ相乗りの形で実施する」という方針が定められた。この方針に基づき、医学系研究科所属教員は、それぞれが関連深い（実際に兼担で教育を担当している）各学部（あるいはその上部の研究科）のFD活動に参加する形でFD活動を行った。具体的には医学部の学部教育を兼担している教員は医学部（第8章）のFD活動に、理学部・工学部の学部教育を兼担している教員は理学部（第7章）・工学部（第9章）ないしは創成科学研究科（第17章）のFD活動に、農学部の学部教育を兼担している教員は農学部（第10章）ないしは創成科学研究科（第17章）のFD活動に参加した。具体的活動内容に関しては、それぞれの該当の章を参照されたい。

第 17 章 創成科学研究科の F D 活動

理学系

第 1 節 授業公開

1. 基盤科学系専攻情報科学コースのピア・レビュー

(1) 実施科目「情報科学ゼミナール I、II」

1) 概要

①日時：平成 28 年 12 月 22 日(金)

②対象学生：M1, M2

③授業概要：情報科学ゼミナール I, II の履修者が、各自の研究課題に関するポスター発表を行い、同時に他の学生の研究発表を聞き相互に評価し合う。

④授業の到達目標：

- ・各自の研究テーマを分かりやすく発表する。
- ・同級生の研究発表を聞き、批判的・建設的に討論を行う。

⑤授業担当教員：内野英治（分野長）

レビュアー：情報分野教員

⑥レビューの方法：授業に出席の後、授業改善点等について議論する。



2) レビュー結果

①授業内容

- ・学生は 3 グループに分かれ、ポスター発表を 30 分間行った。発表者以外の学生は、レビュアーとして、質疑応答を行った。
- ・総発表件数と発表スケジュールは以下の通りである。
 - 第一グループ：14：30－15：00（発表 4 件）
 - 第二グループ：15：00－15：30（発表 4 件）
 - 第三グループ：15：30－16：00（発表 4 件）

②授業の進め方

- ・学生は 3 グループに分かれ、30 分間のポスター発表を行う。発表グループ以外の学生は、レビュアーとして参加し、発表者に質問等を行う。
- ・各レビュアーはそれぞれ発表に対して採点を行い、授業の成績にも反映させる。
- ・採点では、「ポスターには研究の概要が簡潔、かつ分かりやすくまとめられていたか?」、「説明（話し方）はわかりやすかったか?」、「発表者は研究内容を十分に理解して研究を行っている」と

思われるか？」の各項目に対して5段階評価を行った。さらに、発表の改善点、発表を聞いた感想を発表者にフィードバックした。

- ・研究発表能力の向上、および聞き手として友人の研究に建設的・批判的にかかわる態度の養成を目指した。
- ・理学部物理情報科学科では研究室の仮配属を開始したこともあり、3年生に対してレビュアーとしての参加を呼び掛けた。3年生が参加するため、発表者はより分かりやすい説明を心掛ける必要がある。

③その他、改善点

- ・昨年度と同様、1グループあたりの発表者を極力少なくし、レビュアーの人数を多くした。
- ・近年は教員が参加しなくても学生間で自由な意見交換が行われている。情報科学ゼミナールI, IIを通してM1とM2が参加し、より良い議論の場ができあがっていると思われる。
- ・昨年同様一人あたりの持ち時間が30分間と若干短めであることから、発表内容によっては議論する時間が少なかったようにも感じられる。ただ、発表時間を長くとるためには発表グループ数を少なくする必要があるため、引き続き、このタイムスケジュールで様子を見たいと考える。

2. 地球圏生命物質科学系専攻生物学コースのピア・レビュー

(1) 実施科目「生物科学ゼミナールI」

1) 概要

①日時場所：平成29年12月26日(火) 13:00~16:30
大学会館会議室

②対象学生：創成科学研究科地球圏生命物質科学系専攻生物学コース1年生(13名)

③授業の概要：M1大学院生が、研究課題の中間発表を10分間の口頭発表で行い、その後5分間の質疑応答を行った。発表会への参加者は、同生物学分野の教員、大学院生および学部生など約60名であった。

④授業担当教員：宮川 勇

レビュアー：堀 学、上野秀一
(生物・化学科 生物学分野)

⑤レビューの方法：発表会に参加し、改善点などを文書で指摘していただく。



2) レビュー結果

授業に対して、レビュアーより以下の指摘をいただいた。

レビュアー1

内容は、受講学生が行っている研究内容を学会の発表形式でプレゼンテーションするものであった。発表した院生は、研究内容を単にまとめるだけではなく、専門外の人間にもわかるように工夫がこらされていた。また、参加している教員院生らから、研究内容の疑問点、或は、改善すべき点が丁寧に指導されていた。発表した院生らには、今後の研究をどのように発展させていくのか、プレゼンテーションをより効果的に見せるにはどうすればいいのか等の理解に役立つと思われた。この授業の受講学生の科学的思考力、プレゼンテーション力の向上がはかられたと思われるが、少し時間をおいて、

どこがどのように改善されたかを再考する場があるとよいと感じた。

レビューア 2

担当教員が全体の司会・進行役を行い、講義の受講者となる修士1年の学生が各自の特別研究の進行具合や問題点を報告していく形式で進められている。

指導教員の指導のもと、各学生が事前に十分な時間をかけて準備・発表を行っていた。また、単に研究内容そのものに対する質問だけでなく、発表の仕方やイントロで伝えるべき事項などのアドバイスを、研究内容に対して専門ではない他の教員から聞くことができた。このことはよりわかりやすい発表を今後行っていく上で非常に有意義であると思われる。一方、この講義では聴講者として他の学年の院生や学部4年生がいるのだが、教員以外からの質問がほとんど見受けられなかった。少なくとも他の修士1年生からの質問を促すためにも、交代で学生による座長が進行する形式も有効かもしれない。

レビューアの指摘を参考に、今後、生物科学ゼミナールIの改善をはかっていきたい。

※ピア・レビューについてまとめてください。

第2節 学部・研究科主催FD研修会

今年度は、創成科学研究科(理学系)として単独ではFD研修会を実施していない。理学系教員は、理学部で開催された以下のFD研修会に参加した。詳細は理学部第2節のFD活動を参照されたい。

- ・教育改善FD研修会
- ・アラカルトFD研修会「受け入れ留学生の理解と対応 留学生と簡単日本語コミュニケーション」

第3節 教育改善に関する活動

創成科学研究科(理学系)単独での教育改善に関する活動は行っていない。理学部と共通で活動している。詳細は理学部第2節のFD活動を参照されたい。

第4節 学生授業評価・教員授業自己評価

2017年度の授業アンケートにおいては学生回答数が41件、教員回答数が11件であった。

下図は2017年度における学生授業評価および、教員自己評価実施アンケートの年度推移である。図1から図5までは、学生の授業評価項目である。図1は学生の授業外学習時間の年度推移、図2は学生の授業目標達成の自己評価に関する年度推移、図3は学生の授業理解度についての年度推移、図4は学生の授業満足度に関する年度推移、図5は学生の授業出席の自己評価の年度推移である。図6から図8までは教員側から見た授業自己評価である。図6は教員側から見た学生の授業目標達成の年

度推移、図7は教員側から見た学生の授業理解度の年度推移、図8は教員側から見た学生の授業満足度を示す。学生の授業アンケート結果は比較的安定した評価結果となっている。一方、教員側から見た評価は年度毎に増減幅が大きい傾向にある。

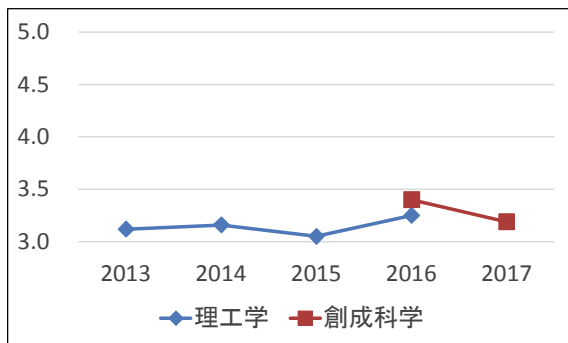


図1 学生の授業外学習時間

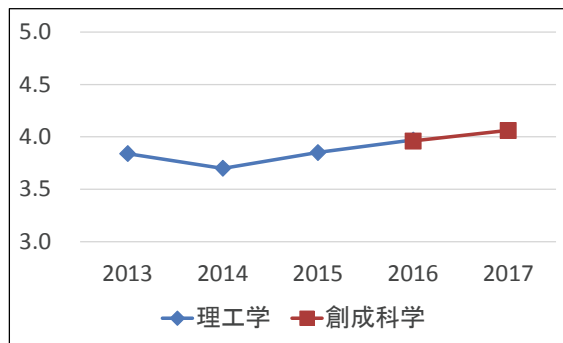


図2 学生の授業目標達成の自己評価

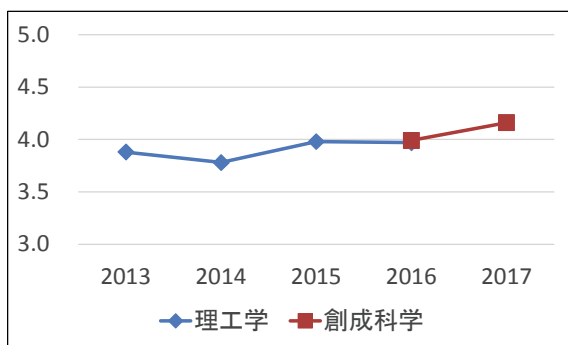


図3 学生の授業理解度の自己評価

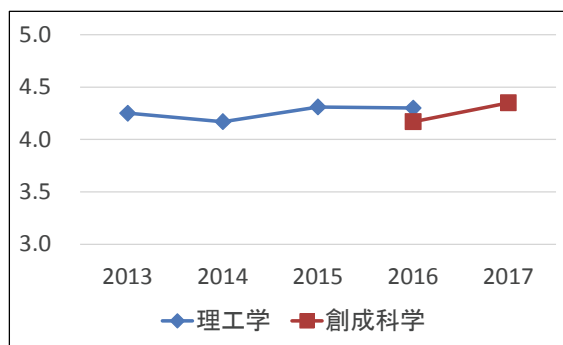


図4 学生の授業満足度

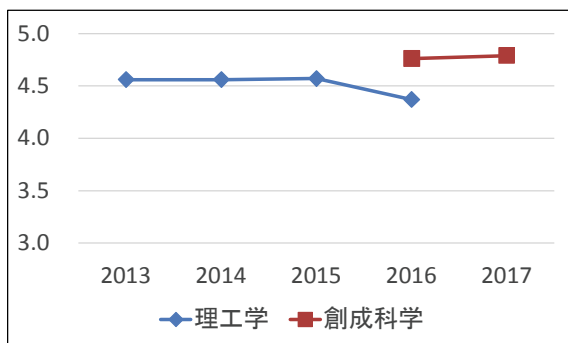


図5 学生の授業出席の自己評価

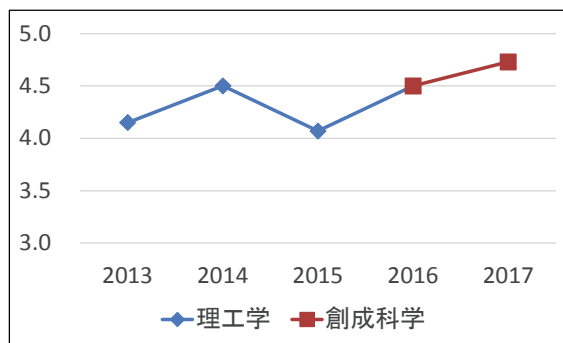


図6 教員側からみた学生の授業目標達成度

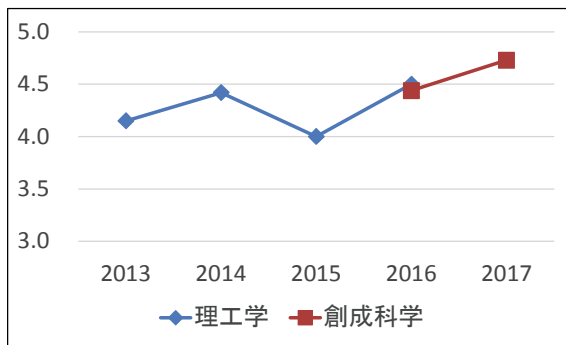


図7 教員側からみた学生の授業理解度

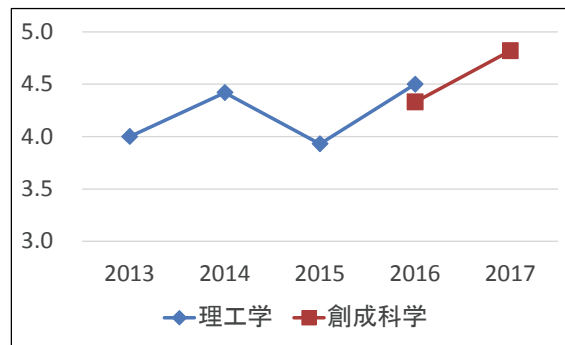


図8 教員側からみた学生の授業満足度

第5節 FD実施経費報告書

今年度は、創成科学研究科（理学系）・理学部ともに、FD 実施経費を使用していない。

第6節 来年度の課題

授業アンケート結果より、学生からの評価は比較的安定していると言える。一方、教員側から見た評価は、母数が少なく信頼性に疑問の余地は残るものの、年度毎に増減幅が大きい傾向にある。評価基準に関する教員へのFDが必要と思われる。

農学系

第1節 授業公開

創成科学研究科（農学系学域）の各教員が、全ての教員と大学院生に対して研究紹介を行い、意見交換等により、各教育研究分野の活性化と分野間の総合理解の促進を図った。

- (1) 合成代謝経路の構築による有用物質生産
日時：平成29年4月28日（金）17時 ～ 片岡 尚也 助教
- (2) ニオイの不思議
日時：平成29年5月26日（金）17時 ～ 赤壁 善彦 教授
- (3) 原子レベルでの立体構造情報に基づく 植物プラスチドの還元力供給系タンパク質の機能解析
日時：平成29年6月30日（金）17時 ～ 木股 洋子 准教授
- (4) 哺乳類の骨格筋細胞に関する適当な話
日時：平成29年7月27日（木）17時 ～ 宮田 浩文 教授
- (5) 活性酸素の謎を解く鍵物質 活性カルボニル種
日時：平成29年10月7日（金）17時 ～ 真野 純一 教授
- (6) 耐熱性好中温微生物の耐熱性機構と高温育種による耐熱化～研究の取り組みとそれから見えてきたもの～
日時：平成29年11月24日（水）17時 ～ 山田 守 教授
- (7) 炭素循環に関わる微生物の探索と性状解析
日時：平成29年12月25日（月）17時 ～ 藤井 克彦 准教授
- (8) 酢酸菌の耐熱性に関する研究
日時：平成30年1月22日（金）17時 ～ 薬師 寿治 准教授

第2節 学部・研究科主催FD研修会

創成科学研究科（農学系学域）では、各種FD研修会を以下の内容で開催した。

- 第1回 研修会名：「講師派遣型アラカルト研修会」
日程 平成29年7月19日(水) [吉田地区] 13:30～14:10
場所 農学部会議室
講師 松原 敏郎 (保健管理センター准教授)
参加者 28名(アンケート回収23名)
- 第2回 研修会名：「教育改善FD研修会」
日時 平成29年12月20日(水) 13:30～14:00

場所 農学部大会議室
 講師 木下 真 (大学教育センター准教授)
 参加者 22名

第3節 教育改善に関する活動

創成科学研究科（農学系学域）は、人類の生存に必要な食料を始めとして、生物機能の開発・応用に関する技術を発展させつつ、各種資源と自然環境との保全・再生との調和を図り、豊かな人間性を醸成する分野といえる。このような広範囲な科学と技術を深化させるために、広範な基礎学力に基づいて高度な専門知識と能力を備えた、豊かな人間性のある科学者、技術者を養成することを目的とし、活動を実施している。

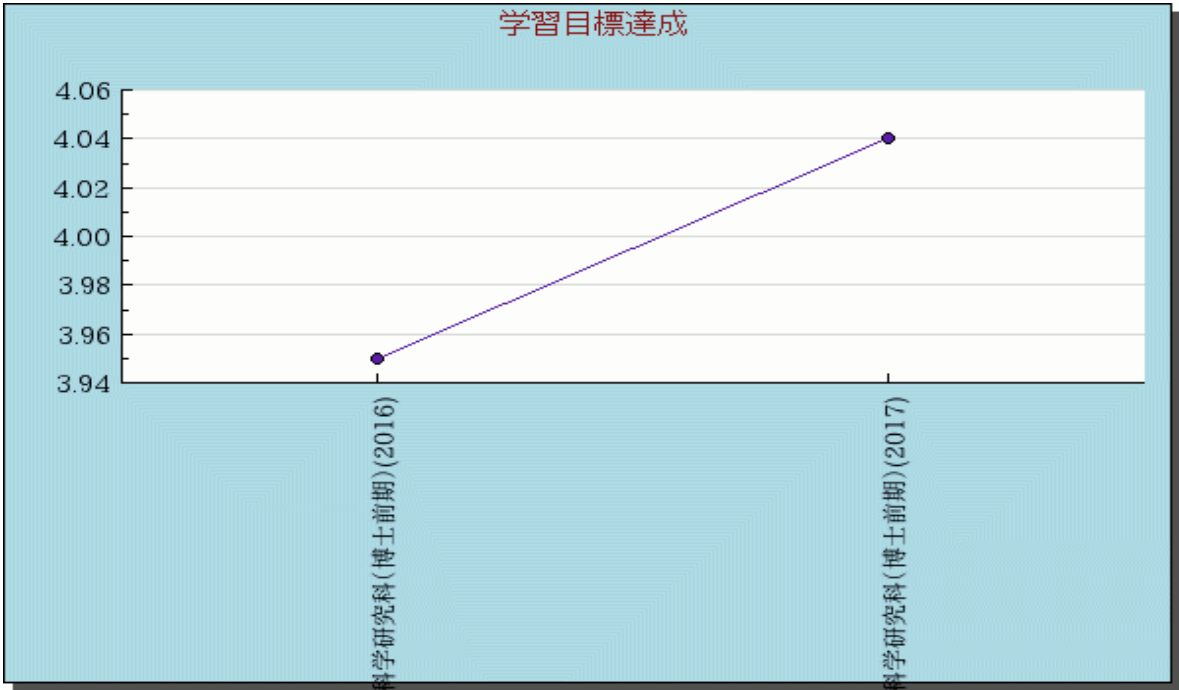
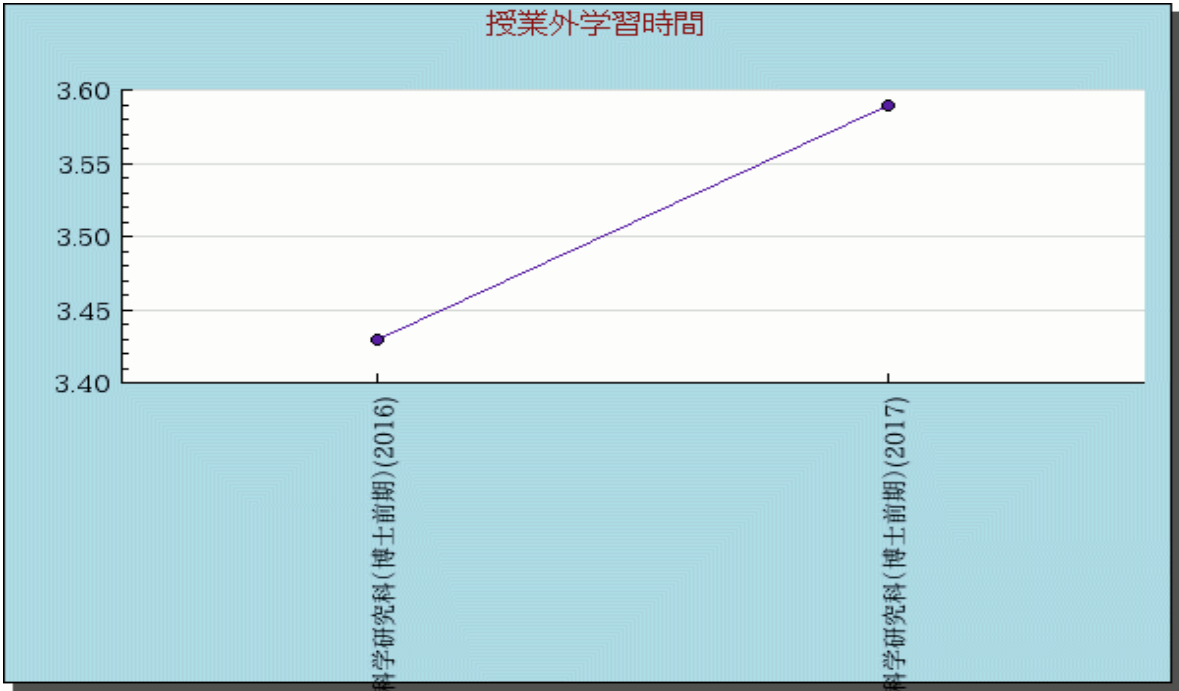
31年度に設置申請中の、ジョイントディグリープログラムによる山口大学・カセサート大学国際連携農学生命科学専攻（仮称）のアドミッションポリシー、カリキュラムポリシー、ディプロマポリシーについて、検討を行った。

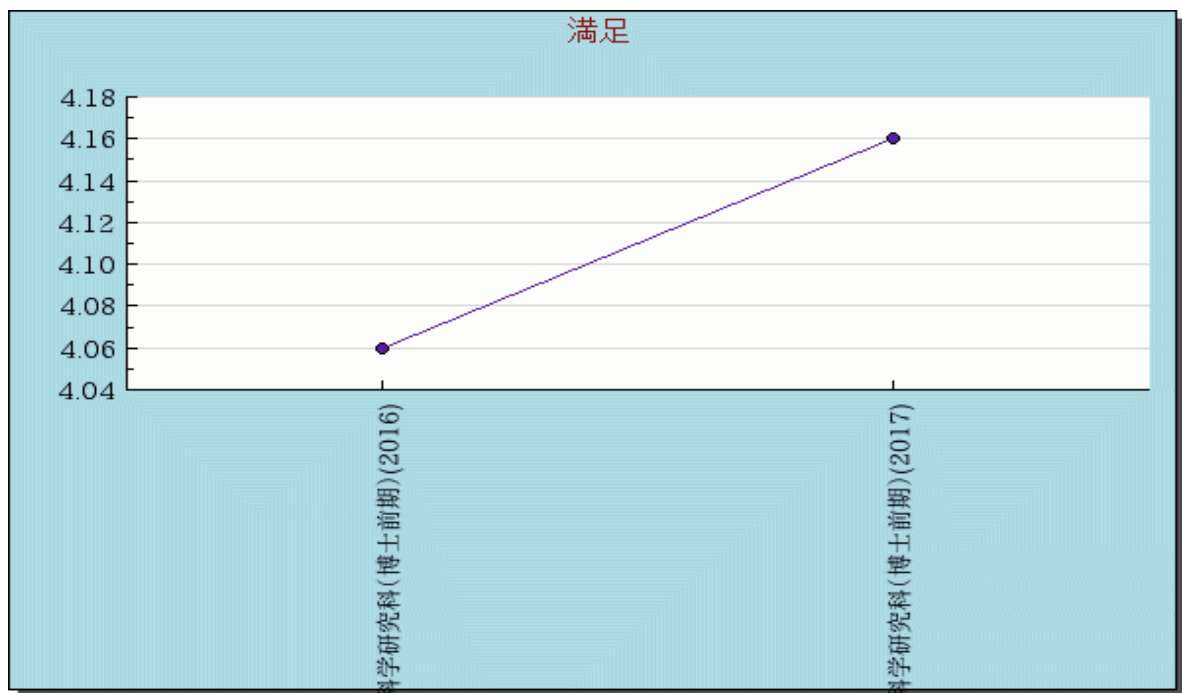
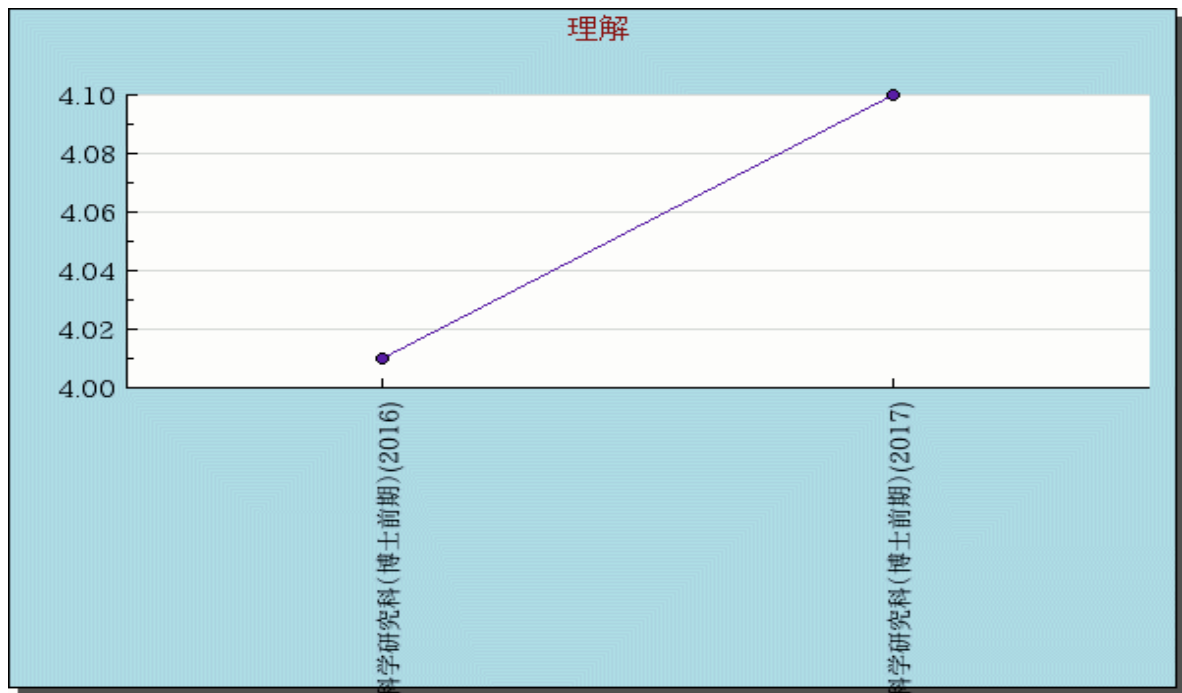
第4節 学生授業評価・教員授業自己評価

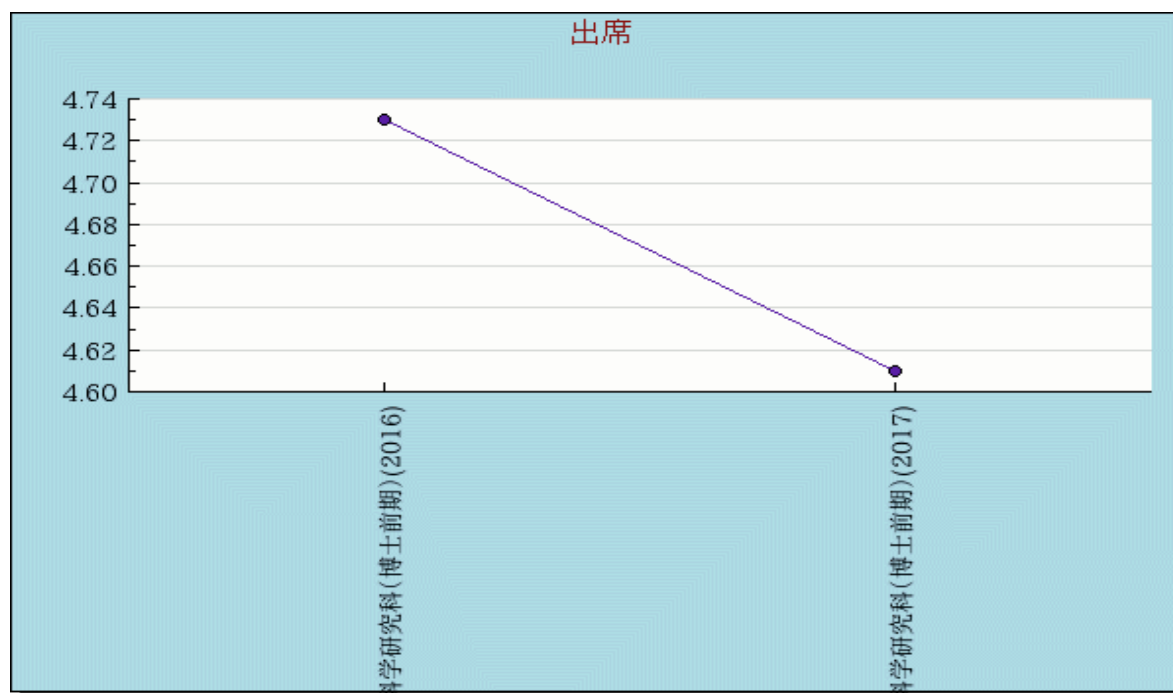
1. 学生授業評価

出席以外の4項目すべてにおいて、前年度を上回っていた。いずれの項目の値も比較的高いレベルを維持できているので今後もこの傾向を保持していきたい。

	講義	講読	演習	実験・実習	語学（共通教育）	語学（農学部専門）	その他	語学（人文学部専門）	未指定	合計
大学院創成科学研究科（博士前期）(2016)	498		13						2896	3407
大学院創成科学研究科（博士前期）(2017)	379		55						3028	3462



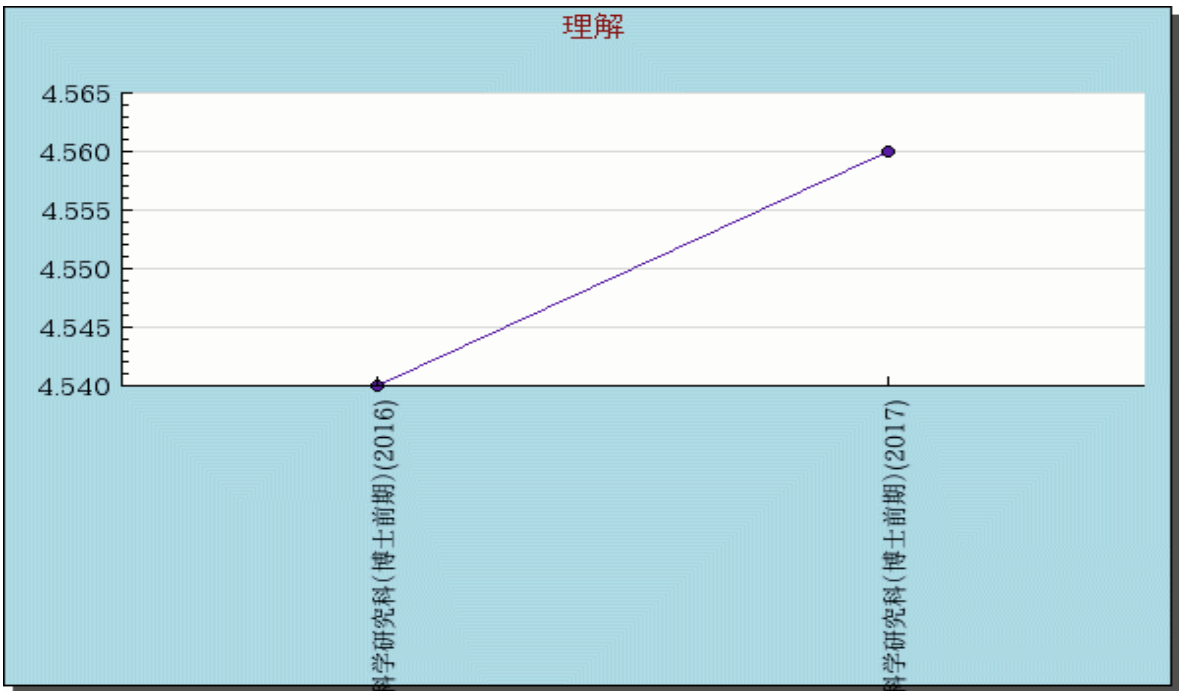
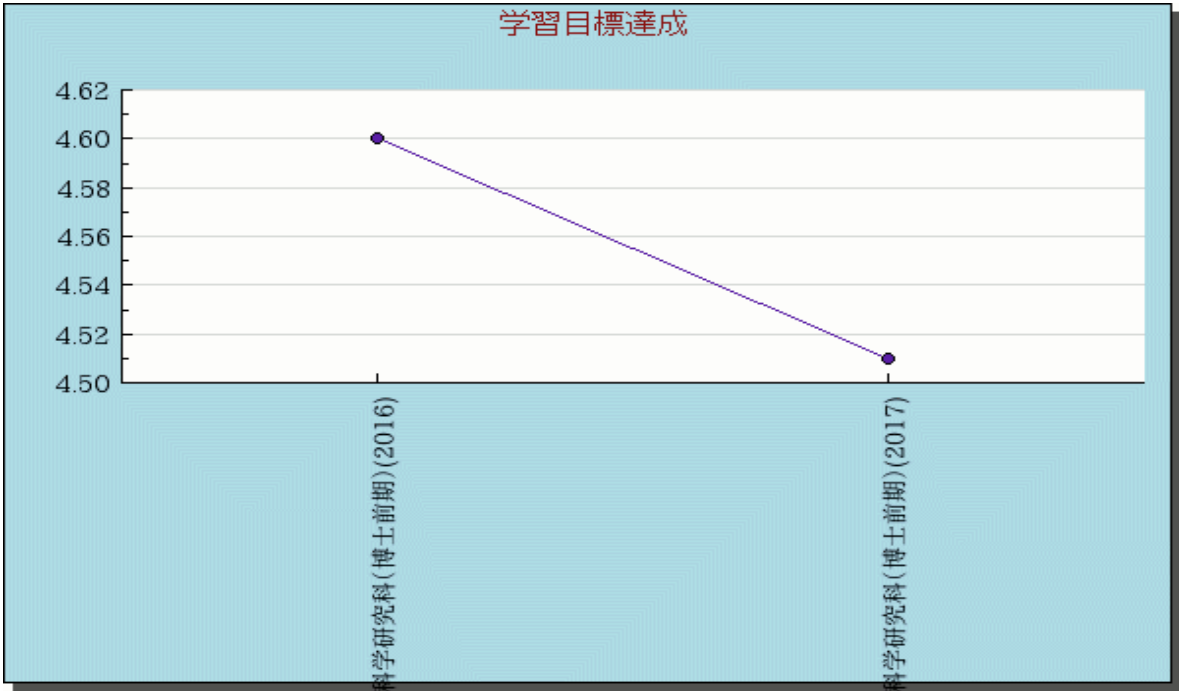


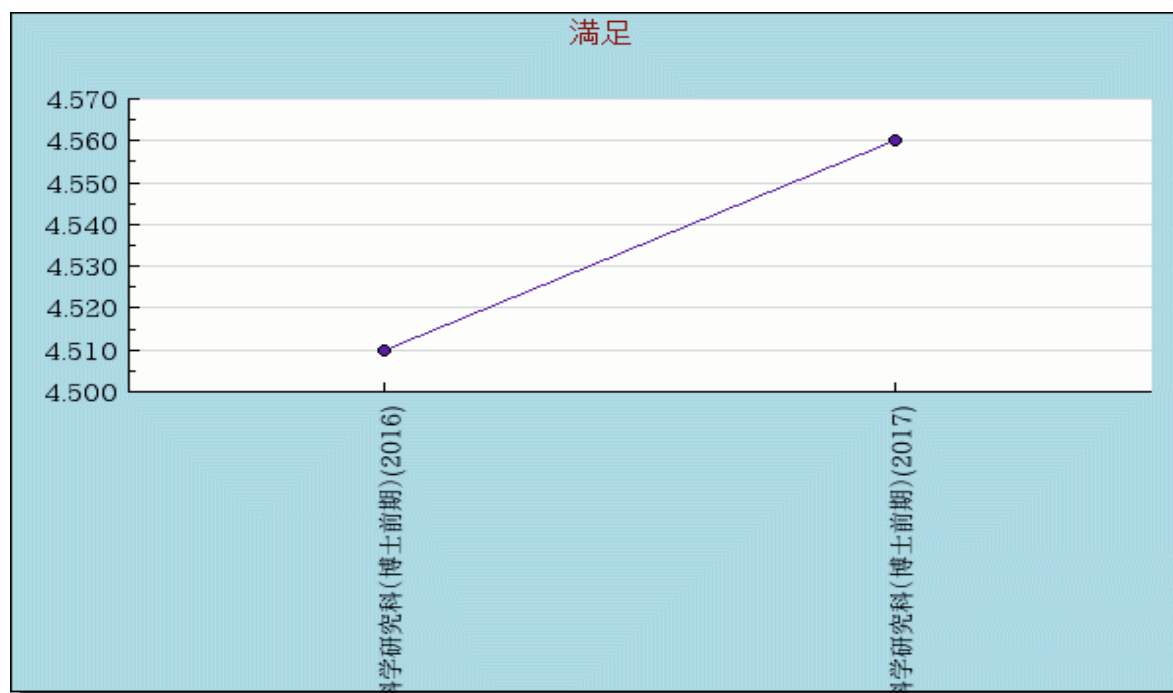


2. 教員授業評価

理解度と満足度が前年度より高い評価が得られた。3項目とも昨年に引き続き高評価であった。教員自身が授業に対して高い意識を持つようになった現れかもしれない。今後もこの傾向を保持していきたい。

	講義	講読	演習	実験・実習	語学(共通教育)	語学(農学部専門)	その他	語学(人文学部専門)	未指定	合計
大学院創成科学研究科(博士前期)(2016)	25		29						50	104
大学院創成科学研究科(博士前期)(2017)	7		1						35	43





第5節 FD実施経費報告書

本年度はFD実施経費の申請はなかった。

第6節 来年度の課題

研究科の教育は学部とは大きく異なっており、また研究科間においてもカリキュラムや教育方針が同一でない。このため、FD活動についても研究科独自の取り組みが今後必要になるように思われる。

第 18 章 東アジア研究科の F D 活動

第 1 節 授業公開

基本的に、東アジア研究科は博士後期課程のみのため、講義形式での授業を重視していない。当研究科設置目的のとおり、「問題解決のための高度な専門知識を発揮しうる人材の養成、指導的高度専門職業人の養成」を目指す本研究科では、ディプロマ・ポリシーに示すとおり「独自に問題を立て、研究を遂行して成果を生み出すことができる自立的な研究能力」を養成することを主眼としている。このため、学識を授けるという意味合いの強い講義形式での授業よりも、各院生に対する個別研究指導が主な形式となっている。

(1) 集団指導の場としての「基盤演習」「プロジェクト演習」

こうした特性を持つ当研究科は、カリキュラム・ポリシーに従って、1 年次に「基盤演習」を、2 年次に「プロジェクト演習」を課している。これらの演習授業はコース別を実施され、学生の研究報告に対して複数の教員がコメント、意見を述べる集団指導体制を取っている。

この集団指導体制は、お互いの指導を確認し合うピア・レビューの性格も持ち合わせており、間接的な授業公開となっている。事実、この形式の演習においてなされる各教員からのコメントが院生にとって有意義なことは言うまでも無いが、加えてこのようなコメントは指導教員にとっても貴重な示唆を与えるものであり、自らの研究指導へのヒントや改善の契機となっている。こうした意味で、これら集団演習科目は、間接的なピア・レビューの効果を持ち、当研究科の研究指導能力にとって重要な位置を占めている。

(2) 個別研究指導の場としての「特別研究」

上述の通り、当研究科の主たる教育活動は、当該院生に対する個別の研究指導である。「特別研究」がこれに相当するが、基本的にこの内容は各院生の研究テーマや研究の到達状況次第であり、これを公開し、ピア・レビューの対象とすることは難しい。

しかしながら、これまで研究科の研究指導を担ってきた中心となるべき経験豊富な教員の退職が続く今後を見据えるならば、当研究科が引き続き博士課程の教育を維持・拡充させ、さらに研究教育能力を高めていくために、この「特別研究」に内在する研究指導のノウハウを研究科全体としてどのように蓄積し、次世代の教員（特に、現在の若手教員）に引き継いでいくかは、当研究科の抱える重要な課題である。

この課題に応えるために、当研究科においては、以下に述べるとおり、コース別の研究指導 FD を研究科主催の FD 研修会として実施している。

第 2 節 学部・研究科主催 F D 研修会

前節の観点から、平成 29 年度にも、下記の通りに研究指導 FD を実施した。これは、学位審査への最終的な関門である「準備論文報告会」開催後に、当該「報告会」で報告した学生の指導教員を中

心として、研究指導に関する問題点や工夫、配慮内容について報告し合い、情報交換することによって、個々の教員の研究指導能力を強化することはもちろん、全体としてノウハウを継承していくことを目的とするものである。

(1) 研究指導 FD の実施状況

平成 29 年度には、コース別に以下のように実施した。

実施日	コース名	「準備論文報告会」 報告学生数	「研究指導 FD」 参加教員数
H29.5.22	アジア比較文化コース	1	10
H29.11.10	アジア経済・経営・法律コース	4	5
H29.11.13	アジア比較文化コース	2	10
H29.11.29	アジア教育開発コース	8	8

コースごとに報告学生数にばらつきがあり、昨年度と同様に、「アジア教育開発コース」の学生が多く、他 2 コースでの報告数が少ないという状況となった。

(2) 研究指導 FD での意見交換の内容

各意見交換において様々な問題が提起されたが、総合すれば、以下のような論点に分けられる。

1) 研究テーマ、分析概念、方法論等について、学生が適切に選択することの難しさとこれを助ける指導の重要性が指摘された。具体的には、以下の各項目が提示された。

- 博士論文として適切なテーマと内容への絞り込み
- 研究目的の早期の明確化
- 先行研究の到達点と限界の明示を踏まえた論じるべきポイント（オリジナリティ）の提示（先行研究のおさらいにならないよう）
- 分析概念と方法論の適切な選択

2) 次いで、学生とのコミュニケーション上の問題について、留学生の言語上の問題を中心に提起された。完成論文の日本語チェックについては現在その措置が採られているようであるが（前年度 FD 報告書より）、英語についてのネイティブ・チェックのようなものはまだ未整備であり、この修正に費やされる教員の苦労は計り知れず、早急な整備が必要と思われる。

- 日本語のブラッシュアップと修正（日本語運用能力の問題、論文の日本語チェック）
- 英語以外の外国語文献の内容や引用状況のチェックの難しさ
- 学生とのコミュニケーションの難しさ（言語上の問題）、真意の伝わりにくさ

3) 指導時間や指導方法に関するものとして、以下の点が議論された。このポイントについては、特に博士課程の学生指導の経験に関わるものであり、経験豊富な教員の意見は、若手教員にとって非常に参考になるものであったとの意見が、FD に関する事後アンケートに多く寄せられた。当研究科としては、こうした指導上のポイントを蓄積し、継承していくべきであろう。

- 研究の方向性を早期に決定することの重要性
- 本人の研究能力の特徴を早期に見つけることが学生の自発的な研究への取り組みに有用であること
- 興味の喚起と抑制（博士論文の作成に必要な範囲と分量を見定めること）
- 指導と指示のバランス
- 指導時間の確保

- 専門外の研究については踏み込んだ指導が難しい点（他の教員によるサポート）
- 研究に関する相談時間を確保する
- ゼミ（特別研究）の実施方法（複数の学生・同一学年合同での実施など）

4) その他、研究面以外での学生サポートの必要性として、心理的なサポートの重要性が指摘された。

- 学生のモチベーションへのフォロー（学生を励ますこと、など）
- 3年という博士論文の提出（学位取得）期限に対する焦り

第3節 教育改善に関する活動

（1）「学位授与に関する内規」の見直し

当研究科では、平成28年度にディプロマ・ポリシーの改訂を行い、その際に「研究者として求められる研究行動規範を正確に理解し、研究行動規範に沿って研究を遂行し成果を表現する能力」を明示した。これは研究者の行動規範遵守を徹底することを意図したものであり、これを保証する体制構築が行われてきている。

平成29年度には「学位授与に関する内規」の見直しを行った。これまで学位論文の基礎となる学術論文の言語は日本語と英語以外に、中国語と韓国語が認められていたが、日本語または英語を原則とすることとした。また、提出書類及び提出草稿はすべて日本語又は英語（に翻訳したもの）とすることとした。これにより、学位審査に関わる審査委員全員が全ての書類を確認することができることとなり、更なる厳正な学位審査の制度的保障ができた。

ただし、査読付き論文の翻訳については、その内容チェックという点からは、やはり問題を抱えている。この点については、今後は英語、日本語での査読誌への論文投稿を極力促すことも必要であろう。

（2）学術雑誌『東アジア研究』の投稿機会を年2回に増加

上記「学位授与に関する内規」の見直しによって更なる厳正な学位審査を保障すると同時に、学位論文の基礎となる学術論文の投稿機会の拡充を検討した。当研究科が発行する学術雑誌『東アジア研究』はこれまでの年に1回（10月）の投稿から年に2回（4月と10月）の投稿が可能となるように、『東アジア研究』の投稿規定を改めた（発行は年1回）。

これまでは10月の投稿で不採録となった場合、学位審査要件を満たすために、他の査読付き学術雑誌へ投稿するなどの例があったが、雑誌の査読レベルはそれぞれに異なっており、望ましいレベルが維持されない場合も生じうる（ペーパー・ミルの存在、など）。当研究科では、これに対して平成27年度に「査読論文の認定について」なる決定をし、こうしたペーパー・ミルの排除を行なっているところであるが、今回の措置はさらに『東アジア研究』への投稿機会を増加することで、学術論文の質を保証することを狙ったものである。

ただし、こうして投稿機会を増加することは、『東アジア研究』編集委員会や査読者の負担増加ともなる。この点については、原則として採録決定の翌年には投稿を見合わせる指導をする（2年連続の論文掲載をしない）との要請が教授会において当該編集委員会よりなされた。

（3）シラバスの整備

シラバスについては、修学支援システムでの登録・公開を促進している。ただし、研究指導である

「特別研究」については、上記システムでのフォーマットになじまない部分もあることから、システム上での登録・公開と合わせて、当研究科 HP において別様式での公開を進めているところである。この別様式での公開については、2018年4月末現在、東アジア担当教員のうち4分の1程度が未掲載となっており、引き続きシラバス作成・公開の要請を行っていくこととする。

第4節 学生授業評価・教員授業自己評価

(1) 学生授業評価について

第1節において述べた当研究科の特性に照らして(学識を授ける講義形式ではなく、自ら学ぶ能力を養成する研究指導が主である点)、高い授業評価が「自ら学ぶ能力」養成に結びつくわけではないことから、学生授業評価は実施していない(対象外としている)。

特に、「特別研究」が中心となる研究指導は、主に教員と学生の一对一のやりとりである。この研究指導に学生授業評価を導入することは、回答する学生の匿名性もなく、妥当ではない。指導者としては自らの指導が学生からどのように評価されているかについて留意する必要があるが、その方法として学生授業評価が妥当な方法であるのか慎重な検討が必要だろう。

(2) 教員授業自己評価について

同じく、教員授業自己評価についても、当研究科での開設授業は全て対象外となっている。この点、既に前年度のFD報告書において詳細に述べられているとおり、博士後期課程の教員と学生との特殊な「師事」関係(物事を教えるという意味での「教育」を超えた自発的な信頼関係に基づく点、また学問上時に穏やかならざる緊張関係をも孕む場合がある点、など)が存在することから、そもそもこの研究指導を評価することは困難である。

実際には、研究指導FDが各教員の研究指導上の問題の持ち寄りと共有の場となっており、むしろこの場を通じての研究指導力の継承と強化を当研究科としては目指していくべきであろう。

第5節 FD実施経費報告書

部 局	FD研修・FD活動の内容	経費の用途 (購入物・旅費謝金等)	執行額(千円)	FD活動の効果(簡潔に)
東アジア研究科	FD報告書の作成に関する資料作成	担当教員の研究経費に配	90	各研究指導FDにおける報告資料作成にかかる経費
		計	90	

第6節 来年度の課題

(1) 教員授業自己評価への取り組みについて

第4節(2)のとおり、教員授業自己評価について、当研究科での開設授業は全て対象外となっている。こうした現状には問題がないではないが、実際にこれが実行可能であるかという点については、すでに4節において述べた通り、解決すべき多くの問題がある。いかなる方法が当研究科の研究指導力の継承と強化に有効なのか、引き続き検討する。

(2) 研究時間の確保に関して（授業外学習時間の確保関連として）

研究時間の確保という観点から、当研究科で取り組むべきものはないように思われる。そもそも博士後期課程の学生にとって、いわゆる「研究時間の不足」という事態は考えにくい（無論、3年間で修了できないなどの事態はある）。しかし、社会人学生の研究時間確保の問題は依然としてある。通常勤務をこなした上での研究時間の確保が非常に困難であることは想像に難くない。これに対して、長期履修学生として4年ないし5年での修了を目指すことを認めているが、それでも研究時間不足により修学が難しくなる場合があり、依然問題が解決されたわけではない。当研究科が留学生・社会人を念頭に設置されていることも考えれば、この点に関するフォローがどのように可能なのか、検討が必要であろう。

(3) 研究不正対策（成績評価の適正化関連として）

研究不正に対しては、再発防止に向けた様々な取り組みを講じてきているが、引き続き学生への研究者行動規範の遵守指導と不正防止措置を行う必要がある。明確に研究不正であると判断することが可能な場合よりも、限りなく疑わしいという場合が多いことを考えれば、この疑わしさを払拭するべく、論文作法に則った記述を徹底することと、このチェックを行う体制を整えることが必要である。このチェックについては、現在は博士論文審査において外部審査委員にその役割をお願いしているが、日本語・英語のチェック（後述）とも関連して、費用も合わせてどのように実行可能な体制を構築できるかさらに検討の余地がある。

(4) 研究指導 FD の実施方法について

当研究科の教員はほとんどが各学部・研究科との兼任であり、研究指導 FD の実施時間の調整が難しく、現在は各コースの準備論文報告会直後の時間帯に開催している。しかし、準備論文報告会の日程調整自体も困難であり、午後の遅い時間の開催になる場合には、研究指導 FD はさらに遅い 19 時以降の時間帯に実施されることも少なくない。ワーク・ライフ・バランスに関する本学の取り組みから考えても、こうした開催時間は望ましくない。実施時間の改善も含めて、研究指導 FD の開催方法を見直すことも考えてよい。

(5) 学位論文の日本語・英語チェックの支援について

研究指導において、常に頭を悩ませる問題の上位に挙げられる問題が、この日本語・英語のチェックに関するものである。特に、博士論文に関するこのチェックについては、研究指導において多大な労力を教員に強いている面が少なくない。この点に関しては、当研究科において再三検討されてきているが、限られた予算の中で、できるだけ支援していく方向で現在検討中である。

第19章 大学院技術経営研究科のFD活動

第1節 授業公開

技術経営研究科は社会人大学院生を対象とした大学院であるので、平日は勤務しながら大学院課程を修学できるように授業を週末の二日間に開講している。日本人社会人を対象とした日本語による大学院講義は、広島教室および福岡教室の2教室体制で授業を行っている。また、留学生を対象にした英語による講義は、常盤キャンパス（宇部教室）において平日のカリキュラムにより授業を実施している。これらの講義は、全教員が担当している。本研究科の授業の基本方針として、宇部教室（常盤地区）、福岡教室ならびに広島教室のすべての教室において、全カリキュラムを対面式授業で行うことを基本としている。

平成29年度に赴任した教員を対象にして、平成29年度前期必須科目6科目の授業を公開した。如何にピュアレビューの項目を付記する。

◆ 優れていると感じた点について

【説明】

- ・ 声をはっきりとして聞き取りやすいですか。
- ・ 丁寧に講義内容を説明していますか。
- ・ 学生の職務内容を念頭に置いた説明をしていますか。
- ・ 学生が各自の業種に応じて演習課題を展開できるように意図されていますか。
- ・ 専門分野が違う受講者にも理解し易いように説明が工夫されていますか。
- ・ パワーポイントの使い方は適切ですか（文字の大きさ、スライドの送り方など）。
- ・ 動画を使った説明など、学生の興味を引き出す工夫がされていますか。
- ・ 学生が授業内容を理解するペースを考慮して、説明のテンポを調整していますか。

【資料】

- ・ パワーポイント スライドのフォントサイズは適切ですか。
- ・ パワーポイント スライド1枚当たりの時間を十分に設定しますか。
- ・ 講義説明を書き込むのに必要な時間が十分確保されていますか。
- ・ 講義で専用ソフトウェアを利用する際には、操作マニュアルが用意されていますか。
- ・ ニュース・報道・Web情報を引用している場合、引用元を明記していますか。

【教授法】

- ・ スクール形式による説明と、グループ学習や討議などの実践形式による学習がバランス良く取り入れていますか。
- ・ 事前課題を用意していますか。
- ・ 授業の進め方や教材について、創意工夫を取り入れていますか。
- ・ 学生のモチベーションを引き出すような工夫をしていますか。
- ・ 講義の進行に応じて、グループワークやグループ討議が適切に行われていますか。
- ・ 学生から発言を引き出すように授業をリードしていますか。
- ・ 特定の学生の発言回数が増えないように、注意していますか。

◆ 授業を参観し、参考になる感じた点について

【事例】

- ・ 授業の内容を補完するための学習
- eラーニングを利用して授業の一部を個人学習に割り当てる。
- 調査に時間を要する内容について、課題レポートとして割り当てる。
- ・ 教材の作成方法
- パワーポイント教材に図表や写真などを配置し、テキストだけ教材と比較してビジュアル的にアピールする。
- 参考資料を活用する。
- ビデオ教材やドキュメンタリー映像などの動画を用いる。

第2節 学部・研究科主催FD研修会

平成29年度 教育改善FD研修会の開催（大学教育センターとの共同開催）

平成20年度から継続して実施しております、各学部・研究科のすべての教員を対象にした『教育改善FD研修会』を開催した。

平成28年度中に全学的な3つのポリシーの見直し作業が終了（一部の学科改組を実施した学部・学科では修正作業は継続中）し、今後は各学部・研究科で実施されている教育プログラムを、改訂されたディプロマ・ポリシー(DP)やカリキュラム・ポリシー(CP)に対応できるように定期的なレビューやモニタリングを継続的に行っていく必要があります。そのためには現在のカリキュラム・マップやカリキュラム・フローチャート(CFC)も改訂されたDPやCPに対応した形に見直しを図った。

そこで、平成29年度の教育改善FD研修会では、これらの見直し作業を巡って、具体的な作業等について説明するとともに、各学部・研究科と意見交換を実施し、技術経営研究科では、山口大学におけるシラバスの位置づけや考え方を授業設計の観点から解説するとともに、カリキュラム・マップおよびカリキュラム・フローチャートとの関連性が紹介された。

開催日時： 平成30年1月16日（火） 14:30～15:30
 開催場所： 大学院技術経営研究科棟 1階 会議室
 研修対象者： 技術経営研究科の教職員

研修スケジュール（約60分程度）

14:30～14:32（2分程度）開催挨拶とスケジュール説明（FDコーディネータ）

14:32～15:15（43分程度）カリキュラム・マップおよびカリキュラム・フローチャートと、山口大学におけるシラバスの位置づけ
 （岡田大学教育センター講師）

15:15～15:30（15分程度）協議・意見交換

平成 29 年度山口大学技術経営研究科 第 2 回 FD 研修会 Derwent Innovation と Derwent Data Analyzer による 特許検索と分析

講師 ヌルハヤティ イッサ

マレーシア工科大学マレーシア日本国際工科院

何が来るのかを知りたいのは人間の本質です。

歴史的に見れば分かるように、人間は天候や潮の上昇や下降から最近の株式業績まですべてを予測しようとしています。このセミナーでは、予測を効率的に行うためのツールとして特許データベースを利用するための検索方法と分析手法を紹介します。

日時 2018 年 2 月 20 日 (火) 午前 10 時～12 時

2 月 21 日 (水) 午前 10 時～午後 3 時

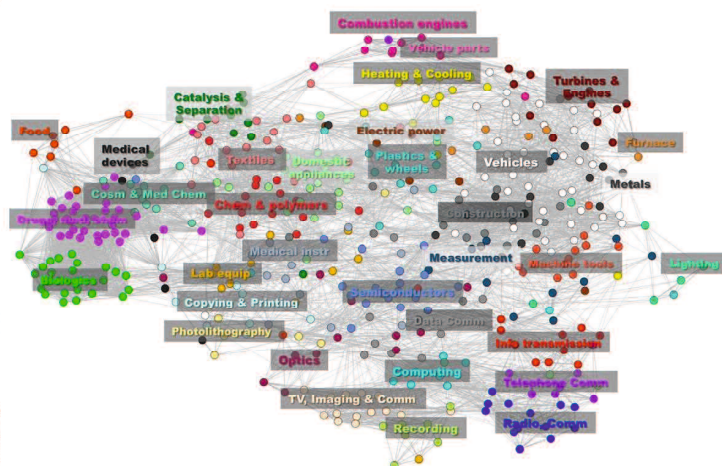
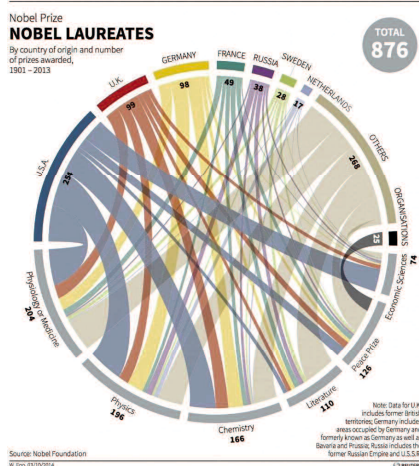
場所 D 棟 4 階 MOT 講義室

Lecture Ms. Nurhayati Md Issa

IP Analyst

YU-MJIIT International Joint IP Laboratory

ummuyazid211112@yahoo.com



Derwent Innovation と Derwent Data Analyzer による 特許検索と分析

ヌルハヤティ イッサ

山口大学大学院技術経営研究科

マレーシア工科大学マレーシア日本国際工科院

何が来るのかを知りたいのは人間の本質です。

歴史的に見れば分かるように、人間は天候や潮の上昇や下降から最近の株式業績まですべてを予測しようとしています。このセミナーでは、予測を効率的に行うためのツールとして特許データベースの検索と分析を紹介します。2025年に世界に影響を及ぼす主要な革新は何でしょうか？

日時 2018年2月24日(土) 午後1時30分

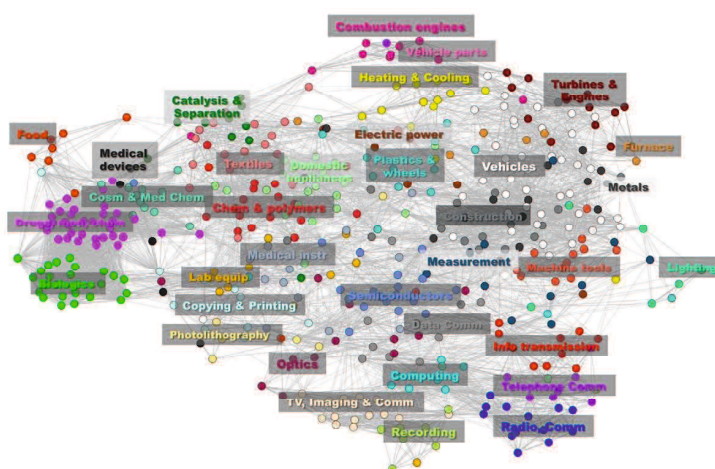
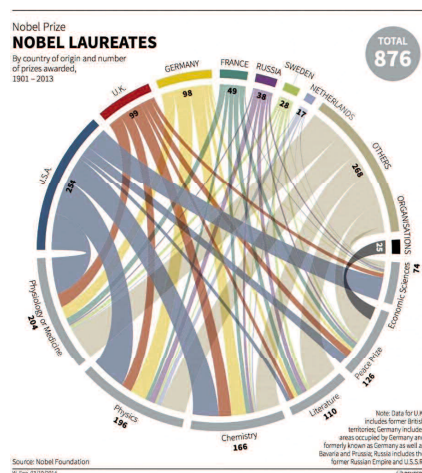
会場 第一会場 山口大学技術経営研究科福岡教室

第二会場 山口大学技術経営研究科広島教室 (遠隔中継)

講師 Ms. Nurhayati Md Issa

IP Analyst in YU-MJIIT International Joint Intellectual Property Laboratory

<ummuyazid211112@yahoo.com>



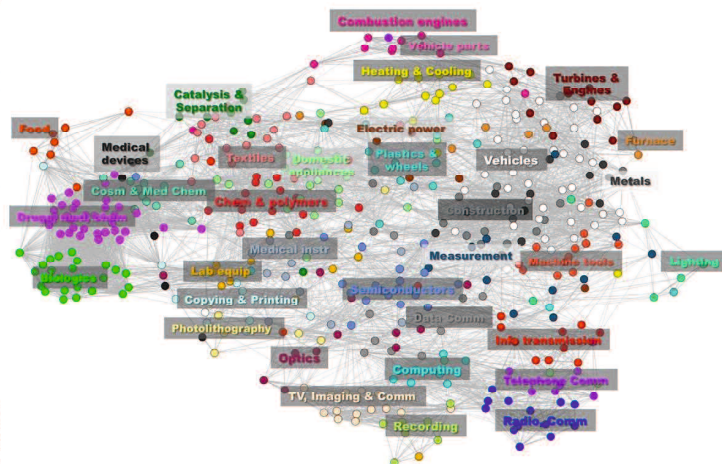
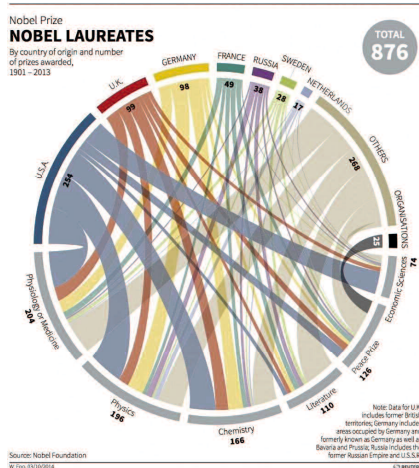
The Future, Innovation Leads It

Malaysia-Japan International Institute of Technology (MJIIT)
Universiti Teknologi Malaysia, Kuala Lumpur Campus

It's human nature to want to know what's coming.

As far back as one can look in history, humans have tried to predict everything from the weather and rise and fall of tides to, in more recent times, stock performance.

It seems fitting, then, that the IP & Science business of Thomson Reuters, with innovation at its core, should also partake in leveraging its assets to forecast the future. What will be the major innovations impacting our world in 2025?



第3節 教育改善に関する活動

平成 32 年度のカリキュラム改正に向けて、教員懇談会を実施し、大学院技術研究科の教員による新しいカリキュラムの編成について議論した。

教員懇談会

平成 30 年 7 月 3 日（火）午後 3 時

平成 30 年 7 月 17 日（火）午後 3 時

平成 30 年 9 月 25 日（火）午後 3 時

平成 30 年 11 月 6 日（火）午後 3 時

第4節 学生授業評価・教員授業自己評価

授業評価アンケートは社会人学生に対して基本的にすべての科目において実施しているが、対象とする社会人学生の学習意欲は高く、「学習目標達成」、「理解」、「満足」のいずれの項目においても、高い評点となっている。

※今年度の状況および経年変化に関する分析

科目毎の授業アンケート結果を次に示す。

アンケートの設問内容は、表 1 に示すとおりである。

設問番号	設問内容
q01	教員の話し方が明瞭で、聞き取りやすかったと思いますか？
q02	理論や考え方、専門用語などが、わかりやすく説明されたと思いますか？
q03	教材、板書、プロジェクターなどに授業の理解を促す工夫がなされていたと思いますか？
q04	練習問題、課題・宿題、参考文献の例示など授業外での学習を促す工夫がなされていたと思いますか？
q05	学生の疑問・質問への対応が十分であったと思いますか？
q06	担当教員の熱意を感じましたか？
q07	あなたはこの授業において、時間外学習（予習・復習・宿題やレポート作成・試験勉強）をどのくらい行いましたか？総時間を平均して、授業 1 回あたりの時間に換算してお答えください。
q08	あなたは、シラバスに記載された学習目標を達成したと思いますか？
q09	あなたは、授業の内容を理解できましたか？
q10	この授業は、あなたにとって満足のいくものでしたか？
q11	あなたは、この授業にどのくらい出席しましたか？（括弧の数字は 15 回授業の場合の出席回数参考値です）
q12	この授業は、大学院レベルの内容であったと思いますか？
q13	この授業は、社会的ニーズに対応していたと思いますか？

基盤科目（必修） 8061000001 イノベーション・マネジメント

時間割コード	Q1	Q2	Q3	Q4	Q5	Q6	Q7	Q8	Q9	Q10	Q11	Q12	Q13	平均
8061000001	4.86	4.57	4.57	4.79	4.71	4.93	4.36	4.14	4.07	4.43	5	4.86	4.5	4.60

基盤科目（必修） 8061000002 オペレーションズ・マネジメント特論

時間割コード	Q1	Q2	Q3	Q4	Q5	Q6	Q7	Q8	Q9	Q10	Q11	Q12	Q13	平均
8061000002	4.64	4.5	4.43	4.43	4.57	4.71	4.08	3.71	4.07	4.14	5	4.57	4.43	4.41

基盤科目（必修） 8061000003 ビジネス法務

時間割コード	Q1	Q2	Q3	Q4	Q5	Q6	Q7	Q8	Q9	Q10	Q11	Q12	Q13	平均
8061000003	4.77	4.69	4.77	4.62	5	4.85	3.15	4.15	4.46	4.69	5	4.85	4.92	4.61

基盤科目（必修） 8061000004 会計・エコノミクス特論

時間割コード	Q1	Q2	Q3	Q4	Q5	Q6	Q7	Q8	Q9	Q10	Q11	Q12	Q13	平均
8061000004	4.54	4.46	4.31	4.46	4.85	4.92	3.69	3.46	3.85	4.08	4.92	4.62	4.54	4.36

基盤科目（必修） 8061000005 テクノロジー・マーケティング特論

時間割コード	Q1	Q2	Q3	Q4	Q5	Q6	Q7	Q8	Q9	Q10	Q11	Q12	Q13	平均
8061000005	4.87	4.8	4.73	4.43	4.93	4.6	3.2	4.07	4.36	4.71	5	4.67	4.8	4.55

基盤科目（必修） 8061000006 企業戦略特論

時間割コード	Q1	Q2	Q3	Q4	Q5	Q6	Q7	Q8	Q9	Q10	Q11	Q12	Q13	平均
8061000006	4.64	4.36	3.21	3.93	4.71	4.21	4.14	3.71	3.64	3.79	4.93	4.71	4.29	4.17

応用科目（選択必修） 8061000007 知財 MOT 特論

時間割コード	Q1	Q2	Q3	Q4	Q5	Q6	Q7	Q8	Q9	Q10	Q11	Q12	Q13	平均
8061000007	4.91	4.82	4.91	4.82	5	4.91	2.82	4.36	4.36	4.64	4.9	4.5	4.7	4.59

応用科目（選択必修） 8061000008 グリーン MOT 特論

時間割コード	Q1	Q2	Q3	Q4	Q5	Q6	Q7	Q8	Q9	Q10	Q11	Q12	Q13	平均
8061000008	4.86	4.5	4.57	4.57	4.79	4.57	4.07	4	4.36	4.36	4.79	4.57	4.79	4.52

応用科目（選択必修） 8061000009 ライフサイエンス MOT 特論

時間割コード	Q1	Q2	Q3	Q4	Q5	Q6	Q7	Q8	Q9	Q10	Q11	Q12	Q13	平均
8061000009	4.75	4.5	4.38	4.75	4.88	4.88	4.38	4.13	4.13	4.88	5	5	4.63	4.64

応用科目（選択必修） 8061000010 ものづくり MOT 特論

時間割コード	Q1	Q2	Q3	Q4	Q5	Q6	Q7	Q8	Q9	Q10	Q11	Q12	Q13	平均
8061000010	4.3	4	4.1	4.3	4.3	4.5	3.3	4	4.2	4.3	4.9	4.1	4.6	4.22

展開科目（選択必修） 8062000001 技術戦略特論

時間割コード	Q1	Q2	Q3	Q4	Q5	Q6	Q7	Q8	Q9	Q10	Q11	Q12	Q13	平均
8062000001	4.78	4.56	4.5	4.61	4.83	4.83	4.28	4.11	4.17	4.61	4.89	4.72	4.65	4.58

展開科目（選択必修） 8062000004 マーケティングリサーチ特論

時間割コード	Q1	Q2	Q3	Q4	Q5	Q6	Q7	Q8	Q9	Q10	Q11	Q12	Q13	平均
8062000004	4.7	4.55	4.45	4.55	4.75	4.85	4	4.05	3.8	4.3	4.95	4.65	4.65	4.48

展開科目（選択必修） 8062000006 ビジネスファイナンス特論

時間割コード	Q1	Q2	Q3	Q4	Q5	Q6	Q7	Q8	Q9	Q10	Q11	Q12	Q13	平均
8062000006	4.73	4.47	4.6	4.67	4.73	5	4	4.13	3.87	4.47	5	4.93	4.93	4.58

展開科目（選択必修） 8062000007 戦略思考特論

時間割コード	Q1	Q2	Q3	Q4	Q5	Q6	Q7	Q8	Q9	Q10	Q11	Q12	Q13	平均
8062000007	4.11	4.32	4.37	4.42	4.79	4.74	3.79	3.84	4.21	4.32	4.89	4.42	4.56	4.37

展開科目（選択必修） 8062000009 経営組織特論

時間割コード	Q1	Q2	Q3	Q4	Q5	Q6	Q7	Q8	Q9	Q10	Q11	Q12	Q13	平均
8062000009	4.17	4.25	4	3.92	4.08	4.08	3.83	3.83	3.67	4	5	4.27	4.17	4.10

展開科目（選択必修） 8062000011 知財戦略特論

時間割コード	Q1	Q2	Q3	Q4	Q5	Q6	Q7	Q8	Q9	Q10	Q11	Q12	Q13	平均
8062000011	4.27	4.2	4.07	4.4	4.67	4.67	3.87	3.8	4	4.4	4.87	4.53	4.67	4.34

基盤科目（必修） 8062100002 オペレーションズ・マネジメント特論

時間割コード	Q1	Q2	Q3	Q4	Q5	Q6	Q7	Q8	Q9	Q10	Q11	Q12	Q13	平均
8062100002	3.2	3.8	4	4.6	3.8	4.4	5	4	4	3.2	4.8	4.6	4.2	4.12

基盤科目（必修） 8062100003 ビジネス法務

時間割コード	Q1	Q2	Q3	Q4	Q5	Q6	Q7	Q8	Q9	Q10	Q11	Q12	Q13	平均
8062100003	5	5	5	4.75	5	5	3.25	4.25	5	5	4.75	4.75	4.5	4.71

基盤科目（必修） 8062100005 テクノロジー・マーケティング特論

時間割コード	Q1	Q2	Q3	Q4	Q5	Q6	Q7	Q8	Q9	Q10	Q11	Q12	Q13	平均
8062100005	5	4.75	5	4.75	4.75	5	4	4.5	4.5	4.5	4.75	4.75	4.75	4.69

学生_授業外学習時間等集計データ

<p>学生_授業外学習時間 経年変化</p>	<table border="1"> <caption>授業外学習時間</caption> <thead> <tr> <th>年度</th> <th>値</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>大学院法経経経経部(2013)</td> <td>3.98</td> </tr> <tr> <td>大学院法経経経経部(2014)</td> <td>4.07</td> </tr> <tr> <td>大学院法経経経経部(2015)</td> <td>3.96</td> </tr> <tr> <td>大学院法経経経経部(2016)</td> <td>3.83</td> </tr> <tr> <td>大学院法経経経経部(2017)</td> <td>3.85</td> </tr> </tbody> </table>	年度	値	大学院法経経経経部(2013)	3.98	大学院法経経経経部(2014)	4.07	大学院法経経経経部(2015)	3.96	大学院法経経経経部(2016)	3.83	大学院法経経経経部(2017)	3.85
年度	値												
大学院法経経経経部(2013)	3.98												
大学院法経経経経部(2014)	4.07												
大学院法経経経経部(2015)	3.96												
大学院法経経経経部(2016)	3.83												
大学院法経経経経部(2017)	3.85												
<p>学生_学習目標達成 経年変化</p>	<table border="1"> <caption>学習目標達成</caption> <thead> <tr> <th>年度</th> <th>値</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>大学院法経経経経部(2013)</td> <td>4.05</td> </tr> <tr> <td>大学院法経経経経部(2014)</td> <td>4.35</td> </tr> <tr> <td>大学院法経経経経部(2015)</td> <td>4.02</td> </tr> <tr> <td>大学院法経経経経部(2016)</td> <td>4.16</td> </tr> <tr> <td>大学院法経経経経部(2017)</td> <td>3.98</td> </tr> </tbody> </table>	年度	値	大学院法経経経経部(2013)	4.05	大学院法経経経経部(2014)	4.35	大学院法経経経経部(2015)	4.02	大学院法経経経経部(2016)	4.16	大学院法経経経経部(2017)	3.98
年度	値												
大学院法経経経経部(2013)	4.05												
大学院法経経経経部(2014)	4.35												
大学院法経経経経部(2015)	4.02												
大学院法経経経経部(2016)	4.16												
大学院法経経経経部(2017)	3.98												
<p>学生_理解 経年変化</p>	<table border="1"> <caption>理解</caption> <thead> <tr> <th>年度</th> <th>値</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>大学院法経経経経部(2013)</td> <td>4.20</td> </tr> <tr> <td>大学院法経経経経部(2014)</td> <td>4.31</td> </tr> <tr> <td>大学院法経経経経部(2015)</td> <td>4.06</td> </tr> <tr> <td>大学院法経経経経部(2016)</td> <td>4.27</td> </tr> <tr> <td>大学院法経経経経部(2017)</td> <td>4.09</td> </tr> </tbody> </table>	年度	値	大学院法経経経経部(2013)	4.20	大学院法経経経経部(2014)	4.31	大学院法経経経経部(2015)	4.06	大学院法経経経経部(2016)	4.27	大学院法経経経経部(2017)	4.09
年度	値												
大学院法経経経経部(2013)	4.20												
大学院法経経経経部(2014)	4.31												
大学院法経経経経部(2015)	4.06												
大学院法経経経経部(2016)	4.27												
大学院法経経経経部(2017)	4.09												
<p>学生_満足 経年変化</p>	<table border="1"> <caption>満足</caption> <thead> <tr> <th>年度</th> <th>値</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>大学院法経経経経部(2013)</td> <td>4.51</td> </tr> <tr> <td>大学院法経経経経部(2014)</td> <td>4.55</td> </tr> <tr> <td>大学院法経経経経部(2015)</td> <td>4.30</td> </tr> <tr> <td>大学院法経経経経部(2016)</td> <td>4.62</td> </tr> <tr> <td>大学院法経経経経部(2017)</td> <td>4.38</td> </tr> </tbody> </table>	年度	値	大学院法経経経経部(2013)	4.51	大学院法経経経経部(2014)	4.55	大学院法経経経経部(2015)	4.30	大学院法経経経経部(2016)	4.62	大学院法経経経経部(2017)	4.38
年度	値												
大学院法経経経経部(2013)	4.51												
大学院法経経経経部(2014)	4.55												
大学院法経経経経部(2015)	4.30												
大学院法経経経経部(2016)	4.62												
大学院法経経経経部(2017)	4.38												
<p>学生_出席 経年変化</p>	<table border="1"> <caption>出席</caption> <thead> <tr> <th>年度</th> <th>値</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>大学院法経経経経部(2013)</td> <td>4.890</td> </tr> <tr> <td>大学院法経経経経部(2014)</td> <td>4.900</td> </tr> <tr> <td>大学院法経経経経部(2015)</td> <td>4.880</td> </tr> <tr> <td>大学院法経経経経部(2016)</td> <td>4.890</td> </tr> <tr> <td>大学院法経経経経部(2017)</td> <td>4.930</td> </tr> </tbody> </table>	年度	値	大学院法経経経経部(2013)	4.890	大学院法経経経経部(2014)	4.900	大学院法経経経経部(2015)	4.880	大学院法経経経経部(2016)	4.890	大学院法経経経経部(2017)	4.930
年度	値												
大学院法経経経経部(2013)	4.890												
大学院法経経経経部(2014)	4.900												
大学院法経経経経部(2015)	4.880												
大学院法経経経経部(2016)	4.890												
大学院法経経経経部(2017)	4.930												

第20章 連合獣医学研究科のFD活動

第1節 授業公開

山口大学大学院連合獣医学研究科は、山口大学を基幹校とし、鳥取大学及び鹿児島大学を構成大学とした連合大学院であり、修業年数4年の博士課程である。学生は各配置大学において担当教員の授業を受けており、これらは公開されている。

また、以下の教育活動は構成3大学において持ち回りで実施しており、併せて他大学の教員へも公開している。

1. 獣医学共通ゼミナール
2. 特別講義
3. Eラーニング

第2節 学部・研究科主催FD研修会

第11章 共同獣医学部FD活動の項を参照。

第3節 教育改善に関する活動

年1回開催される獣医学共通ゼミナール及び年3回開催される特別講義では、毎回学生アンケートを実施し、教育改善に資するため、フィードバックしている。

(1) 平成29年度山口大学大学院連合獣医学研究科 獣医学共通ゼミナールに関するアンケート結果

期 日	平成29年8月23日（水）～8月26日（土）		
場 所	鳥取大学		
参加学生	64名	アンケート回収	37名分

1) ワークショップ アクセプトされる論文の書き方

1. 1、2年生向きと思われる。1年生には日本語でのレクチャーも加えて行った方がわかりやすい。
2. 客観的な論文を添削する側の意見は日頃聞けないので、この機会はたいへんよかった。また、実例も交えての講義だったため、すぐに応用できそう。

3. 論文をよりシンプルに書き、伝わる表現を心かけようと思った。私は1年で論文を書いた経験がないため論文の直し方と同時に構成、組み立てなど基本的な書き方も勉強したかったと思いました。
4. 継続的な自主学習の重要な分野で付け焼き刃的なセミナーやクイズをしても意義が薄いと感じました。問題は英語以外の部分にあるように思います。

2) ワークショップ 出版倫理

1. 大学でも研究倫理の講義にふれる機会が増えてきているためこの時間でセミナーをもう1演題増やしていただきたかった。
2. E-ラーニングでやった内容なので、新知見があまりなかった。この講義は日本語でびっくりした。海外勢にとっては大丈夫なのか？
3. Poor quality 品質を改善できないなら、無くすか、時間を短くしたほうが良いと思います。出典・事例・概念の連携が不十分だと思います。e-ラーニングの方が良かったです。
4. It should be presented in English. Although we could read the contents in slide, we also needed to understand more in explaining.

3) セミナーA, B, C, D

1. セミナーDのように逆に先生から質問して、効果がよりいいかも（指名されるかとか緊張だけど）
2. A~Dは全て興味深く、AやDは、自身の分野との関係も深く、非常に勉強になった。また、まったく異なる分野の第一人者の方々の講義を聞く機会は、めったにないので、自分の知見を広げることにも役立った。
3. 様々な分野の内容をきけてどれも興味深かったのですが専門用語が難しかったです。keywordだけでも事前にリストなどあったらありがたいです。
4. とても興味深く楽しいセミナーだった。せっかく素晴らしい研究を聞く機会なのに、英語の語学力不足で十分に理解できないところが残念である。しかし、比較的ききとりやすい英語なので、理解度は60%~70%くらい。

4) 学生研究紹介について

1. 実施時間は午前中だけにしぼって2日分けて実施する方が活発な意見交換ができるかもしれません。
2. 休憩がきちんと取れると良かった。質疑応答は日本語でもOKにしても良いのではないかと？（留学生ばかりが質問していた気がするので）
3. すばらしい発表が多く、2年後に向けて参考になりました。また質疑応答に関しても、対応の方法等参考になりました。
4. どうしても理解できない質問もあるので、訳してくれる人がいれば、もっとスムーズに進むと思う。

5) フラッシュトーク、ポスター研究紹介について

1. 学年によって発表数が多い時と少ない時があるため、実施方法を変えることを検討したほうがよいと思います。今年のように少ないと、質問したいのにできない人が増えますので、奇数、偶数に分けずに質問を受ける等の工夫をお願いします。
2. とても活発で良かったと思う。オーラルより意見交換、講論ができると思うので、それが目的ならばポスターに力を入れた方がよいと思う。
3. 今回はポスターセッションの時間が短く、本人達が見てまわる時間がなかったのが残念だった。
4. 全員が1つの部屋に入るといっばいで動けず、質問ができなかった。人数を2組に分けるor部屋を2

つに分けるなどの対策をして欲しい。

6) 特別講演 1, 2 について

1. 自分たちにとってもものすごく近い話題であったので、おもしろかった。野生動物、口蹄疫と興味を持った。
2. 今日の先生方は、どちらも微生物系であったため分野のちがう方のお話も聞きたった。
3. 写真など多く、いつも自分が触れていない分野の違った一面を知ることができ、興味深い内容だった。
4. Lecture1: wildlife issue. It gave a lot of new information that interesting both lecture 1&2 are helpful.

7) その他全体に関する意見、要望など

1. サマーセミナーは他大学の同期や先輩の研究が今どうなってるのかが知れる数少ない機会であり、毎回熱いセッションができ、モチベーションの維持や今後の研究進行に非常に意義深いものだと思う。
2. 全ての講義間の休憩時間は全て10分でよいと思う。その分、早く帰れるよう配慮してほしい。
3. The seminar was well organized. Maybe it would be good and helpful to give visiting students Guest Wi-Fi connection, to make communication easy.
4. 電車の時間を考慮して欲しい。

(2) 平成29年度第1回 山口大学大学院連合獣医学研究科 特別講義アンケート結果

〈授業科目名〉 平成29年度第1回山口大学大学院連合獣医学研究科特別講義

〈実施日〉 平成29年6月9日(金) 10時30分~12時00分

〈実施大学〉 鳥取大学

〈担当教員名〉 鹿児島大学 窪田 力 教授
『BOVINE CLONE』

山口大学 前田 健 教授
『Lesson from field study』

〈受講者〉 学生9名

〈アンケート回答者〉

- | | |
|----------------|------|
| 1. 連合獣医学研究科1年生 | 3名 |
| 2. 連合獣医学研究科2年生 | 1名 |
| 3. 連合獣医学研究科3年生 | 1名 |
| 4. 連合獣医学研究科4年生 | 2名 |
| 5. 獣医学科6年生 | 2名 |
| | 合計9名 |

〈特別講義はあなたにとって有意義でしたか?〉

- | | |
|-------|----|
| 1. はい | 9名 |
|-------|----|

- | | |
|--------|----|
| 2. いいえ | 0名 |
| 3. 無回答 | 0名 |

〈講義についての意見・感想〉

- (院生) ・前に予習したいから、Key wordを示してくればありがたいです。
 ・全くの専門外のお話で、理解することが難しかったですが、おもしろい内容だったので興味を持って聴くことができました。
- (学部生) ・図を用いて説明していただけたので、分からない単語があってもフォローしやすかったです。SFTSVの感染経路に関して新しいことが分かり、興味深かったです。臨床医として知っておくべきことだと感じました。
 ・クローンのマーブリングと鼻のプリントが似ているという話しが興味深かった。全く同じというわけではないんだなと思った。

(3) 平成29年度第2回 山口大学大学院連合獣医学研究科 特別講義アンケート結果

〈授業科目名〉 平成29年度第2回山口大学大学院連合獣医学研究科特別講義

〈実施日〉 平成29年10月6日(金) 10時20分～11時50分

〈実施大学〉 山口大学

〈担当教員名〉 鳥取大学 澁谷 泉 教授

『How neuronal and endocrine cells communicate with other cells?
 : The mechanism of the intercellular signal transduction.』

鹿児島大学 川崎 安亮 教授

『Are the eyes window of the Brain?

— Eye movements and the diseases, from physiology to pathophysiology —』

〈受講者〉 学生11名

〈アンケート回答者〉

- | | |
|----------------|-------|
| 1. 連合獣医学研究科1年生 | 1名 |
| 2. 連合獣医学研究科2年生 | 1名 |
| 3. 連合獣医学研究科3年生 | 7名 |
| 4. 連合獣医学研究科4年生 | 1名 |
| | 合計10名 |

〈特別講義はあなたにとって有意義でしたか?〉

- | | |
|--------|----|
| 1. はい | 9名 |
| 2. 無回答 | 1名 |

〈講義についての意見・感想〉

- ・時間を短くして講義を多くして欲しい。

(4) 平成29年度第3回 山口大学大学院連合獣医学研究科 特別講義アンケート結果

〈授業科目名〉 平成29年度第3回山口大学大学院連合獣医学研究科特別講義

〈実施日〉 平成29年11月10日(金) 10時30分～12時00分

〈実施大学〉 鹿児島大学

〈担当教員名〉 山口大学 高木 光博 教授

『General Review of Mycotoxins in Dietary Feeds』

鳥取大学 森田 剛仁 教授

『Comparative study on the pathogenicity of the generated Newcastle disease virus mutant isolate between chickens and waterfowl』

〈受講者〉 学生5名

〈アンケート回答者〉

- | | |
|----------------|----|
| 1. 連合獣医学研究科1年生 | 2名 |
| 2. 連合獣医学研究科2年生 | 1名 |
| 3. 連合獣医学研究科3年生 | 1名 |
| 4. 連合獣医学研究科4年生 | 1名 |
| 合計 | 5名 |

〈特別講義はあなたにとって有意義でしたか?〉

- | | |
|--------|----|
| 1. はい | 5名 |
| 2. いいえ | 0名 |

〈講義についての意見・感想〉

- ・ 普段接しない分野の話を聞いてよかった。
- ・ Very Interesting lecture. If possible to held more in the future.

第4節 学生授業評価・教員授業自己評価

(1) 山口大学大学院連合獣医学研究科 学生授業評価 (結果)

〈授業科目名〉 平成29年度獣医学共通ゼミナール セミナー
(平成29年8月23日(水)～26日(土)実施)

〈担当教員名〉 鳥取大学 担当教員

参加学生 64名 アンケート回収51名分

〈学年〉

1. 1年生	23 人
2. 2年生	12 人
3. 3年生	14 人
4. 4年生	1 人
5. 無回答	1 人

<学生区分>

1. 一般学生	12 人
2. 留学生	15 人
3. 社会人	23 人
4. 無回答	1 人

<質問 I >

1) 教員の話し方は聞き取りやすかったと思いますか？

1. そう思わない	0 人
2. 余りそう思わない	3 人
3. どちらとも言えない	4 人
4. ややそう思う	22 人
5. そう思う	21 人
6. 無回答	1 人

2) 理論や考え方、専門用語などがわかりやすく説明されましたか？

1. そう思わない	0 人
2. 余りそう思わない	2 人
3. どちらとも言えない	8 人
4. ややそう思う	25 人
5. そう思う	15 人
6. 無回答	1 人

3) テキストやプリントなどの教材が効果的に使われましたか？

1. そう思わない	0 人
2. 余りそう思わない	2 人
3. どちらとも言えない	10 人
4. ややそう思う	16 人
5. そう思う	22 人
6. 無回答	1 人

4) コンピュータなどの視聴覚メディアが効果的に使われましたか？

- | | |
|--------------|------|
| 1. そう思わない | 0 人 |
| 2. 余りそう思わない | 0 人 |
| 3. どちらとも言えない | 2 人 |
| 4. ややそう思う | 16 人 |
| 5. そう思う | 32 人 |
| 6. 無回答 | 1 人 |

5) 学生の疑問・質問などに対して適切な回答が得られましたか？

- | | |
|--------------|------|
| 1. そう思わない | 0 人 |
| 2. 余りそう思わない | 1 人 |
| 3. どちらとも言えない | 3 人 |
| 4. ややそう思う | 22 人 |
| 5. そう思う | 24 人 |
| 6. 無回答 | 1 人 |

6) 教員の身振りや手振り、目を見て話すなどの態度は適切でしたか？

- | | |
|--------------|------|
| 1. そう思わない | 0 人 |
| 2. 余りそう思わない | 1 人 |
| 3. どちらとも言えない | 2 人 |
| 4. ややそう思う | 20 人 |
| 5. そう思う | 27 人 |
| 6. 無回答 | 1 人 |

7) 教員のセミナーに対する熱意を感じましたか？

- | | |
|--------------|------|
| 1. そう思わない | 0 人 |
| 2. 余りそう思わない | 1 人 |
| 3. どちらとも言えない | 4 人 |
| 4. ややそう思う | 17 人 |
| 5. そう思う | 28 人 |
| 6. 無回答 | 1 人 |

8) あなたはセミナーの内容を理解しましたか？

- | | |
|-----------|-----|
| 1. そう思わない | 1 人 |
|-----------|-----|

- | | | |
|----|-----------|------|
| 2. | 余りそう思わない | 6 人 |
| 3. | どちらとも言えない | 8 人 |
| 4. | ややそう思う | 22 人 |
| 5. | そう思う | 12 人 |
| 6. | 無回答 | 2 人 |

9) このセミナーは、あなたにとって満足のいくものでしたか？

- | | | |
|----|-----------|------|
| 1. | そう思わない | 1 人 |
| 2. | 余りそう思わない | 2 人 |
| 3. | どちらとも言えない | 5 人 |
| 4. | ややそう思う | 19 人 |
| 5. | そう思う | 22 人 |
| 6. | 無回答 | 2 人 |

10) このセミナーは、あなたの研究にとって有意義でありましたか？

- | | | |
|----|-----------|------|
| 1. | そう思わない | 2 人 |
| 2. | 余りそう思わない | 1 人 |
| 3. | どちらとも言えない | 3 人 |
| 4. | ややそう思う | 19 人 |
| 5. | そう思う | 24 人 |
| 6. | 無回答 | 2 人 |

(2) 山口大学大学院連合獣医学研究科 学生授業評価 (結果)

<授業科目名> 平成29年度獣医学特別ゼミナール (平成29年8月22日(火), 23日(水)実施)

<担当教員名> 鳥取大学担当教員
(樋口、高橋、富岡、尾崎、笛吹、柄、北村、大崎)

参加学生 18 名 アンケート回収 17 名分

<学年>

- | | | |
|----|------|------|
| 1. | 1 年生 | 10 人 |
| 2. | 2 年生 | 1 人 |

- | | |
|--------|-----|
| 3. 3年生 | 4 人 |
| 4. 4年生 | 2 人 |
| 5. 無回答 | 0 人 |

<学生区分>

- | | |
|---------|-----|
| 1. 一般学生 | 6 人 |
| 2. 留学生 | 3 人 |
| 3. 社会人 | 7 人 |
| 4. 無回答 | 0 人 |

<質問 I >

1) 教員の話し方は聞き取りやすかったと思いますか？

- | | |
|--------------|-----|
| 1. そう思わない | 1 人 |
| 2. 余りそう思わない | 3 人 |
| 3. どちらとも言えない | 3 人 |
| 4. ややそう思う | 6 人 |
| 5. そう思う | 4 人 |
| 6. 無回答 | 0 人 |

2) 理論や考え方，専門用語などがわかりやすく説明されましたか？

- | | |
|--------------|-----|
| 1. そう思わない | 2 人 |
| 2. 余りそう思わない | 2 人 |
| 3. どちらとも言えない | 3 人 |
| 4. ややそう思う | 7 人 |
| 5. そう思う | 3 人 |
| 6. 無回答 | 0 人 |

3) テキストやプリントなどの教材が効果的に使われましたか？

- | | |
|--------------|-----|
| 1. そう思わない | 4 人 |
| 2. 余りそう思わない | 6 人 |
| 3. どちらとも言えない | 3 人 |
| 4. ややそう思う | 0 人 |
| 5. そう思う | 4 人 |
| 6. 無回答 | 0 人 |

4) コンピュータなどの視聴覚メディアが効果的に使われましたか？

- | | |
|-----------|-----|
| 1. そう思わない | 1 人 |
|-----------|-----|

- | | | |
|----|-----------|-----|
| 2. | 余りそう思わない | 2 人 |
| 3. | どちらとも言えない | 1 人 |
| 4. | ややそう思う | 4 人 |
| 5. | そう思う | 9 人 |
| 6. | 無回答 | 0 人 |

5) 学生の疑問・質問などに対して適切な回答が得られましたか？

- | | | |
|----|-----------|-----|
| 1. | そう思わない | 0 人 |
| 2. | 余りそう思わない | 2 人 |
| 3. | どちらとも言えない | 0 人 |
| 4. | ややそう思う | 6 人 |
| 5. | そう思う | 9 人 |
| 6. | 無回答 | 0 人 |

6) 教員の身振りや手振り，目を見て話すなどの態度は適切でしたか？

- | | | |
|----|-----------|-----|
| 1. | そう思わない | 1 人 |
| 2. | 余りそう思わない | 1 人 |
| 3. | どちらとも言えない | 1 人 |
| 4. | ややそう思う | 9 人 |
| 5. | そう思う | 5 人 |
| 6. | 無回答 | 0 人 |

7) 教員のセミナーに対する熱意を感じましたか？

- | | | |
|----|-----------|-----|
| 1. | そう思わない | 1 人 |
| 2. | 余りそう思わない | 1 人 |
| 3. | どちらとも言えない | 2 人 |
| 4. | ややそう思う | 9 人 |
| 5. | そう思う | 4 人 |
| 6. | 無回答 | 0 人 |

8) あなたはセミナーの内容を理解しましたか？

- | | | |
|----|-----------|-----|
| 1. | そう思わない | 2 人 |
| 2. | 余りそう思わない | 3 人 |
| 3. | どちらとも言えない | 5 人 |

- | | |
|-----------|-----|
| 4. ややそう思う | 6 人 |
| 5. そう思う | 1 人 |
| 6. 無回答 | 0 人 |

9) このセミナーは、あなたにとって満足のいくものでしたか？

- | | |
|--------------|-----|
| 1. そう思わない | 3 人 |
| 2. 余りそう思わない | 2 人 |
| 3. どちらとも言えない | 4 人 |
| 4. ややそう思う | 5 人 |
| 5. そう思う | 3 人 |
| 6. 無回答 | 0 人 |

10) このセミナーは、あなたの研究にとって有意義でありましたか？

- | | |
|--------------|-----|
| 1. そう思わない | 2 人 |
| 2. 余りそう思わない | 4 人 |
| 3. どちらとも言えない | 3 人 |
| 4. ややそう思う | 4 人 |
| 5. そう思う | 4 人 |
| 6. 無回答 | 0 人 |

第5節 FD実施経費報告書

該当なし

第6節 来年度の課題

(1) 教育改善について

各大学の代議委員で構成される学務担当者会議を毎月開催し、教育の改善を図っているところであるが、FDに関しても引き続き更なる充実を図りたい。

(2) 授業外学習時間の確保（単位制度の実質化）について

Eラーニングの授業科目について引き続き改善，充実を図りたい。

平成 29 年度 山口大学 教学委員会 名簿

部局名	職名	氏名	任期	備考
	副学長（教育学生担当）	福田 隆眞		大学教育機構長
大学教育機構	大学教育センター長	菊政 勲		
〃	学生支援センター長	横山 和平		
〃	保健管理センター所長	奥屋 茂		
〃	留学生センター長	福田 隆眞		
〃	大学院教育センター長	上西 研		
人文学部	教授	森野 正弘	28. 4. 1～30. 3. 31	
〃	教授	上田 由紀子	29. 4. 1～31. 3. 31	
教育学部	教授	高橋 雅子	28. 4. 1～30. 3. 31	
〃	教授	中田 充	29. 4. 1～31. 3. 31	
経済学部	教授	寺地 伸二	29. 4. 1～30. 3. 31	
〃	教授	三間地 光宏	29. 4. 1～31. 3. 31	
理学部	教授	志村 俊昭	28. 4. 1～30. 3. 31	
〃	教授	坂口 有人	29. 4. 1～31. 3. 31	
医学部	教授	田中 満由美	28. 4. 1～30. 3. 31	
〃	教授	松山 豪泰	29. 4. 1～31. 3. 31	
工学部	教授	新苗 正和	28. 4. 1～30. 3. 31	
〃	教授	中田 幸男	29. 4. 1～31. 3. 31	
農学部	教授	執行 正義	28. 4. 1～30. 3. 31	
〃	准教授	阿座上 弘行	29. 4. 1～31. 3. 31	
共同獣医学部	教授	高木 光博	28. 4. 1～30. 3. 31	
〃	准教授	伊藤 良樹	29. 4. 1～31. 3. 31	
国際総合科学部	教授	北西 功一	28. 4. 1～30. 3. 31	
〃	教授	有元 光彦	29. 4. 1～31. 3. 31	
事務局	学生支援部長	村田 三郎		
〃	学生支援部教育支援課長	三浦 勝弘		
〃	学生支援部学生支援課長	梅木 哲也		

平成 29 年度 山口大学 学部・研究科 FD コーディネータ 名簿

部 局 等	職 名	氏 名	備 考
人文学部 人文科学研究科	講 師	石田 俊	
教育学部 教育学研究科	教 授	星野 裕之	
経済学部 経済学研究科	教 授	兵藤 隆	
理学部 創成科学研究科(理学)	教 授	末竹 規哲	
医学部(医学科) 医学系研究科	教 授	藤宮 龍也	
医学部(保健学科) 医学系研究科	教 授	田中 愛子	
工学部 創成科学研究科(工学)	教 授	稲井 栄一	
	教 授	新苗 正和	
農学部 創成科学研究科(農学)	教 授	阿座上 弘行	
共同獣医学部	准教授	伊藤 良樹	
国際総合科学部	准教授	星野 晋	
東アジア研究科	准教授	山本 勝也	
技術経営研究科	准教授	大島 直樹	
連合獣医学研究科	教 授	前田 健	

平成 29 年度 山口大学 大学教育センター 名簿

部 局 名	職 名	氏 名	備 考
大学教育センター	センター長	菊 政 勲	
//	主 事	池 園 宏	
//	主 事	野 崎 浩 二	
//	教 授	小 川 勤	
//	准教授	木 下 真	
//	准教授	林 透	
//	講 師	岡 田 耕 一	
//	助 教	ADAMS KIRA LA MARRA	
//	助 教	BIZZELL SHANIQUA NYETTA	
//	助教（特命）	篠 田 雅 人	

平成 29 年度 山口大学 FD 報告書「山口大学の FD 活動」
平成 30 年 11 月発行

編集・発行 山口大学大学教育機構、山口大学教学委員会
山口市吉田 1677-1
TEL (083) 933-5150 (学生支援部教育支援課)